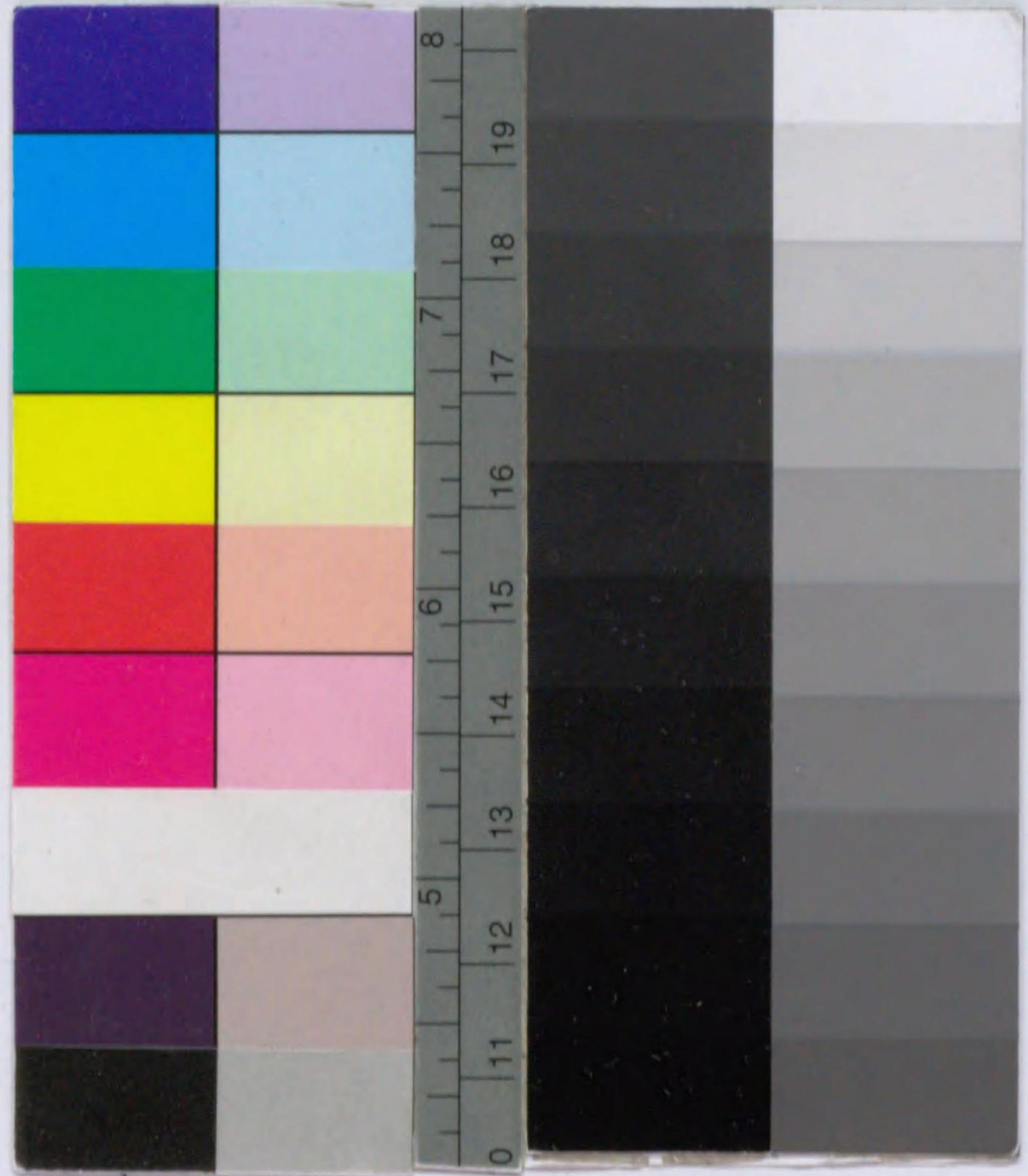


583-15



1200501523061

583
15



といふ有様、其の後に寄席の藝になつても落語であつて、話の丁場は延びても落ちがなければ濟まない、それと立別

India
British an
The auth
proce
for

三田村鳶魚校訂

帝國文庫
第三十篇



東海道
木曾街

中
膝栗毛



納本

東京
博文館版

といふ有様、其の後に寄席の藝になつても落語であつて、話の丁場は延びても落ちがなければ濟まない、それと立別

膝栗毛條々

鳶 魚 生

江戸の戯作者の内でも、十返舎一九は黄表紙晒落本讀本合卷中本噺本丸本と、述作の品目の多い人であつた、さうして是れほどに多種類の執筆者は尠い、一九は誠に融通のいゝ作者であつたから、久しく勢力のあつた晒落本の漸く抵滞した時、恰も其の時は松平越中守の寛政改革で、晒落本などは作柄から許されず、放縦淫靡な筆致を持つ作者は處刑された、世界も趣向も型に嵌つて目新しくなくなり、讀者の興味も泥んで了つては、流石に晒落本も欠て扱はれさうになつた上に、御役人様から板元も作者も睨み付けられる、といふ状況になつては、何が何でも晒落本は、御役人の睨みと讀者の欠びとから脱れなければならぬ、それは晒落本だけでなく、戯作一般に同様のことだが、別けて江戸時代の文藝に於て寛政改革の前と後とて、其の面目が著しく變つた、是は改革の都度に極つて見られることであつたが、寛政改革の前後が一番際立つて見えるのは、明和以來打續いて、賑々しく三十年許を押し通した江戸文藝に、晴天の一つ雷見たやうに新政の號令が響き渡つた爲めであらう、若し幕閣に松平定信が立たず、寛政に改革が無かつたなら、渠れ程急激に江戸文藝の面目の變化することはなかつたらう、さうなら目立つたこともあるまい、然し沈滞抵着した當時の文藝は、御役人の眼が光らなくても、讀者の大欠びを如何ともすることが出来ない、只だ権力に依つて變化の勾配が緩くなり、何時とはなし、際立たずにツル／＼に移り替つて行くのだらう、變化に早晚はあつても決して其の儘では居られなかつたに相違ない。

といふ有様、其の後に寄席の藝になつても落語であつて、話の丁場は延びても落ちがなければ濟まない、それと立別

御役人の眼玉作用で、ブルンコした顔のやうに、娑婆て見た彌次郎といった思入れ、出直つたから目にも立ち、際立ちもする、重みは讀本にあつても、勢力は晒落本にあつたので、就中晒落本の變化が注意されもすれば、作者の骨折りも見える、變化は忙しい、急行速行しなければならぬ、それも一つ雷て仰天し、周章狼藉して居る處だ、其の潮あひは學者臭い馬琴には勝手づくであつても、珍しい才氣を持って居ながら京傳には都合が悪い、其處で不融通に見えた晒落本作家は、一九に先き立つて泣本を出して居る、此の泣本から人情本に行き着いたのだ、何故か本邦の文學史に泣本を云つてない、その作者も尠く、作物も乏しいが、寛政改革の産んだ江戸文藝の一種として、御無沙汰には打過ぎられない義理もある、我等は好い機會を見て、泣本に關する愚意を述べたいと思つて居る。

此の際に多種類に筆の揮へる、融通の好い一九は、本人としても今朝も七ツ屋で褒められた處を御披露したくもあらう、又た板元も捨て置かない勘定でもある、即ち拾ひ上げられた東海道中膝栗毛、現在の江戸文藝の品目は、板式でも分け、作柄でも別ける、滑稽物といふ部類は、専ら作柄に従つて板式を問はないやうに思はれるが、作柄別けが板式分けよりも嬉しい部類立てだと思ふものゝ、さうなら作柄が綿密とまでは往かずとも、一往は吟味してあるかと眺めると、存外不親切らしいのに驚く、何故なら當世下手談義も、續百花鳥も、名水染分絞も、風俗七遊談も、風流志道軒傳等の風來山人の諸作も、吹寄蒙求も、賣飴土平傳も、浮世風呂浮世床も、八笑人七偏人も、一處に膝栗毛諸篇と扱つて居る、板式や製本の體裁で別けるのは、或は盲人向きの手探りに近いと云はれるかも知れぬ、それより作柄で部類する方が何程立勝つたものか知れない、とは云へ斯う入れ込みでは始末が附かぬ、極く大ざつばに見ても滑稽を本色として書いたのと、教訓を所詮として書いたのと、二夕別れにすべきものが其の多數を占め、數は尠いが兩者の孰れにも屬せず、各個別々な主意を持つたものもある、此の個別的な主意に従つて分類したなら四五別、六七別では濟みさうもない。

體裁も半紙本と極つて居り、作柄も現に古木屋氏から心學道話並みに扱はれて居るのであるから、渠の教訓を所詮とする一堆は、作柄から體裁から双方の條件に依て滑稽物に混雜せず別な分類にしなければ無理だ、題箋にも何々談義とあるのに任せて、談義物として取除けべき筈だ、此の談義物の意義は決して輕視すべきものでない、江戸文藝中に著大な位置を持つて居る、然るに文學史は遺忘して居るのか、甚しい無資著に經過して居るのも不思議千萬である。

現在に滑稽物と汎稱されて居るものは、如何にも混雜して居て、分類の機能がなく、細別は後廻にしても、儼然たる大別をさへ遺却して居るのは怪しからぬ、差當り談義物を控除して、二大別すべき他の一大別、滑稽を本色とする作物、其の體裁は中本、此の中本の體裁をなしたの中には、泣本人情本もある、泣本の如きは大莧蕪型と中本型と兩様の體裁を持つ、故に一般には泣本といふ分類がなく、大莧蕪型の晒落本に混入し、中本型の人情本として區別して居る、その通りに滑稽物も作柄よりも體裁で分類され、或は假名草紙に屬し、或は滑稽物に算へられる、その滑稽物の中にも半紙本と中本とある、假名草紙に屬する分は製本の體裁の外に、作の時代と文體文脈から懸隔があるとも云はれやうが、十把一束にした滑稽物といふ稱呼の下には、その中から滑稽を本色とするものを撰み出した處が、撰み出すと容易に安心の出来ないことになる、我等は即今當面に一九の膝栗毛について話さうとするのである、それが滑稽物といふ分類の下にあるが爲めに、滑稽物と汎稱されて居る大體を概観して、上來の説述を敢てしたのである。

我等は爰に中本の滑稽物といふ、しかし風來山人の諸作の如きは、半紙本と中本とある、それは中本の體裁であつた處が、寛政改革以後のものとは違ふ、假名草紙の中に並べられた滑稽物とも同じでない、此の差異の由來も一席で

辨じるのには多きに過ぎる、又た寛政改革以後のものにしても、晒落本仕立のものや、黄表紙模様のもの、一九三馬鯉丈の滑稽物とは一處にならない。

寛政改革以後の滑稽物に主位を占めたものは、落語小説茶番小説であつたから、同じ滑稽物といふ類別をしても、決して一處にならない、違つた派口になつて居る、江戸の一般生活は其の時に世間は安穩であり、人心は平夷であつたから、別けても都會に住む民衆は如何にも延び／＼として居た、一日一日を樂しむのに、何として遊ぶのが好いかと、それだけしか苦勞を持つて居ない儕輩もあつたといふ、さうした時世であつたから、娛樂といふ娛樂が孰れも進歩發達する筈である。

近年落語と云もの流行して、貴賤ともに愛興すること大方ならず、昔鹿野武左衛門と云もの、劇談笑話もて世に行はれしと云、是を落し話の元祖と稱す、其後石井宗叔と云もの、武左衛門の流を酌み、専ら滑稽を唱へしかども、其事長く行はれずして、後には如何なりしとも知れず、然るに天明年中に及んで談州樓馬と云者、武左衛門が一流の世に廢れたるを歎て、其頃江戸に流行しける狂歌師戯作者の類をかたらひ、落語を再興しける、此輩初めは連中の宅に集り、戯談秀句など演て慰みとしけるが、耳新らしく興あることなりとて、後には祝儀の坐席、日待の遊興などに招かるゝことゝなりける、此頃は前句の開卷、狂歌の讀切といへば、必ず落語をすることにて、追々其道も開けて連中に加はるものも多かりしかば、始て牛島の武藏屋に於て話の會を催しける、此時隣松が畫ける桃太郎の畫像を床にかけて、黍園子を備へたりしと云、兩日會合して戯談をなしける輩は、水魚亭魯石、櫻川慈悲成、通亭文馬、後の石井宗叔、京屋可樂、龜屋壽樂、朝寝坊夢樂也、此日老若群集して夥しく賑ひける也、斯て後は茶屋の二階、或は廣き明屋などかりて、會日を定めて興行する程に、此頃櫛屋圓生、船遊亭扇橋、立川金馬、林屋正藏など云もの出來りて、彌其道流行し、每會甚賑ひける故、終には人寄の席を構へて、座料を

取て聞することになりたり、是文化の初め頃也。

夫より續いて菅良輔、翁屋三馬、白面舎狸友、鶴遊亭東里、尾上小勝、金原亭馬生など出來り、所々の人寄にて興行す、其中にも可樂が三題話、夢樂が時代話、扇橋が音曲話等は餘人の及ばざる所にして、此道の名人と稱せり、此外圓生が芝居掛り、正藏が怪談、狸友が腹鼓、東里が晒落、小勝馬生がこわ色等、各一流の新技を出して、婦女子の身を喜ばしめしかば、此類を都て話家と唱へて、世にも興することゝはなりける。

其後文政より天保年中に及んで、圓喬、扇藏、鐵扇、可上、青我、柳橋、數十人流行す、其弟子共に至りては數ふるに暇あらず、其中に大坂より下れる桂文吾、同文治、あひ玉など云ものあり、又仙哥、哥女吉、鯉かんなどとして、都々一節と云ものを三絃に合せてうたへるものあり、是等をはじめて、其弟子共に至りては、いくばくなくること敷ふるにいとまあらず、其中にも可上が百眼、柳橋が人情話、仙哥が都々一節を以て名譽とす、凡昔の落し話は言葉短く條通りて、婦女子の耳に落て解し易きことを専らとす、今の話は道行長くして、一ツ話に三日も四日も掛る程の續きもの流行し、あまさへ鳴物入大仕掛などと唱へて、咄をなすに種々の道具を仕組、笛太鼓三味線などをあしらひ、狭き高坐の上に三人も四人も立出て、芝居狂言の眞似をなせり、甚笑止なること也（名なし隨筆）斯う云ふ經過が咄家を寄席藝人にした、小咄は勝手が悪いので、自然丁場が延びて行く、さては人情咄、芝居咄となり、幾夜かに續いた話にもなる、しかし宗叔馬以前は大體が笑話なので、落ちのある話は仕形咄、輕口と共に、其の一部分であつたのが、其の後は落ちのある話に限るやうになつた、だから落語と概稱するやうにもなつた。

安永のころ石井宗叔、烏亭馬馬の二人、古風を一變して、今のさまの落しばなしを唱へそめたり、その話しの落しといふものに、間違落、仕形落、頓智落、地口落などの別あり（金杉日記）。

といふ有様、其の後に寄席の藝になつても落語であつて、話の丁場は延びても落ちがなければ濟まない、それと立別

れた續き話の人情咄。芝居咄は落ちがなくても好いが、笑話ならば是非とも落ちが入用であつた。

宗叔馬馬は新しい藝の持主である、それは世間に生き／＼した興味を興へもした、やがて寄席の演技となつた、其の景氣は目醒ましい、式亭三馬の浮世風呂(文化六年刊)が諷刺話と笠に着て居るだけでなく、

一夕歌川豊國のやどりにて、三笑亭可樂が落話を聞、例の能辯よく人情に通じて、おかしみたぐふべき物なし、惜かな其趣向僅に十分一を述たり、傍に書肆ありて、吾とおなじく感笑して居たりしが、忽ち例の欲心發り、此錢湯の話にもとづき、柳巷花街の事を省きて、俗事におかしみを増補せよと乞ふ、則需に應じて前編二冊まづ男湯の部をこゝろむ。

是だから教俗里談錢湯新話(伊藤單朴寶曆四年)と違ふ筈である、彼は談義物では落語小説なのだ、三馬は大に風來がる、當今の滑稽物は平賀ぶり以來のものだと云ふけれども、ソレは往けない、風來山人とも違ふ、まして其の以前の孰れとも別物なのだ、浮世床も御同様、話の丁場の延びた、落ちのないもので、高坐の演出を誘導するものだった、又た咄家の仕勝手からも必然の成行だつたのである、若し古今百馬鹿とか、四十八癖とか、早替胸機關とか、醋酩氣質とかに至つては、明白に小咄の様子を見せて居る、三馬は當時最新の興味であつた落語の消長に通じても居たので、落語中興始末といふの書いても居る。

三馬は又た茶番早合點(文政四年)があるのみならず、それよりも十年前に素人狂言紋切形(文化九年)を出して、其の巻頭で大に茶番の來歴を辯じて居る、茶番は先づ寶曆以來と云つてよからう。

役者籤箱前文あり略す茶番は樂屋にのみありし事なりしが、角至など云へる好者より段々風流になり、日々あらたにして素人へわたる、又身ぶりは今いふ狂言茶ばんなり里住といふ人よりはじまり、ちかくは三落、世にひろめて専らもてはやす事となりぬ、中略これにくさ／＼の繁きありて、太ゑんどののは、其かたちをかしくして始終たしかならず、いはゞ秋

の月を田樂にして食ふが如し、流香はきたなくして、しほめる花の水はなをたらすごとし、藤十郎といへるもの、此道にすぎにして、六義ありと書るもをこがましからずや云々、かく記したるを思へば、此人／＼は寶曆中の茶番仕なるべし、○角至○里住○三落○他園○流香○藤十○一瓢○白兎○如齋○三樂三落と同人○金福○陽堂○

惡鬼源喜敷未詳○來道、此等おの／＼高名なり、寶曆明和の間、世に知られし茶番あまたあり、○焉馬鳥亭一號淡洲樓○今日吉、此二人もおなじ頃に産れ合せて、明和よりこのかた茶番を弄び、幸ひに長壽にて今尙現存せり、安永天明以

來、櫻川杜芳寛政中に没すを始として、山東京傳文化中に没すのたぐひ、此伎の好人おほく、世に名だゝるもの夥しければ、しばらくこゝにいはず、さる中にも好屋翁は、安永より當時にいたるまで、ます／＼新奇を巧み、趣向綿密にて

景物の品數多し、此翁の茶番は甚だ事長けれど、人倦くことをしらず、利屈の中にかしきみあり、古事古語を引くかと思へば、地口秀句の落しあり、見る人感に堪て沈まんとする時、思ひよらぬことにて人氣を引立、めりはり、きら／＼とわかること妙を得たり、趣向は變化自在に、景物は風流俊雅をつくし、流行をはやくうがち、當然を明らむる事、世にこえたり、古今に此翁をこそ高手といはめ、又寛政より當時うちつゞきて、名高き人／＼

○秀朔俗よんで龜太とよふ○晋象○豐川○英賀○古石○竹鳴○井李○漁交○吉傳○松曉言これらを兩國連と云て、おの／＼きこえ高し、○櫻川慈悲成の茶番は、趣向に拘はらず、始終はなやかにて品よく、をかしきことに妙を得たり、すべて賑なる茶番、世に數多あれども、此右に出る者なしをかしみに下がりせず、下卑を去りて、眞のをかしきをつくす、彼こそぐりて笑はするたぐひのものにあらず○柳亭種

彦は、趣向綿密にて、氣どりよく、景物種々にはたらし、よく當世の氣をとる○むかしより小田原町に名ある人夥し、其外日本橋連を始として、藏前連、吉原連、本所連、深川連、淺草連、下谷連、神田連、芝連、山の手連にいたるまで、廣き大江戸にあらゆる好人、其數限りもなき事なれば、枚擧するに遑あらず。(茶番早合點)

茶番は芝居の樂屋に發生したものだ、段々劇場を離れて世間の流行物になり、江戸民衆の興味として頗る勢力があ

つた、曾て俳諧發句が江戸生活に與へた趣向趣味と、其の分量を比較すれば茶番の方が多大であらう、手短に茶番早合點の一章に見る顔觸れにしても、狂歌、落語、戯作、演劇との錯綜が知れやう、其の人々は敢て吟味して見るまでもなく、孰れも四者の錯綜を招來するのに當然であつた、それに明和以降は下方したでの發行が容易ならぬ力量を以て加蓋したので、後世からは江戸中が芝居町であつたかのやうに眺めさせる程な形勢にもなつたのである。

寛政以後の茶番は立茶番(狂言茶番)と口上茶番とある、其の口上茶番が盛になつた、勿論一方が衰へて一方が盛になつたのではなく、兩者は連行並進するのだつたけれども、立茶番よりも口上茶番の方が撥ねて居る、比較して見れば力強くもあれば新鮮な氣味にも富んで居た、此の際茶番早合點が好屋を賞美したのが注意される、又た好屋の行き方は咄家の演じる丁場の延びた落語との交渉を考へなければなりません、三馬等が咄家から戯作へ持込むかと思へば、振鷲亭のやうな戯作者は咄家に臺本を與へても居る、寛政以後の傾向は戯作者と咄家とを融通して、互に其の産物を與奪するのに便利であつた、此の便利を機會に時代を劃限することにもなる。

茶番小説は三馬よりも一年前に東里の阿齋茶番口切のせりふがあり、同年に慈悲成の壽茶番狂言、なほ口豆飯茶番樂屋(文化十三年)がある、蓬洲の口八丁(文化四年)や東西散人の安名手本執心廊(文政十年)に茶番狂言正本と銘を打つた、此の二つは早い方からと思ひ付きの方からと目が著く、他にモット適當な例證があるかも知れないが、我等の知つて居るのでは先づ此の邊だ、けれども茶番小説としては鯉丈を推薦したい、彼の八笑人(文政三年)和合人(文政六年)、それから金鵝の七偏人(安政四年)だらう。

順序から云へば、三馬、鯉丈、落語小説、茶番小説となる、茶番にしては立茶番、口上茶番と經過した、笑話落語が立茶番に浸潤し、身振は口上茶番へ延長して居る、とは云へ口上茶番は口上茶番なのだから、咄家との融通が多い、立茶番が臺本丸本を背負つた古風を脱出して、新しい興味、新しい趣向に轉化するには、咄家から需要しなければ駄だ。そ

れには口上茶番の開展發達が入用である、咄家とは丁場の延びた落語を演じる者をいふのだが、彼等が其處まで到着した事が、口上茶番の盛況と見合される、口上茶番の盛況に際會した立茶番、寛政以後の茶番は到底口上茶番の盛況に相違ないが、其盛況に並んで立茶番も榮えた、此處では口上茶番、立茶番といふ順序になる。爰での詳しい説明を望む人は鯉丈を善くお讀なさいと云ひたい、茶番小説としては八笑人、和合人を切に推薦する理由も他ではない。

借十返舎の東海道中膝栗毛等は、寛政以後の滑稽物なのだが、落語小説なのか、茶番小説なのか、我等は其の孰れにも片寄せたくない。彼が變つた趣向興味を看取して、大手を擡げて抱込んだ中に、種々様々なものがある、無論落語茶番を抱擁して居た。曾て『鹿を逐ふ獵師は山を見ず、其處へ嵌つて居ながら、一九が氣が附かないのが面白いではないか、若し氣が附いたら猶豫なく落語小説なり、茶番小説なりで往つたらう。茶番の趣向は未だ其處まで往つて居ないにしても、落語小説は三馬を待つてきてない、時世に先立つことは容易に望まれぬけれども、時世と同道するのには堪へられさうなものだ。しかし一九も三馬も鯉丈も時世を追駆けたのか、それとも引摺られたのか、決して御同伴ではなかつたらしい、何時でも誰でも御同伴し得られるのは細君だけなのか、イヤ江戸時代には女房を連れあるけばお笑草であつた、甘い御亭に見られたくないので、相應な山の神信者も連行しなかつた』と云つたことがある。だが文化文政度には茶番が至らなくはない、それだけ心付いた外は、十餘年後に於ても我等一分だけには考へが違つて居ない。一九は新しくする爲めに、頗る融通の好い作者だけに、手廣く趣向興味を抱へ込んだ、其の中に踵を接して立ち現るべき落語小説、茶番小説の根本を包含して居た、然るに自身は、さうとは知らないのだから一九は鼻毛を抜かれたやうである、なほ分派すべき幾件かの項目を持つて居た、それが大抱擁であつたとも云へないことはあるまい、既に

除外して居ないのだから、新趣向新興味として認められた機敏は許されやう、只だそれだけで有力な功績が認められやうとは思はなかつたのだ、一九は落語小説が成立たうとは思はなくても、落咄齋くり金(享和二年)、疱瘡請合輕口噺(享和三年)、落咄腰巾着(文化元年)、落咄の突出し(同年)、落咄店開大安賣(文化三年)、唯よし(同年)、落咄見世開(文化四年)、新作口合はなしうなぎ(同年)、落咄曲形瓢(文化五年)、落咄春雨夜話(同年)、江戸前噺(同年)、落咄家内喜多留(同年)、落咄彌次郎口(文化十三年)、仕形噺屋津天御覽(文化十四年)、おとしばなし福ねずみ(文政元年)、落咄口取者(同年)、咄の藏入(文政三年)等の作がある、一九ほど咄本を澤山出した作家は他にあるまい、彼は着目して居たゞけてなく、其の生産者でさへあつた。

一九の咄本及び材料に取つた笑話を眺めると、主として小話であつたやうだ。渠の丁場の延びたものには御無沙汰勝ちであつた、三馬の咄本は知らないが、彼の落語小説は咄家の領分のものである、落語小説は小咄からは成立たない、必ず丁場の延びた話でなければ往けない、同じものを捉へて居ながら、一九三馬の兩人が別々になる譯は此處だ。

一九は茶番にも着目して居たのみならず、方言競茶番種本(文化十四年)がある、臺本丸本に囚はれた三階風の古さに比べては新しいが、咄家の藝を後に見て、機轉の好い三題咄を消化する手際を誇る口上茶番、それに追附かうとする立茶番の氣前、三馬が得意の茶番早合點も後世恐るべきものがある、一九は其の狂歌の如く、茶番に於ても遅れて居る。三馬さへ及ばなかつたのであるのに、一九は俄の臭味さへ持つて居た、其の方から云へば一九より新しい三馬、三馬より新しい鯉丈が茶番小説を成立たさせる人なのだと云ふのが、何よりも簡明な云ひ方だと思ふ。

一九の串戯二日酔、金儲花盛場などを見ると、三馬の四十八癖、一盃綺言、酩酊氣質と、コツキラコをしさうであ

る、鉢合せをする程であつても、一九から浮世風呂、浮世床は出来ない、小咄を取立てること迄は同様であつても、丁場の延びた代物へ手を掛けなかつた爲めとしか思はれぬ、若し黄表紙に往けば落語小説、茶番小説の母胎たるべきものに乏しくない、此の邊が眞に燈臺下暗しなのであらう、其處からは心附かずに、膝栗毛の混沌に眼玉を光らせて、ウ、と合點したのが、現下の落語界の趨向であつたらしくも見える。

一九を東海道中膝栗毛から、金毘羅參詣、宮島參詣、木曾街道、善光寺道中、草津温泉道中、中山道中と見て往く、最初の東海道中とは離れて行く、文久の重版では東海道中にさへ「日本橋より品川へ」といふ標示を加へるやうになつた、それが木曾街道以下には似合はしいが、東海道中には不相應のやうにも見える、それは何故だらう、原刻本にはない此の標示から膝栗毛諸篇を考へて見るのも面白ぢやないか。

中本の滑稽物から離れて、紀行に落着いた馬士の歌籠(文化四年)、旅行案内に傾向した金草鞋(文化十年)、とを何と見るか、此の離れは木曾道中膝栗毛で初めて氣が附いたのだが、未だ馬士の歌籠や金草鞋ほどに勾配が強くない。しかし紀行たるべく、案内たるべき性質は、既に東海道中膝栗毛が持つて居る、それが滑稽からも小説といふことからも、二つの傾斜のために漸く隔離して、木曾道中膝栗毛を際立てた、是も大抱擁の中に落語も茶番もありながら、遂に其の孰れにも走らずに、混沌といふか、曖昧といふか、最初の規模を變へないやうにした、此の態度は膝栗毛諸篇に於ては確持された、無論二世一九に至つては先師の規模に忠實でなかつたが、初代は紀行となり案内となることも、頗る因循して思ひ切つた片寄りを見せずに、膝栗毛諸篇だけは通した、四圍の景況からは動かされさうで稍危険を感じしめなくもなかつたのに、兎に角に膝栗毛の規模を變へなかつた、それは姑息なやうでもあつたが、落語小説、茶番小説に墮ちなかつたので、浮世風呂にも八笑人にも七偏人にも對立して、些少も遜る所のない物として、はた一枚上の役者にされて、今日が日まで景氣を持続されたのであらう。

一九と三馬とは共に諷刺に富む、けれども一九は刺のない蕎麥で、三馬のは刺が甚しい、一九は茫漠とした處に味があり、三馬はキビ／＼した處を命とする、一九は駿府生れだから痰火が切れない。三馬は江戸ツ子なので娑婆ツ氣が出て居る、とだけでなく二人の性格からも来て居るだらう、それが東海道中膝栗毛と浮世風呂とを併讀して、一番觀面に感ずることではあるまいか、さうなら此の場合、作者の出生地は問題にせず済む。

二人の蕎麥に刺があつても無くつても、結局江戸ツ子と田舎者と双方を嘲笑することになつて了ふ。それは御覽の通りである、江戸ツ子を擔ぎ上げることは、一九よりも三馬の方が天井を見せて居る、手強いただけ惡落ちにもならうといふもの、抑三大都市の中に江戸を第一とする娑婆ツ氣の出たのは寶曆だが、京を花の田舎と見下すやうになつたのは天明の頃だ、其の心持が八百八町の裏店の隅々まで徹底した時、江戸ツ子といふやつが出現したのだ、此の阜月の鯉に見立てられもした代物は、文化文政以來の珍品とある、文化文政の江戸は成熟した都市でもあつた、今日の東京が國史に未曾有なやうに、當時の江戸は絶後と云はれないが、體に空前の發達を致して居た、けれども江戸ツ子等が歴史に參稽するの、三都の現況を比較するのといふのでなく、只だ住み馴れた土地を何處よりも優勢にして了つて居るので、實は江戸以外の土地を知らない、世間見ずの獨合點に過ぎないのだ、知識に乏しい彼等は、外來者が土地不案内なのを見て嘲罵し、耳慣れない言語を聞けば一も二もなく愚弄する、田舎者と云つて馬鹿にする其の人々よりも、江戸ツ子は自分の住む町の名主の支關へ往つてさへ何程マゴツクだらうか、ツイ鼻の先の自身番へ呼ばれてもへドモ下しずには居られなかつた、彼等の言語は甚しい訛りだらけの重言片言づくしなのを氣付がつかない。

江戸ツ子といふ珍妙な代物の出來上つたのは、經濟狀況に依つて都會に發生した畸形兒である、彼等は江戸生活を三階とすれば下階に屬し、五級に別ければ第五級に屬する、彼等の知識のない思慮のない輕佻な行動を、下廠する生

活階級の人々から面白く見られた、罪のない處を興味として賞玩されたのである、實はそれが當時の戯作者にも御愛嬌に見へたのだ。

江戸ツ子が外來人を貶し附ける第一は言葉であつた。彼等は自己の物としては何にも持たない、只だ有るのは訛りだらけの言葉のみである、其處から誰をでも田舎者にして了ふ、それに土地に泥んで江戸ツ子階級でない者も、方言國訛については、假借なく同黨伐異して憚らない、江戸の言葉は大略寶曆度に渾成した、方言國訛から離脱したものだ、文だ、三馬は狂言田舎操の中で、正銘の江戸語を論じて居る、それは江戸ツ子の使用する言葉と大變違つたものだ、文化文政度でも彼等は武家町家の第三級生活者とさへ言語が同じでない、然るに此の怪しい江戸ツ子の言葉から押當てて、遠慮なしに田舎者にして了ふ風が、化政度から勝手放題に行はれた、下懸方言鄙通辭ひなな(文化七年)、田舎通言驛路の鈴(文化八年)、片言雜話田舎講釋(文化十二年)などが直ぐに思ひ出される、その前にも田舎談義(寛政十二年)のやうに、田舎言葉を一篇の興味にしたものもあるが、他の都市(京大坂等)に對し、鄉村に對し、都鄙を辨じるのに言語を眞先にして分別することはなく、其の土地の種々の特徴を比較するのに勉めた、それが化政の江戸では専ら言語の自己と相違するのを吟味するの屈托した、耳珍しくさへあれば何の猶豫もなく、忽ち方言國訛として指彈し、其の人を田舎者とするのに躊躇しなかつた、思ふに化政の江戸ほど言葉穿鑿の嚴しいことは、有史以來あつたものぢやないのだらう。

此の潮先なればこそ、一九の金草鞋も方言修行と角書をして、勉めて土音郷訛を並べ立てもする、三馬の大千世界樂屋探は、熊谷と敦盛の組討の本文、源平盛衰記を提出し、それを熊谷の坂東音、在所言葉、敦盛の京辯を其の儘に口語體に書き移して對照させもした、此の趣向には田舎者めエといふのを何よりの罵倒と心得た江戸ツ子を嬉しがらせ、又た誰をも關東平の土臭さ、御龜末さと、京辯の廻り遠く、齒切れの惡さとを比較して、テキパキとした威勢の

好い江戸言葉の快活な處を承知させ、成程田舎者はと納得させたらう。

東海道中膝栗毛は此の江戸ツ子、江戸語を十里と持ち出せば、忽ち坐つて居て外來人に威張るのとは違つて、土地不案内でマゴツキもすれば、快活を誇る江戸語もお笑草になる、形勢一變してはイヤハヤなものなのに、京大坂まで引出しては溜つたものぢやない、三馬は先ツ走りの江戸者を近在へ引出して、村の兄哥に締めさせる趣向を、狂言田舎操に書いて居る、随分早間を往つたが、大間に往つても、江戸者は處を放しさへすれば凹むに極つたものだ、連れ出さなくても、足もとの怪しい代物だけに、一九も三馬もお揃ひで、折角擡げた江戸ツ子を、胴上げの上げ放しにするやうに成行くのも、蓋し已むを得ないのであらう。

一九は遙々と江戸者を連れ出した、是は京大坂を持廻つて、胴上げの上げ放しを巧んだのぢやない、可愛い子に旅をさせろといふ俗諺がある。旅行は毛頭興味のものではなかつた、汽車汽船電車自動車のある世の中からは、膝栗毛の旅行は想像するだけでも骨が折れるだらう、諸大名の參勤交替の往來は何程殿様たちの苦痛だつたのか、マア考へても御覽なさい、立派な乗物と云つた處が、丸て箱詰になつたやうなもの、其の窮屈さ加減は驚くべきものだ、それこそ展望などは殆どありはせぬ、其の中では居住ひも自由にならぬ、身動きもせず十日も半月も、乃至廿日餘も擡がれるのだ、是て煩はないのが不思議だと思ふ、それが江戸時代に一番上等の旅行で、お大名様の道中なのですよ、然るに我等は當世乙女織(寶永三年)に『金銀は塊、行次第の多やう旅』とあるのを見附けた、西鶴は早く三ヶの津、五ヶの津の遊里を歴訪する耽溺家を描いて居る、それが既に榮耀の旅であるが、榮耀旅といふ言葉に我等が接したのは、此の當世乙女織であつた、モツト早い處にあるかも知れないが、今は自分だけのことで云つて置く、しかし西鶴は贅

澤な旅行者を扱ひながら、榮耀旅といふ言葉を遣つて居ない、何程贅澤な旅行はしても大名の道中で知れて居る、我等は漸く寶曆四年の前句附の中に、

ゆるり〜と〜

音曲の道具持たせて遊山旅

といふのを見附けた、遊山旅といふ其の心持は、兎に角旅行を楽しむ心持だ、興味の旅行で苦しくない行き方なのだ。

近年わきて心得ぬはやり病あり、隙と金との自由にまかせて、湯治といひ立て、毎年遊山旅をなす者多し(明和八年版教訓世間萬病回春)

今日の旅行とは比較にならぬもの、遊山旅といふに相應するだけの設備があるやうになつて來た、元祿度から食事と宿泊と別だつたのが一處になり、寢具や蚊帳を備へることが、旅籠屋の常になつた、それから六十年ほど遊山旅の時代が來たのか、宿驛の沿革、旅店の變化を云ひ立てると、話は容易に片付かないが、文化文政には旅費から眺めても多少とも、旅中に我儘が云へたらしい、其證據としては當時の旅日記が残つて居る、従つて旅行好きも増加する筈だ、江戸から五里八里を隔てた一晚泊りの見物には婦女さへ出掛ける有様、京大坂へは行つて見たい者が多く、モウ旅行を恐れる人などはなくなつた、面白づくに書くにも寛永の竹齋物語、萬治の東海道名所記、元祿の新竹齋よりも、著しく情況が違ひ、心持が變つた時だけに、東海道に限らず木曾路や中山道と云はず、一九が膝栗毛を書き立てる時期は、誠に適當であつたと思はれる。

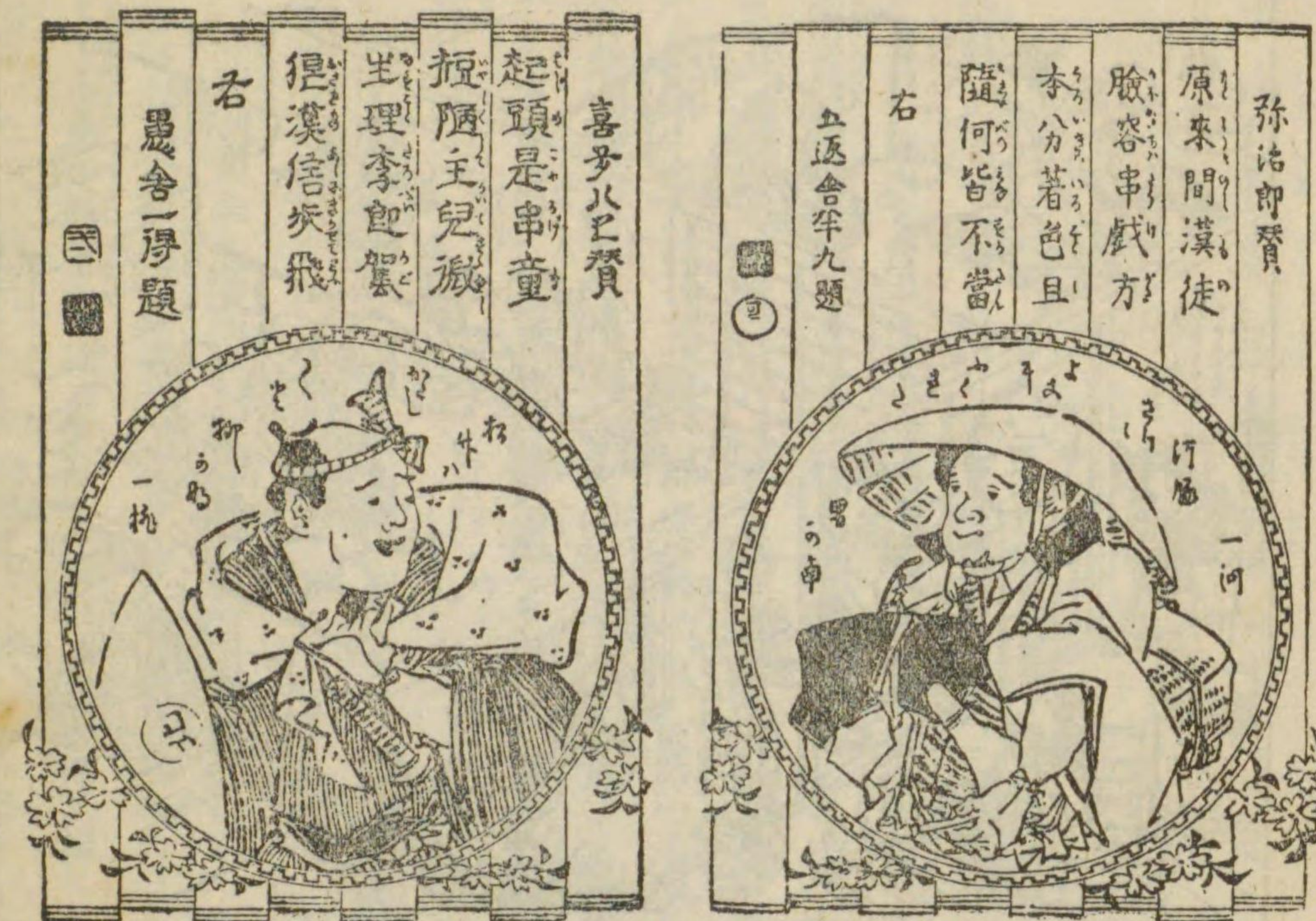
以上の陳述は思ふ儘を、成るべく手短かに云ひ試みたのであるが、大方は果して其の何程までを許可し、其の若干を否定するか、それとも頭ごなしとお出なさるか、御批判が又た我等には面白からう。

東海道
中海
膝栗毛
全

目次

東海道中膝栗毛	一
發端	三
初編	三
二編	八
三編	九
四編	一三
續栗毛	三七
初編(金毘羅參詣)	三九
二編(宮嶋參詣)	四七
三編(木曾街道)	四三
四編(同)	四九
五編(同)	五一
五編	六一
五編追加	一〇三
六編	三九
七編	六七
八編	一〇五
六編(木曾街道)	三五
七編(同)	五三
八編(從木曾路善光寺道)	五九
九編(善光寺道中)	六三
十編(上州草津溫泉道中)	六五

目次終



孫治郎賢

原來問漢徒

臉容串戲方

本分著色且

隨何皆不當

右

十返舎平九題

喜多八上賢

起頭是串童

短陋主兒戲

生理李郎蟹

提漢倍疾飛

右

愚舎一得題

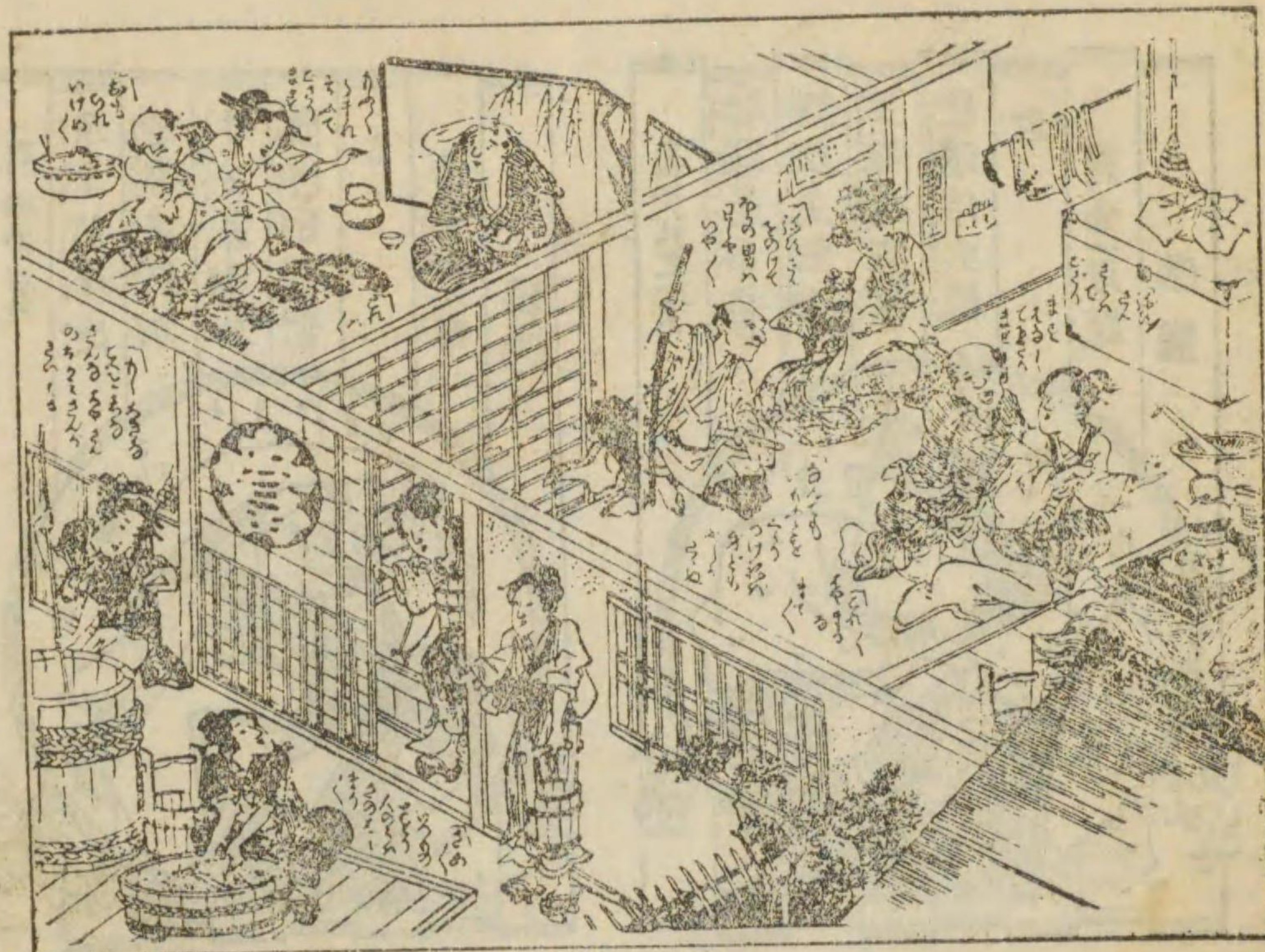
藤栗毛發端序

鬼門關外莫道遠、五十三驛是皇州、といへる山谷が詩に據て、東海道を五十三次と定らるよしを聞り。予此街道に毫をはせて藤栗毛の書を著す元來野飼の邪々馬といへども、人喰馬にも相口の版元、太鞭をうつつて賣弘たる故、祥に乘人ありて、編數を累ね、通し馬となり京大阪および、藝州宮嶋までの長丁場を歴て歸がけの駄賃に、今年續五篇、岐蘇路にいたる。彌次郎兵衛喜多八の稱、異國の龍馬にひとしく千里の外に轟たれば、渠等が出所を問ふ人有、依て今その起る所を著し、東都を鹿島立の前册とし、おくれ走に曳出したる、馬の耳に風もひかさぬ趣向のとなつて置を、棚からおろして如斯

于時文化

甲戌初春

十返舎一九志



道中膝栗毛 發端

東都 十返舎 一九編

武野野の尾花がすゑにかゝる白雲と詠しは、むかし／＼浦の苫屋、鳴たつ澤の夕暮に愛て、仲の町の夕景色をしらざる時の事なりし。今は井の内に鮎を汲む水道の水長にして、土蔵造の白壁建つゞき、香の物桶、明俵、破れ傘の置所迄、地主唯は通さぬ大江戸の繁昌他國の目よりは、大道に金銀も蒔ちらしあるやうにおもはれ、何でも一稼ぎと心ざして、出かけ来るもの、幾千萬の數限りもなき其中に、生國は駿州府中、柘面屋彌次郎兵衛といふもの、親の代より相應の商人にして、百二百の小判には、何時でも困らぬほどの身代なりしが、安部川町の色酒にはまり、其上旅役者華水多羅四郎が抱への鼻之助といへるに打込、この道に孝行ものとして、黄金の釜を掘出せし心地して悦び、鹹氣のありたけをつくし、果は身代に迄途方もなき穴を掘明て留度なく、尻の仕舞は若衆と二人、尻に帆かけて府中の町を欠落するとして、

借金は富士の山ほどあるゆゑにそこで夜逃を駿河ものかな

斯足久保の茶なることを吐ちらし、頓て江戸にきたり。神田の八丁堀に新道の小借家住居し、すこしの貯あるに任せ、江戸前の魚の美味に、豊島屋の劍菱、明樽はいくつとなく、長家の手水桶に配り、終に有金を呑なくし、是ではすまぬと鼻之助に元服させ、喜多入と名乗せ、相應の商人方へ奉公にやりしが、元來さいはじけものにて、主人の氣に入、忽ち小錢の立まはる身分となり、彌次郎は又國元にて習、覺たりしあぶら繪などを書いて、其目ぐらしに春米の當座買、たゞき納豆、あさりのむきみ、居ながら呼込で喰てしまへば、びた錢一文も残らぬ身代、田舎より着つゞけ

或人河津信即多喜多八を原何者ぞ中答曰くも
 其の一人は唯の親仁を喜多八と稱し、其の一人は
 其の一人は唯の親仁を喜多八と稱し、其の一人は
 其の一人は唯の親仁を喜多八と稱し、其の一人は
 其の一人は唯の親仁を喜多八と稱し、其の一人は
 其の一人は唯の親仁を喜多八と稱し、其の一人は
 其の一人は唯の親仁を喜多八と稱し、其の一人は



の布子のそで、綿が出て洗濯の氣を付るものもなく、
 是はあまりなるくらしと、近所の削り友達が打寄て、さ
 るお屋鋪におす奉公勤めし女、年かさなるを媒して、
 彌次郎兵衛にあてがへば、破鍋に綴蓋が出来てより、狼
 の口あいたやうなふるびもふさぎてやり、諸事手健に
 人仕事などして彌次郎を大事にかくる様子、此女房の奇
 特なる心ざしに、彌次郎夜もはやく寝て、随分機嫌をとり
 くらしけるが、うか／＼としてはや十年ばかりの星霜を
 ふりけれども、薯蕷鱸にならず、相替らぬ春報、され
 ども屈託せぬ氣性にて、売洒落にしやれちらし、近邊の
 なまけものどもの遊び所となりて、五合徳利の寢姿なが
 し元に絶ず、べこ／＼三味線の音、不斷味噌桶のふたを
 あくる間とはなかりける。(あるじ彌次郎兵衛はるす
 と見え、女ばうおふつ、ながしもとにあすのしかけして
 るると、うらだなの女ばうおちよま、ほそおびまへだ
 れにて、たなつちりをふつて裏口よりさしのぞき、
 おちよま、モシおかみさんへ、御無心ながら、醬油がすこし
 あらば、どうぞかしておくんせへ。ホンニ夕べはてへ

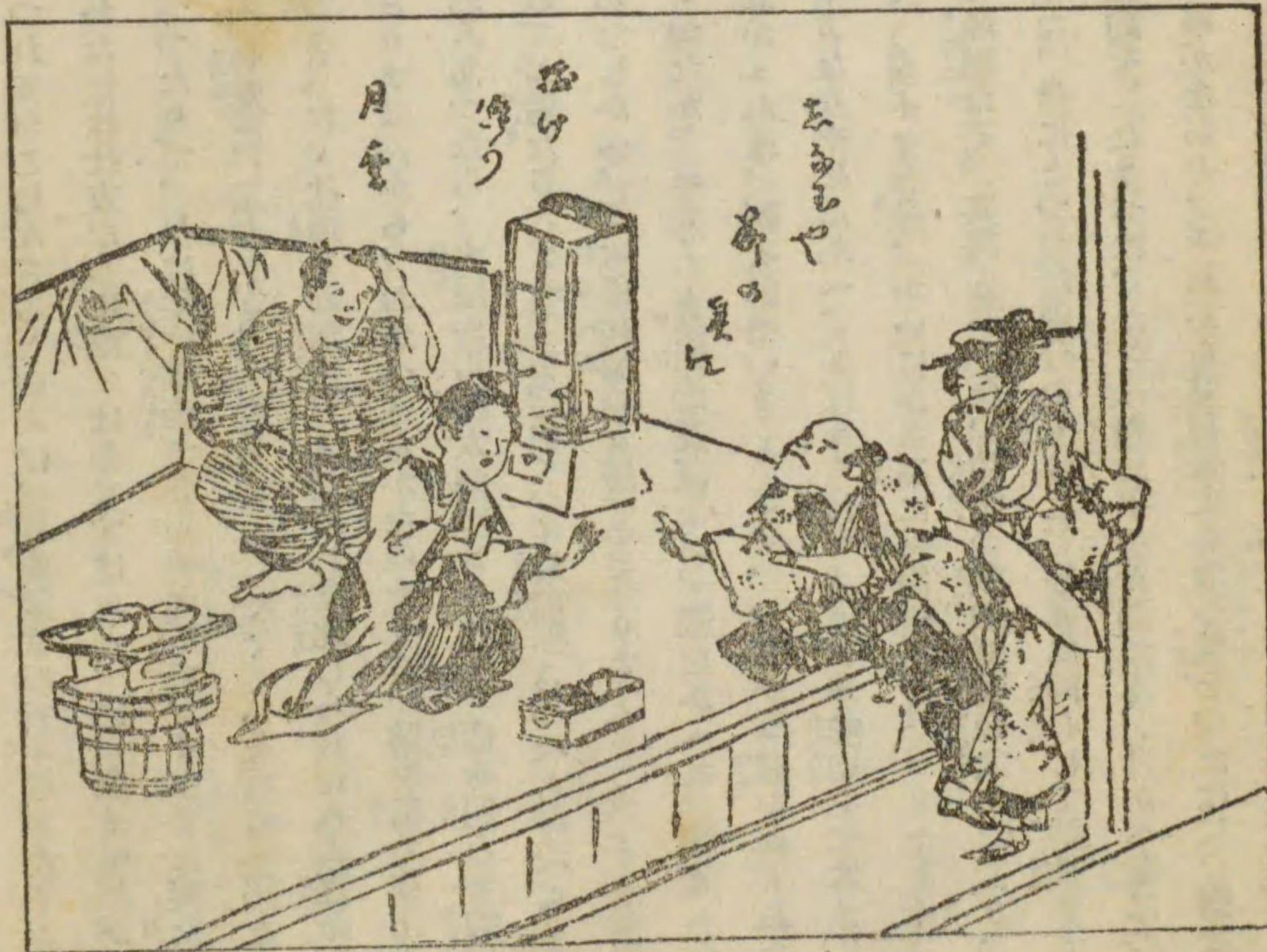


ぶお賑かてござりやした。わつちらが所の生酔どのを御覽じやれ。ただけへりやせんわな。此間の晩夜更て、路次の
 戸を破るやうに叩いたとつて、大屋さんのおかみさんが、あの口でござへそくに小言をいひなすつたが、わつちらが所
 の野呂馬どのものろまなりやア、あの又おかみさんもあんまりぢやアござりやせんかへ。ナント店賃の一年や二ねん溜
 つたとつて、一生やらずにおきやアしめへし、それをやかましくいふくらみなら、溝板の腐つた所もどうぞするがい
 いぢやアねへかへ。そして犬の糞も、てんぐの内の前ばかり浚つて、長家のものはなんだとおもつてゐるやら、ノ
 ウおくんさん ト、むかうのうちのかゝしゆへ水をむけかけると、あがり口にかたあしおろして子どもにちゝをのま
 せてゐる女ばう、やがておりて出かけ、おくん、モシナあんまり大きな聲をして、そんなことをいひなさるな。奥の
 おけんつうが、今手水にいつたよ。アノおしやべりも又、大屋さんのおかみさんへいつそ追従ばかりいつて、長家の
 ことをどうめへつたかうめへつたと、いゝ苦勞性ぢやアねへかへ。それに聞なせへ 此間からあそこの内へ来てゐた
 居候は、アノかみさんの妹だといふこつたが、ナニあれがおやしきに奉公してゐたもすさまじい。ちよつと見てもし
 れてありやす。ありやアおねへ、ばんくるはせものだとよ。一昨日もどこか下谷のおやしきへ目見にいくとつて、つ
 くり立て出ていつたが、ナアニよその隠居さまへ妾にいくので、支度金が七兩来たとき、いやぢやアねへかへ。あの
 頬で妾も氣がつよい。わつちらもこの額のはげつてうがなくて、耳の際の痰瘤がもうちつとちひさいと、妾にでも出
 て支度金をとらうものを、ハ、ハ、ハ、おかみさん彌次さんはまだかへ。ヲヤ／＼噂をいへば影がさすと、ソレ旦那
 がおけへりだ ト、ふたりはおのがうちへひつこむと、彌次郎立かへりて、彌次、エ、この畜生めは、願にかけてお
 らが所の裏口に寐てゐらア。おふつ茶はわいてあるか。ふつヲヤおめへ酒ばかりでおまんまはまだかへ。彌次、しれて
 あることさ。居酒屋へはよつたが居飯屋へはよらなんだ。ふつ、そして喜太八さんの所から、なんてたび／＼呼にくる
 のだへ。彌次、おれに金をかしてくれとつて。ふつ、ヲヤばからしいどうしたのだへ。彌次、あいつめが假宅へてもはま

つたさうで、親方の金をちつとばかりつかひこんだといふことだ。其尻がわれるとしくじるはあたりまへだが、こゝでしくじつては理屈のわりいことがあるといふ。なぜだときいたら、あそこの番頭めが、此間疝氣が天窓へさしこんで、それなりにあたまがしやつきりとなつて死んだといふ事だ。それに親方は年寄の癖に、美しい若いかみさんをもつて、腎虚してもうけふかあすかといふくらゐ、これも今にめでたくなるは必定、さうすると喜太八めが、その後家を請合て手にいれる仕様があらうといつたがなるほどさういけば、あいつめはおかまをおこすはなしたが、そこではおいらもわりい事はなし、どうぞこゝでしくじらさねへやうにしてへものだがしかたがねへ。時に飯にしよう。何ぞ菜はねへか。ふつさつきのむき身殻汁さ。彌次「ナニ拔身が喰れるものか。しかしこいつもきらずとあればきづけへなした。ト、此内日もくれたるに、あんどどうをともし、彌次郎ちやづけをくひかゝる時、とこの頃五十あまりの侍、たびしやうぞくに、侍「イヤ卒爾ながら、駿河の府中からおざつた彌次郎兵衛殿は爰元でおざるかヤア。ふつ「ハイこつちらでござりますが、どつちからお出なさいました。侍「イヤハイ。氣遣ひなものではおざんないヤア。ト、三十ちかき女をつれてはいり、腰をかくるを見て、彌次郎きもをつぶし、彌次「コレハ兵太左衛門さま、妹御をつれて何として御出府でござります。兵「あんとしたア曲がない。このいんもうとめを、貴様の所へ嫁入につれてまゐつたのでござるヤア。斯ばかし申では合點が參るまい。きさま國元にて、これなる身どもがいんもうとおの蛸と、密通をせられたといふこと、跡にて聞て腹立はいたしたれども、たんだひとりのいんもうとがこと、どうした縁でがな、貴様でなくでは添ぬと申すゆゑ、不便におもつて堪忍の胸を撫て、すいた男に添せずとおもひきはめ、わざ／＼めしつれて參つておざるヤア。此うへからは随分といんもうとめを不便がつてやつて下さい。まづ祝つて冷酒でなりと盃をさせずに、サア／＼はやく／＼。おふつ「オヤ／＼おめへさんどなたかはしらねへが、どこのくに、かめつさうな、總體男といふものは、女に逢て二世の三世のと眞實らしくいひかけて、欺して見るは女をおとすおさだまりの口上、それをまん

まことにして、駿河からわざ／＼其男に添さうとつて、つれておこしなさるといふは、馬鹿氣きつてゐるぢやアござりませんか。又妹御も妹御、満足な男でもあることか、わたしは仕方なしに添てはゐますけれど、色が黒くて目が三かくて、口が大きくて髭だらけで、胸先から腹ぢうに癩がべつたりで、足は年中雁瘡でざら／＼して、イヤまた寝た寢息の嗅いとこ。彌次「ヤイ／＼こいつめが、亭主を羅利骨灰にしやアがる。おふつ「オホ、、、、それでも男といふものはすたらねへもので、女とさへイヤ眼一でも鼻缺でも、たゞは通さぬ氣性、さだめし念比しられた人も邂逅にはありましたらうが、あんまりこのもしいをとこでもござりませんから、おまへさんがたのやうに、跡を追て来た人はひとつとりもござりません。この狭い内に女房がふたり三人あつたら、大屋から根太がたまらねへ、店を明ろと追出されるでござりませう。人のしらねへうちに、はやくつれてお歸なされませ。兵「エレハイ最前からつべら／＼べらと、此女中よくしやべるが、其方は先何者だい。おふつ「アイわたしかへ、彌次郎兵衛の女房でござります。兵「アニ女房だい、見たくでもないヤア。これ彌次郎兵衛、お身女房をもつたか。エレ／＼是非に及ばない。繩をかゝれ。國元へひいていかずに、ト、くわいちうよりはやなはを取いだし立かゝれば、彌次郎やつきとして、彌次「ナニ繩をかゝれたアどういふ理窟、わつちが女房をもつちア繩をかゝらにやアなりやせんかへ。とはうもねへ。モシエ鯨切を二本さしなざつたとつて、それが恐しいものでもござりやせんはな。兵「イヤお身、がいにかさ高にお出やるな。コリヤよくきけ。今度いんもうとめをしつれたは、家老中の指圖に依て罷越たぞ。其譯といふは、相役の横須賀利金太かたより、此いんもうとを婦妻に貰ひたきよし、媒をもつて申した、身にとつては過分の聲ゆゑ、早速に同心して結納まで受をさめた所に、いんもうとめは一筋にこなたと夫婦の契約をしたうへは、たとへ親兄弟の差圖でも、ほかへ縁につかずこたアいやだといふ。身共魂消まいものか。ア、せず事がないと、それから其利金太かたへ便をつかはし、彌次郎兵衛と申すものといんもうとめが、密通をいたせし事神もつて存ぜず、それゆへ結納も受納いたせし所に、いんも

うとめは密通の男ならでは添ないと申。しかれば妹が首を切てこなたへ持参仕らう。それにて御一分をたてられ、御了簡頼入と申遣せしに、先方も諸親類はじめ傍輩どもへ、兼てこなた妹御を妻に申受る筈と吹聴せし上は、世間體へ對し申譯のない仕合、女の首ひとつ受たとして、何の役にもたぬ事、此上は其元とうち果すより外分別なし。明晩阿倍河原において勝負を決せずとの返事、元來身共も覺悟のまへ、いかにもと挨拶せし所に、家老中より雙方をめされ、年來御主人の御知行を頂戴いたし居ながら、私の宿意をもつて討果さんとは、殿へ對して第一不忠妹が兄にかくして夫を持しをしらずして、利金大に契約せしを不届とはいひがたし。いまだ婚禮もせないうちの事、互に一分のすたる事はなはず、自今以後兩人意恨を棄て、御奉公を大切に勤められよ。また妹おたこのことは、假初にいひ約束せし男の外、他へ縁さつくまじとは、まことに貞節のいたり、殿にも不便に思召れ、下地より馴染たる男に添せよとの御意、有難くお受申て、それより是まで罷越たる所、さきの男、今女

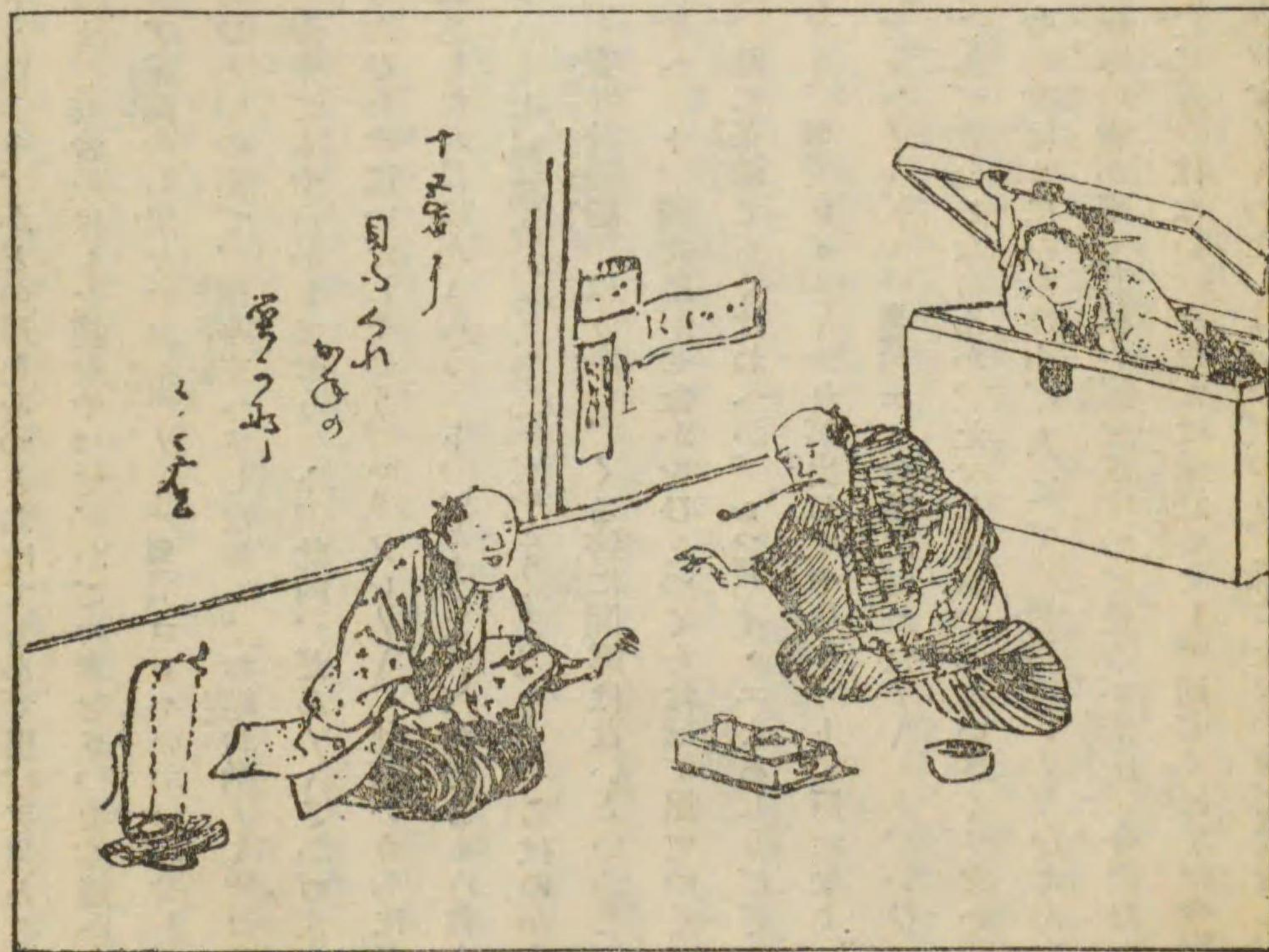


房を持をるゆゑ、すごく妹めをめしつれ歸りましたと、アニハイ兵五左衛門ともいはるゝ侍が、生類さげて歸られずか。ヤアサア妹めを妻にいたせばそのとほり、いやといへば是非とも繩をかけて國元へ引つれ、家老中へ此段を披露し、一旦約せし利金太かたへおのれを渡さねば、兵五左衛門武士がたゝない。サアせずことがないと諦てなはをかゝれ。但しは踏付てめしとらずかヤア。彌次ハア成程さうおつしやればきこえました。しかしそれはおめへさまの方の得手勝手、たとひこの身は三枚におろされ、切割まれて鹽辛にせらるゝ共、我を大切にしてくれ難辛抱する此女房を捨て、妹御を女房にもたれるものか。しかたがねへ。どうとも御勝手になせへましト、かくごして兩手をうしろへまはせば、兵五左衛門たちかゝり、すでに彌次郎をいましめんとするを、女ばうおふつすがり付、おふつ、モシモン段々の様子を承りますれば御尤な事、去ながら現在夫が細目にかゝり、永の道中に耻をさらし、お國でもしも命に拘ることやなどあつては、わたしの悲しさ。モシ今おまへのいひなさるには、たとひ此身はどうなつても、難辛抱した女房は捨られぬといひなすつたがわたしには千倍。もうなんにもいひませぬ。わたしには隙を下さりませ。あの妹御は駿河からの馴染とあれば、わたしよりはさきの事、添とおつしやるも無理ではない。サア斯わけていふ上に暇をもくれず、お侍さまの手にかゝる了簡なら、まづわたしからさきへ死すト、なくなくながしものとのはうちやうをとつてひねくり廻すを、彌次郎おさへて、彌次コリヤ、何を、馬鹿ものめが。おふつ、イエエそれでも。彌次、ハテさて、それ程に思ひ詰た事ならしかたがねへ。ちつとの間、暇を取て、親分の所へでもいつてみてくれ。大事の女房を今さらうなどは夢にもおもはねへ。はかねへ別れをするもみんなおれがわりいからだ。ト、さすがの彌次郎も、女房の手まへきのどくさに、かたかげへまねきて、いろくにだましつすかしつひひふくめ、すゞりばことりいだし三くだり半をかきてやれば、びんぼふ人のきさんじさ、きの身きたましくしばこにふるしきづつみひとつひつかゝへて、なみだながら、しほくとして出てゆくと、兵五左衛門大小をとつてはふり出し、

兵「ヤレ、重荷をおろした。ナント彌次さんわしが仕打は妙であります。彌次「駿河もの、詞おそれ入た。いなか侍の立、いかな後家の質屋へ見せても、百石取とは直打する男を、棒手振の芋七にして置は惜いもの。それに此又矢場のお蛸が、田舎娘の身振妙であつた。皆おれが自作の狂言でふたりを頼んで、女房に「はいくはせ追出したも、あの陰氣ものに飽果たからの事、ひとつには急に十五兩といふ金がなければならねへ事で、芋七貴様へふつと咄したら、きさまのいふには、ソリヤさいはひの事がある。さる所の隠居が、内の腰元に手をつけ、孕した故、聾や娘の手前、しれぬ先にとて、表向いとまを出して、請人の所へ内證で預ておかれたが、どうぞ腹の子ぐるめに、金拾五兩つけて片付たいと、わしがたのまれて居るから調度よいが、しかし女房のある上へはどうも、はなしについて、おれもその十五兩ほしい最中、たとへ腹には鬼の子がやどつてゐやうとも、金さへもつてくれば、年増女房にあきた所、こいつは妙だと此狂言を聞いて、きさまだちふたりを頼んで、まんまと上首尾にやりはやつたが、彼持參金のしろものは、いよゝ急に來る筈か、どうだ。いも「セイヤくるはずとも。おめへも金が急ぐといふ、さきでも腹が落さうだから一刻もはやいがいと、せきこんでゐられるから、そこで今夜更てから、そつと駕でこゝへむけてくるはずにしておいた。ちよつびり酒でも出さにヤアなるめへが、内にとつたのがありやすか。彌次「ヤア、今夜くるのか。エ、それは又早急な。それとしつたら、けふ髪月代でもしておかうものを、ドレちよつと鬘ばかりでも剃て來よう。いも「ア、コレ、今頃どこに鬘結床があるものだ。そんなことよりは酒の支度でもするがい。コレサおめへなにをまごゝする。彌次「イヤ何もしわへが、ちよつと爪でもとつておかう。いも「ナニ埒もわへ、そんなことはしわへでもいゝじやアわへか。彌次「イヤそれでも十本みんなとらずとも、せめて二本の爪ばかりは。いも「ハ、おきやアがれ。大わらひだ。ト、此内、にはかにそこらとりかたづけるやら、火ばちにけしずみをおこしかけ、ねずみいらずから五合とくりをとりだし、まづまぢうけに、しらふではをかしいと、三人はなつきあはせ、のみかけてゐる折から、

おもて口にいきづゑの音カツチ。いも「ヲヤもう來たさうな。ト、かどの戸をそつとあけてとんで出、ヲツとここだ。駕の衆御大儀。コレ一ばいのんでござれ。ト、有合のはした錢をやつて、かごの者をさつそく追かへし、のつて來た女の手をとつてもなひはいり、いも「サア嫁御のお出だ。お盃。彌次「コレはいかいおせわ。いも「サアお壺さんそけへすわりなせへ。そこでおめへからひとつのんで、御亭主へさしなせへ。お蛸お酌。コリヤア四海浪しづかにといひてへが誂はしらず、あした來て潮來でもやらかませう。ト、此内、だんゝさかづきもすみ夜もふけたるに、おたこ「いも七さん、わつちらアもうおひらきにいたしやせう。いも「ソレ、此狭いうちに長居はおそれだ。コレおつぼさん今夜はゆるりと休なせへ。又あしたお目にかゝらう。ト、いとまごひし、おたこもろ共立出れば、彌次郎おくるふりしておもてにたち出て、彌次「コレいも七、持參金のさたがないがどうする。いも「そこはぬからぬへの。今のさきかごから出た時そつときいたら、あしたの晝時分隠居のはうから、くる筈に間違はないといふことだ。ソリヤノ請合きづけへなしに、今夜はしつかり樂みなせへ。ト、彌次郎がせなかをひとつくらはせて出てゆく。彌次郎兵衛かどぐちをしめて、彌次「コリヤア寒くなつた。時に茶漬でもくはねへか。おつぼ「イ、エよろしうござります。彌次「そんならもうねようか。おつぼ「おとこを取りませう。彌次「ツイ、おれが出してやらう。ト、戸だなよりやぶれふとんにかいまきなどとりいだす所に、おもての戸をトン。ト、彌次「エ、今頃にだれだ。ト、いひつともさては今おひ出した女ばう、此事をかぎつけてやふりこんできたるならんか、たゞしはおやぶんいさくさをいひにきたるか。何にもせよ見つけられてはめんどうなりと、今の女ばうにむかひ小ごゑにて、彌次「コレ、ひよんなことがある。此長屋の作法で長屋のものが軈をとると、長屋中の者が來て其軈の尻をさすつて見るが定法。今そなたの來たことをどうしてしてやら、それでさすりに來をつたに違ひはない。そなたは懐妊のよし。同じくはまだ今宵は來ませぬといつて見せたくなへが、どうであらう。おつぼ「ヲヤ、わたしはいやだのう。殊にたゞの身ではなし、

しらないお人に此おいどを撫させる事はいやだねへ。
 彌次「そんならどこぞへかくしてへものだが、此通二階はなし。ヲツトあるぞ〜。窮屈ながらちよつとの間、ここへ〜。ト、賣のこしのあき半櫃あるをさいはひ、ふたをあけてかのおつぽを入れ、もとのごとくふたしておき、やがておもてのかけがねをはずし、戸をあくれば、あんにさうゐして、北八せきこんでとびこめば、彌次「ヤア北八か。エ、今時分にどうして来た。北八「イヤもうもう内に落着てゐられやせぬ。此間からおめへに頼んだ十五兩の金の事翌日は店おろしにかゝるゆゑ、せび〜あすの朝まで、わつちが遣ひ込だ穴を埋ておかねばなりやせぬ。それが出来ねへと忽百日の説法屁ひとつ。おめへのいふには随分心當りがあるから、譚談してやらうといひなざつたによつて、じつと待てゐたが、今もつてきたがないから、あんまり氣づけへさに、寢所からそつとぬけて來やしたが、いよ〜そのかねは出來やせうかね。彌次「しれたことよ。あしたの晝までにはきつと出かしてやる。そこへいつちやア男だ。なんぼこんなにしみつたれ

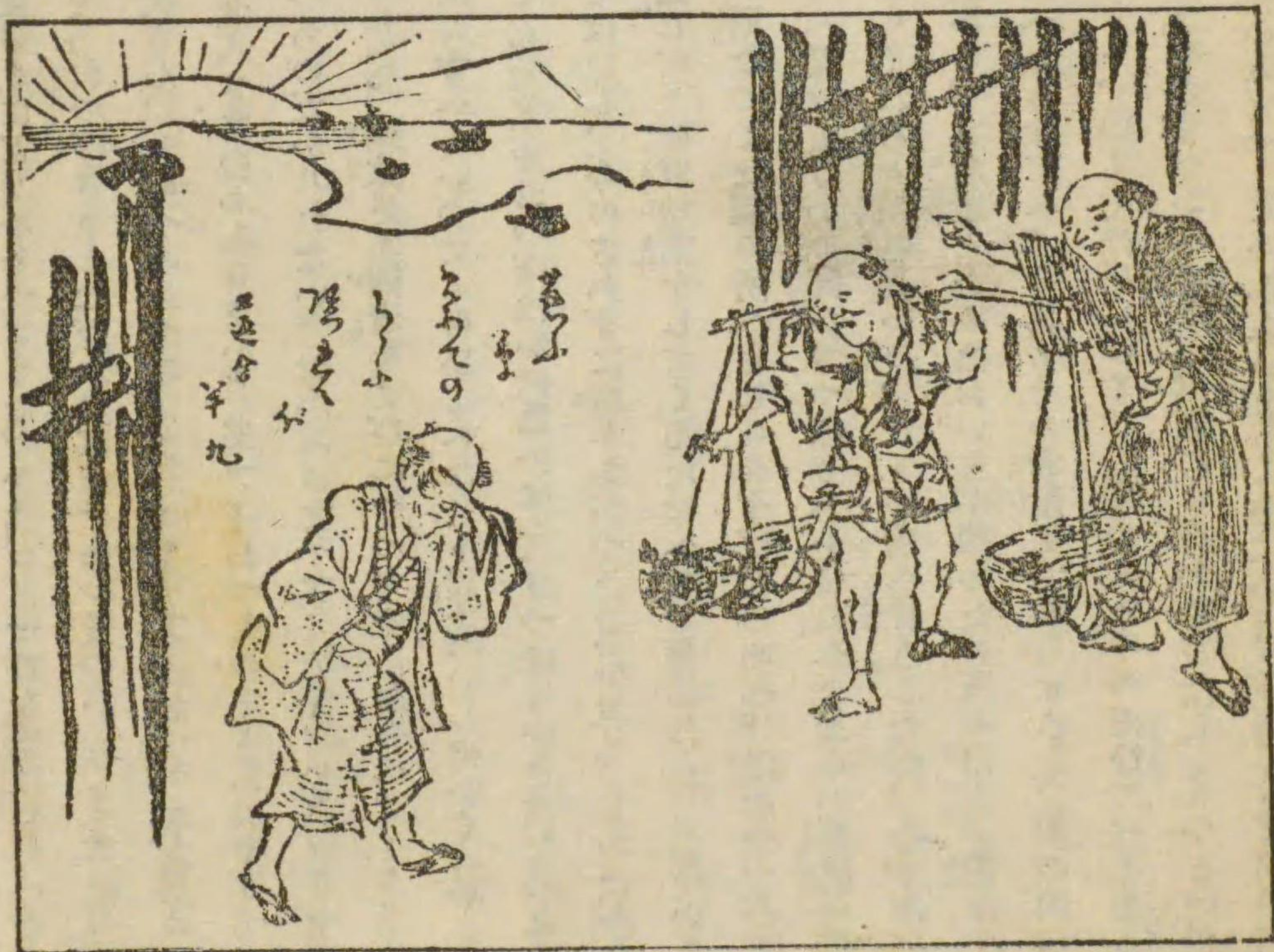


なくらして居ても、さあといへば十兩や十五兩の目くさりかね、工面せうといつたがせうかにヤア、ちげへはねへから落着て居さつし。北「そいつはありがてへ。其かはり百倍にして此恩を返しやす。此間からいふ通り、番頭はなくなる、親かたも今にめでたくなりやすから、跡で後家御を手に入さへすりや、すぐにわつちが旦那さま、どうか芝居の敵やくがいふやうなこつたが、是ばつかりは違なし。極々内々の所はもう出來かゝつてあやすから、今が大事の所、爰で拾五兩のかねがねへと、しくじつて蛇もとらず蜂もとらずだから、どうぞおたのみ申やす。彌次「おれも手めへをおもふは身をおもふだから、其咄のとほりにいきさへすると互ひの爲だ。あすの晝時分には耳を揃へて拾五兩、きつと間にあはせてやるぞ。ト、此はなしのうち、はんびつのふたを内よりおしあげて、おつぽ「モシ〜どうぞして下さりませ。腹がいたくてどうやら産さうになりました。ア、くるしい〜。トむしやうにうめき出せば、彌次郎大きにうろたへ、彌次「エ、そいつはこまつたものだ。コレ〜きた八、手めへ子を産女の手傳をした事はねへか。北「ナニとんだことを。イヤ、かみさんがいつの間にも孕んだのだ。さつぱりしらなんだ。隣のかみさんでもおこして來てたのむがい。彌次「イヤ〜ちつと譯があつて、隣へもさたなしにこつそりとやりてへ。マアそこへ湯でもわかしてくれ。北「それは承知だが、なぜまたあんな窮屈な所へかみさんを入れておいたのだ。サア〜出なせ〜。ト、はんびつの中から女の手をひつぱり、引き出さんとしけるに、おつぽきた八を見て、おつぽ「ヤアおまへか嬉しや〜。わしが産月を心元なさに、こゝまで尋ねて來て下さりましたか。ト、しがみつくに北八はびつくりしたかほ、彌次郎ふしんはれず。彌次「コリヤ北八、手めへこの女とちかづきか。おつぽ「ハイわたしは此きた八さまのござる内に、おまんまたきをいたしてをりましたもの。いやだといふのを無理無體、きた八さまに口説れまして、ツイ逢まして、かうした身になりました故、お隙をもらひ親もとへかへりましたも、物堅い親、うちへは入らず、北八さまのもらひ分にて、親の手前を引とられ、餘所の内に預られてをりましたが、此事親方さまの耳に入らぬうち、わたしに拾五兩の金

をつけて、外へ片付たいとの相談、わたしは逆も斯なるからは、いつ迄もはなれぬ氣でみましたけれど、それではあなたのお爲になるまいと、得心づくでおもひきり、こゝろにそまぬこゝへ嫁入して來ましたのでござります。ト、くるしい中になみだ半分、いさいのはなし彌次郎きもをつぶし、彌次「ヤア／＼そんなら親方のうちの引負、拾五兩なくては償れぬといつたは、引負てはなくて、この女を片付代の十五兩か。北「さやう／＼。彌次「エ、おきやアがれ、このべらぼうやらうめ。よくおれをとんだめにあはせやアがつた。北「ナニとんだめにあふものか。かねさへからねへけりやいゝじやアねへかへ。彌次「いゝとはなんのことだ。コレ其金ゆゑに、おらア女房をさらけ出してしまつて。今夜からひとりて寢にヤアならねへは。北「そのかはりまた若い女房をゆづつたから申分はあるめへ。彌次「たはことつくしやアがれ。あの女のつらがふた目とも見られるつらか。いめへましいやらうめだ。ト、まつくるになつてはらをたて、ひとつふたつひひ募りて、彌次郎堪へず、北八にぶつてかゝる。北八もやつきとなつてからかつてあるうち、おつぼはしきりにむしがかぶると見え、ウン／＼うなつて苦しがるをもかまはず、こなたにはやみくもと、つかみあつてゐる中、夜あけてなかうどの芋七、しやうばい物のかひ出しにゆくとて、このうちへおとづれたるが、何やらうちにはばつたくさ音して女のうめくこゑもきこゆるにぞ、いも七これほと、そとより戸をあけんとするにあかず、たたいもあけざれば、やにはにそとよりひつばづしてはいると、彌次郎見るより、彌次「ヤアいも七か、よくもよくも此やらうめと馴合て、おれをはめたな／＼、合點しねへぞ。すまねへぞすまねへぞ。いも「ナニはめたとは何の事だ。彌次「なんの事だもすさまじい。ふてへやつらだ。ト、又いも七にとつてかゝるを、いも七はらをたて、小ぢからのあるにまかせ、彌次郎をねぢふせる。北八とりさへてもきかず、ごつたかへしてたばこぼんをふみくだくやら、どびんの茶をぶちまけるやら、三人やたらみつちやとさわぎたつるもの音に、きんじよとなりの人々おひ／＼かけつけ、かれこれとりさへるうち、おつぼはそこらをのた打まはりくるしみたるが、つひに血をあけて目をまはしたふれる。

北八「ヤア／＼おつぼどうした／＼。コレ芋來てくれ。可愛さうにどうかしたさうな。いも「コリヤ目をまはしたのだ。コレ／＼水だ／＼。北「おつぼヤアイ／＼。となりのていしゆ「おつぼさまとはだれの事だ。モシ爰のかみさまはへ。いも「コレこの目をまはしたがかみさま。となり「ハア彌次さん、おめへのおかみさまか。彌次「アイわつちが女房のやうでもあり、又ないやうでもあり。となり「ハアきこえた。北八さまのかみさまか。北「アイわつちのかゝあのやうでもあり、又ないやうでもあり。となり「マアなんにしろ、どつちのだかしれない。おかみさまヤアイ／＼。いも「コリヤつめたくなつた。もういけねへ。北「エ、いぢらしいことをした。彌次さん醫者をよびにやつてくんせへ。となり「わたしは元宅さんでも呼んで來てあげませうか。彌次「その序にお寺へもいつてもらひてへな。ト、此内いしやぐるやら、灸をすゑるやら、よつてたかつてさま／＼にして見れども、むざんやおつぼはかほ色かはり、さつぱりいきはたえたるやうすに、北八おもはずなきいだし、「かはいや只の身ではなし、今のさわぎに血があがつたのだらう。しかたがねへ。時に彌次さんおめへも腹がたつたらうが、どうぞ了簡してこの取始末をしてくんせへな。彌次「おれをばいゝいろな目にあはせる。北「なんぼ勸當同然にした女でも、斯なつては親の所へもしらせずばなるめへ。誰をやつたものだらう。いも「ソリヤアわしてもいつてやらうが、ぜんてへ是はどういふ譯かさつぱりわからねへ。おらが新道の着やに預つてゐた女、餘所の隠居の妾だが、片付たい世話してくれろと頼れたから、こゝの内へ仲人したが、今きけばおめへの女房とはどうした理屈だ。北「マア／＼あとでわかる。其看屋といふはおいらが親かたの所の出入、預けておいたはやつぱりおいら。マアそれよりか、はやく親の所へしらせてへ。それもその看屋までしらせると、親の内へあそこからしらせてくれる。いも「そんならいつて來やせう。ト、いも七は出てゆく。近所の人々手つだひて、そこらとりかたづけ、めい／＼くやみをのべ、あいさつして、皆々ひとまづかへると、北「何にしるわつちはちよつといつて來よう。ゆうべそつと出た儘だから、あとはいゝやうにたのみます。ト、かみいれから金二歩出して彌次郎に渡し、

出かけんとする所へ傍輩の與九八來り、ヲヤ／＼北八どの爰にか。親かたがとう／＼今朝がた御臨終なされた。北「さうだらうとも。與九「それについておかみさまがおつしやるには、北八に暇をくれる。あれは平生心ざしのみだらなもの。且那どのがしなれたら猶の事、女の主と侮つて、どのやうな不埒をせまいものでもないから、さう／＼請人の所へ引わたしてやれとの事。それはと傍からさま／＼取成をいつて見たが、どうでも貴様はかみさまへ、なんぞいやらしい事でもいつたと見える。さうかして、日頃からいけすかねへ頬の皮の厚い男、顔を見るもいやだと、きさまの事をわるくいつて、七里潔敗いやだ／＼といつてござるからしかたがねへ。モシ彌次郎兵衛さまはあなたか。只今お聞のとほりてござりますから、北八どのは是でおわたし申す。彌次「承知いたしました。コレきた入あのとほりだが、それでいゝか。北「イヤもうよくてもわるくもしかたがねへ。しかし其筈ではねへつもりだに。彌次「くれ／＼もいめへましい業ざらした野郎めだ。いつその事何も角もぶちまけようか。



北「ア、コレ／＼誤つた。をがむ／＼。與九「また折を見て訴訟のしかたもあらう。なんにしろけふは内が取込てゐるから、又そのうちにト、あいさつそこ／＼にして與九八は出てゆくと、引ちがへても七立かへり、「サア／＼親元へはしらせて來たが、是から買ものをせずはなるめへ。北「御苦勞／＼。逆ものことにわつちといつしよに來てくんねへト、彌次郎へわたした二歩をとつて、いも七をひきつれ、はやをけその外の入用の品をと／＼のへてくると、彌次「ヲヤ手前も氣のきかねへ。序に酒もかつてくればいゝ。北「それをぬかるものかト、はやをけの中から、一升徳利にまぐるのさしみを取出し、まづのみかけてゐる所へ、あひながやのものだん／＼大さかもりとなり、酒もあとからかひたして、のこらずなま酔となり巻舌にて、いも「サア／＼この元氣で佛を桶へさらけ込てしまはう。時に寺はどこだ。彌次「馬鹿アいへ。おいらが内に寺があつてたまるものか。北「それはつはつまらねへ。彌次「かまうこたアねへ。なんでも持出しさへすりやア、どこかしら寺があるだらう。北「それだとして、葬禮をかついで寺町を呼つてあるいたとつて、かひてはあるめへ。いも「イヤそれもおもしろからう。わしは寺町へばかりあきなひにゆくが、呼やうが町とはちがひやす。マア今頃のしろものなら、死でいこ／＼ゆうれんさうや、ばげぎや／＼、卒都婆の干物に、石塔のたうちりなぞはよく賣るから、葬禮も買人がありませう。ハ、ハ、ハ、ハ。北「かはいさうに洒落所ちやアねへ。サア／＼はやく片付けてくんねせへト、なま酔大せい寄てたかつて、むだやらしやれやら出はうだいな事しやべりながら、佛をけの中へをさめて香花を手向ける所へ、おつぼのて／＼おや涙をふき／＼たづね來りて、「アイゆるさつしやりまし。わしやアおつぼの親でござらア。北「是はようこそ先こちらへ。親ヤレ／＼憂ことをしをりました。わしやア田舎もんでござるから、義者ばつてむけちなくばい出しましたが、こんなになるべいたアおもひをりませなんだ。ドレドレむすめはどこに居をります。ちよつくり頼サア見せてくれさつしやりまし。彌次「エ、おめへもうちつとはやく來なさればいゝに、モウ桶の中へさらけこんでしまつたものを、のう芋七。いも「イヤしかし、とつさんの身では見たい

は道理々々、道理よ狐の子ぢやものをとけつかるハ、。さらばお開帳致さうか ト、棺桶の繩をとき、ふたをあけて見すれば、おやぢめがねをかけ、つくんと見て、親「コリヤハアちがつた。アもし。彌次「ナニちがつたア。何がちがひやした。親「佛がちがひ申た。此佛にヤア首がござらない。そしてわしの娘は女でござるに、コリヤハア男の死人と見え申て、胸髯がはえてござらア。いも「ナニ首がないとは、ドレ／＼ほんにコリヤア首がねへ。彌次さんおめへどうした。彌次「ナニおいらがしるものか。そこらにヤアおちてはゐねかへ。親「ヤレハア此衆はとんだ人達だ。サアうらが娘はどうさつせへた。しんだのなんのと啜ばつかしつかつしやる。サア娘を爰へ出しなさろ。彌次「出せとつて外にヤアねへ。とはうもねへおやぢめだ。親「コリヤハアすまない／＼。北なる程とつさんのいふのは尤だ。何にしる首がなくちやアつまらねへ。親「インネ／＼田舎もんでこそあれ、うら頭百姓もしたもんだ。お家主どのへことわつて、多すい目にあはせてくれべい ト、だん／＼こわ高になり、やかましくいふゆゑ、そばに居あはせしひと／＼、いろ／＼なだめても一向きゝいれず、大やさまがこのやうすをゐさいにきいてかけつけ、大や／＼今聞ましたが大變なことでござる。何にいたせ、しんだ者の首のないといふは ト、はやをけの内をのぞき見て、「イヤ／＼親父どの、きづかひさつしやるな。首はあります。親「あるとはどこにあります。大や「コリヤ佛を逆さまに入たのでござる。ハ、。親「ハアそれで落着きました。コリヤどなたも御太儀でござる ト、これより夜にいらしてそうれいなし、あとねんごろに申らひけるが、さてしもきた八は、せつかくしんぼうせし親かたの内を出されて、又彌次郎のかたに居さふらふとなり、たがひにつまらぬ身のうへにあきはて、いつその事まんはしにふたりづれて出かけまいかとのさうだんをなし、友だちにたのみて金子をかりうけ、先づそのとしはめてたき春をむかへて、きさらぎのなかばより。いせさんぐうとおもひたち。東海道へと出かける。

かしまだちの狂歌

難波江のよしあしゝとも旅なれば

おもひたつ日を吉日とせん

道中膝栗毛發端 大尾

膝栗毛發端叙

春の日の長旅も、馬士唄の竹に、雀色時の泊には、奇妙希代の滑稽を吐て、衆人の腮顔に釣匙を掛させ、彼佐々木掘原が、生暖磨墨より、遙に勝り、千里の駿足も及はざる、膝栗毛と題せし、その發端の書を閲して、感稱の餘り、跋文を乞ふて、智囊の傷れるほど、底を無性と拂きしに、原來三文の貯は儲おき、一文不智の僕なれば、諺にいふ、蠅螂か斧猿猴が月、されども犢尾蒼蠅の譬のごとく、此ひざくり毛の尻尾に執付、唯意氣なりを、ひつかく事しかり。

小船街

旭 亭 一 桃

道東
中海
膝栗毛
初編
全

道中膝栗毛序

宮根八里の長持唄には、猛き宰領の心を和らげ、竹に雀の馬士唄には、鬼殺を煙せしむ。はその哥の徳利酒香や謠の旅衣、都をさして行かけの駄賃帳を繰返し、筆の建場に雲駕の息杖をしてえいやらやと書編たる東海道、五十三次の記行に、無滑稽と方言の二割増、重荷に僻言夷曲歌、それが中にも唯一夜、鮓のめし盛押かけて、商ふ戀の筥枕、その有増を宿帳の帖となしたるは、空尻の壳無駄なる、ほんの噺の間屋場もどき、ハイ頼ますくと、此本の鹿島立に、序する事しかり

維時享和二載

壬戌孟陽吉且

十返舎一九誌

道中膝栗毛凡例

- 此書はすべて東海道往來之記、上貴人高官の通行より、下拔參物貫乃木賃泊、雲駕馬士の俗腸迄、其下情を穿て、悉く弘着す
- 驛々風土の佳勝、山川の秀異なるは、諸家乃道中記に精しければ此に除く、所々の名物景物等に至つては、聊其滑稽詞を加へ記す
- 彼伴女傀儡の風流泊々の遊戯、その可笑さを純にす
- 巻中に著す夷曲哥は、排設地口を專にす。故に晒者は笑へ、予が風製落首体たるを以て、入金を曾て出さず、却て其料を著服するは、是稱を取より徳を執て、慚を愧と思はざる、予が性質仕方がなし
- 此編は東都品川驛より、稍く宮根驛に至つて畢る、其餘草稿出来あれども、帖數乃過余を厭ひて、飯盛の跡釜に譲り、追焚して後編に著んとす。すべて茲年予が戯作の帖舉俱に滿尾に至らず。是則無性横著骨格なりと、書肆の私言一言もなし

凡例終

卷中書目

- 發端鹿島立之話
- 川崎萬歲屋酒奈良茶話
- 馬士高詳演色情話
- 神奈川晝食滑稽之話
- 拔參宮謀旅人而腹餅話
- 戸塚泊番轉倒之話
- 關長持唄而懷女房所謂之話
- 一寸加禮坊主過而貪波鏗話
- 駕鼻自固無如在話
- 宿引應對嚴重之話
- 小田原泊功拙之話
- 宮根山中晒落蔓話

上件

浮世道中膝栗毛 初編

十編 舍一九 著

發語

富貴自在冥加あれとや營たてし門の松風、琴に通ふ春の日の麗さ、げにや大道は髪のごとしと、毛すぢ程もゆるがぬ御代のためしには、鳥が鳴吾妻錦繪に、鎧武者の美名を残し、弓も木太刀も額にして、千早振神の廣前にをさまれる、豊津國のいさをしは、堯舜のいにしへ延喜のむかしも、目撃見る心地になん。いざや此とき國々の名山勝地をも巡見して、月代にぬる聖代の御徳を、藥籠あたまの茶吞ばなしに貯へんものと、玉くしげふたりの友どちいざなひつれて、山鳥の尾の長旅なれば、臍のあたりに打がへのかねをあたため、花のお江戸を立出るは、神田八丁堀邊に獨住の彌次郎兵衛といふのふらくもの、食客の北八もろとも、朽木草鞋の足もと軽く、千里膏のたくはへは何貝となく、はまぐりのむきみしほりに對のゆかたを吹おくる、神風や伊勢參宮より、足引のやまとめぐりして、花の都に梅の浪花へと心ざして出行ほどに、はやくも高なわの町に來かゝり、川柳點の前句集をおもひいだせば、

高なわへ來て忘れたることばかり

と、よみたれ共我々は何ひとつ心がゝりの事もなく、獨身のきさんじは、鼠の店賃いだすも費と、身上のこらすふるしき包となしたるも心やすし。去ながら旦那寺の佛餉袋を和らかにつめたれば、外に百銅地腹をきつて、往來の切手をもらひ、大屋へ古借を濟したかはり、御關所の手形をうけとる。ふめるものは、見たふしやへさづけて金にかへ、

がらくた物は、店うけにしよはせて禮をうけ、漬菜のおもしとすみかき庖丁は隣へのこし、ちぎれたれども、繩すだれと油壺はむかうへゆづりて、なにひとつ取のこしたるものもなく、まだも心ばかりは、酒屋と米屋の拂をせず、だしぬけにしたればさぞやうらみん。きのどくながらも、是もふるきうたに、

さきの世にかりをなすか今かすかいづれむくのありとおもへば
打わらひつゝ、彌次郎兵衛また狂詩を口ずさむ

雖非亡命可奈何

借金不報學尻過

夫居本貫掛乞衆

將是川向成三千戈

と打興じて、ほどなく品川へつく。彌次郎兵衛、

海邊をばなどしな川といふやらんと、難じたる上の句に、北八とりあへず

さればさみづのあるにまかせて

いとおもしろく歩行ともなしに、鈴が森に至り、彌次郎兵衛、

おそろしや罪ある人のくびだまにつけたる名なれ鈴がもりとは

大森といへるは、麥藁ざいくの名物にて、家ごとに商ふ。

飯にたくむぎわらざいく買たまへこれは子どもをすかし尻のため

それより六郷の渉をこえて、萬年屋にて支度せんと腰をかける。萬年屋のをんな「おはやうございやす。彌次郎兵衛「二せんた

のみます。北八「コウ彌次さん見なせへ。今の女の尻は、去年までは柳で居たつけが、もう白になつたア。どうでも杵にこづかれると見える。そしてめんえう道中の茶屋では、床の間にひからびた花をいけておくの。あのかげものをみねへ。なんだ。彌次「アリアア鯉のたきのぼりよ。北「おらア又鮒がさうめんをくふのかとおもつた。彌次「コウむだをいはずと、はやく喰はつし。汗がさめらア。北「ヲヤいつの間にもつてきた、ドレ〜ト、ならちやをあり切さら〜としてやり、彌次「もうおはちが零落した。北「又さきへいつてうめへものをしてやらうト、それよりふたりはぜにをはらひこゝをたちいでてゆくに、向うよりお大名のぎやうれつ、さきばらひの男一人、六十位のおやぢ、一人は十四五のやつこ、いづれも宿の人足なり。先拂「したアにしたアにかぶりものをとりませうぞ。北「かけおちものは下座をしねへでもいゝと見える。彌次「なぜ。北「ハテかぶりものは通りませうぞといふは。先拂「馬士、馬のくちを取ませうぞ。北「馬の口もとりはづしができるかのハ、ハ、ハ、ハ。先拂「あとの人せいがかたかいぞ、彌次「おいらがことか、高いはずだ。愛宕の坂で九文龍とかたをならべた男だ。北「しやれなさんな。とんだめにあはうぜ。彌次「アレ見やれ。どれもいゝ奴だ。まきばしよりでがうせいに尻がならんだは。何のことはねへ、葎町じんみちの土用ぼしといふもんだ。北「ヲヤ〜弓をかついてゐる人の笠を見ねへ。あたまと延引してゐらア。彌次「そしてアノ羽織の長さは、暖簾から金玉がのぞいてゐる。北「とのさまはいゝ男だ。さぞ女中衆がこすりつけるだらう。彌次「べらぼうめ、いろ〜なことにせわをやくは。あなたがただとつて、やたらそんなことをしてつまるものかへ。北「なぜそれだとつて、アレお道具を見ねへ。アノとほりにたちづめだは。ハ、ハ、ハ。サアお駕がとほつたからいかうト、たつて行過ると、しゆくはづれに、馬かた「おや方、かへり馬だに乗つてくんない。彌次「安くば乗るべい。馬かた「さか手ていかう。じばで乗てくんない。ト、馬のねだんもさうだんができて、彌次郎も北八もこゝより馬にのると、二ひきならべてひきいだす鈴の音、しやん〜〜。馬、ヒイン〜。ト、むかうよりくる馬かた「へエ畜生めはやいな。馬かた「くそをくらへ。馬かた「うぬけつても

しやぶれ ト、これがこのてやいの行ちがひのあいさつ、たがひにあくたいをいつてぎりをのべわかれる。彌次郎兵衛をのせたる馬かた。「コレ伊賀よ、きのふ手めへとのんでゐたやらうは、アリアア上の宿の房州だな。(このてやい、つねに名をいはず、みな、くに所のなをよぶ。北八をのせたる馬かた、大道にひよくりながら)「せんどのばんげにな、アノ房州めがかゝあがな、うらが親方の背戸ぐちに、ばりをこいてゐたと思へ。あにがシヤアといふおとをきくと、うらも氣がわるく成たもんだんで、こいつなアかまふこたアなへ。ぶつちめてやらうと思つて、打くらつたげんきて、いきなりうぢよヲねぢやアげて、そこへぶつたふしたとおもへ。さうすると、かゝあめがきもをつぶしアがつて、コリヤアあにヲするとぬかしやアがつたから、エ、あによヲするも犬のくそもいるもんかへ。擲てしめるのだ。だまつてけつかれといふと、あにがアノづうたへだから、ひどへちからのある女よ。コノ野郎みやアと、おりよヲつゝこかしやがつたんで、エ、どうしやアがると、よこつつらア一つぶんなぐつて、既の壁へおつたふして、のつかゝつたとおもへ。まだ小言をぬかしやアがるから、うらが親方の子にやらうとおもつて、もちよヲ買つて來がけだから、そのもちよヲ二ツ三ツ、かゝあめがくちへねぢこんだら、むしやむちやとくらやアがるから、其内にぶつちめた。さうすると最つとくれるといやアがつたんで、うらもそこらア探廻して馬の糞たアしらずに、あいつがくちへおしこんだら、むによヲわるがつて、はらアたちやアがるまいか、うらもあんまり可愛さうだんで、とうとう焼杉の下駄アひとつおつたふれたはな。いまくしい。(此はなしに、二人も大きに興を催し、はやかな川のぼうばなへつく。)夫よりふたりとも馬をおりてたどり行ほどに、金川の臺に來る。爰は片側に茶店軒をならべ、いづれも座敷二階造、欄干つきの廊下棧なとわたして、浪打ぎはの景色いたつてよし。(ちややのをんなかどに立て、)おやすみなさいやアせ。あつたかな冷飯もございやアす。煮たての肴のさめたのもございやアす。そばのふといのをあがりやアせ。うどんのおつきなのもございやアす。お休なさいやアせ。(二人はこゝにて、一ぱい氣をつけんと、ちややへはいりなが

ら)彌次「きた八見さつし。美しいたべもんだ。北「ハ、アいかさまい、娘だ。時になにかある ト、きた八そこらを見廻し、さかなをさしづしてさけをいひつける、むすめ前だれで手をふきくしほやきのあちをあたため、てうし盃をもち出、娘「これはおまちどほさまでございやした。彌次「おめへの焼た鮎なら味からう ト、むすめ、フ、ンとわらひながら、表のはうをむいてよびながらゆく。むすめ「お休なさいやアせ。奥がひろうございやす。北「おくがひろいはずだ。安房上總までつゞいてゐる。彌次「北八見さつし。此さかなはちとござつた目もとだ ト、打かへし見て彌次郎、

ござつたと見ゆる目もとのおさかなはさては娘が焼くさつたか
きた八是をきゝて、おなじくこじつける。

味さうに見ゆる娘に油断すなきやつが焼たるあぢのわるさに
彼是と興して爰を立出、いろく道草を喰ふ驛路の氣さんじは、高聲にはなしものしてたどり行ほどに、此宿はづれより十二才斗のいせ參、跡になり先になりて、いせ參、だんなさま壹文くれさい。彌次「やらうとも、てめへどこだ。いせ「わしらア奥州。北「あうしうはどこだ。いせ「かさに書てあり申す。彌次「奥州信夫郡幡山村長松、ム、はた山か。おいらも手めへたちの方に居たもんだ。はた山の與次郎兵衛どのは達者であるか。いせ「與次郎兵衛といふ人さアしり申さない。與太郎どんなら、わしらがとなりさアにあり申す。彌次「ヲ、その與太郎よ。其又うちにのん太郎といふ年寄のぢいさまがある筈だ。いせ「ぢいはいはあり申す。彌次「そして與太郎どの、かみさまは、たしか女だつけ。いせ「おかづさまアをんなでござり申す。よくしつてゐめさる。彌次「今じやアなんといふかしらねへが、おいらがゐた時分は、名主どのは熊野傳三郎といつてな、そのかみさまが内に飼ておいた馬と色事をして、にげたつけがどうしたしらん。いせ「それがさアよくしつてゐめさる。庄屋どんのおかつさまア、内の馬右衛門といふ男とつづばしり申た。北「イヤ妙

妙。彌次「コリヤ小僧よ。なぜあとへさがる。くたびれたか。イセ、わしはひだるくてなり申さない。彌次「もちでもか
つてやらう。こい／＼。ト、五文もち五つ六つかつてやりながら、いよ／＼づにのり、彌次「なんと小僧よくしつて
ゐるだらう。イセ「アイ／＼。ト、もちをしてやる。この内つれのいせ参り、これも十四五のまへがみ、あとからよび
かける。ト、イ／＼長松ヤイ／＼。ツレ「ぬしヤアもちよアおれにもくれさい。イセ「さきへ
ゆく人にかつてもらへ。あんでもあの衆が國さアのはなしをするを、ヲイ／＼といつてゐると、ぢきにかつてくんざ
るはちヤア。ツレ「ヲイ／＼もかつてもらうべい。ト、かけだして彌次郎に追付、わしにももちよアかつてくれさ
い。彌次「てめへはどこだ。ト、かさのかきつけを見て、ハ、ア是も奥州下坂井村、コレ手めへの村に與茂作といふ親
仁があらう。イセ「先もちよアかつてくれさい。さうせないけりヤア、こんたのいふことがあたり申さない。彌次「おき
ヤアがれ。ハ、ハ、ハ。北「こいつはかつがれた。ハ、ハ、ト、打わらひてゆく程に、はや程ヶ谷の驛につく。兩側より
旅雀の餌鳥に出しておく、留をんなの顔は、さながら面をかぶりたるごとく眞白にぬりたて、いづれも井の字がすり
の紺の前垂をメたるは、扱こそいにしへ、爰は帷子の宿といひたる所となん聞えし。(たび人をのせたる馬士、なまけ
たるこゑにて、)「ふじの人穴馬でもはいる、なぜにお方にや穴がない。ドウト。とめ女「馬士どんおとまりかな。馬士「イ
ヤだんなはむさしやだが、おまへのかほを見たら、ソレ此畜生めがとまりたからア。ソレ／＼。馬「ヒ、ヒン／＼。ト、
行過ると、又あとよりたび人二三人、とめ女「もしおとまりかへ。ト、引とらへて引ばる。旅人「コレ手がもげらア。
とめ女「手はもげてもうございます。おとまりなさいませ。たび人「ばかアいへ。手がなくちヤアおまんまがくはれね
へ。とめ女「おめしのがあらねわへはうが。おとめ申ちヤア猶かつてさ。たび人「エ、いめへましい。はなさぬかへと、や
うやうにふり切て行と、又あとよりくるは旅僧。とめ女「おとまりなさいませ。(旅僧此女のかほを見て、)「イヤもちつとさき
へ参らう。ト、この跡よりくるは田舎道者。とめ女「おとまりなさいませ。田舎「はたごさア安かアとまりますべい。

とめ女「おはたごは二百ツツ。田舎「イヤ／＼さうは出し申さない。そんない湯はぬるくてもよくござる。平はついでか
へてくつたこたアござらないが。めしと汗は、たつた六七杯ツツも喰やア、それでよくござるは。そん、だいにや、
あしたの晝食は、この柳ごりに一ぱいつめてもらへば、もう外になんにも入申さない。はたごは百十六文ツツも出し
申さう。とめ女「そんなら外へおとまりなさいませ。田舎「ヘアとめざアいきますべい。ト、ゆき過る。彌次郎兵衛き
た入此體を見て、始終興に入る。彌次「又こじつけるうた、

おとまりはよい程谷ととめ女「塚まへてははなさどりけり

と、打わらひ過行ほどに、品野坂といふところにいたる。是なん武州相州の境なりときけば、

玉くしげふたつにわかる國境所かはればしな坂より

すでにはや、日も西の山のはにちかづきければ、戸塚の驛になんとまるべしと、いそぎ行道すがら、彌次「コレきた
や、またつせへ。はなしがあらア。なんでも道中は飯盛をすゝめてうるせへから、こゝにひとつはかりごとがある。
おいらは親仁なり、ぬしヤア廿代といふもんだから、親子といつてもいゝくらみだによつて、是から泊／＼では、な
んとおや子のぶんにしようぢやアねへか。北「ヲ、これは妙だ。なる程それヤアすゝめねへでいゝ。そんならおとつ
さんといふのか。彌次「さうさ、貴様は諸事を息子きどりだが承知之助か。北「よし／＼さういつて又、いゝたほでもあ
つたら、此むすこをだしぬくめへよ。彌次「エ、ばかアいはつし。ヲヤもう戸塚だ。笹屋にしようか。北「とつさんや。
彌次「なんだ。北「こゝぢやア、ねつからお泊なせへといつて、ひつばらねへの。彌次「ほんにそのはずだ。爰はどなたか
おとまりと見えて、みな宿屋に札がはつてある。北「コウむかうの内かいきだせ。彌次「コレあねさん、泊てくれる氣は
なしか。はたご女「イエ今晩はおとまりで、あひやどはなりません。彌次「なむ三さうだらう。ト、だん／＼やどをさが
せども、みなふさがり、とめぬゆゑ大きにこまり、まごつきあるき、

とめざるは宿を疝氣としられたり大きんだまの名ある戸塚に

それより宿はづれにいたるに、漸くはたごやの合宿なきてに見ゆるあれば、やがてこゝにたよりて、彌次「なんとわしらを泊てくんせへ。ていまおふたりかへ。おとまりなされませ。當宿は、やどやはみなふさがりましたが、私かたばかりあたりませぬ。彌次「こんなきれいな内をなぜあてねへの。ていまわたくしかたは、新宅でござります。ソレおなべお湯はどうだ。ト、此内、女、たらひに湯をくんで来り、やなぎごりふろしき、つみをさしきへはこぶ。北「コウ彌次さん、じゃアねへとつさん、おめへわらぢもいつしよにおかう。彌次「ヲ、そして、おれが脚半もぎつといすいておきや。北「ナニ脚半をいすげか。ト、かほを見ると、彌次郎兵衛目つきでしらせるゆゑ、口こどをいひながら、きやはんをあらひしまひ、北「あねさんちやをひとつツツくん。ト、下ざしきへとほる、女盆にちやを二つもつて来り、女「すぐにおゆにおめしなさいやせ。彌次「コウあの女のつらアみたか。眞中がへこんで、なんのことはねへ。ふみけへしの馬蹄石といふもんだ。北「そりやさうと彌次さん。彌次「ソレ女がきたは。北「ツツとつさん、湯へはいらねへか。ト、此内女さかづきをもつてくる。彌次「ヲヤ酒か。えどものと見ると、どこでもかうするにはあやまる。北「ナゼ、酒を出しやア別にせにとるか。彌次「しれた事よ。ト、いひながら手ぬぐひを取、湯へは入る。女「すどりぶたと、てうしをもち出。女「おひとつめしあがりませ。北「是は御ちさうだ。コウおいらが親父に、はやくあがらつせへといつてくん。女「ハイさやう申ませうと、(立て行。此内彌次郎兵衛湯よりあがりて、)彌次「ハ、アなんだ。コリヤアのめるは。コレ手めへはやく湯に入つてきや。北「イヤのんでからはいらう。彌次「エ、てめへもいちのきたねへもんだ。這入てきやな。(此内北八も湯へは入る。)ていま出て「是は何もござりませぬが、一つめしあがりませ。彌次「イヤ御亭主さん、これではめいわくだ。ていま「イエ時にかやうでござります。わたくしかたは、今迄外商賣をいたしてをりましたが、今度はたごやになりました、すなはち今日が店開でござります。あなた方は、はじめてのおきや

くゆゑ、それで祝つてひとつさし上ますのでござりますから、別に御酒代をいたゞくではござりませぬ。おこゝろおきなくめしあがつて下さりませ。彌次「イヤ夫は先おめでたい。しかし御ちさうになつては、ちかごろきのどくだ。ていま「ナニサ御遠慮なう、今におすひものもできます。彌次「イヤもうおかまひなさるな。ていま「ハイ御ゆるりと、いひすてゝたつて行、北八ふるより出て、北「やうすは残らずあれにきていた。おや方、たどとはありがてへ。彌次「コレしやれずとも、一べん湯へ這入てきや。そのうちにみなおれがのんでしまはア。北「さうだらうとおもつて、湯へはいつてゐても、あらふをらアねへ。ヲヤ足はまだ土だらけだ。まゝよ。サアはじめねへ。彌次「まうとつくに初てゐらア。ドレもうひとつ初直してからささう。北「イヤおいらはこれだ。ト、ちやわんについて、いきなしにぐつぐつとやらかし、北「ア、いゝ酒だ。時に着は、ハ、アかまぼこも白板だ。さめじやアあんめへ。漬しやうがに車えび、やぼじやアねへ。コウとつさん此しそのみがいちちうめへ。おめへは是はばかりくひなせへ。彌次「ばかアいへ。そりやアあとへのこるにきまつたもんだ。時にもう吸ものが出さうなものだ。北「まちなよ。ト、ふすまのあひだから、かつての方をのぞき、北「てるく、今よそつてゐらア。ヲヤなむさん神さまへあげるのだ。イヤアくるぞくるぞ。ト、ひぎをなほしてゐると、やがてをんな吸物をもつて出て、女「おてうしをかへませう。ト、もつてゆく。ふたりながらすぐに吸物のふたをとつて、北「ヲヤ赤みをたアしやれるは。よもや玉みそじやアあんめへ。時にてうしはどうだ。彌次「せはしねへ。たつた今もつていつたは。北「もうきさうなものだ。ト、此内、女が、てうしをもつてくると、ふたりながらなる口ゆゑ、あひのおさへのとのみかけ、だん／＼さけがまはつて、親子のあいさつも、なんだかむちやくちやとなる、北「コウあねさんちつとあひをしてくん。女「わたくしはいつかうたべませぬ。北「はてさコレさういはずと、そしてこん夜おめへと、ちよつとナ。これがかための盃だノウとつさん。彌次「せがれめは、もうよつたさうな。北「ナニよつたもきがつえ。アノ親父のつらはよ。ハ、ハ、ト、まきしたにてしやれる。女はきもをつぶし

ながら、うけたさかづきをほして、彌次郎兵衛かたへさす。北「エ、おやぢのちくしやうめ。おもひざしにあづかつたな。コウ女中、のちにたのみます。ト、しなだれかゝる。女はあきれてさう／＼にげだして行。彌次「コウきさまアわりいとこだ。女の前であんなことをいふなへ。北「ナゼいつちやアわりいか。わるかアいふめへ。おらアアノたへもんめがをかしな目つきをするので、もうおやこのえんがきりたくなつた。ト、此内に睡も出て、いろ／＼あれども、あまり事なげればこゝに略す。なま中おやこのあいさつにて、はたごやの女まこととおもひ、何をいつても、とりあげねば、今更ひとりねの枕さみしく打ふしけるが、夜もふけゆくまゝに、勝手もしづまり、やまの神の小言いふ聲のみきこえて、此ふたり、寐もやらず。着たる夜着のあかつきかけて、千手觀音の利生あらたに、かゆき所へ、ふすまもる風の手のとゞくもうるさく、ほろ酔の酒もさめて、今おもひ廻らせば、ひとりねにおはちのまはらざるも、めしもりの杓子あたりわるきゆゑにや、假の親子の遠慮ありしは、かへつて鳥目の徳つきたりとをかしくて、

一筋に親子とおもふをんなより只二すぢの錢もうけせり

斯口ずさみて打笑ひつゝかたむけし箱枕も、耳の根にいたくもひよく夜明の鐘、はや表には、助郷馬の嘶く聲「ヒインヒイン。馬のおとブウ／＼。長もちに人「竹にさあ引すゞめはアなアんあへ、ライ／＼どうする／＼。此内、彌次もきたもおき出れば、やがて睡も出。こゝにもいろ／＼あれども、あまりくだ／＼しければやくす。それよりふたりは、そこ／＼にしたくしてこゝを立出ると、向うよりつづいてくるお大名の長持、引もきらず。人「はこねさア引八里イはアなあんあへ。アツ／＼どうだか／＼。北「彌次さん見ねへ。おもさうなものをよくかつぐぜ。アノ尻をふるさまア。彌次「あのでやいが尻をふりまはすを見たら、チトふさいで来た。北「なせ／＼。彌次「死だ女房がことをおもひだして。北「おきやアがれ。ハ、ハ、ハ、ト、此内、むかうより、ちよんがればうず、やぶれたあふぎにて手をたゝきながら、坊主「ヒヤア御はんじやうの旦那がた、壹文やつて下しやいませ。彌次「つくなく。坊主「とこ／＼／＼よいとこな。北「コ

レつくなといふに、錢はねへは。坊主「ナニないことがござりやしよ。道中なるおかたには、なくて叶はぬぜにと金。またも杖笠蓑桐油、なんぼしまつな旦那でも、足一本ではあるかれぬ。そのうへ田町の反魂丹、コリヤさつてやのしらみ紐、あつちうふどしのかげがへも、なくてはならぬそのかはり、古いやつは手ぬぐひに、おつかひなさるが御徳用。彌次「エ、やかましい。ソレやらう。ト、はや、みちより壹文はふりだす。坊主「コリヤ四文錢とはありがたい。彌次「ヤ四文ぜにか。なむ三ばう三文つりをよこせ。坊主「ハ、ハ、ハ、彌「いめへましい。ト、此内はやふぢ澤につきければ、まづぼうばなのあやしげなる茶みせに休み。北「ばあさん團子はつめてへか、チトあつためてくん。茶屋の「ドレヤきなほしてしんぜますべい。ト、けしずみの火をかきさがし、灰のたつをもかまはずあふぎたてる。此うちふたりはほこりをはたき／＼たばこのみあると、六十ぐらゐの、かつばをきてふるしきしよつたるおやぢ、此みせ先にたちどまりて、親仁「モシちつとものを間ますべい。江の島へはどういきます。彌「おめへえのしまへいきなさるか。そんならこりよアまつすぐにいつての、遊行さまのお寺の前に橋があるから。北「ほんに、橋といやア、たしかそのはしの向うだつて、いきな女房のある茶屋があつたつて。彌「ソレ／＼、去年おらが山へいつた時とまつた内だ。アノかゝアは江戸ものよ。北「だうりて気がきいてらア。親仁「モシ／＼、其はしからどういきます。彌「その橋の向うに鳥居があるから、そこをまつすぐに。北「まがると田甫へおつこちやすよ。彌「エ、手めへだまつてゐるへ。ソノみちをすつと行くと、村はづれに茶屋が二軒有ところがある。北「ほんにそれよ。よくくさつたものをくはせるちや屋だ。彌「ソリヤア手めへのいふのは右側だらう。左側の内はい、はな。去年おらがいつた時、びち／＼する鯛の焼もの、それに大平が海老のはね出るやつに、玉子とくわゐと大椎茸に、そして、親仁「モシ／＼、わしはそんなものはくはずとようござる。そこら又どういきます。彌「そこをすつといきあたると、石の地藏さまがありやす。北「アノ地藏さまは瘡の願がきくさうだ。おらが方のへたなすがあれでなほつた。彌次「ほんに瘡といやア、新道の金箔屋のため吉めは、草津へいつ

たつけがどうしたしらん。北「あれは、大福町に所帯をもつてゐらア。彌「大ふく町といふはどこだ。北「大ふく町は、おいらが通りをまつすぐに當座町へ出て、判取町から店賃町を通つて、地代屋敷の算盤ばしをわたると、そこが大福町だ。親仁「そんなことよりヤア、江の島へゆく道ををしへてくんさい。彌「ほんにさうだつて。其地藏さまから大ふく町をまつすぐにいくとの。親仁「えのしまへいくにもそんな町がござるか。彌「イヤ、こりヤア江戸の町だつて。親仁「エ、この衆は、おえどの事は聞申さない。らつちもない衆だ。ドレ先へいつて聞きますべい。ト、ぶつ／＼とをいひながら行過る。北「ハ、ハ、ハ、ト、此内、あるじのばゞだんごを四五くし、ぼんにのせてもつて出る。彌「こいつは黒いだんだ。ト、いひながら一くし取あげてみれば、けしずみの火がだんごにくつついてゐるゆゑ、わざと火のついてゐるをかくしてきた入のはうへさしいだして、彌「コレ手めへこげたやつがよからう。北「ドレ／＼ト、口もとへあてがひ、ア、ツア、ツア、ばあさんアツ、。とんだめにあはせた。コレ團子に火がくつついて、ア、ひり／＼する。彌「ハ、ハ、手めへあつたかなのがよからうとおもつて、火のついてゐたのをやつたは。北「エ、いめへましい。ペツ／＼。彌「サアいかう、婆さんおせわ。ト、ちや代をおきこゝを出でて、ふじ澤のしゆくへはいると、兩かはの茶や口をそろへて、茶や女「お休みなさいヤアし。酔ないさけもござりヤアす。ばり／＼する強飯をあがりヤアし。馬かた「だんな生た馬はどうだ。やすくやりませう。馬は達者だ。はねる事はうけ合だ。かこかき「かごよしかの。だんな戻り駕だ。やすくいきませう。北「かごはいくらだ。かこ「三百五十。彌「たかい／＼。百五十ならおれがかついでいかア。かこ「百五十にまけますべい。彌「まけるか。ドレ／＼此草鞋をそこへつけて下せへ。かこ「おめへ乗るのかへ。百五十でかつぐといはしやつたぢやアないか。そんだんで、片棒わしがかついで百五十とるのだ。彌「ハ、ハ、ハ、こいつはい。エイは、そんなら二百か。かこ「やすいがいきますべい、ナア棒組。サアめしませ。ト、かごのねができ、彌次郎兵衛こゝよりかごにつて出かける、先ぼう「ぼうぐみや。且那はかたいぜ。あとぼう「しつかりかまへていさしやるも

んだんで、ト、此内、茶やのていしゆ駕かきのなをよびながら、ていま「ヲ、イヤ、イ、梅澤の佐渡屋へちよつくりさういつてくんさい。此中の新酒はあんまり水の交やうがすくない。今度から酒をちつと交てよこしてくんさいと、いつてくんさいヨ。ソレ何かおちたア。かこ「アイ／＼ト、かつぎいだす。彌「コウ貴さまたちやア藤澤か。アノ宿も大分きれいになつたの。問屋の太郎左衛門どのは達者かの。さきぼう「よくだんなはしつてござる。随分たつしやでゐられます。彌「孫七どのはまだ勤めてゐるかの。さき「アイサア、だんなはなんでもあかるいもんだ。あと「べらぼうめ、しつてゐやしやるはずだ。駕の内「道中記を見てゐさつしやるは。ハ、ハ、ハ、ト、此内、早くも馬入のわたしにつく。北八こゝは何といふ川と人とひしに、只わたしばとばかりこたへけるを彌次郎きよて、川の名を問へばわたしとばかりにて入が馬入の人のあいさつ此川は、甲斐の猿はしより流れおつるよし。やがてむかうにわたりたどり行程に、此に白旗村といへるは、そのむかし、義經の首こゝに飛來りたるを祝ひこめて、白はたの宮といへる、今にありと聞て、彌次郎兵衛、首ばかりとんだ話の残りけりほんの事はしらはたの宮それより大磯にいたり、虎が石を見て北八よむ。このさとの虎は藪にも剛のものおもしろいしとなりし貞節彌次郎兵衛とりあへず、

去ながら石になるとは無分別ひとつ蓮のうへにやのられぬ
 斯打興じて大磯のまちを打過、嶋立澤にいたり、文覺上人が刀作と聞えし西行の像にむかひて、
 われ／＼も天窓を破りて歌よまん刀づくりなる御影拜みて
 春の日の長欠びに、願の掛金もはづる、斗り目をすりながら、北「ア、退屈した。ナント彌次さん道を謎を懸よう。

ほんに、ハ、ハ、ハ。北「エ、てへなしに湯をまつくろにした。ト、こどをいひながらあしをあらひ、すぐにぎしきへとほると、女やなぎごりさんどがさをもちきたり、とこの間に置く。北「コレ、女中たばこぼんに火を入れてきてくんな。彌「ヤヤてめへもとんだことをいふもんだ。北「なぜ。彌「たばこぼんへ火をいれたらこげてしまはア。たばこ盆の中にある火入のうちへ、火を入れてこいといふもんだ。北「エ、おめへも、詞咎をするもんだ。それぢやア日の短い時にヤア、たばこをのまずに居にヤアならねへ。彌「ときに腹がきた山だ。今めしをたくやうすだ。埒のあかねへ。北「コレ彌次さんおいらよりヤア、おめへ文盲なもんだ。彌「なぜ。北「めしをたいたら粥になつてしまはな。米を焚といへばいゝに。彌「ばかアぬかせ。ハ、ハ、ハ。ト、此内、女たばこぼんをもつてくる。北「モシあねさん、湯がわいたらへえりやせう。彌「ソリヤ人のことをいふうぬが、なんにもしらねへな。湯がわいたらあつてはいられるものか。それも水が湯にわいたらへえりやせうとぬかしをれ。北「此内、又やどの女、モシお湯がわきました。おめしなさいませ。彌「ヨイ水がわいたか。ドレはいりやせう。ト、すぐに手ぬぐひをさげ、ふろばへゆきて見るに、このはたごやのていしゆ、かみがたものと見えて、すゐふろをけは上がったにはやる五右衛門風呂といふふろなり。左にあらはす圖の如く、土を以てかまをつきたて、その上へ餅屋のどらやきをやくごときの、うすべらなる鍋をかけて、それにすゐふろをけをさげ、まはり湯のもらぬやうに、しつくひをもつてぬりかためたる風呂なり。これゆゑ湯をわかすに、たきど多分にいらす、りかただいいちのすゐふろなり。くさつ大津わたりより、みな此ふろなり。すべて此ふろには、ふたといふものなく、底板うへにうきてあるゆゑ、ふたのかはりにもなりて、はやく湯のわくりかたなり。湯に入るときは、底を下へ沈めてはいる。彌次郎このふろのかつてをしらねば、そのういてあるをふたとこゝろえ、何ごころなくつてのけ、ずつと片あしをふんごんだところが、かまがぢきにあるゆゑ大きにあしをやけどして、きもをつぶし、彌「アツ、ハ、ハ、ハ。こいつはとんだすゐふろだ。ト、いろ／＼かんがへ、これはどうしてはいるのだと、き

くもばか／＼しく、そとであらひながら、そこらを見れば、せつちんのそばに下駄があるゆゑ、こいつおもくろいと、かのげたをはきてゆのなかへはいり、あらつてみると、北「まぢかねてゆどののをぞきみれば、いう／＼と淨るり。彌「おはんみだのつゆちりほども。北「エ、あきれらア。だうりて長湯だとおもつた。いゝかげんにあがらねへか。彌「コレちよつとおれが手をいぢつて見てくれろ。北「なぜに。彌「もうゆだつたかしらん。北「いゝきせん。ト、ぎしきへはいる。此内彌次郎ゆからあがり、かのげたをかたかげへかくし、をしらぬかほにて、彌「サアへえらねへか。北「ヲツトしめた。ト、さう／＼はだかになり、いちもくさんにすゐふろへかたあしつこみ、北「アツアツ、ハ、ハ、ハ。彌次さん／＼たいへんだ。ちよつときてくん。彌「さう／＼しい、なんだ。北「コレおめへこの風呂へは、どうしてはいつた。彌「馬鹿め、すゐふろへはいるに別にはいりやうが有ものか。先そとで金玉をよくあらつて、そして足からさきへどんぶりこ、すつこつこ。北「エ、しやれんな。かまがぢきにあつて、これがいられるものか。彌「はいらねりやアこそ手めへ見たとほり、今までおれがいつてゐた。北「おめへどうしてはいつた。彌「ハテしつこいをとこだ。水風呂へはいるのに、どうしてはいつたとはなんのことだ。北「ハテめんような。彌「むづかしいこたアねへ。初めの内ちつとあついのをしんぼうすると、後にはよくなる。彌「ばかアいひなせへ。しんぼうしてゐるうちにヤア、足がまつくろにこげてしまはア。彌「エ、埒のあかねへをこた。ト、心の内はをかしこたへられず、ぎしきへかへる。北「いろ／＼とかんがへ、そこらを見廻し、彌次郎かくしておいたる下駄をみつめて、ハ、アよめたと心にうなづき、すぐにそのげたをはいてすゐふろのうちへはいり、北「彌次さん／＼。彌「なんだ又呼か。北「なるほどおめへのいふとほり、入しめてみるとあつくはねへ。ア、いゝこゝろもちだ。あはれなるかな石どう丸は、ズレ／＼。北「此内、彌次郎あたりをみれば、かくしておいたる下駄がなき故、さてはこいつみつけたなと、をかしくおもつてゐる内、北「八はさすがにしりがあつく、立たりすわつたりいろ／＼して、あまり下駄にてぐわたくわたとふみちらし、

道東
中海
膝栗毛
二編

膝栗毛後編序

予嘗旅の賦を作、其略に云、土橋を渡り又土橋を見る、恰深川にて友を訪が如く、並木を出て亦並木に入る、殆淺草にて狐に魅が如し。巻藪に鱧立なせる焼肴には、今井四郎が討死をおもひ、強飯に群鳥なせる蒼蠅には伊勢平氏の敗軍を歎く。木賃泊の居風呂は、晁の脚短といへとも膝をこゆる事なく、大井川の歩行渉は鶴の脛長といへとも胸をひやす事しきり也。雲助は裸虫の長として赤裸の境界に終、出女は万物の靈として万客の弄物に老。見るも都意馬の頭を低聞事皆心猿の腸を斷。さるをうきもの、發話としもらで、天地の逆旅に居て獨たのしく日月の過客にしたがひて、そごろうかれありくものは、十篇舎の主にして、これが爲に一双の膝栗毛を養ふ。一疋の口の輕尻は瀾に一冊子を負て箱根にとゞまり、伯樂顧て本屋仲間の初市に價を倍。今本馬卅六貫目中腹に擊才力を出して、一鞭たゞちに京城にいたる、かばかり迅速のうちに驛路の情態を記て、全篇の功を成此膝栗毛一日千里といふべし。

享和癸亥春

芍藥亭主人 菅原長根題

道中膝栗毛後編凡例

- 此膝栗毛後篇は、管根驛より大井川に至り終る、驛中旅客の滑稽、逆旅傀儡乃風色、其雅情を穿て著す事初篇に同じ
- 驛々風土に隨て音律に清濁の差別あり、俚言方語の通稱に異なる事あり、笑ふべきに非ず、古代の詞は却て田舎に残れりと、徂來翁の謂なり、たとへば駿遠兩國にて、行といふを行ずといふは行んずる也、酒を吞ず飯を食ずとは皆吞んず喰んずるなりと物類稱呼に見えたり
- 恐しいといふ事を、相筋にてはおつかないといひ、駿筋にては多しといひ、遠州にてはこはいといふ、同國にて九ツをけ、ねつといひ、心なしといふをけ、れなしといふ事は古今集に「かいがねをさやにも見しかけ、れなくよこをりふせるさやの中山」とあり
- おぞいといふは、尾張にて物の悪敷事をいふ、駿河邊にては物事賢き事にいふ和字正鑑に「からすてふ大おぞどり」の哥を、おほおぞどりと濁音によませてあしき鳥の事といへり。おぞといふ是也。いの助字也
- 相豆駿遠にてまずいといふは、味からすの下字をとりて、まずといふ、いは助字なり
- 都て道中管根より伊勢路までは、馬をおまといひ、又いまといふ日本記に馬をいまとよませり。仍て相通しておまともいふ
- なぜといふを、あぜといふは萬葉に「あぜそも今宵よしるさまさぬ」とあり
- うらといふは、我等の轉語おれらをちとめておらといひ、おら又轉じてうらといふ
- 驚くことを、相豆にてはたまげるといひ、駿遠にはおびへるといふ、たまげるは源氏に魂消と有

○なでうあてうといふ詞は紫日記になでう女のまなふみとあり

○愚なるものを、駿遠にてひやうたくれといふ

○相豆に、とてつもないといふ詞は性理大全に塗轍と有なるべし。駿州にはとひやうもないといひ、遠州にはしやうくもないといふ

○にしといふは主なり、にとぬと通へばなり

○すはることをかうまるといふは、禪家に久しく座する事を行座といふ、行の字は久しき義なり、仍てかうまるといふ、まるは居の心にて、ねまるかしこまるのまるなり

○此等の外勝るに暇あらず、只此巻中にあらはしたる詞のみを爰に解く、仍て排設の趣は、俚俗の訛言方語のまゝを記して、其おかしみを純にす

○逆旅木賃泊の慄慄なる体。六部順禮ぬけ參の患苦、雲駕馬士護摩の灰等の始末初篇にもれたるをこゝに記す、餘は續編に譲ものならし

十返舎一九識

浮世道中膝栗毛 後編

十返舎一九著

長明が東海道記に曰、松に雅琴の調あり、浪に鼓の音ありと。息杖の竹笛をふけば、助郷の馬太鼓をうつ、膝栗毛後篇の序びらき、ヒヤリ／＼、てれつくてれつくとすつてんてん。狂言詞、かやうに候ものは、お江戸の神田の八丁堀邊に住居せし、彌次郎兵衛きた八と申すなまけものにて候。扱もわれ／＼、伊勢へ七度熊野へ三度、愛宕さまへは月參の大願を起し、ぶらりしやらりと出かけ、ねつから急ず候ほどに、えいやつとはこねの驛に着て候。語、玉くしげ箱根の山の九折／＼、げにや久かたの醴賣や、さんしよ魚の、名所多き山路かな。あまざけう、めいぶつあがらしやいませ。あまざけのましやいませ。北、彌次さんちつとやすみやせう。ライ一盃くんナ ト、しやうぎに腰をかける。おやぢ一ばいくんで出す。北、こいつは黒い／＼。彌、くろいやうで甘いは、遠州はま松ぢやアないか。北、わりいわりい。コウおめへなぜのまねへ。彌、おいらアいやだ。ソノちやわんを見や。施主の氣がきかねへよ。あさがほなりにてもすればいゝに。北、さうさはぢやア強飯のかうのものも、奈良漬ぢやあるめへの。おやぢ、かうのもんはござらねへが、むめぼしよヲ進ぜますべい ト、皿にある梅ぼしをいだす。北、ライ／＼いくらだへ。サアおせわ ト、ぜにをはらひ出て行。向ふよりくる小荷駄馬、ひきもきらず、すゞの音しやん／＼／＼。まごのうた、

「ふじのあたまたがつんもえる。なじよにけぶりがつんもえる。三島女郎衆にがらゝ打こみ、こがれおじやつたらつんもえたア。しよんがへ。ドウノ」。

(こちらからゆく馬かた、互ひに行ちがひて)「ヒヤア出羽宿の先生どうだ。向ふよりくべらぼうめ。おれが先生なる馬かた、

りやア、うぬははつつけだア。馬ヒイン／＼。(又むかふより来るは、お大名のお國からお江戸入の女中たち、かごをつらせて四五人づれ、さわぎつれてくるを見て彌次郎)「ヨヤ／＼えらい／＼。北ほんにはは皆生た女だ。きめうきめう。ナント彌次さんつかねへこつたが、白い手拭をかぶると、顔の色がしろくなつて、とんだいきな男に見えろといふことだが、ほんとうかの。彌ソリヤアちげへなしさ。北よし／＼ト、たもとからさらしの手ぬぐひを出して、ぐつと頬かぶりにすると、とほりすがひに女中たち、北八がかほをのぞいて見て、みな／＼わらひとほりさざる。北「なんとどうだ。今の女どもが、おいらが顔を見てうれしさうに笑つていつたわ。どうでも色男はちがつたもんだ。彌「わらつたはずだ。手めへの手拭を見や。木綿さなだのひもがさがつてゐらア。北「ヤア／＼こりヤア手拭ぢやねへ。あつちうふんどしであつた。彌「手めへ、ゆふべふろへはひるとき、ふんどしを袂へ入れて、それなりにわすれたはをかしい。大かたけさ手水をつかつて、顔もそれでふいたらう。きたねへをとこだ。北「さうよ。だうりこそわるくさい手ぬぐひだとおもつた。彌「ナニぜんてへ手めへがあたじけねへから、こんな耻をかく。北「なぜ。彌「もめんをしめるから、手ぬぐひと取ちがへる。コレおいら見やれ。いつても絹のふんどしだ。北「それだつて、やね屋がながつぼねのふきかへに行きやアしめへし、きぬをめることもねへす。エ、まゝよ。たびのはぢはかきずてだ。斯もあらうか。

手ぬぐひと申うてかぶるふんどしはさてこそ耻をさらしなりけり

それよりかぶと石をよめる。彌次郎兵衛、

たがこゝに脱捨おきしかぶといしかゝる難所に降参やして

斯て山中といへる建場にいたる。爰は兩側に茶屋軒をならべて、「おやすみなさいまアし。くだり諸白もおざりやアす。もちよアあがりやアし。いつせんめしよアあがりやアし。お休なさいやアし、お休なさいやアし。彌「きた八ち

つと休んでいかうト、ちや屋へはひる。此内にはにつき立てたるへつついまへに、くもすけども、ふとんをからだにまきたるもあり、しぶかみをきたるもあり、あるひはねごぎ、あかがつばなどをきてよりこそり、火にあたりゐると、おもての方より竹のきせるをくはへて、一人の雲介ずつとはひり、「おへねへひやうたくれどもだ。あか熊やどぶ八めが、峠まで長持でやつたアな。くもすけ「えいわ。そんたいあび手が、あんどんにげんこはふんだくるべい。(この長持といふは六百の事、あびてといふはさかての事也。) 今一人「コレそりアえいが、コノやうがおしやらくを見るへ。しつかりもんつきをきやアがつた。酒ごもきてあ「きんによう小田原の甲州屋で、やらやつと壹まい貰つて着たが、あんまり裾が長くて、お醫者様のやうだとけつかる。九はだ「やらうめらア工面がえいから、すきなものをきやアがる。おらアこんぢう内から、はだかでありやア、がら吉ばどあがぬかすにやア、古傘をやらうから、ひつべがして着ろとけつかる。べらぼうめ、やらうの猪ぢやアあんめへし、そんなもんがきられるもんかといつたら、すんなりこりよヲきろとつて、えいみしろをいまいつくれたと思へ。そのみしろをきんにようの晩げに、畑で湯につつばひるとつて、ひん脱ておいたら、聞きやれ、だいじの着ものを、がらおまにくはれてしまつたア。いま／＼しい。(彌次郎きた八、このてやいのはなしをきいてゐて、大ききようにいり、やがてこゝを立出てゆくと、長坂大しぐれといへるあたりより、旅人壹人こんの木綿かつばをきて、風呂敷包と柳ごりをかたにひつかけたるが、あとになり先になり) たび人「あなた方はどこでござります。彌「わつちらアえとさ。たび人「わたくしも江戸でござります。あなた江戸はどの邊でござります。彌「かん田さ。十吉「かんだには、わたくしもをりましたが、どうかあなたがたは見申たやうだ。神田はどこでござります。彌「神田の八丁堀で、わつちらが内はとちめんや彌次郎兵衛といつて、間口が廿五間に裏行が四十間、かどやしきの土藏づくりで大造なものよ。十吉「ハアそのうらでござりますか。彌「とんだ事をいふ。うらだなは無しさ。わつちが所壹軒ですまつてゐやす。十吉「ハアそんなら、惣地代で沽券はいくら。彌「こけんは千八

百兩。十吉おめへ直でござりやすか。口銭は何朱でも二ツ割に致しやせう。彌おめへ何をいふ。十吉わたしは又、地面の賣買のおはなしかと存じました。彌ナニそんなこつちやアねへ。わつちらアちよつと出るにさへ、供の五人や十人はつれてあるきやすが、それぢやア氣がつまつてもしろくねへから、此をとこひとりつれて、不自由してあるくものずきだね。十吉なる程さやうでござりませう。イヤ又あなたのおふくろさまなぞは、私よく存じてをりますが、いつぞや淺草の門跡さまの前で、お目にかゝりました時、なかに包をさげて杖にすがつてござるやうす、大きにおとしがよりました。彌ハアそれは大かた、寺參にでもいかれた時でござりませう。おめへ御存じとあれば、定めて何とか詞をかけられたで御座りやせう。十吉、わたくしを見ると直にかけてござつて、何をおつしやるとぞんじましたれば、一もんやつて下しやいませと。北「ワハハハハハ、彌イヤおめへおいらをおつにはぐらからすの。北おもしろへく。なんとおめへこよひわつちらと一しよにとまりはどうだ。十吉、ようござりやせう。ト、それよりみちすがらたがひにしやれ合、國澤といへるにいたる。こゝに法花寺といへるてらに、あしかゞぶしやうのこんりふありし七面堂あり。彌次郎兵衛はるかにこれをふしをがみて、

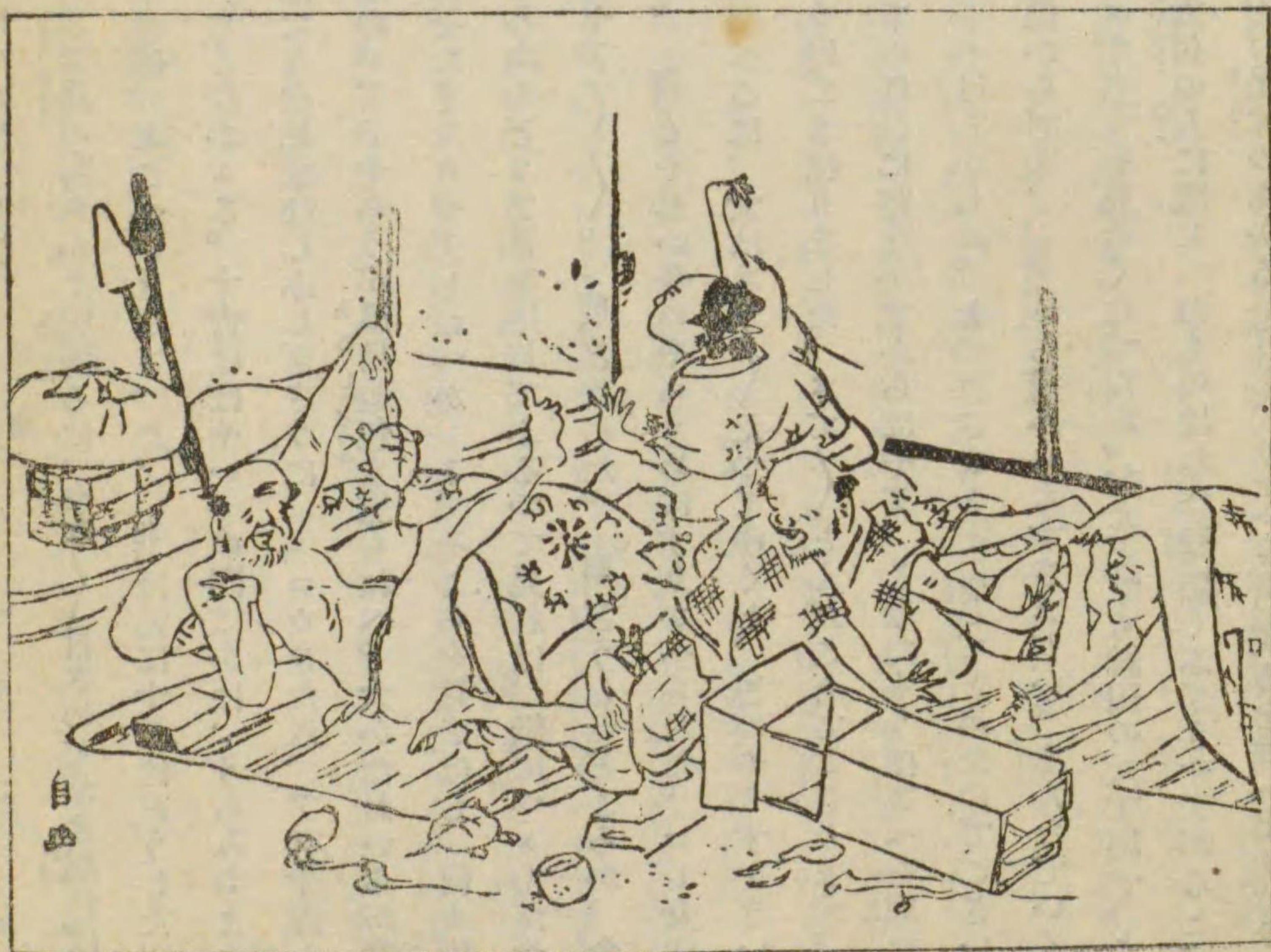
足利のぶしやうの建し名にめてて、七面堂といふべかりける

斯て三人はなしつれて、市の山にいたる。(こゝに、いがぐりあたまの子ども三三人、大なるすつぽんをとらへてもちあるき遊びあると、北八見付て) 北「コウ彌次さん、いゝものがある。アノ泥龜をかひとつて、晩にやどやでやらかしはどうだ。彌よからう。ナント小ぞうそのすつぽんを賣ねへか。子供「こんたしゆ、いるならうちくれべい。そんだいぜによくれさるか。北「やらうとも、ソリヤおつきな錢をやる。ト、四文せん廿四文ばかりぬいてやり、やがてあたりのわらをひろひ、かのすつぽんを薬づつに入れて引つさげ。北「きめうく。十吉こいつは面白い。時に日がいらした。ちと急やせう。ト、あしばやに三人たどる。既に其日も暮にちかづき、入相のかね幽にひゞき、鳥

もねぐらに歸りがけの駄賃馬追立て、とまりを急ぐ馬士唄の、なまけたるは、ほてつばらの淋しくなりたる故にやあらん。(此とき、やうやく三しまのしゆくへつくと、兩かはよりよびたつる女のこゑく) 女「お泊なさいませく。彌エ、ひつばるな。こゝをはなしたら泊るべい。女「すんなら、サアお泊り。彌「あかすかベイ引。ト、にげるはずみに、あんまに行あたる。あんま「アイタ、、、、まなこつぶれがべら坊め、あんまアけんびきイ。引せちうう、せうちうは入ませぬか。目のまはる焼酎をかはしやいませ。北「えいかげんにこゝへ泊らうか。のをんな「サアおはひりなさいませ。おさんどんおとまりだよ。ていしゆ「コレハおはやうござります。おつれさまはおいくたり。彌「かげぼし共に六人。ていしゆ「へいそれは。ヤレちやア三太郎はぬか。お湯をとつてこい。お茶は煮えてあるか。ソレ先お風呂をひとつあげろ。お飯もわいた。すぐにおはひりなさいませ。(此内、三人ともあしをあらひしまひ、すぐにおくへとほる。) 女「お湯におめしなさいませ。彌「下れおさきへまらう。ト、はだかになりてかけいだす。女「モシそこはかうかでございます。こつちらへ。彌「ホイこれは。ト、ゆどのへゆく。十吉「ときにかの薬包はへ。北「この間におきやした。のちの寢酒にしらへてもらひやせう。(此内、彌次郎湯よりあがると、つぎに十吉ゆにいりにたつ。やどのていしゆ、とひやの下やくをつれて、ちやうめんとやたてをもちいづる。これは宿帳とて、旅人の國ところをします事也。) ていしゆ「御めんくだされませ。ハアおひとりはおふろか。宿帳を附ます。あなたがたお國は。北「ハイわしは泉州。ていしゆ「泉州はどこでございます。北「せん州堺。名は天川屋義平といひやす。ていしゆ「へいあなたは。彌「わしかへ、城州山崎村與市兵衛と申やす。ていしゆ「扱は與市兵衛さまとはあなたか。うけたまひおよんだ、あなたの聲さま勘平さまはどうなされました。彌「かん平は、三十になるやならずしにやした。ていしゆ「ハアそれはおちからおとし。おかる様は。彌「ずるぶん達者であります。ていしゆ「そして狸の角兵衛さまや、めつばふ彌八様はたしかあなたのお近所であつた。彌「さやう。ていしゆ「アノ又猪はどこにゐられます。彌「ハアしゝはどこだか。ていしゆ「てんつ

帯のウときなさろ。そしてこの足さアわしがうへへのつけなさろ。彌彌「イ／＼かうかく」。竹竹「ヤレハアねざらい
 こんだよ。そしてがいにあとへさがりやることよ。もつとそらへつん出なさろ。彌彌「アツトしようち／＼(と、よ
 ぎをすつぽりかぶり、しばらく無言。此うち北八があひかたのおつめもきたりて、いろ／＼あれどもこれもくたく
 だしければやくす。はや其夜もふけゆくまゝに助郷馬おけがうまのすゞの音もたえはて、脊戸せどになく犬いぬの遠吼とほほえ、しゝを追ふ鳴
 子の音まで、ふきおくる夜あらしの身にしむばかり、行燈あんどうのあぶらも盡つきて、いつのまにかはまつくらやみ。(このとき
 かのつとになしおきたるすつぽん、とこのまにおきたる儘、それなりに忘れたるが、やがてわらづとをくひやぶり、
 そろ／＼はひ出で、ごそつきあるくに、十吉目をさまし何やらんとかんがへあるうち、かのすつぽんは、北八がよぎ
 の中へはひこむと、北八びつくり目をさまし。北北「だれだ／＼。ト、あたまをあげると、すつぽんうろたへて、北八
 が胸のあたりへかけあがる。北八きやつといつてひつつかみはふりなげると、彌次郎がかほへばつたり。これもきや
 つといつて目をさまし、うろたへてひつつかみ、ゆびさきをくひつかれて、「アタ、。。(あひかたお竹も目をさま
 し)「ヤレうつたまげた。あじやうしたへ。彌彌「火をともしてくれる。アイタ、。竹竹「あんとしたへ。ト、さぐり
 まはす手さきが、すつぽんへさはり、バアチヤハアと、うしろへたふれるひやうしに、ふすまがはづれてともにばつ
 たり。きた八むしやうに手をたゝき、「まつくらてねつからわからぬ。竹竹「おたつどんおたつどん。最前さいぜんから客衆きやくしゆが
 うでをたゝかつしやる。早くあかしよもつてきなさろ。彌彌「はやく／＼。アタ、。ト、むしやうにうろたへさ
 わぐ。此ひまに十吉、彌次郎がふとんの下にいておきしうちがへの金をぬすみ、かねてこしらへおきたると見えて、
 石ころをかみにくる／＼つゝみたるをすりかへ、どうまきへいれて、又もとの如くふとんの下へいれおく。いつたい
 この十吉は道中のごまのはひといふものにて、こんなことをするがしやうばいなれば、いつの間にかは彌次郎がかね
 をもつてゐるを見てとり、とちうよりつけきたりて、かくのごとし。この内、宿の女ばうあかりをもちきたり、見れ

ば彌次郎が手にすつぽんがくつついて、ぶつてもたゝい
 ても一向にはなれず。やどの女ばうあわてゝ。女ばうば
 あチヤ、こゝへはどうしてすつぽんがきたやア。北北「ハ、
 アひるまのすつぽんが、つとの中から這出はひだたのだな。コ
 イツすつぽんとぬけさうなもんだ。彌彌「エ、しやれ所ぢ
 やアねへ。アレちがでる、いたい／＼。竹竹「あんだとお
 もつたら、がさだアもし。ソリヤアゆびを水の中へいれ
 めさると、ぢつきにはなしてつんにげ申まうすわ。女房によう「ホン
 ニさうしなさいまし。ト、あま戸をあける。彌次郎かけ
 出、手水鉢てみづばちのなかへゆびをつけると、すつぽんはなれ
 およぐ。彌彌「ヤレ／＼とんだめにあつた。北北「イヤ
 はや、奇妙きみょう希代きだい希有きゆうけれつ、ちんじちうやう言語ごんご同断どうだんな
 ことであつた。ハ、ハ、ト、そこらとりかたづけ、ま
 だ夜あけにも間もあればと、又もまくらをかたぶけて、し
 ばらくまどろみける中に、北八をかしさ半分、
 よねたちとねたる側かたには泥龜すつかんもはづかしいやらゆ
 びをくはへた
 おなじく彌次郎もいたさをこらへて、



すつぽんにくはへられたる苦しさにこちや石龜のちだんだをふむ

最早其夜も明行ば、寺の鐘も勤行の聲もろともに響渡り、求食鳥の軒ちかく鳴渡るに、みなく目さめておき出れば、

勝手より膳も出、それ／＼に支度する内、ヤどの女おひとり、どこへいきなされた。北「ほんに十公はどうした。

彌「大かた雪陣だらう。さきへやらかせ。ト、かまはずめしをくひかゝる。十吉ははやいつの間にかは、うらみちより

にげ行たれば、いくらまつてもくるはずはなし。彌次郎あたりを見まはしふしぎさうに、「コウきた八、アノ十吉と

やらアなんだらう。北「されば。彌「ハテがつてんのかぬ。アノやらうが風呂敷包も笠もねへ。大かたおいらが寢

てゐる内、たつてしまつたと見える。北「ヤアそんなら何ぞなくなりヤアしねへか。ト、そこらを見まはし、何も別

條はねへが。彌「イヤ／＼別條があるやうだ。ト、ふところからどうまきを出してふるつて見れば、紙につゝんだや

つががつたりとおちる。あけてみればみないしころ。彌「ヤア／＼。北「どうした。彌「どうしたどころか、金

が石になつてしまつた。エ、エ、。北「こいつは大變／＼。彌「くやしい今のやらうめにすりかへられた。コレ女中

御亭主を呼でくんな。はやく／＼。ト、むしやうにのぼせかへるに、女はさう／＼たつてゆくと、このやうすをきい

て、宿のていしゆねまきのまゝかけきたりて、北「今うけたまはりました。さて／＼とんだことござります。

彌「イヤきさま御亭主だの。コレすまねへぞ／＼。あんなごまのはひに宿をかすからにヤア、こなたもうはまへを取た

らう。なぜおいらにさたなしにさきへたゝせた。北「コレハけしからぬ。おつれさまとぞんじてとめたのでござい

ます。今朝たゝしつたもさつぱりしりませぬ。大かたうら道からでも、彌「うら道からもすさまじい。そんなでいく

のぢやアねへわ。なんでもアノごまの灰を出せ／＼。コレエやらうを見そくなつたか。おえども神田の八丁堀で、と

ちめん屋の彌次郎兵衛さまといつちやア、おそらくおれが近付の人に誰しらぬものはねへわ。悪くふざきヤアがると、

やてへばによつたゝきこはして、合羽干場の地請にたつのだ。足元のあかるいうち、サアごまの灰めを爰へ出せ。サ

アだせ／＼。北「これは御難題。ざりとてはおきのどくな。彌「ナニおきのどくの人丸さまだ。イヤ四斗樽さ

まがあきれらア。サア四斗樽めをこゝへ出せ。北「ナニしとだるとは。彌「イヤサ四斗樽をがつてんでとめたから

にヤア、きさまも一ツ穴の狐だ。北「これは無體な。ナニわしらが四斗樽をとませう。彌「とめねへことがあるも

のか。ゆうべから今のさきまで、こゝのうちねてゐたわ。北「アノ四斗樽がかへ。彌「ヲ、サ四斗樽。イヤ／＼

ごまのはひだ、ごまのはひだ。北「これ彌次さん、マアしづかにしねへ。かはいさうに、御ていしゆのしつたこと

ぢやアねへ。道づれにしてきたはこつちがわりい。どうもしかたがねへとあきらめなせへ。北「さやう／＼。是がわ

し共が内へござつての相宿ならば、おつしやるも尤だが、何をいふも一しよにござつたものを、申さばおまいたちの

御籠相といふもんだ。北「ちげへなしさ。コレ彌次さんおめへりきんでもはじまらねへ。どうもしやうことがねへわ

さ。ト、いはれてみれば、彌次郎もなる程とおもつたところがつまらず、ふざきつてだんまりである。しまひつか

ねばきた八、北「彌次さんマア飯でも喰ねへ。彌「めしもくへぬ、ナントきた八かうだ。府中迄いけばちつたアさん

だんするあてもあるから、先一文なしで出かけよう。ト、つかひのこりのせにをあつめて、やう／＼とこゝのはたご

をはらひ、あとにわづかのはしたせにのこりたるをたよりに、さう／＼にこゝを出かけ、みち／＼もこゝろがけて、

ごまのはひのゆくへをたづぬれども、いつかうしれず。しやれもむだもどこへやら、たどうか／＼とたどりながら、

ことわざの枯木に花はさきもせて目をこすらすごまの灰かな

北「彌次さんそんなに力を落しなんな。たかどかうだ。

うき沈ある世は次第ふどう尊いのれるかひもなき護摩の灰

彌「きたや、おらアもう坊主にでもなりたい。北「おめへとんだことをいふ。彌「いつそえどへかへらうか。北「ナニ

サけへる事があるもんだ。柄杓をふつても、おいせさままでいつてこにヤアげへぶんがわりい。彌「それでも、モウ

ひだるくてあるかれぬ。北「ハテまちなさい。こゝにえどからことづかつてきた十二銅があるから、さきへいつた
 からもちでも買つてくひなせへ。ト、いひつゝふたりながら、つねにすがりてえちら／＼とゆくむかふから、狀箱をか
 つぎしにんそく、「エイさつさ／＼」。北「なんだ野郎の章歌天さまア見るやうに、やみとかけてきやアがる。彌ア
 アうらやましい。あんなにかけるいきほひだから、さだめておめしもふんだんにくつたらう。北「エ、おめへも、乞
 食じみたことをいふもんだ。御狀箱の「エイさつさ／＼」。北「ソレあぶねへ。こつちへよんな。にんそく「エイさつさエイ
 さつさ。ト、とほりすがいに、御狀箱のかどで、彌次郎が小びん先へ、がつたりとあたる。彌「アイタ、、(にん
 そくはるさいかまはず、「エイこりやさつさ／＼」。彌「ア、ア、いたい／＼。なんの因果でこんな目にあふか。お
 らアしにたくなつた。北「エ、ばかアいひなせへ。ソレ馬がきたア。彌「馬士どんさきの宿までは、まだよつぽどあ
 るかの。馬士ナニぢつきにそこだア。彌「いくらほどあるへ。まごたつた三里廿四五丁もあるだんべい。彌「ハツア
 ア、ト、だん／＼たどり行程に、やがてかまがふちといへる所にいたりて、かゝる中にもすきの道とて、又一首くち
 ずさむ。されどもうたもその身のくるしきまゝなれば、

名をきいてほしやこがねの釜が淵くちに孝行したきゆゑには

此所にて餅などとゝのへ、すこしは腹の虫をやしなひ、たがひにちからをつけ合、はなしものして漸沼津の驛に
 つく。こゝにてまづ足をやすめんと、宿はづれの茶やへはひる。をんな「おはやうおさいますチヤ。お支度でもしな
 さいませぬか。北「イヤあとの建場てうんといふほどくつてきやした。ト、此内、兩掛をにんそくにかつがせ、供を
 一人つれたる侍おくにふうの大たぶさ、もめんを片面にそめたる小もんのぶつさきばをきたるが、このちや屋
 へはひる。女「おちやあがりませ。侍「もうなんどきだの。女「ハイ、八ツでもおざりやしよ。侍「よいさけがあら
 ばちくと出しなさろ。女「ハイ／＼三十二文のをあげませうかヤア。侍「今すこし下直なのはなんぼぢや。女「廿四

文のおおざいます。侍「しからば、ソノ廿四文の酒と、卅二文の酒と等分にわつて、壹合五勺ばかり出しなさろ。

女「ハイ／＼、ト、かつてより、ちろりさかづきをもちきたり、さかなのにつけなどいだす。侍「コリヤ／＼、此煮付

よつた肴共の價ななんぼぢや。女「三十二文でおざいます。侍「こちらは。女「十二文。侍「ム、よい／＼。コリヤ

傳助わごりよも一つのみやれ。供傳助「ネイ。侍「コリヤ、向ふに火をたきよるをなごどもは、奥田氏の内室によく似よ

つた。供「いかさまこちらの今笑ひよるをなごなごも、よいやうでござります。侍「どれか／＼。ム、アノはしらの

ねきに、よこたはつてをるをなごがよい／＼。サア傳介今すこしある、吞てしまへ。供「ネイ／＼。侍「サア勘定の

いたさう。なんぼぢや。コリヤ／＼、この肴どもは手はつけないぞ。女「ハイ／＼、四十二文でございますチヤ。

侍「ヲ、よい／＼、ト、供のものにはらはせ、こゝを出かける。北八彌次郎はちやばかりのんでたちあがり、北「サア

いかう。彌「アイおせわ。女「どなたもようおいで。ト、それよりこゝを立出、ふたりはかの侍とあとになりさきに

なりて、いろ／＼はなしつれてたどり行に、ならの坂といふ所にいたり、千本の松原にて、きた八がこじつけるうた、

この景色見ては休にやならの坂、いざたばこにや千本のまつ。

(侍このうたを聞てかんしんしじ、ヒヤアでけた／＼。お身たちはえどのものだな。彌「さやうでござります。私ど

もは夜前の泊で、ごまの灰に取つかれて、大きに難儀をいたします。侍「ハアそれは近頃きのどくぢや。なるほど、

ごまの灰のさしたのはいたからう。北「イヤごまの灰と申すは、どろぼうのことでござります。侍「どろぼうとは何

ぢや。北「ハイ泥坊と申は、盜賊のこととござります。侍「ハ、アなにか人のものを取る盜賊の事を、どろぼうと

いふか。彌「さやうでござります。侍「ソノ又どろぼうを、ごまの灰といふぢやナ。なるほどげせたく。北「と

きに旦那へちとお願ひがござります。私ども右の泥坊にあひまして、さつぱり路用をとられてしまひましたから、大

きに難儀をいたします。府中まで參れば、いかやうともいたしますが、それまでの所にこまります。そこで財は身の

文のおおざいます。侍「しからば、ソノ廿四文の酒と、卅二文の酒と等分にわつて、壹合五勺ばかり出しなさろ。
 女「ハイ／＼、ト、かつてより、ちろりさかづきをもちきたり、さかなのにつけなどいだす。侍「コリヤ／＼、此煮付
 よつた肴共の價ななんぼぢや。女「三十二文でおざいます。侍「こちらは。女「十二文。侍「ム、よい／＼。コリヤ
 傳助わごりよも一つのみやれ。供傳助「ネイ。侍「コリヤ、向ふに火をたきよるをなごどもは、奥田氏の内室によく似よ
 つた。供「いかさまこちらの今笑ひよるをなごなごも、よいやうでござります。侍「どれか／＼。ム、アノはしらの
 ねきに、よこたはつてをるをなごがよい／＼。サア傳介今すこしある、吞てしまへ。供「ネイ／＼。侍「サア勘定の
 いたさう。なんぼぢや。コリヤ／＼、この肴どもは手はつけないぞ。女「ハイ／＼、四十二文でございますチヤ。
 侍「ヲ、よい／＼、ト、供のものにはらはせ、こゝを出かける。北八彌次郎はちやばかりのんでたちあがり、北「サア
 いかう。彌「アイおせわ。女「どなたもようおいで。ト、それよりこゝを立出、ふたりはかの侍とあとになりさきに
 なりて、いろ／＼はなしつれてたどり行に、ならの坂といふ所にいたり、千本の松原にて、きた八がこじつけるうた、
 この景色見ては休にやならの坂、いざたばこにや千本のまつ。
 (侍このうたを聞てかんしんしじ、ヒヤアでけた／＼。お身たちはえどのものだな。彌「さやうでござります。私ど
 もは夜前の泊で、ごまの灰に取つかれて、大きに難儀をいたします。侍「ハアそれは近頃きのどくぢや。なるほど、
 ごまの灰のさしたのはいたからう。北「イヤごまの灰と申すは、どろぼうのことでござります。侍「どろぼうとは何
 ぢや。北「ハイ泥坊と申は、盜賊のこととござります。侍「ハ、アなにか人のものを取る盜賊の事を、どろぼうと
 いふか。彌「さやうでござります。侍「ソノ又どろぼうを、ごまの灰といふぢやナ。なるほどげせたく。北「と
 きに旦那へちとお願ひがござります。私ども右の泥坊にあひまして、さつぱり路用をとられてしまひましたから、大
 きに難儀をいたします。府中まで參れば、いかやうともいたしますが、それまでの所にこまります。そこで財は身の

さし合せとやら、どうぞ是をうりたうござりますが、おかひなさつて下さりませぬか。ト、こしにさげたる、いんでんのきんちやくをいだしみせる。侍、ホウそれはきのどく。途中でものを求るは如何敷が、お身たちの難儀とあれば、求てつかはさう。あたひはなんぼぢや。北、ハイ三百ぐらゐにさしあげませう。侍、それは高直ぢや。北、すこしはおまけ申ませう。侍、しからばソノ巾着共のあたひな、かうと六十文のつかはそか。北、それはあんまり。侍、六十文の遣そか。北、もちつとおかひなさつて下さりませ。侍、しからば六十二文のつかはそか。北、イエどうも侍左あらば清水チウ舞臺どもからとんだとおもつて、六十三文のつかはすか。北、イヤモウそんなに壹文ヅツおかひなさつては、御相談ができません。かういたしませう。丁度にお買なさつてくださりませ。侍、ヤ丁度とはなんぼぢや。北、ハイちやうどと申すは、百につばまりましたことを、ちやうどと申すから、百文なら差上ませう。侍、ムなにか、百のことをちやうどといふか、しからばちやうどに求めてつかはさう。北、それはありがたうござります。ト、きんちやくをわたし、百文取り、「モシ是は安いものでござります。捨うりにしても根付くるみでは、四五百がものはござります。侍、イヤ身ども忤どもが、兩人罷在が、是は總領へのよいみやげぢや。北、へいあなたはまだお若うお見えなさいますに、お子達がおふたりとはよいお樂みでござります。無駄ながら、もうおいくつでござります。侍、あてゝお見やれ。北、ハイ、あなたは、コウト三十七八にもおなりなされませすか。侍、身ども當年巳のとして、四十二歳にまかりなる。北、それはおわかうござります。侍、コレハ御挨拶。しかし身ども相役の園原作野丞もん、米木津甚太夫など、みな同年でまかりあるが、その内で身どもがいつちわけへといひをるて。北、さやうでござりやせう。侍、それに又家中うちのわけへをなごどもなぞが、身どもがことを澤村宗十郎に似てをるなぞと申す。北、ハ、アなるほど。侍、ときにお手前はいくつぢや。北、旦那おあてなされてごらうじませ。侍、ムウ、お手まへとしな、こうと廿七八にもなりをるか。北、イエちやうどでござります。侍、ナニちやうど、アノ百か。北、イヤ



是でござります。侍、ハア三百にはわけへをとこだ。みなく「アハ、。(このはなしにまぎれて、あゆむともなしに小すは大すはを打過、程なく原の宿へつく、こゝにてつれのさぶらひにわかれて、) まだめしもなくは沼津をうちすぎてひもじき原のしゆくにつきたり。北、エ、おめへまだ、そんなしみつたれをいふわ。いまの錢で蕎麥でも喰ふべい。彌、ソリヤアよからうく、ト、そばやへはひり、北、ツイ二せんたのみませ。そば、ハイ、ト、やがてそば二せんを出す。彌、ふといそばだ。くひでがあつていゝわへ。北、八もう一ぱいかへようか。北、イヤ、さういちどきに錢をつかつてはならぬ。又さきへいつて、何ぞやらかしやせうから、湯でもおもしろいのみなせへ。彌、そんならわけへ衆、ゆをひとつくんな。そば、ハイ、彌、ア、うめへ。きた八のまねか。ツイ、もう一ぱいくんな。ヲツトヲツト、アツ、くちをやけどした。あんまりあつた。どうぞそばをちつとうめてもらひていもんだ。北、コレくわけへしゆ、たびたびきのどくだが、薬をのむからもうひとつゆをくんな。そば、ハイ、北、コレたつぶりだよ。ヲツトよし。しかしわしがのむくすりは、したちのはひつたゆでなければきかねへから、とても事にわけへしゆ、したちをすこしにしてくん。ヲツトよし、ト、ふなの水をのむやうにくつくと吞て、「サアいかう。彌、へぶ心がたしかになつた。

今くひしそばはふじほど山もりにすこしこゝろもうきしまがはら
 それより新田といへる建場にいたる。爰はうなぎの名物にて、家ごとにあふぎたつるかばやきの匂ひに、ふたりは鼻のさきをひこつかして、

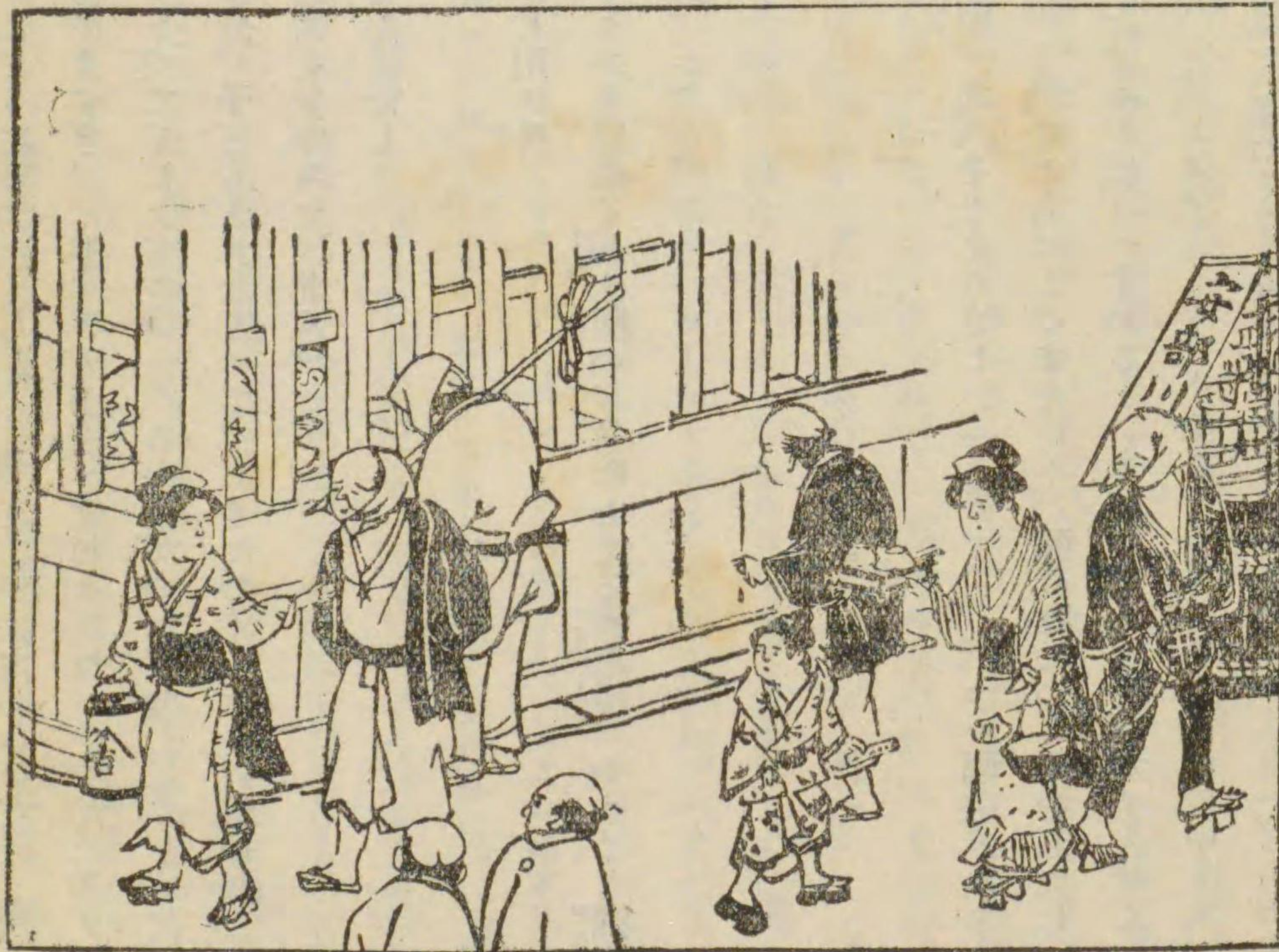
蒲焼のほひを嗅もうとまじやこちらふたりはうなぎのたび
 頓て元吉原を打過、かしは橋といふ所にいたる。此所より富士の山正面に見えて、すそ野第一の絶景なり。彌次郎取

あへず、

餅の名のかしは橋とて旅人のあしをさすりて休やすらん

斯て吉原の驛につく。棒ばなの茶屋女共、いづれも黄色なる聲々に、女「お休なさいやアせ。さけウあがりやアし。米の飯をあがりやアし。こんにやくと葱のお吸物もおざりやアす。おやすみなさいやアし。かごかきかごよしかな、かご。馬かた「ナイ旦那衆馬アどうだ。戻りだからやすい。彌今迄乗づめにのつてきたから、ちつと是からひろひやせう。北「ころびやせうがきいてあきれらア。(それよりこのしゆくはづれに、やぶれあみがさをきたるらう人ものとおぼしく、扇をもちて) 誦「いざ酒をのまうよ。さておさかなはなに〜ぞ。ころしも秋のやまくさ、ききやう、かるかや、われもかう、しをんといふは何やらん。道中わづらひまして難儀をいたします。なにとぞ路錢の御合力を願ひます。北「イヤモウ、わつちらアゆうべごまの灰に路用をとられて、壹文なした。どうぞもらひためがあらば、こつちへ御合力ねがひます。浪人「そんなら、コレつくなくな ト、さう〜に行過る。ふたりもをかき打わらひつたどりに行に、村はづれに小屋がけして、くわんおん様のかけぢをかけ、麻の破れごろもをきたる坊さま、いねぶりをしてゐたりしが、たび人を見ると、にはかにりんをうちならし、觀音經「妙法蓮華經普門品第始終多聞。世間子息大分遊興毎晩三味線。音曲滅多無正。夜前大食翌日頭痛八百。羅利古灰。笑止千萬。近邊醫者早速御見舞。調合煎藥。呑多羅久多良腹張多心經。チインはなのした空殿のこんりふ、おこころざしをおたのん申ます。北「おきやうがおもしろへから、寄進につきやせう。坊「ハイそれは御苦勞、お名をしるませう。彌「そんなら彌次郎兵衛とつけなさい。坊「ハイ俗名彌次郎兵衛。彌「エ、まだ死にやアしねへわな。坊「へいまだ死なしやらんのかな。イヤ是へは、おこころざしの戒名をしるします。北「ライそんなら、そけへかいてくん。釋の急難取つめた佛果菩提のため、ソリヤ一文 ト、なげだして行過る松ばらの中ほどに、十四五のまへがみ、どてをくづしてやくわんをかけ、くわしな

どならべて、あそぶかたてにたび人をよびたつる。「おやすみなさいませ。おやすみなさいませ。北「サア彌次さんくわしてもくはねへか。彌「チトやすまう ト、どてのうすべりのうへ〜こしをかけ、ふたりながらくわしをしてやり、北「小ぞう、このくわしはいくらづつだ。小ぞう「アイ貳文ヅツ。彌「五ツくつたからいくらだ。小ぞう「わしはいくらだかしりません。北「そんならことうと、五ツで二五の三文か。これこゝにおくぞ。彌「ヒヤアこいつはやすいもんだ。もうひとつくはう。コリヤいくらだ。小ぞう「ソリヤア三文。北「ドレ〜うめへうめへ小ぞう、せんのお錢はすんだぞ。あとのくわしが四ツくつたから、三四の七文五分か。エイは五分はまける〜。彌「イヤ餅もあるな。北「ドレこいつはうめへ。このもちはいくらだよ。小ぞう「ソリヤア五文どりよ。北「五文ヅツならこうと、ふたりで六ツくつたから五六十五文、ソレやるぞ。小ぞう「イヤこのしゆは、モウ塵劫記ぢやアうりましない。五文づつ六つくれなさる。北「ヤア〜〜錢があるかしらん。小ぞう「こゝへ出しなさる。一ツ二ツ



三ツ四ツ ト、五文ツツひとつ／＼にかぞへて、めのござんようにひつたくられ、彌こいつは大わらひだ。北とんだ目にあつた。サアいかう ト、立あがり、四五けんもゆきすぎ、北八アノ小ぞうは如才のねへやつだ。アノ餅がナニ五文取なものは、二文か三もんの餅だらうに、高くうつて、しよての損をうめやアがつた。彌いま／＼しい、今くつた餅がのどにつまつた。ゲツ／＼ ト、をかしさ半分、子どもとあなどつて、ちきにむくつたと打笑ひたどり行。それより久澤の善福寺といへるに、曾我兄弟の石碑あるををがみて、北八、

今曾我に機縁をむすぶわれ／＼は外に一家も壹もんもなし

富士川のわたし場にいたりて、彌次郎兵衛、

ゆく水は矢をいるごとく岩角にあたるをいとふふじ川の舟

此涉を打越けるに、はや日も西の山の端にちらつき、おのづから道急ぐ馬士唄の、竹にとまる雀色時、やう／＼蒲原の宿にいたる。

道中膝栗毛 後編 坤

此宿の御本陣にお大名のお着と見え、勝手は今膳の出る最中、北八をとよりさしのぞきて、北コウ彌次さんちよつと此ふるしきづつみをもつてゐてくん。彌どうする。北イヤちつとのまだ ト、彌次郎につみをわたし、御本陣へずつとはひり、勝手のださくさの中へあがり、かたすみのはうへすわると、本陣のをんな、だん／＼ぜんをもちほこび、大ぜいへすゑると、北八ライこゝへも一せん。女ハイ／＼ ト、すゑる。かゝるこんざつの中ゆゑ、人もきがつかず、きた八おもふさまくつてしまひ、すきまを見て、手ぬぐひをひろげ、わんにもりたるめしを一せんちや

つと打あけてぬぐひに引つゝみ、やがてこそ／＼とにげ出、まごつく内、彌次郎はむかうの軒の下に待ち、たいくつして、きた八か。北ライ／＼。彌どけへいつた。北へ、おらア飯をくつてきたが奇妙か。彌エ、どこで。北本陣でどさくさまぎれに五六ばいやらかしてきた。彌ソリヤアいゝことをした。しかし手ぬぐひも實のねへもんだ。なぜおいらもつれていかねへエ。北イヤおめへにやアみやげをもつてきた ト、手ぬぐひにつみし飯をいだす。彌何だめしか、有がてへ。イヤなか／＼手ぬぐひがきいてゐるわへ。アうめ／＼ ト、のこさずくつてしまひ、かの手ぬぐひをうちふるつて、ヤアこれはてぬぐひにつみんできたな。エ、きたねへ。北ナニきたねへものか。彌それだつて、手ぬぐひが金玉やなにかをあらつた手ぬぐひだものを、ア、むねがわるい。ベツベツ。北ハ、。ウどうぞいきな女のある内へとまりてへの。北ナニ木賃でとまる内に、いきもへうたんもあるものか。ハテどこだかしれねへ ト、あつちこつちのうちをのぞきあるき、のきの下にねてゐる犬のあしをふんで、大きにくひつかれ、北アイタ、。犬キヤアン／＼。のこさず／＼あぢのすウし、さばのすウし。北コウすしやさん、こゝらに木ちん宿はねへかの。すしやアイむかふのとつばしのうちよ。彌アイおせわ ト、おしへられたる内のかど口から、北チト御めんなせへ ト、ずつとはひりみれば、たゝみの四五でふもしかれようといふ内にて、ぶつだんひとつとやぶれつづらひとつのしんだい、あるじは七十ちかきおやぢ、あろりのきはにわらをなつてゐる。じぎいにてつるしあるなべに、何かぐつ／＼にえるそばに、六部が一人じゆんれいふたり、一人は六十餘のおやぢ、一人は十七八のむすめ、おいずるをきたまゝ、あかぎれだらけの足をのぼし、火にあたつてゐる。此家のばゝア、松のえだをへしをりあろりへくべながら、こつちへはひらしやませ。北わしらを今夜とめてくんなせへ。おやぢあがらしやませ、ソレそこ

に水がある。あしよゆすぎなさる。あしをあらひながら北八彌次さん見ねへ。いゝ順禮がとまつてゐる。彌ホ

シニこいつたゞはおかれぬ。ひだるい時にやアまづいものなした。ト、打わらひあしをあらひて上へあがる。六部「サアこゝへ来てあたりなさろ。北「コウ彌次さんもつとそつちへよりな。ト、娘のそばへわりこんですわる。あるじの婆は、あろりのなべをおろし、ば「サア彌ができた。みんなくひなさろ。彌ソレはあつたかてよからう。ば「インネこんたしゆのことぢやアござらぬ。コリヤアこのしゆのかいだアよ。順禮「イヤけふ貰つた米ア、しひなばつかしたんとあつて、そして半分は石ころだアのし。こりよやくつたら、腹がおもたくなるだんべい。ば「ろくぶさんのも三合ばかしやアあつたんべい。そこへわけてくひなさろ。ト、この内じゆん禮六部も、てん／＼にちやわんを出し、もつて喰ふうち、だし合の米なれば、彌次郎きた八はたゞ見てゐるばかりで、手もちなくてたばこ入のそこをはたく、六部はやがてくひしまひて、六部「ふたりのお衆はさだめしおえどのしうだらうか、わしどもはおえどで、てんこちも無い目にあつたアもし。彌「どうしなさつた。六部「わしがハアこの六部になつた因縁のウかたり申べいが、ヤレ扱入といふもなアはあ、運がなくちやアもちあげべいにも、あんとしてなづきやアあがり申さない。わしがハア、わかい時分におえどに居申したが、そのとき何でもハア夏のとつつかから秋へぶつかけて、毎日／＼つなく風のふいたことがあり申た。其じぶんハア何でも金儲のウすべいとつて、いろ／＼首さアひねくりまはいて、とつけもないことを思ひついたアもし。彌「はての、六部「イヤサ箱屋をおつばじめ申たわ。あにが重宮だアの櫛箱だアのと、いろ／＼箱共をづなくかひこんで、賣つもりだアもし。彌「ハテ風がふいたによつて、箱屋とはどういふあんだの。六部「さればさア、わしがハアおもひつきにやアあにが扱、まいにち／＼とひやうもなく風がふいて、おえどではがいに砂ぼこりがたち申すから、おのづと人さアの目まなこへ砂どもがふきこんで、眼玉のつぶれるものがたんと出来るだんべいとおもつたから、そこでハアわしが工夫のウして、せけん（にはかめくち）の俄盲がほかにあてうせう事はなし、みんな三味のウならはしやるだんべい。さうすると三味せんやどもが繁昌して、せかいの猫どもが打ころされべいから、そこで鼠どもがづな

くあれて、あんでもせけん（はつち）の箱共のウ、みんなかじりなくすべいたア目の前だアもし。コリヤハアこゝで箱屋商賣のウおつ初めたら賣べいたアちがひはないと、あにがハア身上（しんしやう）ありぎり、箱どものウ仕入たとおもはつしやい。彌「コリヤアいゝおもひつきだ。大かたうれやしたらう。六部「イヤひとつもうれまじない。そこでわしもハア是ほどまてに工夫のウして、ぜつ（ぜつ）びまうかるべいとおもつた事がつづげれ申たから、しよせんハア、あてうしてもいかなiconだ（はつち）と發起のウして、六部（はつち）になり申た。兎角世（とがくせ）かいはおもふやうにやアならないもんだアもし。北「ハアかんしんなおはなしだ。時に又順禮さん、おめへはどういふ事からおもひついで順禮にやア出なすつた。順禮「コリヤハアわしも序（ついで）に懺悔（ざんげ）ばなしのウしますべい。この娘はコリヤアふとりの孫でござるが、わしどもはハアかはつたこんで、佛縁のウ結び申た。わしは日光のはうでござるが、さだめてそれさまだちも、はなしに聞てゐやり申すだんべいが、わしどもが國なぞは、雷（かみなり）がたくさんで、此二十年ばかしもあとのことであり申したが、ふと夏でかく雷（かみなり）が鳴申して、わしどもがせどぐちさアへおつこちたとおもひなさろ。さうするとハア其雷（かみなり）どのが、榎（えのき）のかぶつちいで、てかく尻（しつぽ）をうち申て疝氣（せんき）がおこつたとさわぎやる事よ。あにがそこで、天ぢくのウへ歸るべいこともできないから、わし共の内（うち）で養生のウしてゐる内、恥さアかたり申さにやア理が聞え申さないが、その雷（かみなり）がわしどもの娘とがらりねんごろのウしまして、互にハアはなれべいやうすもおさんないから、すぐにその雷（かみなり）どのをむこに取たとおもひなさろ。そこでハア天ぢくの親かたどのから、夕立（ゆふだち）の時分は手傳（てづか）てくれるとつて、夏中（なつちゆう）はたのまれていきやり申したが、ふと夏、上（かみ）がたさアへかせぎに行とつて出たなりけりて、かへらぬとおもひなさろ。あまつさへ、その時わしが娘はおつばらんでゐるし、あにがハア案じをるまい事か、大かたどこぞへおつこちて、腰骨（こしほね）がなぶんぬいて、わづらつてもあるだんべいとおもつたばかしで、便（たより）きくべいにもあてづつぼうなり、コリヤハアあんなるこんだとおもつてゐるうち、友達の雷（かみなり）どのが来て、これのむこどのハア熊野（くまの）うらへおつこちて、鯨（くじら）にがら、呑（の）れたたのはなし。ヤレさて悲しいこん

だと娘もなきやる、わしもハア片腕のウもがれたやうにおもひをりましたが、あんとすべい、せうことがない。其
 だいにヤアむすめが雷どのゝ種をおつばらんだから、鬼子でもうみをするべい。それにハア親雷の跡をつがせべいと
 たのしんで、あんでも鬼の子をうむやうにと氏神さまへ願のウかけて祈た所が、因果なこたア生れた子が此娘でござ
 り申す。そこでハアわし共もちからのウおとして、是ほど祈たのに鬼はうまず、しかもこんなに満足な人間の子をう
 むといふは、よくの因果だとあきらめて、罪亡しにこりよつて、願禮と思ひ立つたアもし。わしども程いん
 ぐわなもなアないとおもやア、はなしよヲするさへむねがつぶれ申わ。ト、なみだながらにはなすうち、はやよもふ
 ければ、主のばゞそれ〴〵にわござなどあてがひて、ばゞサアみんなをべらしやいませ。内ががいにせばいから、
 わしと願禮の女の衆は、天上へあがつてねますべい。ト、九ツばしごを二かいへかけて、じゆんれいのむすめとつれ
 て上る。六部は笈のうちより紙帳など出しかぶる。あるじのおやぢもじゆんれいも、うすべらなるふとんのやうなる
 ものをひつぱり、ゐりのはたへころげてねる。北、コリヤア小便がもるやうだ。彌、おいらもいつしよにかう
 ト、うらぐちへ出、彌、アノ願禮めぶつちめようとおもつたら、二かいへ行をつた、いま〴〵しい。北、さつきから
 咄してゐる内、そつと手をにぎつたり尻をつめつたりして、ちわをしてゐたがおめへしるめへ。彌、うそをつくぜ。
 北、うそでない。今夜アノ娘をぶつちめて見せよう。彌、早いをとこだ。ト、うちへはひり、うらぐちをしめてねる。
 かゝる木賃どまりのわびしきも、はなしのたねとはいひながら、凌ぐべきむしろ屏風も、破壁をもる風の音いたくも
 更行鐘に目覺て、北八あたりを伺ひ見れば、みだ旅勞れのかげ合躰ゴウ〴〵スウ〴〵ムニヤ〴〵。(時分はよしと
 北八そつとおきあがれども、あかりはなしまつくらやみ、そこらあたりをさぐり廻して、よう〴〵とはしごに取つき、
 二階へあがり見れば、天井は竹すのこにてその上にむしろをしきたれば、あるくとミシリ〴〵となるにおどろき、や
 がて四ツばひになつてさぐりまはり、むすめとおもひばゞアがねてゐるふとんの中へはひこみ、そろ〴〵なてまはし

ゆすりおこせば、ばゞアめをさまし、ト、いふゝゝに、北八うらたへ、さてはかどち
 がへせしと逃だすひやうしに、あしへたけのとげをたて、ばつたりこけると、竹すのこをふみぬき下へどつさりおち
 るおと、ミシ〴〵ガラ〴〵ストウン。うちのおやぢめをさまし、「あんだ〴〵。二かい〴〵あんだかいらないがとつびや
 うしもない。皆おきなさる〴〵。(このおとに六部も願禮もおきあがり、六部どえらい音がした。あかりをつけなさ
 ろ。まつくろくてあんだかかんだかしれないぞ。(こゝにあやしいかな、北八てんじやうをふみぬき下へおちたところ
 が、何か箱のやうなもの、中へおちて、いつかうにわからず。あしにころ〴〵となんだかひつかゝるゆゑ、さぐりて
 見れば、ほとけさまの後くわうなり。さてはぶつだんのなかへおちしと、くるしきうちにもをかしさ半分、このまに
 かけいでんとするに、はやあかりをともして内のおやぢ、〴〵あんだかほとけさまのなかへおちたさうだ。ト、ぶつだ
 んのとをひらけば、おもひがけなく北八がはひ出たるゆゑ、きもをつぶして、おやぢ、イヤ此人は。北、モシ身延様へは
 どうまゐります。おやぢ、ばかアいはつしやい。こんたアまあ、アゼニそこへはひらしやつた。北、イヤわつちハ小便
 におきた所が、ツイ戸まどひをして。おやぢ、アニ戸まどひをした。イヤこの人はほとけさまの中へ小便をしやせぬか
 ト、ぶつだんの内をのぞき、おやぢ、ヤア〴〵こんたア天上からおちめさつたな。北、アイサつひアノ猫におはれて
 おちやした。おやぢ、アニこんた鼠ぢやアあるまい。猫におはれたアあんなるこんだ。そしてアゼ天上へあがらしや
 った。北、イヤわしはふんどしを鼠にひかれたから、もしや二階にでもあらうかとそれをさがしに。ト、いひわけを
 してゐるうち、上からばゞアがおきて来り、ばゞイヤ〴〵さうぢやアござらない。わしもハア六十になり申が、どこ
 の國にか、あによヲすべいとおもつて、わしがひとところへはひこみめさつた。おやぢ、ヤア〴〵こんたア氣がちがヤア
 せぬか。わしどもは二十年もこつちイ、そんなあじやらしいこたア中絶のウしてゐますに、アノしわくたなばアが
 所へはひこむといふは、イヤはやこんたはみたくでもない人だ。北、イエもう御めんなせへ。コレ彌次さんねたふり

をしてゐずとおきてくんな ト、ゆりおこされて、をかしさをかくし、彌どうもわけへものといふもなア、あとさきのかんげへがござりやせん。どうぞれうけんしてくんなせへ ト、六部やじゆんれいもともくちをそへて、やうやうとをさまり、きた入もゆかた一まいりしろなして、てんじやうのつくろひちん少々出し、さらりとすんでしまひければ、程なくよがあげて彌次郎北八はさうく、此所をたち出で、ゆく道すがら、彌北八へぶふさくの小田原の泊では、すあふろの底をぬいて貳朱ふんだくられ、又ゆうべは二かいをぶぬいて、三百とられたもちゑがねへぞ。北「イヤ面目してへもねへ。いまくしいが一首詠だ。

順禮のむすめとおもひしのびしはさてこそ高野六十の婆々

彌ハ、、、。ゆふべ戸まどひの言譯もをかしかつたが、ふんどしを鼠にひかれたとは、いゝこじつけだ。イヤそれでひとつ、咄をあんじたがどうだ。北「コリヤおもしろへ、聞てへの。彌、まづかうだ。ゆうべのやうに順禮や六部と一所に、木ちんどまりをしやした。時に手めへが夜中におきて何かまごつきやす。さうすると、みんなが目をさまして、コリヤおめへ何をしなるといふと、手めへがいふには、イヤわしはふんどしを鼠にひかれやした。たしか二かいの方へ引いていつたやうだといふと、順禮も六部も、さういひなさればわしも枕元に置たふんどしが見えぬ。イヤわしのもこゝにおいたがない。コリヤアみんな鼠にひかれたもんだらう。なんでも二階へいつて見やせうと、みなつれだつてはしごをあがりやす。さうすると、二階のすみのはうで三味線の音がする。イヤこいつはふしぎだとあがり口からすかして見れば、鼠どもが大ぜいよつて、みんなのふんどしをひろげて見て、一びきの鼠がいふには、おいらが引てきた六部のふんどしは、振ふと三味線の音がするはどうした事だやら、がつてんがゆかぬといひ乍ら、其ふんどしを口にくはへてふるつて見ると、なる程、チン、く、なぞとなりやす。そこで又外の鼠がいふには、六部のふんどしに限つて、三味線の音がするもふしぎだ。ものはためし、おいらがひいてきた順禮のふんどしをもふるつて見よう

と、おなじく口にくはへてふるふと、是も、チ、チン、となりやした。こいつはめうだと又一疋の鼠が、おれは北八とやらいふ男のふんどしを引てきたが、コリヤアゑつちうだから短いだけで、鼓弓のねがするだらうと、くはへて振つてみれば、ヅマンヅン、と義太夫三味線の音がしやす。そこで鼠どもが、こいつはふしぎだ、六部やじゆん禮のふんどしは、みなかはいらしい歌三味線のねがするに、なぜ北八とやらがふんどしは義太夫三味せんのねがするだらうといふと、すみつこの鼠がしばらくかんがへ、ソリヤアそのはずだわへ。なぜそのはずだ。ハテ北八とやらは大かたふと棹だらうよ。北「ハ、、、。奇妙く、ト、此はなしのうち由井のしゆくにつくと、兩がはよりよびたつるこゑ、茶や女「おはいりなさやアせ。名物さたうもちよアあがりやアせ。しよつばいのおおざいやアす。お休なさいやアせく。彌「エ、やかましい女どもだ。

呼たつる女の聲はかみそりやさてこそ爰は髪由井の宿

それより由井川を打越、倉澤といへる立場へつく。爰は鮑榮螺の名物にて、蟹人すぐに海より取來りて商ふ。爰に

爰もとに賣るはさゞの壺焼や見どころおほき倉澤の宿

それより薩埵峠を打越、たどり行ほどに、俄に大雨ふりいだしければ、半合羽打被き、笠ふかくかたぶけて、名におふ田子の浦、清見が關の風景も、ふりうづみて見る方もなく、砂道に踏込し足もおもげに、やうやく興津の驛にいたり、こゝにあやしげなる茶店にたちより、北「ライばあさん、ソノきなこをつけただんごを、二三ぼんくんせへ。彌「さてく、久しぶりでおめへの顔を見たわ。いつもお達者でめてたい。時にこの子は、ちつさな時見たよりかア大きくなつた。姉娘は達者かの。ばゞ「わしは子どもはおおざんない。彌「そんならまごか。ばゞ「インネ、子がなけりやア孫もおおざんない。彌「ハテノおめへの孫でなけりやア、たしかどこのか孫であつた。ばゞ「インネ馬士ぢやアおざんない。

となりのかごやの子でおざるわ。彌ハアさうか。コウあの子、團子だんごがふたつ餘つた。ソレくひな。かごやうらアヤアだ。彌ナゼイヤだ。かごやナニ糠アつけただんごはやアだ。彌ナニぬかをつけるものか。コリヤきなこだ。ば、インネわしらがとちやア、ぬかア付てうり申。彌エ、だうりてざら／＼するとおもつた。ペツ／＼。そんなら犬にやらう。コ、コ、コ、犬わん／＼。彌ソリヤやるわ。あんといへ。犬アアん。彌ア、をしいもんだト、のこらず犬にやつてしまひ、むねをわるくしてこゝをたちいで、たどりゆくに、猶あめはしきりにふりつゞきて、いつかうしやれもむだもいではこそ、たゞとぼ／＼とあゆみなやみて、ほどなく江尻のしゆくをうち過けるに、こゝにてあめもはれければ、

降くらし富士の根ぶとをうちすぎて江尻に雨の霽あがりたり

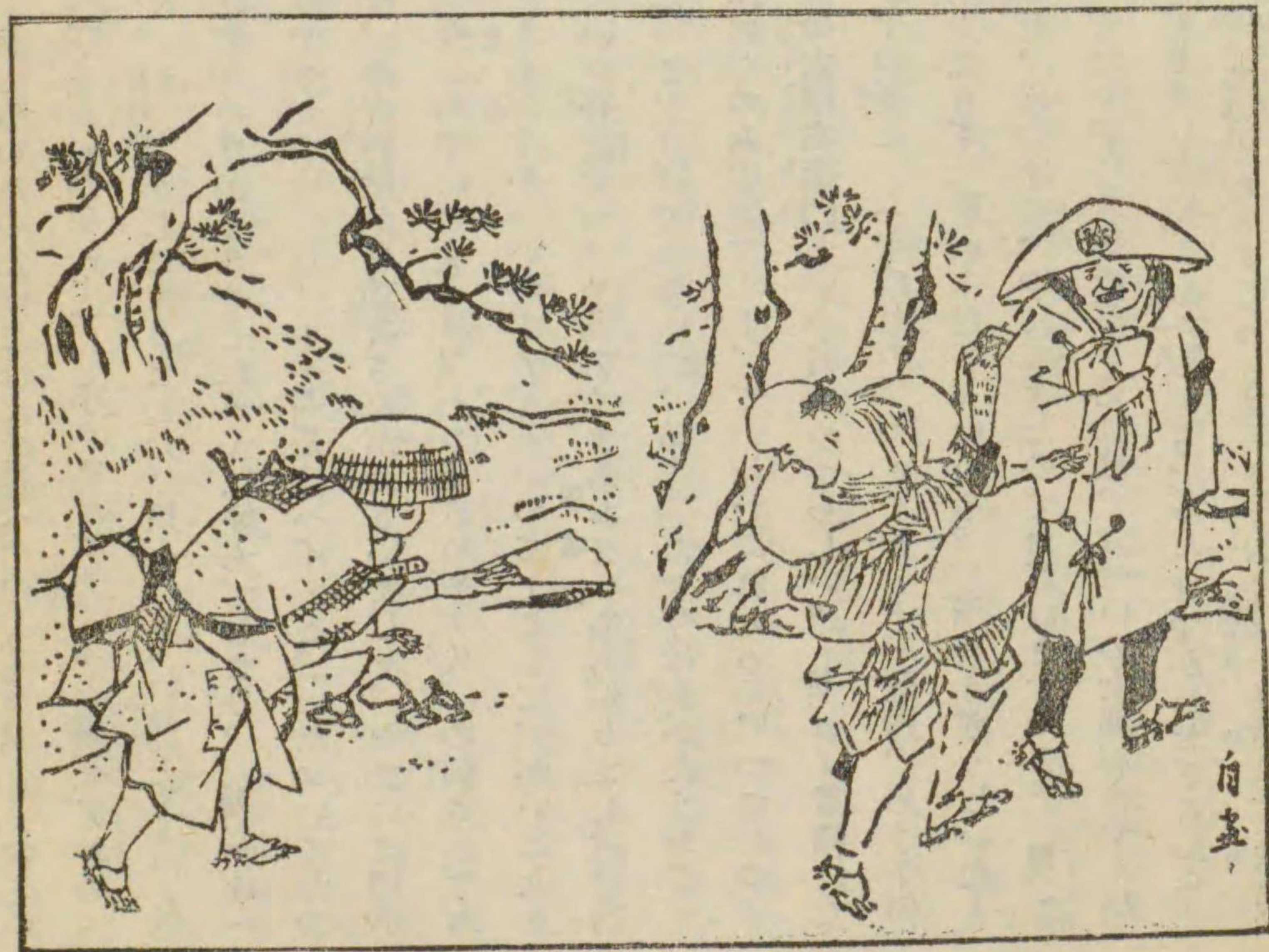
雨やみたれば、おのづから行かふ人の足もかるげに、からしり馬の鈴の音もいさましく、シヤン／＼。馬士のうた「よんベナアしのんだらアエ、おさんどなア、まづいイあせさねてゐた、からいよなべの飯がすぎて、つづぶしたア、へ引。エ、このほてつばらア、またばりをこきヤアがる。ついでにうらもやらかすべし。シヤア／＼。」「さきへゆく馬方、あとをふりかへり」次郎ヤイ、にしがおまア、だがおまだ。あとからコリヤア下町のさかやのおまよ。あしこのやらうめが、がいにつなくつかやアがつたんで、おまアあづい。昨日きんにようも清水へ四くらくいつてかへると、役があたつて府中までとつばしらかしたア。駄ちんはみんなうらが吞てしまつて、がらおまにくはせべいなアなし、丁場の背戸せうどにつないておいたら、雪陣せつじんのやによヲ、がら／＼みんなくらやアがつた。さきへ行アノ酒屋のかあめはしよつばいやつよ。うらがあしこにゐる時分にヤア、飯の中へすさをまぜてくはしヤアがつた。それにあんだかハアうらを見ると、むしやうに字を書ならべの、イヤ算盤そろばんをかじれのと、いろ／＼な戯言たはぶをつきやアがつて、うらをあしこの伴頭ばんとうに仕ようといやアがつた。其手をくふものか、業ごふさらしナ。ドウ／＼。北きたまごどん、火をかして

くんなせへ。馬士うまアイ／＼。御前方おまいちやアおえどだな。おえど衆は気がづない。昨日きんによう、うらが府中から江尻迄三百でのせた旦那が、おえど衆でえい旦那よ。長沼迄くると、その旦那がいふにやア、江尻まで三百ぢやア安いから酒一を二百ましてやらう。そんない酒はべつにこつちからかつて吞せると、吉田よした的てきばて、たらふく酒を振廻しやつた。それから又いしやるにやア、コリヤまご、にしやア一日おまを引ひてあゆんで草臥くたはれたらう。是からうらがおりて、にしを此おまにのせようといはしやる。コリヤハアあんたるこんだ。うらア乗のこたアやアだといつてもきかない。旦那よせつびうらにのれとつて、そんない乗賃のりちんを二百やらうと、梅の木うめの立場たちばからとう／＼うらをぼいのせて、江尻へくると、おきつまでおまア取とるのだが、草臥くたはれたらうから、おまアとつたぶんでだちんやらうと、又二百下さつた。あんなえい旦那はめつたにアないもんだト、はなしのうち、此馬こにつてゐる旅人、馬うのうへにてそらいびきをか／＼。ゴウ／＼。馬士うまアイ旦那あぶない。目をさましなさろ。(たび人おこされて目をひらき)「馬うが埒らちがあかぬからぬぶけが出た。きのふ三嶋から乗のた馬はよい馬であつた。そして馬士うまがとんだ氣のよい男よ。三嶋から沼津へ百五十でねをして乗のた所が、馬士うまがいふには、旦那はこんなはやい馬に乗のて、今いまに落おちようか、イヤめつたにゐねぶりもならぬなどと、心遣こころづかひして居ゐさしやるだらう。それがきのどくだから、駄賃だちんはモウもらひますまいといひをる。それから三まいばしへくると、旦那は馬うのくらで腰こしがいたみませう。ちとおりてお休やすなさい。酒さけでもあがるなら酒手さかてはこつちからあげませうと、馬うかたのはうから百五十くれて、沼津へくると、さきのしゆくまでおくつて上あたいが、わしが馬うははねますから、外そとに馬うを取とりていかしやれ、駄うちんはわしが進すすませせうと、又百五十たゞくれた。あんな氣きのよい馬士うまもないもんだト、はなしのうち此馬こをひく馬うかたあるきながら、「ゴウ／＼ムニヤ／＼。(此はなしに彌次郎やじらう北八も大きききように入、止とむともなしに府中ふちゆうのしゆくにつく。先傳馬町せんでんばまちに宿しゆくをかりて、それより彌次郎やじらうがしるべの方かたへたづね行。こゝに金子かねこの才さいかくとゝのひ、大きにいさみ出してやどへかへり、なんでもこよひはかわてき

きおよびし、あべ川町へしげこまんと、北八もろとも其したくをして、やどのていしゆをまねき。彌モシ御ていしゆ、わつちらア是から二丁町とやらへ見物にいきてへもんだが、どつちのはうだね。ていま安部川の方でござります。北「遠いかね。ていま爰から廿四五丁ばかりもありません。なんなら馬でも雇てあげませうか。北「こいつはい、彌「から尻につて女郎買もおもしろい。頼て爰より売尻馬に打乗ゆくほどに、かの安部川まちといへるは、あべ川彌勒の手前にて、通筋よりすこし引こみて大門あり。爰にて馬をおり、廓に入て見るに、兩側に軒をならべて、ひきたつるすがよきの音賑はしく、見せつきのおもむきは、東都の吉原町におほよそ似たり。客とおぼしきが、黒き木綿に紋のつきたる羽折などきて、手拭のさきを結すてかぶり、おくり行茶屋の女は、焼杉の駒下駄をひきずり、客人の神と見えしは、おほくは股引草鞋にて、いづれも祖父ばしよりなり。そよりでやいに前垂がけの競あれば、棒のさきにもつかうなどくもりつけて、かつぎあるくひやかしあり。行かふ男女は開帳参の人のごとく、更に風俗定まらず。又繁昌は言斗なし。(向ふよりくるは地まはりと見えて、かたのしまがら、かはりたるどてらをきて、山だしのひくき角下駄に竹のかはのはなをすげたるをはき、さらしのでぬぐひをあくびにかぶり、往來の人に行あたりて)「あんだい、コノおんぢいは。まなこをはだけてとほりやアがれ。アゼおれにぶつかつた。あとからく「ヤイ市イ、あんとした。そいつへこたらしてやらすい。(これはへこませるといふがごとし。)

あひて「くらがりてツイがら行合ました。かんなにさいい ト、行過る。それより此てやい、かうしさをのぞき、地廻「アノ壁のきしにある女のつらは、淺間さまの天の面のやうだ。アリヤ立て行ア。せいのみじかい女らだ。梶原の馬がくつた笹葉を見るやうに、半分しかア育ないわ。今一人「この内の着物は、みんな七間町の硯ぶたのやうだナア。(このかぢはらの馬がくつたさゝのはといふは、きつねがさきのかぢはら堂の故事也。又七間丁のすぢりぶたといふは、きじろいろにあぶらゑのかいてある、するがさいくのすぢりぶたの事也。きものもやうを、かのあぶらゑに見たてゝのしやれなるべし。彌「ナントどこぞへあ

がらうか。北「まちなよ。たしかに爰は壹分と拾匁と貳朱だけな。壁のはうにしよう。大かた拾匁だらう。むかうの暖簾はなんだ。しなのや、こちらがちやうじや、ここが大和屋だな。しかしどうしてあがるのだ。勝手がしれねへ ト、かうしさをうろついてゐる内、客人ひとりあがるを見すまして、北「よし、サアこゝにしやせう。彌次さん見たてねへ。彌「ツツきまつた。サアあがらう ト、つれだちてすつとのれんの内へはいると、わかいいもの、コレハよくお出なさいました。先うへト、二かいへあんないする。二人は見たてた女郎をちうもんすると、すぐに其へやへつれて行き、あたりを見れば、とこのまに琴もあり、花もいけてあり。すべて吉原小店のへやもちのごとし。こゝは酒代べつにかゝると見え、わかいいもの、御酒はどう致しませう。北「酒も出してくん。わかい「ハイ、とつてあげませう ト、此内、彌次郎があひかた名は小ぎさの、うへだの小そで、しまじゆすのおび、そらいろちりめんのうちかけ、北八があひかたいさ川、しまちりめんきんもうるのおび、くろ



とこ夏「ほんとうにかやア。客「天照皇大神宮さまかけていかない。とこ夏「すんならなつぎくさん、出してあせさし
 いました。ト、とこ夏のさしづに、かくしたるつけ髪を出してわたせば、客「ヤアまだたらない。なつぎく「モウそれば
 つかし。客「アニハイ、まだかた小びんがそこらにやアないか、尋てくれなさる。女郎「コレカあるヤア。客「それだ
 それだ。ト、じしんにあたまをさぐり廻して、まげさをよこちよにくつつけ、ためいきをつぎて、客「ヤレ／＼え
 ずいめにあつた。みな／＼「ヲホ、ト、これより中なほりの酒になりて、いろ／＼あれども事長ければりやく
 す。彌次郎北八ははらのかはをよぢり、彌いづくのうらでもあるやつだが、よつぽとおもしろかつた。ちやうど去
 年のほる、一九が中田やの勝山にしばらくの時、あんなさまであつた。ごふざらしな。ト、此内わかいもの來り、「モ
 ウお床にいたしませう。チトあつちらへ。ト、北八はじぶんのあひ方のへやへ行と、そのうちわかいものところをとり
 て、ふたりながらひきわかれてしばらくまどろむ。斯て一すゐの夢はさめてあかつきのなごりををしみ、彌次郎床を
 起出れば、北八も目を摺ながら爰に來りて、打つれ立梯子をおりるに、みな／＼おくり出て、挨拶をこ／＼にひきわ
 かれ、傳馬町さして急ぎかへり來りければ、はやくも宿には朝めしの用意とよのへ、膳をすうるに、支度あらまじに
 して、やがてこの驛を打立けるが、今もどろしみちをますぐに、ほどなく彌勤といへるにいたる。爰は名にあふあ
 べ川もちの名物にて、兩側の茶屋いづれも奇麗に花やかなり。ちやん女めいぶつ餅をあがりやアし。五文どりをあが
 りやアしあがりやアし。彌「おいらアゆうべ、二朱がもちをくつて來たからモウ爰てはくふめへ。北「さうさ／＼
 ト、此内、あべ川の川ごし道に出むかひて、「だんな衆おのぼりかな。彌「ライきさまなんだ。川「ごし「川「ごしてござり
 ます。やすくやらすにおたのん申ます。北「いくらだ。川「ごし「きんにようの雨で水が高いから一人まへ六十四文。
 北「そいつは高い。川「ごし「ハレ川をマアお見なさい。ト、打つれて川ばたに出、彌「なる程がうせいな水せいだ。コレお
 とすめへよ。川「ごし「ナニおまい、サアそつちよヲつんむきなさる。ト、二人をかたぐるまにのせて川へさぶ／＼とは
 いる。北「ア、なんまいだ／＼。目がまはるやうだ。川「ごし「しつかりわしがあたまへとつつきなさる。ア、コレそんな
 にわしが目をふさがつしやるな。向うが見えない。彌「なるほど深いわ。コレおとして下さるな。川「ごし「アニおとす
 もんかへ。彌「それでひよつとおとしたらどうする。川「ごし「ハレおとした所が、たかておまいはながれてしまはしやる
 ぶんのことだ。彌「エ、ながれてたまるものか。イヤもうきたぞ／＼。ヤレ／＼御くらう／＼。ト、かたぐるまより
 おりてちんせんをやり、彌「ソレべつに酒手が十六文ツツ。川「ごし「ヘイコレは御きげんよう。ト、川「ごしは、すぐに
 川かみのあさいはうをわたつてかへる。北「アレ彌次さん見ない。おいらをばふかい所をわたして、六十四ツツふん
 だくりやアがつた。

川「ごしの肩車にてわれ／＼をふかいところへひきまはしたり

夫より手越のさとにいたるに、又もや俄雨ふり出して、たちまち車軸をながしければ、半合羽取出し、打かづき、
 足をはやめてほどなく丸子の宿にいたる。こゝにて支度せんと茶屋へはいり、北「コウ飯をくはうか、爰はとろ／＼汁
 のめいぶつだの。彌「さうよ、モシ御ていしゆとろ、汁はありやすか。ていしゆ「ハイ今できず。彌「ナニできねへか、
 しまつた。ていしゆ「ハレぢつきにこしらへずに、ちいとまちなさる。ト、にはかにいものかはもむかずして、ざつ／＼
 とおろしにかゝり、ていしゆ「おなべヤノ／＼、このいそがしいにあによヲしてゐる。ちよつくりこい、ちよつくりこい
 ト、けはしくよびたつるに、うら口よりごごとをいひながらくるは女房と見え、かみはおどろのやうにふりかぶり
 たるが、せなかにちのみ子をせおひ、わらざうりひきずり來り、「今、彌太アのおんばアどんとはなしよヲして
 りたに、やかましい人だヤア。ていしゆ「アニハイやかましいもんだ。コリヤそこへお膳を二ぜんこしらへる。エ、ソ
 レ前垂かひきずらア。女房「おまい箸の洗つたのウしらすか。ていしゆ「アニおれがしるもんか。コリヤヤイそのはしよヲ
 よこせヤア。女房「これかい。ていしゆ「エ、はしてもがすられるもんか。播木のことだわ。コリヤ扱まごつくな。その

膳へつけるのぢやアないわ。こゝへよこせといふことよ。エ、らちのあかない女だ。ト、すりこ木を取つてごろ／＼といもをする。女房「ソレおまいすりこ木がさかさまだ。ていまかまうな。おれが事よりうぬが、ソリヤのりがこげらア。女房「ヤレ／＼やかましい人だ。コノ又がきや、おんなじやうにほえらア。こいま「コリヤ摺鉢をつかまへてくれろ。エ、さうもつちやアすられないわ。おへないひやうたくれめだ。女房「ナニこんたがひやうたくれだ。ていま「イヤこのあまア。ト、すりこ木でひとつくらはせると、女房「うやつきとなりて、女房「コノやらうめは。ト、すりばちを取つてなげると、そこらあたりへとろ／＼がこぼれる。ていま「ヒヤアうぬ。ト、すりこ木をふりまはして立かゝりしが、とろ／＼汁に這つてどつさりころぶ。女房「こんたにまけてあるもんか。ト、つかみかゝりしが、これもとろ／＼にすべりこける。むかうのかみさまかけてきたり、ヤレチヤ又見たくもないさかひか。マアしづまりなさろ。ト、兩方をなだめにかゝり、これもすべりころんで、「コリヤハイ、あんたるこんだ。ト、三人がからだ中とろ／＼だらけにぬる／＼して、あつちへすべりこつちへころげて、大さわぎとなる。彌「こいつははじまらねへ。さきへいかうか。ト、をかしささをこらへて爰を立出で、北「とんだ手やいだ。アノとろ／＼汁で一首よみやした。

けんくわする夫婦は口をとがらして鳶とろ／＼にすべりこそすれ
それより宇津の山にさしかゝりたるに、雨は次第に篠を亂し、鳶のほそ道心ぼそくも、杖をちからに十團子の茶屋ちかくなりて、彌次郎おもはず、さかみちにすべりころびければ、

降しきる雨やあられの十だんごころげて腰をうつの山みち

(をかべのしゆくのだ引、待受て)「おとまりでございますか。彌「イヤわつちらアけふ川をこさにやアならねへ。ヤドリ「大井川は止りました。北「なむさん、川がつかへやしたか。ヤドリ「さやうでございます。さきへお出なされたつても、お大名が五かしら、島田と藤枝におとまりでございますから、あなた方のおやどはござりませぬ。先岡部へ

おとまりなさいませ。彌「そんならさうしようか。北「おめへなにやだ。ヤドリ「相良屋と申す。すぐにお供いたしませう。ト、打つていそぎゆくほどに、はやくも大寺かはらのさか道をうちこえて、をかべのしゆくに至りければ、

豆腐なるをかべの宿につきてげりあしに出来たる豆をつぶして

(先この驛に宿をとりて、川のあくまで、しばらくたびのつかれをぞやすめける。)

道東
中海
膝栗毛
三編

89

88

予多年東海道に遊歴し、其行路中、山川の佳境勝景なるを假書して、旅袖に藏おけるあり、それか中に風土の異なる遺風を録し、亦土人の言語都會に替れるくさくさの多かる中に、往來旅客の光景、或は貴遊或は卑賤の患苦、雲駕馬士の木訥なる出女の姿けはひ、なべて鄙情のおかしげなる有増を、白地にかいつけたる道中の滑稽を、栗栗毛と題號し、初編二編祥にして世に行れ撰者が偶中の怡稍からず。由是今書肆の需に、三編を輯作し、同志の人の覽に備ふ將其文の拙は、予が短才の及ざるを、視ゆるし給へとしかいふ。

于時享和四載

甲子蒼陽日

十返舎一九識

凡例

此編は、道中岡部驛より、舞阪に至り、荒井渡船にして一集終る。其余草稿大概出来あれども、急迫にしていまだ校正するに遑なし。因而四編に悉く著し、嗣に出す。都而初編二篇より、長途の滑稽、其趣一にして珍しからず。好士の見るに倦ん事を恐て、聊趣向の轉變せることを輯む。猶四編に至りては事繁くして、舞坂驛より漸四日市に至て終る。其次五篇は伊勢路にかゝり、古市の遊樂、相の山の光景を盡し、其余奈良越より、大阪へ出ることを記して、全冊此に満尾せしむ。

十返舎一九著

名にしおふ遠江灘浪たいらかに、街道の並松えだをならさず、往來の旅人互に道を譲合、泰平をうたふつら馬の小室節ゆたかに、宿場人足其町場を争はず。雲助駄賃をゆすらずして、盲人おのづから獨行し、女同士の道連、ぬけ参りの童まで、盜賊かどはかしの愁にあはず。かゝる有難き御代にこそ、東西に走り南北に遊行する雲水のたのしみもすみたるよし聞とひとしく、そこへに支度してはたごやを立出けるに、はや諸家の同勢往來の貴賤櫛の齒を挽がごとく、問屋鴛宙をかけり、小荷駄馬飛で走る街道のにぎはひいさましく、ふたりもともにかれたどり行ほどに、朝比奈川をうちこえ、八幡鬼島をすぎ、白子町にいたる。爰は建場にて兩側の茶屋女、おちやアまゐるはア。一せんめしよアまゐるはア。お休みなさいアし。馬士のうたうらがお長松のかゝアはたこよナア。あせさ蛸だとおもしやるへ。八間まなかに足だらけ。しよんがへ。ドウ。馬ヒイン。馬かた、旦那衆おまアいらぬか、二ひやくだが安いもんだイ。なんなら錢さへくんざりアたゞでもいかずに。北エ、二百出しやア夜の馬にのらア。くそたれめが。馬かた、ヤイクそつたれたアあんだイ。うらがいつくそをくう。馬ヒ、ヒン。彌「ナントちよつぼりのんでいかうか。コウ姉さん。いゝ酒があらばちつと斗出してくんな。ト、茶屋くは入る。茶やのおんな、ハハイかえんしてあげずかア。彌さうさ。時にさかなは何が有やす。ていまアいねぶかとまぐろの煮たの斗。北イヤねぎまのふるふきソレよからう。ていまインネふるふきじやアござらない。たんだ齋前てこたのたのし。

つてうしざかづきをもち出、まぐろを皿にもつて持來る。彌「ハ、アねぎまといふから、江戸でするやうだとおもつたら、コリヤアきじやきを煮たのだな。よし。北はじめよう。ヲト、、、イヤこの肴はおだぶつだぜ。コリヤきのふのまぐるだな。ていまインネ、ハイきんにようのいをじやアござらない。彌「それでもさつぱりくへぬくへぬ。ていま「ハアきんにようのがわるかア、おつとひのをしんせませう。そんだいにやア酔こたアうけ合だもし。北「エ、酔てたまるものか。そして此酒は半分水だ。ベツ、時にいくらだの。ていま「ハイさかなが六十四文酒が廿八文。北「うまくねへかはりに高いもんだ。サアいかうと、錢をはらひ、爰を立出、はやくも鐘が淵といふ所に至り、例のすきの道なれば、彌次郎兵衛取あへず。爰もとは鞍のあぶみがふちなれど踏またがりてとほられもせず。それより平島口田中を打過ぎ、藤枝の宿ちかくなりて、街道の松の木の間に見えたるはこれむらさきの藤えだの宿。(此しゆくの入口にて、ふるしきづつみちよいとかたにかけたる田舎のおやぢ、馬のはねたるにおどろきにげるひやうしに、北八へつきあたる、北八水たまりの中へころげて大きにあつくなり、おきあがりて田舎ものをひつとらへて) 北「コノ親仁め、まなこが見えねへか。寒鳥の黒燒でもくらやアがれ。おやぢ「コリヤハイ御めんなさい。北「ヤイ御めんなさいじやアすまねへわへ。コレやらうは小粒でも、ぎやつといふから、金の鯨をにらんで、産湯から水道の水をあびた男だ。おやぢインネ、ハイ、水をあびたならようござるが、そなたのこけた所は、おまの小便のたまりだもし。北「エ、その小便のたまつた所へ、なぜつつかしやアがつたへ。おやぢ「そりやハイ、わしもがらい、おまにつまばねられて、そなたに、いきやつたのだ。どうもせずことがない。かんにさつしやい。北「なんだ堪忍しろ、いやだわへ。ほんのこつたが、大江山の親分が、鐵棒ひいてわたりにこようが。石尊さまが、猪の熊の似づらをか、

せたてうちんで、路次口から、溝板のうへへ、はひかゞんできても、きかねへといつちやア、久米の平内を居ざいそくにやつたよりかア、まだ、びつくともせぬやつこさまだア。おやちソリヤア、ハイ、あにか、しちむづかしいことをいはつしやるが、わしらにやア、ハイ、かいかくにしれ申さぬ。わしもハイ、此の近在の長田村じやア、名のしやくも勤めた家筋だんで、お地頭さまの年頭にやア上席ノウせる男だ。あにも、がいにくれなく、雑言ノウしめさるこたアござんないヤア。北エ、わるくしやれらア。尻がかいゝわへ。あたまのかけでも、ひろはせてやらうか。おやち「エ、ソなたアづない人だヤア。わしにもハイ荒神さまがついでゐるに、がいに願ノウたゝかしやんな。北エ、此すりこ木め ト、くらはせにかゝる。彌次郎兵衛見かねてやうゝにひきわけて、 彌きた八もうれうけんしろへ。とつさん、おめへがせてへ魚相しながら気がつえ。もういゝからいきなせへ ト、北八をなだめるうち、おやちはつらふくらかし、ふしようゝに行過ると、彌次郎、

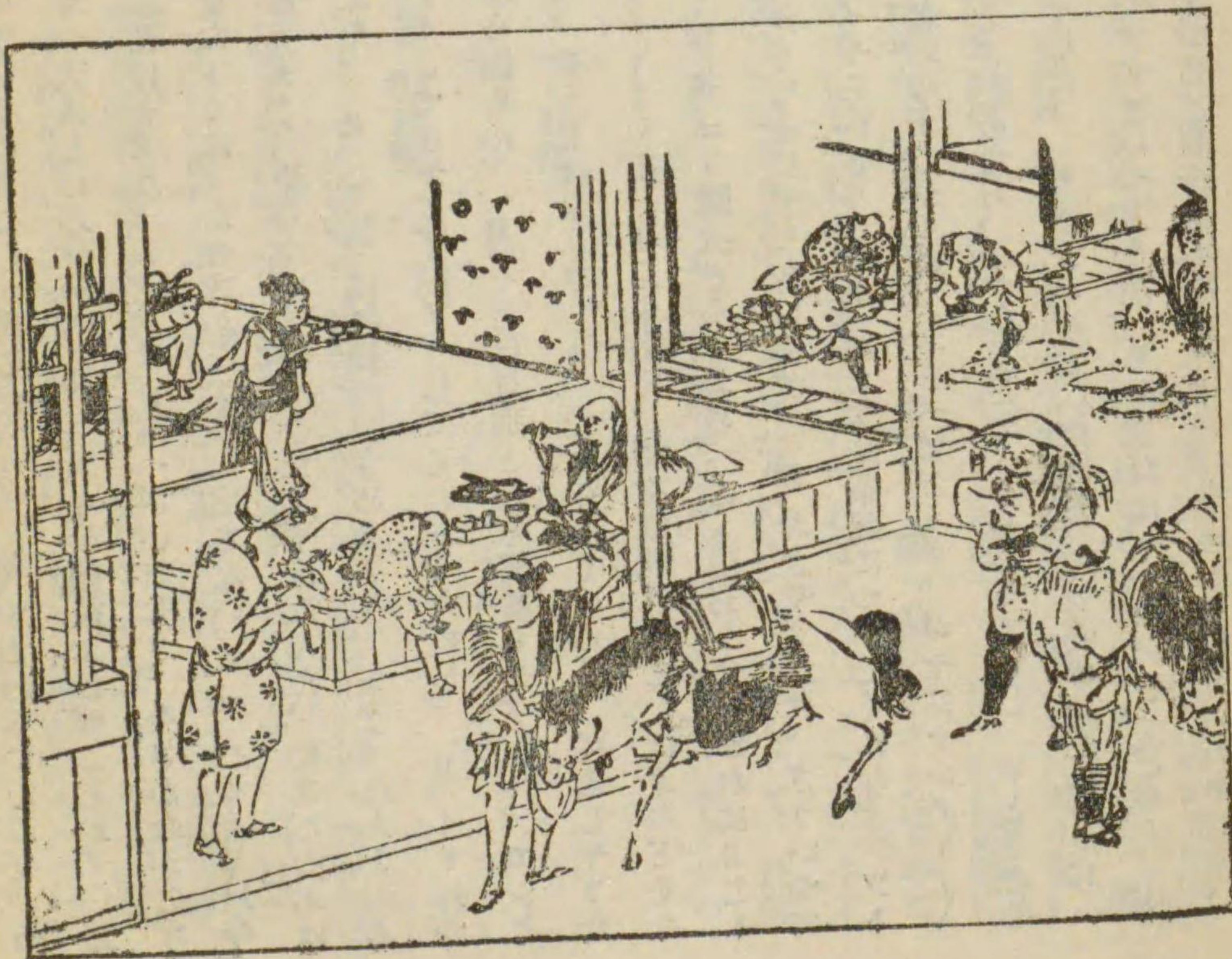
頭につてきた八に今たゝかれし薬罐あたまの親仁へこんだ

打笑ひつゝ瀬戸川を打越、それより、しだ村、大木のはしをわたり、瀬戸といふ所にいたる。爰は建場にて染飯の名物なれば、

やきもの名にあふせとの名物はさてこそ米もそめつけにして

斯てこの町はづれの茶屋に、さきの田舎親仁休みゐたりけるが、二人を見つけて呼かけ、おやち「エレ、さつきやア無禮ノウしました。わしもハイありやうは、一ばいのんだ元氣で、づない事もいひ申したが、そなたしゆが了簡ノウしてくれさつたから、へこたらずに歸村ノウしますは、マアあんで禮にさけウひとつしんぜませう。こゝへよらつしやいまし。彌ナニわつちらア酒ものんで來やした。おやち「エレチャア、せつかくわしがおもひだアのし。ぜつひ一ツよからず。コリヤゝ御亭の、味よいさけウ出さつしやいまし。北エ「お心ざしは忝いが、サア彌次さんい

かう。おやち「ハテコリヤじやうのこわい人だヤア。おつきにやらずに、ちよつくりよつてくれされヤア ト、むりに彌次郎北八が手を取つてひきずりこむ。ふたりもなる口ゆゑ、酒ときゝて少しこゝろひかされて、彌えいは、北八いつばいやらかさう。しかし親父さん、おめへの御ちそうじやアきのどくだ。おやち「ハテコリヤよいといふのに。御ていのゝ、肴アじやうにつん出してくれさい。時にコリヤ、ハイ、爰はあんまりはしつぽだ。おくざしきへいかずかヤア。おやち「サアあつちいござらしやいまし ト、出しかけたてうしさかづきをおくへもつてゆくと、三人も中にはからまはり、おくざしきのえんがはに、わらぢのまゝあぐらをかき、彌次郎兵衛、「サア親父さんはじめなせへ、おやち「アイすんだら毒見ノウしませず。ヲト、よからず。さて先若いのへしんぜませう。北エ「アイわつちやア酒よりかア腹がへつた。おやち「アニはらがへつた。ソリヤア飯をくはつしやい。ちつきによくする。北エ「イヤ先酒にしよう。ヲツトあります。時にこの吸ものはなんだ。たゝみ鯛のせんば



煮か。おほかたこの跡ぢやア、かぼちやのごま汁か、さつまいものよしが出るだらう。彌サアわるくいふぜ。コレ此海老を見や。かうはねかへつた所は、がふてんじやうの天人といふ身がある。北イヤ豊後ぶしのことかアいなア、引といふ所もありやす。ハ、ハ、ハ、時にやおぢさんあげやせう。おやぢ、インネへさいませう。今さかながこずニコリヤあんねい、さつきからハイへしをれる程腕をたくくに、あぜさかなアつん出さな。女「ハイ、只今あげずに、ト、やうく大びらとはちぎかなを持ってくる。おやぢ、やらやつと持ってきた。平はなんだ、たまごのぶはぶはか。彌おそいはずだ。今うむのをまつてみた見えた。北「こいつは無鹽だ。きめうく。おやぢ、たんとんでくれさつしやい。そなたアわしがたにやア命の親だ。よくさつきやア了簡ノウしてくれさつたのし。北イヤわつちもツイ虫の居所がわるくつて、いひ過しました。まつびら御めん。彌そこは旦那どんも野暮ぢやアねへ。モシこいつはどうせ、味噌べつたり焼せうがといふをとこだから、せうどはなしさ。ト、たゞのむさけゆゑ、つゐしやうたらだらやみくもにひつかける。このうちかつてよりもいろくもち出、せんも出て、彌次郎北八すこしはきのどくながら、これもくつてしまふ。おやぢ小べんに立て行跡にて、北「コウ彌次さん、おめへこのわり合をおれによしなせへ。おいらがアノおやぢをいぢめたればこそ、おめへがうてきにやらかしたぜ。彌おきやアがれ。さういつてもまんざらぢやアねへ。アノ親仁のこぬうち、後にのむ分もやらかさう。北「おらア此茶碗についてくん。ヲツトきたくきたさのくく、讃岐のこんびら、たかゞ高瀬の船頭の子じやもの、おさへてどうす。ジヤジャンくく、彌エエ、引山にきつころばした松の木丸太のよでも、妻とさだめたら、まんざらにくもあるまいし、やとさのせく。おもしろく。時にこのおやぢの、べらさくめはどうした。北「ホンニながい雪隠だ。モシ女中、爰に居たぢいさまはどけへいつたの。女「たしかおもてのはうへ。彌ハテノこいつどうかへんちきだはへト、まてどもく此おやぢどこへいつたか、いつかうにかへらず。せつちんをさがせどもゆきがたしれず。北「モシ女中今のおやぢが、

爰のはらひをしていつたかの。女「イ、エまだいたゞきませぬ。彌ヤアくヤア。北「いつべいおこはにかきやアがつたな。おつかけてぶちのめさうト、とんで出たれども、どつちへ行しやら、いつかうくもをつかむが如く、殊におやぢは此近在のものゆゑ、わき道へはいりしにや、さらに行へしれず。北八しよげて立歸り、彌次さんどうもしれねへ。とんだ目にあつた。彌しかたがねへ。手めへ拂ひをしや。アノ親仁めがくやしんぼうで、手めへに意趣げへしをしたのだけはな。北「それでもナニおればかりかふるもんだ。いまくしい。せつかく酔た酒が、みんなさめてしまつた。彌次郎どんの犬と太郎どんの犬と、みんなさめてしまつたか。北「エ、しやれなさんな。そこ所じやアねへ。まあなんにしるいくらだね。ていま、ハイ、九百長五十でござります。北「かたりにあつたとおもつて、往生して拂ひやせう。いやアいふほど、ちゑのねへはなしだ。彌さういつてもおつなおやぢだ。いゝことをしやアがつた。コウ北八、手めへの貌で一首うかんだ。

御馳走とおもひのほかの始末にて腹もふくれた頬もふくれた
北「へ、ごふはらな。生馬の目をぬきやアがつた。

有がたいかたじけないと禮いうていつばいたべし酒の御馳走
かくよみて北八も笑ひをもよほし、あなかもとあなどりて、とんだ意趣がへしを、しられたるもをかしく、爰を出て行ほどに、大井川の手前なる島田の驛にいたりけるに、川越ども出迎ひて、だんなしゆ川アたのんます。彌貴さま川ごしか、ふたりいくらで越す。川ごし、ハイ今朝がけに、あいた川だんで、かたくまじやアあぶんない。蓮臺でやらずに、おふたりで八百下さいませ。彌とはうもねへ。越後新潟じやアあんめへし、八百よこせもすさまじい。川「すんだらいくら下さるヤア。彌いくらもすりこ木もいらねへ。おいらがぢきにこすは。川「ヲ、川ながりやア二百つけて寺へやるから、なんならさうさつしやい。ながれたはうが、やすくあがらア、ハ、ハ、ハ。彌ばかアぬかせ。

問屋へかゝつておこしなさるは、ト、云すて、あしばやに行すぎ、彌ナント北八、あいつらにからかうがめんだうだから、いつそのこと、問屋へかゝつて越さう。手めへの脇指を借しやれ。北、なぜ、どうする。彌、侍になるわ。ト、北八がわきざしを取てさし、おのれがわきざしのひきはだを、あとのほうへのぼし、長くして大小さしたやうに見せかけ、彌、ナント出来合のお侍、よく似合たらう。此ふるしきづつみを手めへ一しよに持て、供になつてきや、北、こいつは大わらひだ。ハ、、、ト、彌次郎がにもつをいつしよにして、北八かたにひつかけ、やがて川問屋にいたり、彌次郎おくにことばのこわいろにて、「コンリヤとん屋ども、身ども大切な主用で罷通る。川ごし人足を頼むぞ。とひや、ハイかしこまりました。御同勢はおいくたり。彌、ナニどうぜいな。とひや、さやうでござります。旦那はお駕かお馬か。お荷物はいく駄ほどござります。彌、本馬が三疋、駄荷がつがふ十五駄ほどありをるが、道中邪魔だから、えとおもてておいてきた。其かはり身ども駕陸尺が八人、そこへしるしめさる。とひや、ハイおさぶらひ衆は。彌、侍共が十二人、やりもち、はさみ箱、ざうり取、よいか、合羽かご、竹馬、つがふ上下三十人餘りぢや。とひや、ハイ、その御どうぜいはどこにをります。彌、イヤサ江戸表出立のせつはのこらずめしつれたが、途中でおおひ癒疹をいたしをるから、宿々へのこしおいた。そこで只今川をこさうといふ同ぜいは、上下あはせてたつた二人ぢや。臺ごしにいたさう。なんぼぢや。とひや、ハイおふたりなら蓮臺で四百八十文でござります。彌、それは高直ぢや。ちとまけやれ。とひや、エ、此川の賃錢にまけるといふはないヤア。ばかアいはずとはやく行がよからずに。彌、イヤ侍にむかつて、ばかアいふなとはなんぢや。とひや、ハ、、、がいにつないおさぶらひだヤア。彌、こいつ武士をてうろうしをる。ふとどきせんばんな。とひや、こなた武士か。刀の小じりを見さつしやい。ト、といはれて彌次郎ふりかへり、うしろを見れば、かたなのこじり、はしらにつかへて、ひきはだばかりの所ふたつにをれてゐる。みな、どつとわらひ出せば、さすがの彌次郎めんぼくなく、しまげかへつてだんまり。とひや、かたなの、を

れたのをさす武士がどこにあるもんだ。こなたしゆ問屋をかたりにきたぞ。そんではハイすませないぞ。彌、イヤ身どもは、みをのや四郎俊國の末孫だから、それで刀のをれたのをさしをるて。とひや、たはごといふと、く、しあげるぞ。北、コウ彌次さんをさまらわへ。はやくいかう。ト、手をとつて引ずられ、彌次郎それをしほにこそ、とにげいだす。とひや、ハ、、、とはうもない氣ちがひだ。彌、ツイやりぞこなつた。いま、しい。ハ、、、

出来合のなまくら武士のしるして刀のさきの折れてはづかし。

此狂歌に雙方大笑ひとなり、彌次郎兵衛北八爰をのがれ、いそぎ川ばたにいたり見るに、往來の貴賤すき間もなく、此川のさきを争ひ越行中に、ふたりも直段とりきはめて、蓮臺に打乗みれば、大井川の水さかまき、目もくらむばかり、今やいのちを捨なんとおもふほどの恐しさ、たとふるにもなく、まことや、東海道第一の大河、水勢早く、石流れてわたるになやむ難所ながら、程なくうち越して蓮臺をおりたつ。嬉しさいはん方なし。

蓮臺にのりしはけつく地獄にておりたところがほんの極樂

斯うち興じて金谷の宿にいたる。兩側の茶屋をんなやおやすみなさいませアし。かきもどり駕のついでぢやござい。北、コウ彌次さんかごはどうだ。彌、イヤ氣がない、手めへのるならのつていかつし。北、そんなら日坂まで乗るか。ト、かごのわだんきはめてうちのりたるに、をりふしあめふり出しければ、古ござ一まい、かごの上からうちかぶせ、かつぎ出して早くもきく川の坂にかゝると、願禮が二三人、「ふだらくや、きしうつなみはみくまの。アイおかごの旦那壹文下さい。北、つくなく。願禮、御道中御はんじやうの旦那、このなかへたつた一文。北、エ、つくなといふにべらうめ。願、それにべらぼうがいるもんか。そつちがべらぼうだ。北、コノ乞食めが、ト、りきむはずみにいかゞしけん、かごのそがすつぽりぬけて、北八どつさりしりもちをつき、「アイタ、、、願、ハ、、、かごかき、エレ、怪我アさつしやりませぬか。北、コレ手めへたちやアなぜこんなかごにのせた。かごかき、ゆるさつし

やりませ。あんどせるもんで。北「どぞぞへいつて、いゝかごをかりてきさつし。かごかき」こかア坂中まなかでかりずとこ
 がござらない。イヤよか能ことがある。ぼうぐ主みのしのへ屋こをばづせ。ぼうぐ主アゼどうせる。かごハテおれがせるこ
 とがある。見され ト、じぶんのふんどしをばづし、ぼうぐみのふんどしと二すちにて、ござのうへからかこのどう
 中をくゝりて、かごサアのつていじやござれ。北「とんだことをする。これでのられるもんか。かごハテ外ほかにせるこ
 とがない。そんだいにやアねぶたくならしやつても、このへこでおちずやうがござらない。不肖ふせうして、のらつしやいま
 せ、ト、きのどくさうにいふ。北八もをかしく、これもはなしのたねと打のれば、彌「ハ、ハ、白いふんどしで、か
 ごの胸中どうなかをくゝつた所は、しつかいおやしきの葬禮むすびといふものだ。北「エ、いまくしい。そんなことをいひなさ
 んな。彌「ハ、アかこの内うちで、ものをいふから佛ほとけでもねへ。こいつ、きこえた。科人かじんだな。北「エ、猶いまくしい。
 おらアもうおりてゆかう ト、こゝよりかごをおり、こゝ迄のちんせんをはらひ、かごをかへし、たどりゆくに、雨
 はしきりにふり出しければ、さかみちすべりて、やうくとさよの中山たてばにいたる。こゝは名におふあめのもち
 の名物にて、しろきもちなり、水あめをくるみていだす。このふたり酒のみなれば、やうやく一ツ二ツくひける内、
 あめつよくなりたるに、

爰こゝもとの名物ながらわれくはふり出すあめのもちあましたり

傳へきく。無間むげんの鐘かねはその寺に、名のみ残りて今はなしと。

この寺にむげんのかねもつきなくし今は晦日すいかに嘘うそやつくらん

それより此坂を下り、日坂ひつがきの驛えきにいたる頃、雨は次第につよくなりて、今は一足ひとあしもゆかれず。あたりも見えわかぬほ
 ど、しきりに降ふりくらしければ、或旅籠屋あちやんごやの軒のきにたゞすみ、彌「いまくしい。がうてきにふるはく。北「はなやの
 柳やなぎぢやアあるめへし。いつまで人のかどにたつてもゐられめへ。ナント彌次さん、大井川おほいのかほは越すし、もうこの宿しゆくに泊

らうぢやアねへか。彌「ナニとんだことをいふ。まだ八ツにやアなるめへ。今から泊つてつまるものか。北「はたか

「この雨ぢやア、いかれまじない。とまらしやりませ。北「イヤこりや泊りたくなつた。彌次さん見ねへ。おく

にたぼがてへ大分とまつてゐる。彌「ヤドレく、こいつはなせるはへ。北「サアおまいちとまらしやりませ。

彌「さうしやせう ト、こゝにて彌次郎北八あしをあらひ、すぐにおくのつぎの間へとほり、彌「コレく女中、素湯すゆ

があらば一ツばいくんな。女「ハイくいん今上まあげうず。北「ひりやうずが聞てあきれたア。女「ハイおさゆ。彌「よし

よした八、きのふのくすりをくりやな。北「なんだ、しんりいあんかん丹たんか。まちなよ。ありのとわたりからひね

り出してやらう。彌「エ、ばかアいやんな。腹はらがいたくてならぬ。北「ソリヤアおめへ、ないらのおこつたのだ。豆

をくやアなほる。彌「エ、わるくしやれずと、はやく出してくれろへ。北「そんならまじ目に、ソレ田たまちの反魂丹はんこんたん

手を出しな。彌「ふたつばかりくりやれ。ガリく。コリヤ胡椒こしだは。ア、辛からい。北「ハ、まちなよ。

イヤもうない。イヤこゝに錦袋きんたい圓まんがある。ソレよしか。彌「からかみのかげてまつくらだ ト、つみ紙つみをあけてく

すりをとり出し、ガリく。ア、又何またをかくはしやアがつた。ベツく。北「ドレ見せな、イヤア是こゝは觀音くわんおん

様さまだ。彌「ほんに觀音くわんおんさまのあたまア、かみくだいてしまつた。ハ、ハ、ハ。女「御膳ごぜんを上げせう。北「イヤ三ぜんく

やア澤さんだ。彌「よくくちを叩く男だ。やかましいだまつてしやべれ。北「しづかにさわげがあきれたア ト、此

内膳も出ていろくしやれながらくひかゝり、彌「ときに女中、おくの客は女ばかりだが、ありやアなんだ。女「み

んな巫女いづなでおざりませア。北「ナニ巫女いづなだ、コリヤおもしろい。ちといき口くちをよせてもらひてへもんだ。彌「もうお

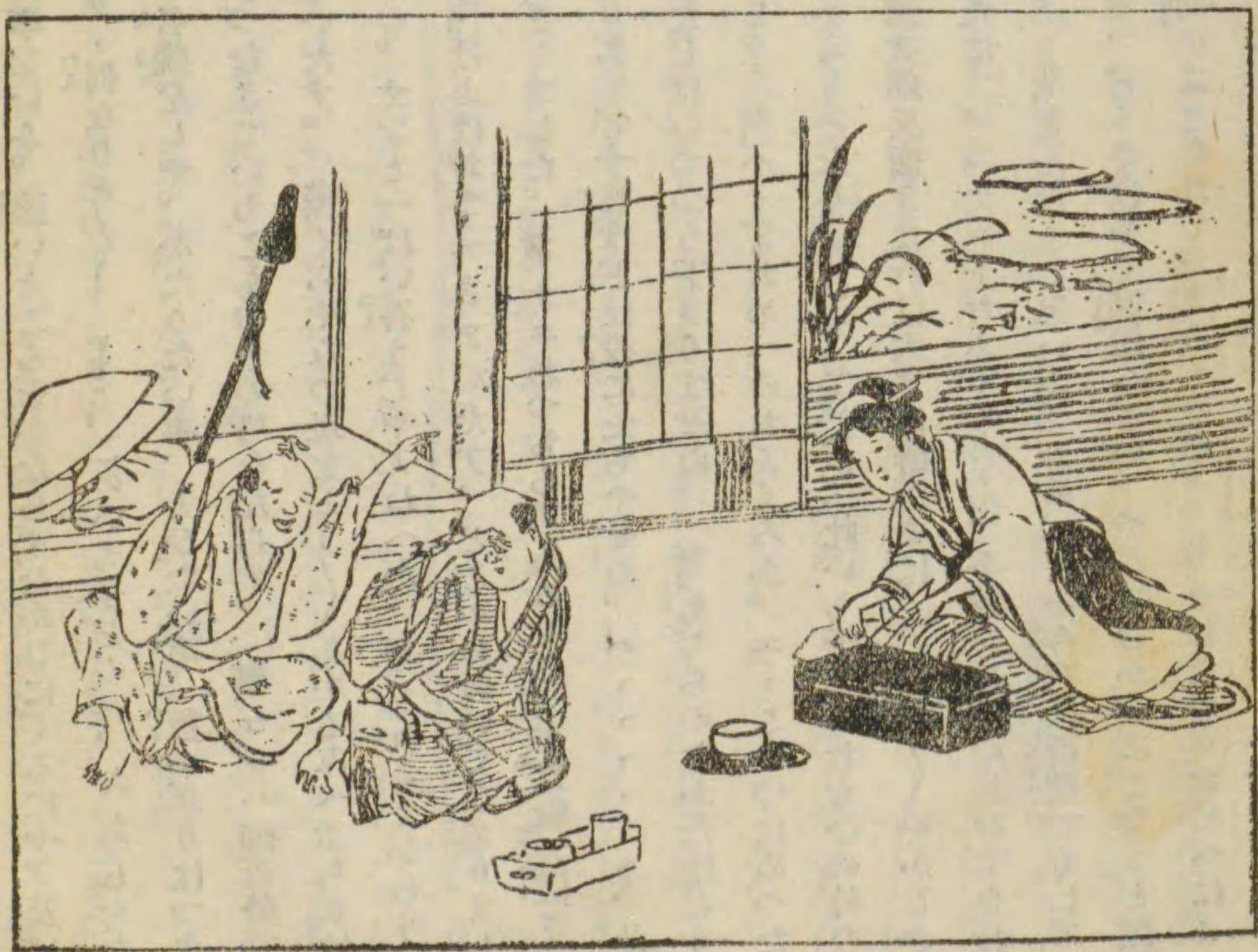
そからう。七ツからはよらぬといふことだ。女「ナニまんだ八ツすこしすぎでおざりませア。彌「そんならきいて見

てくん。おいらが山やまの神かみをよせてもらはう。北「コリヤをかしい。女「いんまきいてううずうに ト、此うちせんも

すみ、女おくのまへゆき、かのいち女にそのことを聞合す。いちこしようちのよしなれば、やがて彌次郎北八おくの

まへはいりたのむと、いち女れいのはこを出してなほすと、さしこゝろえて宿の女水をくみ来る、彌次郎すぎざりし女房のことを思ひだして、しきみのはに水をむけると、いちこは先神おろしをはじめ。いちこ、そもくつつしみうやまつて申たてまつるは、上に梵天、たいしやく、四大てんわう、下界にいたればえんまほふわう、五どうのみやうくわん。わがてうは神國のはじめ、天神七だい、地神五だいのおんかみ、いせはしんめい天照皇太神宮、外ぐうには四十まつしや、内宮には八十末社、あめのみや、風の宮、月よみひよみの御みこと、北にべんくう鏡の社、あまのいはと天日如來、あさまがたけふく一まん虚空藏、その外日本六十餘しう、そうじて神のまんどころ、出雲のくにの大やしろ、神のかずが九萬八千七しやの御神、佛のかずが一萬三千四れいの靈場、冥道をおどろかし、此に詣じたてまつる。ハアおそれありや。このときに、このくかたのそしやうりやう、だいくのぶつてうし、弓と矢のつがひの親、一郎どのより三郎どの、ばんもかはれ水もかはれ、かはらぬ物は五しやくの弓、一打うてば寺々の佛壇にひびくなふじゆ、ヤアレハアなつかしやく。よく水をむけてくださった。わしが弓取のまくらぞいどのも出やうけれど、しやばにいた時精進がきらひで、看は骨までくやつたむくい、今は牛鬼になつて地獄の門番をしてあらるゝゆゑ隙がない。それでわしばかり出ましたぞや。彌おめへだれだ、わからねへ。いちこハアわしは水を手向どんの爲には、からのかゞみじや、子だからどの。北からのかゞみたア、彌次さんおめへのおふくろのことだ。彌ハ、アおふくろか、そなたにヤア用はない。いちこハアレからのかがみどんじやア用はおざらないか。わしやアそなたのまくらぞひじや。あつがましくも能ぞ問うて下さつた。そなたのやうないくぢなしに連添つて、わしや一生くふやくはず、寒くなつても裕壹枚きせてくれた事はなし、かんの冬も單物ひとつ、ア、うらほしやく。彌かんにんしてくれ。おれも其時分はめんくがわるくて、かはえさうに、苦勞をしどに、しやつたが残り多い。北ヲヤ彌次さん、おめへなくか。ハ、こいつはおにの目に涙だ。いちこわすれもせない。そなたが瘡をわづらはしやつたとき、わしはあや

にくひつをか、瓜の蔓の次郎どののよい病ひ、たつたひとりの子實は、脾胃虚して骨ばかりに瘦ける、米はなし日なしはせがむ。大屋どの、店賃やらねば、路次の犬のくそにすべつても、こととはいはれず。彌もうもういつてくれるな。むねがさけるやうだ。いちこそれにわしが奉公して、せつかくためた着物まで、そなたゆゑにおきなくしたかくやしい。質はさかさまにヤアながれ申さぬ。彌そのかはり、手めへは結構なところへいつてゐるだらうが、おれははまだにくらうがたえぬ。いちこ「ヤアレハアなにかけつこうでござらう。友だち衆のせわで、石塔はたて、下さつたれど、それなりで墓まありもせず。寺へ附届もして下されねば、無縁どうぜんとなつて、今では石塔も塀のしたの石がけとなつたれば、折ふし犬が小べんをしかけるばかり、つひに水ひとつ手向られた事はござらぬ。ほんに長死をすれば、いろくなめに逢ますぞや。彌もつともだく。いちこ「そのつらい目にあひながら、くさばのかげでそなたのことをかたときわすれぬ。どうぞそなたもはやく冥途へきて下さ



れ。やがてわしがむかひに來ませうが。彌「ヤアレとんだ事をいふ。遠いところをかならずむかひにくるにヤア及ばぬ。いちこ「そんならわしがねがひをかなへて下され。彌「ヲ、何なりとく。いちこ「このいち子どのへ、おあしをたんとやらしやりませ。彌「ヲ、やるともく。いちこ「ア、名残をしや。かたりたい事、とひたい事、敷かぎりはつきせねど、冥途のつかひしげければ、彌陀の淨土へ。ト、うつむきていちこあづさの弓をならす。彌「コレハ御苦勞でござりました。ト、鳥目貳百文はりこみ、かみにくるみていだす。北「くらやみの耻をとうくあかるみへぶちまけて仕廻た。ハ、ハ、ハ、時に彌次さん、おめへとんだふさぐの。ナンと一ばい呑うじやアねへか。彌「それもよからう、ト、手をたき女をよび、さけさかなをいひつける。いちこ「けふはおまへさまがたア、どこからおいでなさりました。彌「アイ岡部から來やした。いちこ「それはおはやうござりました。彌「ナニわつちらアあるくこたア章駄天樣さ。サアといふと、十四五里ヅツはあるきやす。北「そのかはりあと十日ほどは役にたちやせぬ。ハ、ハ、ハ、ト、此内、酒と肴を持出る。彌「ちとあがりませぬか。いちこ「わたしはいつかう下さりませぬ。彌「あちらのおかたはどうだ。いちこ「かゝさんお出。サアおかまさんもお來なさいまし。北「ハ、アおめへのおふくろか。エ、こいつはめつたなこたアいはれぬわへ。まづあげやせうト、これよりさかもりとなり、さいつおさへつ、此いち子どもおもひの外のくらひぬけにて、いくらのもしやあくとしてゐる。彌次郎兵衛きた八は大きに酔がまはり、いろくをかきしやれあれども、くだくしければりやくす。北八まきじたにて、「ナントおふくろさん、今夜おめへのおむすをわつちにかしてくんせへ。彌「イヤおれがかりるつもりだ。北「とんだことをいふ。おめへこそ今宵は精進でもしてやりなせへ。可愛さうに、しんだ囃衆があれほどにおもつて、どうぞはやく冥途へこい。やがてむかひにこやうと深切にいふぢやアねへか。彌「ヤレそれをつてくれるな。向ひにこられてたまるものか。北「それだからおめへはよしな。サアおふくろおいらにきまつた。ト、いち子のむすめにしなだれかゝるを、つきはなしてにける。いちこ「およ

しなさりませ。いち子のむすめがいやならわたしては。北「もうかうなつちやアだれかれの見さかひはない。ト、むちうになつてしやれる。此内かつてより膳も出、色々こゝにもあれ共りやくす。はや酒もをさまり、彌次郎北八も次のまにかへり、日がくれるやいなや、とこをとらせわかせる。おくの間にもたびくたびれにや、もうわかせるやうす。北八小ごゑにて、北「なんでも巫子のしんざうめが、いつちこちらのはしにわたやうすだ。後に這かけてやらう。彌次さん、おめへねたふりなぞはとほりものだけ。彌「おきやアがれ、おれがしめるは。北「氣のつえ。大わらひだ。ト、いひつゝ兩人ながらぐつとよぎをかぶりねる。すでに夜も五ツすぎ、四ツまはりの拍子木のおと、まくらにひゞき、臺所にあすの支度の、みをする音もやみければ、たゞ犬の遠吠のみきこえて、物淋しくふけ渡るに、北八時分はよしとそつとおき出、おくのまをうかゞへば、あんどうきえてまつくらやみ。そろくとしのびこみ、さぐりまはして、かのいちこのふところへにぢりこむと、おもひの外此いちこの方から、ものをいはず北八が手をとつて引ずりよせる。北八こいつはありがてへと、そのまゝよぎをすつぽり、手まくらのころびねに、かりのちぎりをこめしあとは、ふたりともせんごもしらず、はなつきあはせてぐつとね入。彌次郎兵衛一ねいりして目を覺しおき上り、「もう何時だしらぬ。手水にいかう。コリヤまつくらで方角がしれぬ。ト、小へんに行ふりにて、是もおくの間へはひこみ、北八がせんをこしたとはつゆしらすぐりよつて、よぎのうへからもたれかゝり、くらがりまぎれにかのいちこもおもひ、きた八がムニヤ／＼いふくちびるをわづりまはし、わんぐりとかみつ。北八きもつぶし目をさまし、「アイタ、ハ、ハ、彌「ヲヤ北八か。北「彌次さんか。エ、きたねへべつ。此こゑに北八とねてゐたるいちこも目をさまして、「コリヤハイ、おまいちは何だ、さうくしい。しづかにしなさる。むすめが目をさますに。ト、いふこゑはば、あのいち子、北八は二度びつくり、こいつ取ちがへたかいまくしいと、はひ出てこそく／＼とつぎの間へにげかへる。彌次郎もにげんとするを、いち子手をとつて引ずりながら、「おまへ此としよりをなぐさんで、今

にげる事はござらぬ。彌イヤ人違へだ。おれてはない。は、あ、インネさういはしやますな。わし共はこんなことを商賈にやアしませぬが、旅人衆の伽でもして、ちとばかしの心づけを貰ふがよわたり、はらさんくなくさんで、只逃るとはあつがましい。夜の明るまでわしがふところてねやしやませ。彌これはめいわくな。ヤイ北八く。は、ア、レ、ハ、イおつきな聲さしやますな。彌それでもおれはしらぬ。エ、北八めがとんだ目にあはしやアがる。ト、やうくむりに引はなして、にげんとすれば、又とりつくをつきたふして、がたびしとけあらかし、さうくつぎの間へはひこみながら)

いち子ぞとおもうてしのび北八に口をよせたることぞくやしき

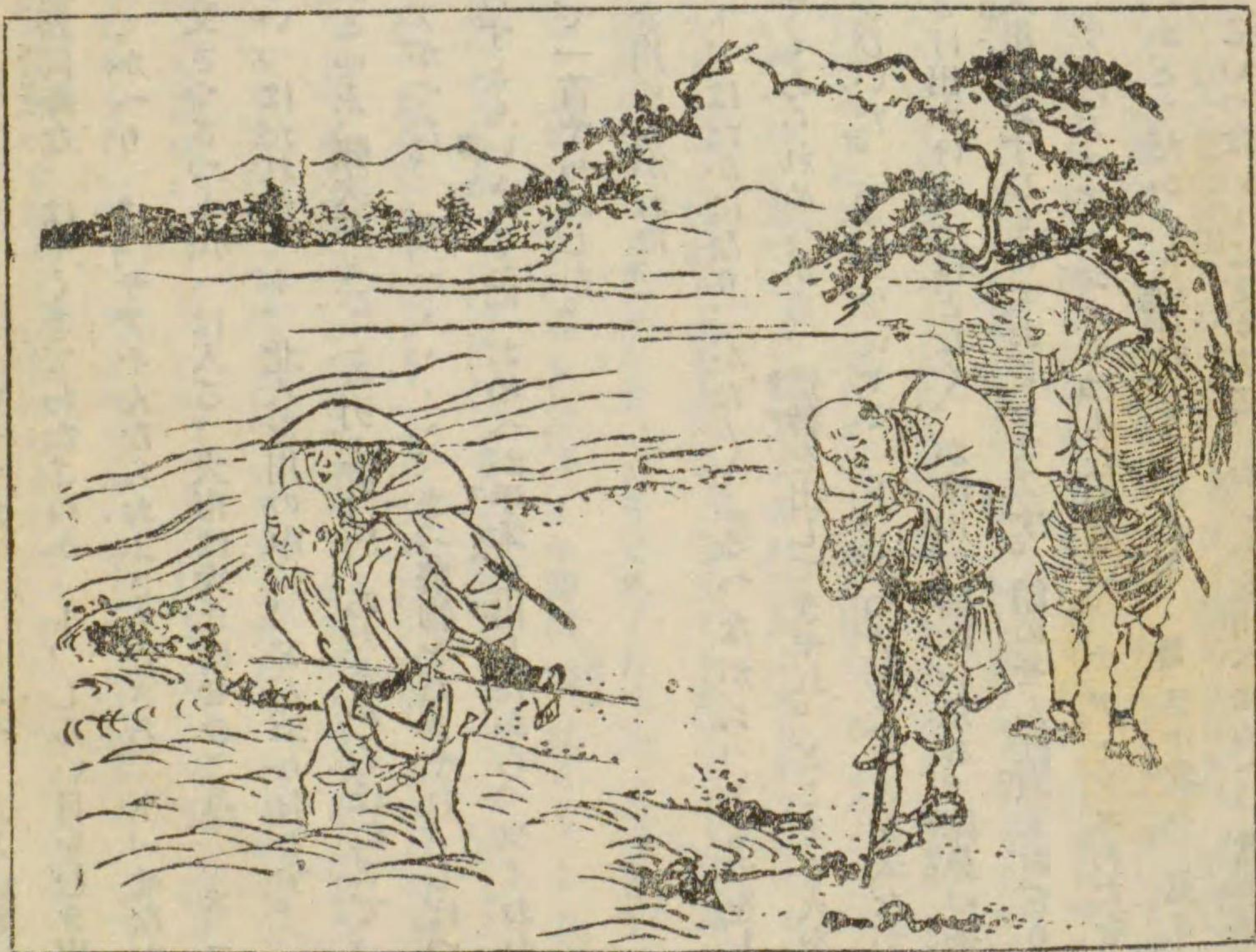
道中膝栗毛 三編下

しの、めまだき驛路の、いそがしげにひきつる、朝出の馬の嘶に、旅勞れの目をこすりながら、彌次郎北八おき出て支度するうち、相宿のいち子が顔ふくらかしろるもをかしく、爰を立出ふるみや、譽田の八幡を打過、右にしようとの畑、彌が田といへる見ゆれば、彌次郎兵衛

干からびししうとの畑にひきかへて水澤山のよめが田をよき

それより鹽井川といふ所にいたりけるに、昨日の雨つよくして橋おちけるにや、行かふ人みづから股引をとり、すそをまくりあげて、爰をわたるに、彌次郎北八も、いざや引つれて涉なんとする折柄、京上りの座頭二人づれ、此川の歩渡りなることを聞けるにや。一人の座頭、犬市、モシ、川は膝きりもござりますかな。北さやうく。しかし水が早いから、おめへがたアあぶない。用心してわたりなせへ。犬市、ハア、なる程、水のおとがよつほどはやい。ト、いひ

つ、石をひろひ、川のなかへなげこんでかんがへ、犬市、イヤ、こゝらが、どうかあさいやうだ。コリヤ猿市、ふたりながら脚半をとるもめんどうだ。おぬし若役に、おれをおぶつてわたれ。さる市、ハ、ハ、ハ、ずるいことをぬかす。拳てまらう。なんでもまけたものが、おぶつてわたるのだが。よし。犬市、コリヤおもしろい。サア、こんさんなむめで。さる市、りやん、どうさいく、ト、かた手でけんをうちながら、兩はうから左の手を出し、たがひにけんをうつ手をにぎりあひ。犬市、サアかつたぞく。さる市、エ、いまましい。そんなら此ふるしきづつみを、きさまいつしよにしよはつせへ。ソレよし。サア、こい、ト、したくしてせなかをむける。彌次郎是はありがたいと、さる市におぶされば、さる市はつれのいぬ市とこゝろえて、さつくと川へはいり、なんなくむかうへわたると、こなたのきしにのこりたるいぬ市「ヤイ、猿よ、どうする。はやく川をわたさぬか。(さる市むかうのきしにてき、つけ、腹をたて)さる市、コリヤじやうだんなやつだ。たつた今おぶつてわたしたに、又そ



つちへいつて、おれをなぶるな。犬市「ばかアいへ。おのればかりわたつて、ふといやつだ。さる市「イヤ、ふといとは
 そつちのことだ。犬市「コリヤおのれ、兄弟子にむかつて言語同断な。はやくきてわたさぬか ト、しろい目をむき出
 し、はらたつるゆゑ、さる市しかたなく、又こちらへ渡りてかへり さる市「サアそんならおぶさりなさる ト、せなか
 をいだす。北八しめたと、手をかけておぶされば、さる市又さつと川へは入る。犬市は大きにせきこみ 犬「コ
 レさる市、どこにある。さる市、川中にて、イヤ、こいつはだれだ ト、北八を川の中へ、どんぶりおとす。
 北「ヤアイ、たすけてくれ。ト、手あしをもがきながれるゆゑ、彌次郎とびこみ引上げれば、あたまからほねまで、
 くさるほどぬれ、北「エ、座頭めが、とんだ目にあはしヤアがつた。彌「ハ、、、まづ着物をぬぎやれ。しぼつ
 てやらう。北「ぜんてへ彌次さんがわるい。なんのおぶさらずともいふことに、おめへが手本を出したから、ツイおれ
 も。彌「川へはまつたか、きのどくな。ハ、、、それで一首やらかした。

はまりけり目のなき人とあなどりしむくいにははやく川のがれに

北「エ、きたくもねへ。よしてくんな。ア、さむい。ト、はだかになり、がたくふるへながら、きものをし
 ぼる、此内ざとうは川をわたり、行過る。彌「こゝでほしてもゐられめへから、着替を出してきやれ。どこぞで火を
 焚てもらつて、あぶるがい。北「エ、いまくしい。風をひいた。ハアクツシヤミ ト、ぶつ／＼とを云なが
 ら、きがへを出してきかへ、くさつたきものはしぼつて引さげ出けるとほどなく、かけ川の宿にいたる。棒鼻の茶
 屋をんな「おめしよアがりますアし。鯨とこんにやくと干大根のおすひものもおざりまアす。鯨のせんば煮もおざり
 まアす。おやすみなさいまアし。なかもち人「ふけばナア、ふくほどナア、ンエもつもなかるい。ナア、ンエわたを
 サア、いれたヤナア。長持にわたをナア、ンエヨウ、しつたかどうだか。馬のい「ヒイン。彌「ヤ北八、見さ
 つし。さつきの座頭めらが、あそこに呑でけつかるは。北「こいつはいふことがある。おいらを川へはめた、意趣返

しをしてやらう ト、つくりごゑにて、かのざとうの酒をのんでゐる茶屋へはいる。北「ライ御めんせへ ちや屋の
 おいでなさいまし ト、ちやをくんでくる。北八かのざとうのわきへ、こしをかける。女「おしたくでもなさいませ

か。彌「まだく腹はぼんぼこなだ。(先刻のざとう二人、此所にやすみ、酒をのみたるが、かの二人とはきもつか
 ず、犬市「ハアねつから酒がたらぬやうだ。もう二合やらかさう。さる市「いかさまなあ、御ていしゆ、もうちつと
 頼ます。女「ハイ。犬市「ときに、今の川へはまつたべらぼうどもはどうしたらう。さる市「それよ。ハ、、、
 先かはりめをやらかさう ト、ちよくに一ばいついで、一口のみ下におくと、北八そつと手を出し、ちよくのさけを
 のんでしまひ、ちやつと本の所におく。さる市「イヤ、ふといやつらであつた。ちやんとおれにおぶさりヤアがつて。
 その其代水をくらヤアがつた時は、たすけてくれると、かなしいおとぼねを出しをつた。なんでもかすりをとる事ば
 かり心がけてゐるやつだから、おほかたあいつは、ごまの灰だらうよ。犬市「さうさ、どうてろくもんじヤアない。
 あゝいふやつは、こんな所へ來ても、えてはくひにげをして、ぶちのめされるもんだ。イヤ時に盃はどうした。
 彌「ホンニわすれた ト、ちよくをとりあげて、のまうとしたところが、さけはいつするもなし。ヲヤ、こぼしたさ
 うな ト、そこらあたりを、さぐりまはし。ハテめいような。あらためてさう ト、又一ばいつぎ、ひと口のんで
 下におくと、北八又そつと引よせ、のんでしまふ。犬市「かうしてゐる所へ、さつきのやつらが來たらをかしからう。
 さる市「ナニあいつらは、おほかた着物をしぼつたり、ほしたりしてまだあつちにまごつてゐるだらう。ちよのないべ
 らぼう共だ ト、いひながら、さかづきをとりあげた所が、又酒はいつするもなし。「これはどうだ、犬「又こぼした
 か。いくぢのない。さる市「イヤこぼしはせぬが、ハテきめうちやうらいな。犬「イヤ手めへそんなことばかりいつて、
 ひとりでのむな ト、此内、北八てうしを取、自分のんだちやのみ茶わんふたつにあげて、そつとてうしをもとの
 ところにおく。犬「コリヤ猿よ、さかづきをまはさぬか ト、ひつたくり、てうしを取て、ついで見て、ヤア此猿市

め、ひとりてくらつてしまやアがつた。さうヤアニ、とんだことを。犬「それでも銚子がさつぱりだ。さうなんだ銚子が無い。イヤこゝの御ていしゆく。わしらを盲とあなどつて、こんな横着をさしやるか。二合の酒がたつた二口のみと、もうないはどうしたもんだ。ていしゆく、ハイそれは二合、しかもたつぷりついであげましたに、大かたこぼしなかつたもんだんて。さうナニこぼすもんだ、商人に似合ぬ事をさしやるから、此酒代ははらひませぬぞ。ト、大きにはらを立る。此ときかど口にあそんでゐる子もりが、さいせんより見てあたりしが、北八のはうへゆびざしをして、子もり「ワアイ、座頭どのさけウ、みんなあの人、ちやわんへついでしまはつせいた。北「ヲヤ、この子はとんだことをいふ。コリヤア茶だ茶だ。ト、いひながら、のみさしたちやわんの酒をのんでしまふ。ていしゆく「イヤ、おまひさけくさいわ。そして顔があかくならしやつたは。大かたあの衆の酒をのましやつたな。北「エ、この人もおなじやうに、とはうもねへ。わしが顔の赤くなつたのは、茶に酔つたのだ。わしはかはつたことで、ちやをたんとむと酔ます。酒によつた人はくだをまくが、茶によつた證據には、ちやばかりいふがくせてならぬ。そこでちやばかりながら、どなたもちややうチヤ、ハ、、、。さう市「イヤ、その手はくはぬ。子供は正直だ。コリヤアこなたしゆが、よこどりしてのんだにちがひはない。酒代をはらはしやれ。北「ちやれやれ。ちやりとは、ちやわいもないことをちやべらしやる。ちやつきからのんだはちやばかり、ちやとうしゆのちやけを、ちやくぶくしたおぼえはござらぬ。わるいちやれだ。チヤハ、、、。犬「イヤ是、目の見えぬものだとおもつて、そのちやらくらおかつしやれ。ハテ、見てゐた子どもが證據人だ。さうまだたしかなことは、御ていしゆく、あの衆の呑だちやわんが酒くさいか、かいて見させやれ。ト、うごかぬ所へ氣をつけられ、北八ちやつと、ちやわんをかくさうとするを、ていしゆくひとり、かいて見て、「ヒヤア、くさい」。そして酒でちやくする。コリヤハイおまいちがのましやつたにちがひはない。酒代をおかつしやいまし。ト、いはれてきた八、こいつはをさまらぬと思ひ、「イヤちやけはのまぬから、ちやか代は拂はぬ。

茶代なら、なんぼでもはらはふ。いくらだ。ていしゆく「そんなら、茶代をおかしやいまし。茶が二合で六十四文。北「ヤなんだ、ちやを二合のんだ。とはうもねへ。彌「エ、めんだうな。はらつてしまつたがい。手めへのするこたア、なんでもをさまらねへ。あしもとのあかるいうち、はらつてしまや。ト、めがほでしらせる。北八もせうことなし六十四文はらつてやると、さう「イヤはや、とんだ人たちだ。大かたさつきおぼさつたも、こんな衆であらう。人のかつた酒をよこどりしてのむといふは、マアどろしゆうといふものだ。北「ナニどろぼうだ。このどうめくらが。ト、りきみかゝる。彌次郎おしとめ、彌「ハテ、こつちがわるい。モシ、れうけんしてくんなせへ。こいつは茶に酔と、氣がつよくてなりやせぬ。サアちやつといかう。アイおちやらばく。ト、いひ捨て北八をむりにひつたて、こゝを立出、あしはやに此しゆくをうち過、北「エ、いまくしい。けふはとんだ間がわるい。錢を出して酒をのみながら、へこまされたがうまらねへ。彌「ハ、、、。おれよりはよつぼどちぬのねへをとこだ。することもなすことも皆あしくぼやちやしられたる人のしがなさ。斯興じ、打わらひつゝ、やがて秋葉三尺坊へのわかれ道にいたり、彌次郎兵衛遙拜して、脇差の貳尺五寸もなにかせむ三尺ぼうの誓ひたのめば、それより澤田、細田を打すぎ、砂川の坂道にかゝりけるに、兩方より木立生茂りて、日の蔭くらく、折ふしゆきもとだえたるに、誰ともしれず「コレレ、たびの人オ、ト、よびかけられ、兩人うしろをふりかへりみれば、かたはらの木かげより、のさくふとところ手にて出来るは、どてらぬのこに、一こしぼつこみ、山をかづきんをかぶりたる、ひげだらけのむさくろしき男、彌次郎北八がむかうへまはり、立はだかる、ふたりはびつくり、こはごはながら、彌「コリヤ晝日中、なんの用だ。かの男「イヤさか手を壹文下さいませ。ハ、、、。北「なんのこつた。それでおちつた。ソレ壹文。彌「あつたら肝をつぶさしやアがつて、いまくしい乞食めだ。ト、つぶやきながら、原

川をうちすぎ、はやくもなぐりのたてばにつく。こゝは色ごぎをおりてあきなふ。

道ばたに開くさくらの枝ならでみなめい／＼におれるはなごぎ

程なく袋井の宿に入るに兩側の茶屋賑はしく、往來の旅人、おの／＼酒のみ、食事などしてゐたりけるを、彌次郎兵衛見て、

こゝに來てゆきゝの腹やふくれけんされば布袋のふくる井の茶屋

此しゆくはづれより、上方ものと見えて、棧留の布子に、銀ごしらへの脇差を差、花色羅紗のしやうぞくかけし合羽をきたる男、供ひとりつれて、あとになりさきになり、上方もの「モシ、おまいがたはおえどぢやな。彌さやうさ。上方わしも毎年くだるものぢやが、おえどはきよといはんじやうなことぢやわいの。アノ吉原へもちよこ／＼さそはれて、晝三とやらいふおやまを買たが、いつも人にふれまはれてゆくさかい、なんぼかゝつたやらこちやしらんが、おまい方もさだめて買なざるぢやあらうが、アリヤなんぼ程かゝるぞいな。彌わつちも女郎かひでは、地面の五ヶ所と拾ヶ所はなくしたものだ、ナニ晝三くらゐではわづかなことさ。マアひらのちうさんなら片しまいで壹分貳朱、茶屋が壹分か、藝者が一くみて又壹分。そして一斤々々でもとれば、その代が四百ツツかゝるぶんのことさ。上ハテノわしも大見世はしよ／＼へいたが、其いつきん／＼といふは、なんのことつちやいな。彌ソリヤア酒一斤、肴一斤などと、内の酒がのめぬから、別に外からとりよせることさ。上方ハアわしがいた内では、そないなことはなかつたわいな。そしてなにも、のめぬ酒は出しやせんわいの。えらうよい酒であつたわいな。彌ナニ、そりやアのめる酒でも、のめぬといつて、別にとるがえどつ子の氣性さ。上方「そして上方では、みな借てもどるが、おえどの女郎は現金ばらひぢやさうな。彌ナニサあそこでも、つき馬をつれてかへりさへすりやア、いくらでも貸てよこしやす。上方「ハ、ハ、ハ。コリヤおまいは大みせのおきやくじやないわいの。そのつき馬とやらいふことは、わしらが店の

しよく人しゆのはなしできてゐますが、晝三かいにそんなことはありやせんわいな。彌なくてさ。ほんにわつちらア、尻に四ツ手かごの蜻のできたほどかよつたものだ。ナニ。ねへことをいひやしやう。上方「ハア、そんなら、おまいのおなじみは何屋ぢやいな。彌アイ大木やさ。上方「大木屋の誰ぢやいな。彌「とめのすけよ。上方「ハ、ハ、ハ。そりや松輪屋ぢやわいな。大木屋にそんなおやまはないもせぬもの。コリヤおまいとんとやくたいぢや／＼。彌ハテあそこにもありやす、ナア北八。北「エ、さつきからだまつて聞てみりやア。彌次さん、おめへきいたふうだぜ。女郎買にいつたこともなくて、人のはなしをきゝかじつて、出ほうだいばかり、外聞のわるい。國ものつらよごしだ。彌べらぼうめ、おれだつていかねへものか。しかもソレ、手めへを神につれていつたじやアねへか。北「エエ、あの大屋さんのとむらひの時か。へ、神につれたもすさまじい。なるほど貳朱のつとめをおぶさつたかはり、馬道のさかやで、むきみのぬたと、から汗でのんだ時の錢は、みんなおいらがはらつておいた。彌うそをつくぜ。北「うそなもんか。しかもそのとき、おめへ、さんまの骨を咽へたてゝ、飯を五六ばい丸呑にしたぢやアねへか。彌ばかアいへ。うぬが、田まちであまざけをくらつて、口をやけどしたこたアいはずに。北「エ、それよりかおめへ、土手でいゝ紙入がおちてあると、犬のくそをつかんだぢやアねへか。業ざらしな。上方「ハ、ハ、ハ。イヤはや、おまいがたは、とんとやくたいな業ぢやわいな。彌「エ、やくたいでもあくたいでも、うつちやつておきアがれ。よくつべこべとしゃべるやらうだ。上方「ハアこりや御めんなさい。ドレ、おさきへまゐらう。ト、きもをつぶし、さうさうにあいさつして、あしばやにゆき過る。彌「いま／＼しい。うぬらに一ばんへこまされた。ハ、ハ、ハ。（此はなしのうち、みかのはしをうちわたり、大くぼの坂をこえて、はやくも見付の宿に到る。）北「ア、くたびれた。馬にでものらうか。馬かた、おまいちおまアいらしやいませぬか。わしどもは役に出了たおまだんで、はやくかへりたい。やすくいかずい。サアのらつしやりまし。彌きた八のらねへか。北「安くぼのるべい。ト、馬のさうだんができて、北八

こゝより馬にのる。此馬かたは、すけがうに出たるひやくしやうゆゑ、いんぎんなり。彌「コレ馬士どん、爰に天龍への近道があるぢやアねへか。馬士「アイそつから空へあがらしやると、壹里ばかりもちかくおざるわ。北馬はとほらぬかの。馬士「インネ。かち道でおざるよ。ト、爰より彌次郎はひとりちか道のはうへまがる。北八馬にて本道をゆくに、はやくもかも川ばしをうちわたり、西坂さかひ松のたてばにつく。ちや屋女「おやすみなざりやアし。ばうめいぶつのまんぢうかはしやりまし。馬士「ばあさん、異なひよりでおざる。ばう「おはやうおさいやした。今新田のあんにいがどうしにかずと、まつていたアに、コレく、よこすかのをんばあどんに、いひついでくんさい。道樂寺様に御説法があるから、あすびながらおさいといつてよ。馬士「アイく、又このごろに来ずい。ドウく。北「この馬はしづかな馬だ。馬士「をんな馬でござるは。北「だうりでのり心がよい。馬士「だんなア、おえどはどくだなのし。北「えどは本町。馬士「ハアえいとくだア。わしらも若い時分、おとのさまについていきをつたが、その本町といふところは、なんでもづないあきん人ばかりある所だアのし。北「ヲ、それよ。おいらが内も家内七八十人ばかりのくらしだ。馬士「ソリヤア御たいさうな。おかつ様が飯をたくも、大ていのこんではない。アノ、おえどは米がいくらしをります。北「マア壹升貳合、よい所て壹合くらあよ。馬士「ソリヤいくらに。北「しれた事百にさ。馬士「ハア本町のだんなが、米を百ツツ買しやるさうだ。北「ナニとんだことを。車て買込わ。馬士「そんたら、兩にはいくらします。北「ナニ壹兩にか。ア、かうと、二二天作の入だから、二五十、二八十六でふみつけられて、四五の廿で帯とかぬと見れば、むげんのかねの三斗八升七合五勺ばかりもしやうか。馬士「ハア、なんだおえどの米屋はむつかしい。わしらにやア分らない。北「わからぬはずだ。おれにもわからねへ。ハ、ハ、ハ。此はなしのうち、程なく天龍にいたる。此川は信州すはの湖水より出、東の瀬を大天龍、西を小天龍といふ舟わたしの大河なり。彌次郎「此所にまちうけて、俱に此遊しを打こゆるとて、

水上は雲よりいでてうろこほど

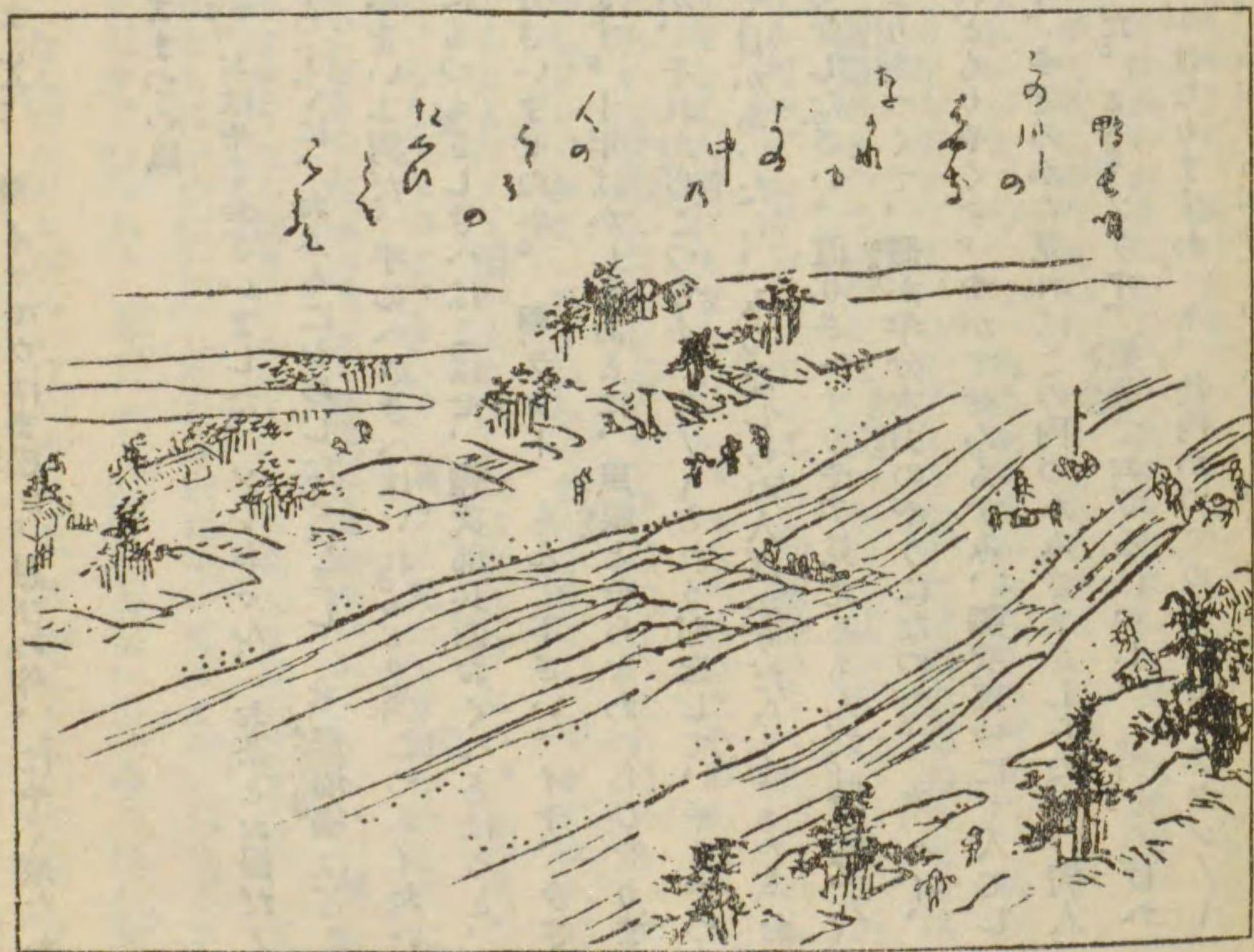
なみのさかまく天龍の川

舟よりあがりて、建場の町にいたる。此所は江戸へも六十里、京都へも六十里にて、ふりわけの所なれば、中の町といへるよし。

けいせい道の道中ならで草鞋がけ

茶屋にとだえぬ中の町容

それより、かやんば、薬師新田をうちすぎ、鳥居松近くなりたる頃、濱松の宿引出向ひて、ヤドリ「モシ、あなたたがたアおとまりなら、おやどをお願ひ申します。北「女といゝのがあるなら、とまりやせう。ヤドリ「ずあぶんおざります。彌「とまるから飯もくはせるか。ヤドリ「あげませいで。北「コレ、菜は何をくはせる。ヤドリ「ハイ當所の名物、裏預でもあげませう。北「それが平か。そればかりじゃアあるめへ。ヤドリ「ハイ、それに椎たけ、くわのやうなものをあしらひまして。北「しるがとうふにこんにやくのしらあへか。彌「マアかるくしておくがい。そのかはり百ヶ日には、ちとはりこまつせへ。



ヤど「コレへいな事をおつしやる、ハ、。時にもうまゐりました。彌「イヤモウはま松か。思ひの外、はやく来たわ
へ。
さつ／＼とあゆむにつれて旅衣ふきつけられしはままつの風

(ヤど引さきへかけぬけて、)「サア／＼おつきだアよ、いしゆ「おはやくおぎいました。ソレおさん、お茶とお湯だア
よ。彌「イヤ、そんなに足はよごれもせぬ。ていしゆ「そんならすぐに、おふるにおめしなさいまし。北「湯灌場はどこ
だ。彌次さんマアさきへやらかしねへ。彌「いま／＼しい事をいふ男だ。手めへさきへはいれ。ヤどの女「こつちイおい
でなさりまし。ト、すぐにゆどのへあんないする。此内、にもつもさしきへはこばせ、彌次郎兵衛おくへとほると、
ぜにヤ「ハイ、兩替はようおざりますか。あんま「おれうちをなさいませぬか。彌「ヲツト、もんで下さい。イヤ、きさ
ま目があるの。あんま「ハイ、仕合と、かたつぽはよく見えます。十年ばかりもあとに、風眼とやらをわづらひをりま
して、兩眼ともにかいもくおツつぶしてしまひをりましたが、それからこつちイハろ／＼とれうちをして、やうやつ
と此あひだ、左りのはうがよくなりました。彌「ひさしぶりで目があいたら、みんなしらぬ人ばかりだらう。あんま「お
さやうでおざります。彌「見えないはうも、ずるぶんれうちをしなさい。直りさへすりやア見えるもんだ。時に北八、
湯はどうだ。(北八ふるよりあがり)「ア、いゝ湯だ。あんまりあつくて、骸が半分水引のやうになつた。女「ハイ、
御ぜんをあげませう。ト、こゝにてぜんも出、いろ／＼あれどもりやくす。やがてぜんもすみ、彌次郎ゆにも入てし
まひ、彌「サアあんまさん、やらかしてくんな。イヤ時に今、ゆどのから見ればこの内のかみさまかしらぬが、病人
と見えて、取みだしてゐるが、なか／＼うつくしいしろものだ。あんま「ソリヤア氣違ておざるはのし。北「きちげへ
でもてへじねへの。あんま「イヤ、きさなさい。今にねんぶつがはなりますわ。ト、此内かつての方にて、チヤン／＼
とかねのおとして、百万べんはじまる。あんま「ソレお見さい。あのきちがひどののは、こゝの下女でおざつたが、御て

いしゆがふつと手をつけられたを、かみさまがひどいやきもちやきて、あの女をぶつたりはたいたりして、とう／＼
さらけ出しをりましたが、とかく御ていしゆは不便がつて、それからわきにかこつておきをりましたを、なほぜかし
かみさまがやかましくいつて、とう／＼氣がちがひ首をく／＼つて死にやりました。さうすると御ていしゆは又よいこ
とにし、あの女を内へいれると、其晩から、かみさまのいうれいがとつついて、あの女が又かみさまのやうに、氣ち
がひになつたもんだんで、それであんなに毎晩百萬べんをくりをります。ト、ひそ／＼はなすに、彌次郎北八も口は
たつしやなれども、しやうはおくびやうもの。北「なんだ、幽霊がとつついたとは、爰のうちへ其いうれいが出るか
の。あんま「出るだんか。彌「うそをつくぜ。あんま「ナニ、うそぢやアおざらぬ。まいばんこの屋根のうへに、白いも
のがたつてゐるのを、見たものがおざります。北「ヤアコリヤとんだ所にとまり合せた。あんま「それにそのかみさま
がくびをく／＼つた時の顔色といふ物は、目まなこをくるりとあいて青涙をたらし、齒をくひしばつて、それは／＼いき
てゐるやうな顔であつた。北「ソリヤアどこで。あんま「しかもソレ、おまいのうしろのえんさきて、北「ヤアコリヤ
たまらぬ。どうか首すぢがぞく／＼するやうだ。彌「あやにくしよぼ／＼雨がふり出したはなさけない。あんま「こ
んやなどはきつと出さうなこんだ。北「イヤコレあんまどの、もうけへつて下さい。彌「アノ又た／＼き鉦のおとで一
ばい氣が引かれるやうだ。北「なんにしてもいま／＼しいやどをとつた。あんま「エ、臆病なお衆だ。ハ、。彌「も
うしめへか。北八はどうだ。北「おらアもうねよう。あんま「さやうなら御きげんよく。ト、あんまはいとまごひして
立て行く。此内女夜具をもち出、とこをとりてゆく。ふたりともにいつにないしやれもむだもいばこそ、只まじま
じとね入もやらず。彌「エ、いつその事、北八今からどうじやアねへか。北「ナニとんだことをいふ。今のはなし
で、どう夜道があるかれるもんだ。彌「それにこゝの内は、なんだかだ／＼びろいばかりで、人がすくないから、う
そきみのわるいうちだ。ト、目ばかりばち／＼してゐると、鼠がてんじやうをかけるおと、から／＼「チウ／＼

チウ。北「エ、鼠までがばかにしやアがつて、小便をしかけた。彌「そのねずみめがうら山しい。おらアさつきから、小便をしたくてもこらへてゐるに、ヤアなんだかやはらかなものが足にさはつた。北「なんだ。ねこニヤアン。彌「コノちくしやうめ。シツ／＼。(百萬べんのかねのおと)「チヤアン。(のきにおちるあまだれ)「ぼたり／＼。(をりもをりと、まよひ子をたづぬるこゑ)「まよひ子の長太やアい。(チヤ、チヤン、ふたりとも、よぎのうちへもぐりこみ、きた八よぎのそでからさしのぞき)「どうだ彌次さん、まだいきでゐるか。彌「なんまいだ／＼。ア、時にこまつた事がある。もう小べんがもるやうだ。北「おたがひになんきな目にあつた。彌「なんとおもひきつて、いつしよにいかうか。北「あま戸をあけてやらかすべし。ト、ふたり一しよに、こは／＼おきて、そろ／＼としやうじをあけ、北「サア彌次さん。彌「イヤ手めへさきへ。北「なにが出るもんだ。ト、あまどをさらりとあけたところが、なにか庭のすみに、白いものがちうとにふは／＼。北「八きやつといつて倒れる。彌「ヤアどうした／＼。北「どうした所か、あれを見ねへ。彌「あれとは。北「しろいものが立てゐらア。そしてこしから下が見えぬ。彌「ドレ／＼ト、ふるへながらこはいものは見たくなり、あまどのそとをそつとのぞき、これもきやつといつて、座敷へはい込み倒れる。北「コリヤ彌次さんどうした。ヲ、イ彌次さんヤアイ。ト、此さわぎに、勝手よりていしゆかけいで、このていを見てさま／＼かいはうし、やう／＼彌次郎しやうきづきければ、ていしゆ「ヤレどうなさいました。北「イヤ小べんにいつた所が、あそこに何かしろいものがあつた、それでこのとほり、臆病な人さ。(ていしゆえんさきへ出、これを見て)「イヤあれは繻絆(じゆばん)でおざります。コリヤ／＼、おさんやい／＼、日がくれたに、やつぱりほしものをなせ取こまぬ。そしてさつきから雨がぼろついできたに、らつしくちもない女どもだ。しかしコリヤアおきのどくさまでおざります。彌「ナニサ、わつちらアこはいといふこたアしらねへものだが、なぜか今夜は、虫の居どころがわるかつたさうな。ていしゆ「ハイおやすみなさいまし。ト、かつてへゆく。彌「エ、いまいましい。大きにきもをひやした。ト、

やう／＼に心おちつき、えん先へ出て見れば、なるほど女がじゆばんをとりこんでゐる。ふたりとも小用をしてさしきへかへり、よぎひきかぶりて、

いうれいとおもひの外にせんだくのじゆばんの糊(のり)がこはくおほえたはじめてわらひを催し、心おちつきて、とろ／＼と一するの夢をむすぶに、程なくやこゑの鶏(こ)の聲、家毎(いえごと)にうたひつるゝいさましさ。早出(はやで)の馬のすどのおとシヤン／＼。うた「ばんにござらばナア、裏(うら)からござれよヲ。おもてくるゝ戸(かど)がおとがするよヲエ引。馬(うま)ヒイン／＼。(鳥(とり)がいたやねをつゝ音(ね)「コト／＼／＼)。彌「もう夜(よ)が明(あ)たさうな。ト、北八(きたはち)もともにおき出れば、やがてかつてよりぜんもいで、いそぎしたくして立出、此宿(このしゆく)にすは明神(あきみ)の社(やしろ)をながみて、

梅干(うめ)のすはのやしろときくからにまもらせたまへ(まへ)のよるまで

斯(か)て、わかばやし(わかばやし)の郷(ごう)をうちすぎ、篠原(しのはら)のとりつきにて。北「ヲヤ味(あじ)さうなぼたもちがある。ヲツトばあさんひとつくん(くん)な。ト、立(た)ながら、店(みせ)さきのぼたもちをつまんでがつちり、北「ヤアこいつはくへぬ。ば「ソリヤアぼた餅(ぼたもち)のかんばんでおざるわ。北「イヤほんに、木(き)でこしらへたものであつた。道理(道理)でかたい。ば「ういくつしんぜます。北「ナニ、三ツ(さん)ばかりくん(くん)な。ト、せにをはらひ、ぼたもちをくひながらよびかけ、北「ヲ、イ、彌次(やじ)さん／＼。彌「なんだ。うめ(うめ)へものならちつとくれる。北「がうぎにうめへ。彌「ドレひとつ。北「イヤそれから御(ご)らうじろ。ト、手のひら(ひら)へのせてさしあぐると、とんびが来(き)りちよいとさらつてゆく。彌「ハ、ハ、ハ。北「いま／＼しい。こゝらの意(い)は、みな下(か)戸(かど)ださうな。ト、うらめしさうにそらをながめて、

あいた口(くち)ふさがれもせぬそのうへにはなをあかせしとびのにくさよほどなく蓮沼(はすくま)つぼ井(い)むらを打過(うちかぎ)、舞坂(まいさか)の驛(えき)にいたる。これより荒井(あらい)まで壹里(いちり)の海上(かいじやう)、乗合(りやく)ぶねにうちのりわたる。げ

にも旅中のきざんじは、船中おもひおもひの雑談高聲にかたり合、わらひの、しり打興じゆくほどに、頓て、なかばわたりて、乗合の人々も咄くたびれ、めい／＼柳ごりに肘をもたげて、あねぶりをするもあり。又この風景に見とれて、只黙終としてゐるもあり。この乗合のうちに、としのころ五十ばかりの、ひげむしや／＼としたるおやぢ、いかにもあかづきたるぬのをきたるが、なにをかうしなひけん、いねぶれる人々のひざのしたをさぐり、又はうすべりをもちあげ、しきりにものをさがしもとむるやうすにて、彌次郎がそての下をさぐりまはす。彌次郎その手をとらへて、彌「コウ、きさまはなんだ。ことわりなしに人の袂をさぐつてなんとする。おやぢ、ハイ御ゆるされまし。わしはハアちとべこ、少なくならしたものがござるから。おやぢ、おめへなくなつたものがあるなら、ことわつてたづねるがい。此ふねの中でどつこへもゆくことではない。なんだ。たばこ入か、きせるか。おやぢ、インニヤ。そんなものぢやアござらない。おやぢ、インニヤ。もうよくござる。彌「たづねずとよいものなら、人のあねぶりをしてゐるうち、そこらアさぐりまはすこたアねへ。のり合みなサアなにが見えぬ。いひなさい。此なかでもが見えないではすまぬ。おやぢ、インニヤ。もうよくござる。彌「ハテいゝではすまねへ。なにが見えやせん。おやぢ、ハアそんならいひますべい。みんなびつくりさつしやりますな。おやぢ、ハ、ハ、おめへがものをなくしたとつて、だれがびつくりするものだ。彌「なにが見えやせん。おやぢ、アイ蛇が一疋なくなり申した。おやぢ、とんだことをいふ人だ。へびたアなんのへびだ。おやぢ、なんだべいとつて、いきた蛇でござるは、のり合、ヤア／＼ア。彌「イヤきさまも、とんだ物をもつてきた。へびをマア何にしようとおもつて。おやぢ、こいつはきみのわるい。こらにはいぬか。ト、たちさわげば、せんちうみなみな總立に立さわぎ、ヤアこの板子の下に、とぐるをまいてゐるわ。ソリヤそつちのはうへいつた。エ、こりやきみのわるい。ソレ／＼あけ荷の下へはひこんだわ。コリヤまあ、とんだ人とのり合した。ト、せんちう上を下へひつくりかへし、たちさわぐ。かのおやぢあけ荷をとりのけ、へびをな

んのくもなくつかみ、またふところへいれる。おやぢ、おめへとんだことをする。それをふところへいれておくと、又はひ出ますは、うみへうつちやつてしまひなせへ。おやぢ、インニヤ、さてさうはなり申さぬ。わしはハア、さぬきのこんびらさまへいくもんだが、道中路錢につきて、すべいやうがござらないから、道でこのへびをとつたをさいはひ、へびつかひになつて、壹文ヅ、もらつていくもんだから、コリヤア、わしがしやうばいのたねでござるわ。彌「イヤ、なんぼきさまがしやうばいのたねだつて、へびをもつてゐる人と、どうしていつしよにあられるものだ。コレ船頭どん、なぜこんなものをふねにのせた。せんどう、ハアわしらだつて、よもやあの人へへびを持てゐやうとはしりませぬ。のり合、コレおやぢどん、なんのかのといはずとも、たせいにぶぜいだ。はやく打ちやつてしまひなせへ。おやぢ、インニヤ、ヤアだ。なり申さぬ。おやぢ、ならざアきさまぐるめに、うみへぶちこんでしまふがどうだ。おやぢ、ヲサ、はめるならはめて見さつしやい。わしにも手ぶしがござるわ。おやぢ、このおやぢめはふてへやつだ。ト、北八たちかゝつて、かのおやぢのむなぐらをとると、ふところからへびのあたまがによつこり出る。北八きやつと言て飛のく。彌次郎つゞいて立あがり、きせるにておやぢを一つくらはせる。おやぢはらをたて、つかみつくと、せんちうみな／＼とりさへるうち、又かのへびが、おやぢの袂からおちて、のたくりまはると、みな／＼ソリヤ又出をつた。ぶちころせ／＼北八じぶんのわきざしのこじりて、ちやつとへびのあたまをおさへる。へびそのまゝさやにまきつけたるを、ちよいと海へ、はふり投るはずみに、手がすべり、わきざしもいつしよに海へうちこみけるに、へびはなみにまかれてみえず。脇差はたけみつゆゑ、うきてながれる。北八めんぼくなくしよげてゐる故。おやぢこれにてはらゐる。のりあひ皆々、コエ、これでおちつた。しかしおきのどくな事は、あなたのおこしのものだ。おやぢ、わしは此としになるが、わきざしのながれるのをはじめて見申した。おやぢ、けつあなのせめへことをいふおやぢめだ。おうしうころも川で、辨慶がたちわうじやうしたときやア、太刀もよろひもながれたといふことだ。おやぢ、ハ、ハ、ハ、

こりやアヘア、よこつばらが痛くなり申すわ。やなぎ樽といふ本に「ころも川さいづちばかりながれけり」といふ句
 がありまうす。辨けいのさしてお出やつたこしのは、かねてこしらへたもんだから、ながれべいたアござんな
 いは。北エ、いはせておきやア、よくしゃべる死ぞこなひめだ。はりとはしてやらう ト、又立あがり、つかみか
 かるを、彌次郎おしとめ、彌もう北八いにしや。のり合の衆の手まへもある。しづまれ〜 ト、是をなだめる
 内、ふねははやあら井ちかくなる。せんどろウサア〜、お關所まへでござる。笠をとつてひざをなほさつしやりませ。
 ソレ〜舟があたりまするぞ。のり合ヤレ〜、とどこほりなくついて、めてたい〜。(ほどなく船は、あら井のは
 まにつきければ、のり合みな〜舟をあがり、お關所を打過ける。彌次郎北八もふねをあがり、
 舞坂をのり出したる今切とまだたくひまもあら井にぞつく
 さるにても、腰のものゝながれたるは、前代未聞のはなしのたねと、みづからうちわらひつゝ、きた八、
 竹篋をすて、しまひし男ぶりごくつぶしとはもういはれまい
 それよりふたりは、此あら井のしゆくに酒くみかはして、あしをやすめぬ。

道中膝栗毛三編終

東海道
 中膝栗毛
 四編

123

題膝栗毛四編卷首

女方の阿佛、立役の親行、十六夜の日記、東關記行の類、世に行るゝ多なれど、皆下役者の時代物、豐稜敷の耳遠きをいかにせん。此膝栗毛の世話事は、切落向を専として、樂屋落を不載、北八、彌次、二枚の道外方に東海道の引道具を用ひ、今四篇におよんで狂言の筋をかへず、見物猶跡幕の遅に手を打事頗なるものは、作者の手柄、宿はづれの並木氏も、領分界の定枕是より右に出ん事を競ふべし。嚮に野生二番目に題して、一鞭直に京城の大詰にいたるといへるものは、大帳を不見の誤にして、此世界いまだ新井より桑名までの道行に終て、伊勢參宮のまはり仕掛、大津街道の泥仕合は、五篇目の打出しに載たり。嗚呼大儒先生、生前に文集の二篇目を出す事まれなるを、膝栗毛の四篇目、三年を不過して、製本既なれるは、當芝居の大名題、三都會の評判記に貫通すへし。

文化乙丑春

前黄表紙著作

喜三二題于芍藥亭

上卷書目

- 新居の驛滑稽
- 白須賀の駕囃北八を誑す
- 二軒茶屋建場北八酒肴を奢る
- 田舎芝居の笑談
- 荷物坊主持問答
- 吉田驛に比丘尼を廻る
- 彌次郎兵衛狐の怪を惧る
- 北八途中災難
- 赤坂泊婚禮騒動

下卷書目

- 彌次郎兵衛藤川争論
- 北八狂女に迷ふ
- 岡崎宿の遊戯
- 彌次郎兵衛草履を掠る
- 鳴見紋屋迷惑

北八伊勢音頭を踊る
 宮泊警女彌次郎兵衛を罵る
 七里涉船中混雑
 桑名茶屋酒宴

以上目録 終

道中膝栗毛 四編

由縁齋貞柳の狂歌に、螺貝の出しむかしはしらねども、今吹はよき追風なりけりと詠しは、東海道に名だたる今切の
 涉になん。そのかみ明應の比、山の奥より螺貝あまたぬけ出、それより海上あしくなりたりしを、元祿年中、公の
 命によりて、海上に數萬の杭をうち、蛇籠をふせ、往來渡船の難澁をすくひ給はりし御恵みの有がたさに、風和らぎ
 浪低くなりて、わたるに難なく、かの彌次郎兵衛北八、爰を打ちわたりて、あら井の驛に支度と、のへ、名物のかばやき
 に腹をふくらし、休みあたるに、げにも來往の貴賤絶間なく、舟場へ急ぐ旅人は、足も空に、出ぶねをよばふ驛につれて
 はしり、問屋へかゝる宰領は、口やかましく、課役をふるゝ馬さしについてのゝしる。はたご屋の、はかまごしよちよ
 にまげてはしり、茶屋をんなの、まへだれすぢかひに引ずつてとぶ。長もち人足横にたつてうたひ、馬士うしるをむき
 て、ひよぐりながら行道すがら、うたうらが性根は、はま名のはしよエ。今はとだえてエ、おともせぬヨエ。ドウ／＼。
 ちや屋「おやすみなさりまアしく。コレ馬士どん。おろし申さつせへよ。馬士「ヲットだんなさま、ソリヤおつふりが
 あぶんない。ト、茶屋の軒下へ馬を引入る。このからしりにのりたるは、もめんのおねずみ小もんに、ひうちのところ黒じ
 ゆすをあてたるぶつさきばをりをきたるお侍、馬よりおりて、北八と彌次郎がやすんである向うのしやうぎにこしをか
 ける。女「お茶あがりまし。ト、ちやをくんでくる。お侍、女のかほをじろりと見たあとにてちやわんをとり、侍「モウ
 何時ぢやらう。女「九ツ半でもおざりましよ。馬士「きんにようの今時分ぢやろかい。侍「したくいたさう。何ぞあるか。
 女「おなぎのかばやきがおざります。侍「なんぢや、お内儀のかばやきか。馬士「御てい主のすつぽん煮はないかな、
 ハ、ハ、ハ、。時にだんなさま、お荷物は是におき升。お小づけがてうど五ツ。侍「その賈ざしはこれへたもれ。

馬士「ハイ、モシだんな様、ちとおねがひがおざります。へ、へ、どうぞ御酒をいつばいたべたうおざります。侍、ホウお身、さげがすきか。馬士「ハイめしよりはすきておざります。侍、あんりよのない事ぢや。勝手にのみやれ。身どもたべうずならば、ふれまはうものを、かいかもく下戸ぢやから、せひがない。馬士「ハアだんなはあがらずとも、ハイどうぞいたゞきたうおざります。侍、ハ、ア解せた。お身、酒手おくせといふのぢやな。イヤまかりならんぞ。道中御定法の賃錢ども、相はらつてまかり通る。別に酒手などといふことは、決してならん事ぢや。馬士「さやうではおざりますが、どうぞそこを。侍「イヤ達てといはゞ遣はさうが、請取書をしやれ。身共歸國の節、とん屋どもへ相とゞける。馬士「いつたい売尻のお荷物には、おもすぎてをるから、どうぞ御れうけんなされまして。侍「しからばソレ入錢も遣はさう。ト、くわんざしより八文ぬいてやる。馬士「ハイせめて十六文下さりませ。侍「しからば身共了簡のもつて、今四文遣はさう。ト、せに四文、はふり出してやる。馬士「ふしようくんに取て、馬を引く。侍「コリヤまてまで。なむ三寶、あやつ、もうどこへか行をつたさうな。身共、大切な草鞋を、馬につけておいたが、もつて行をつたさうぢや。残念な、江戸まではかれるわらうぢやものを。ト、ぶつ／＼とをいふを、北八をかしく、「モシ、あなたはえどへお下りてござりますか。侍「さやう／＼。北「今承りますれば、草鞋一そくを、えどまでおはきなさると見えました。侍「けしからず道がお上手でござりますの。侍「イヤ身共、手作にいたわらうぢや程に、一そくあると、いつも江戸まで行戻りはきをります。侍「ほんに、わらぢのきれるはあるき下手でござりますが、あなたは道がお功者なことだ。しかし私も此わらぢは、一昨年松前へはいて參つたが、歸るまで何ともござりませなんだから、しまつておいて、去年長崎へもはいてまゐるし、そして又今度は出て出ましたが、御らうじませ。まだなんともござりませぬ。侍「はて扱、お手前は身共より道が功者ぢや。いかゞいたせば、そのやうにひさしくわらぢがはかれますな。侍「ナニサ草鞋ははきづめにしても切れませぬが、そのかはり私には、どうも脚半がきれてなりました。

ぬ。侍「それはどうして。彌「私は旅へ出ますと、馬に乗づめにいたしますから。北「おきやアがれ、ハ、ハ、ハ、彌「サアいかう。あなた御ゆるりと。アイおせわ。ト、こゝの勘定をして立出、此しゆくはづれより、二人ともふた川までの駕をとりて、打のり行ほどに、はや高師山、はしもとの北に見ゆれば、彌次郎兵衛れの狂歌を口ずさむ。 薦がうむ高師の山の冬はさぞ雪に眞白く見違やせん

此あたりにて、向ふよりくるふたつの駕に行合。かごかき「どうぢやおやかた、かへていかずに。かごの「なんぼおこす。ふた川「げんこやらずに、それでいぢやござい。かご「まゝよ、棒組まけてやらアず。ト、かごのさうだんしてきて、兩はうのかごかき、「旦那さまがた、駕をかへますから、乗かへて下さりませ。北「ふた川まで打こしだがい、ト、此内、ふた川の駕にのり来る男、こちらのかごにのりかはれば、北八も彌次郎も、さきのかごにのりうつる。北八をのせたるかごかき、「旦那は仕合ぢや。コリヤア宿屋駕でおざりますから、蒲團がしいてあるだけ、おまへがたはかへさしやつたが、お徳といふものぢや。北「ほんにさうだ。ト、いひつゝかごにしたじきのふとん、高くなりあたるに心づき、何心なくふとんの間をさぐり見れば、四文ぜに一本あり。さては今までのつて来た男が、爰においてわすれたと見えた。なんでもこいつせしめうるしと、北八そつとかの一本を、おのがふところへちやくぶくして、そしらぬかほをしてゐる。この内早くも白すかの驛に至る。はひりくちのちや屋女、おもてに出てよびたつるを見て、彌次郎兵衛、

出女の顔のくろきも名にめてて七なんかくす白すかの宿
 此宿をうちすぎ、程なく汐見坂にさしかゝるに、これなん北は山つゞきにして、南に蒼海漫々と見え、絶景まことに
 いふばかりなし。
 風景に愛敬ありてしをらしや女が目もとの汐見坂には

(北八、かく口ずさみたるを、かごの先ぼう聞きつけて)「ハア旦那はえらい歌人ぢやな。アレ向ふの山を見さしや
りまし。鹿がゐをりますは。 北「ドレ、是はおもしろい。 ききぼう「めいよう、おえどの旦那がたは、あんなおもしろ
うもないちくしやうめを、珍しがらしやつて、きんにようも發句とやらを、いはつしやれたお人があつた。 北「お
れも今の鹿で一首よんだ。貴さまたちについてきかせたとつて、馬の耳に風だらうが、かういふ歌だ、おく山に紅葉
ふみわけなく鹿の、聲きく時ぞ秋はかなしき。なんと奇妙か。 あとぼう「だんなはえらひものぢや。 わしどもはか
いもくしらぬが、なんにしされ、うたが直にひゆつと出るといふものぢやからえらいえらい。 北「一寸した所が、此
くらゐなものよ。イヤ貴様たち、あんまり讀てくれたから、酒が呑したくなつた。爰は建場か。 ききぼう「さるが番場
でおざります。サア棒組、一ぶくすつていかアず。 ト、ちや屋のかどにかごをおろしやすむ。 北「みんな一盃ツツの
まつし。コレ女中、そこへ酒を壹升でも貳升でも、うめへ肴をつけて、出してやつてくんな。(彌次郎兵衛かごの内に
て) 彌「ヲヤ北八どうした。てへふおうふうなことをいふな。 北「ナニサ、ちよつと呑せるが、どこでもこのくらゐ
なものだ。 ト、さきほどひろひし、四文銭に一本をだして見せかける。 彌「手めへ、それをみんなおごるか。 北「し
れた事よ。 彌「おもしろへ、おいらも御馳走にならう。 ト、彌次郎かごを出て、みせさきにすわると、やがて女がさ
けさかなをもち出る。きた入をのせたるかごのさきぼう、「是は有がたうおざります旦那いただきます。コリヤ、
ぼうぐみ、どこへいつた。ヤイみんな來されの。さつきの猿丸太夫さまが、御酒を下されるは。 ト、かごかき四人、
よりこぞりてのみかける。彌次郎もをかしく、おもいれのみかける。北八は一ばんへこまされてだんまり也。 彌「サ
アサア御ていしゆ、いくらだの御酒代は、駕の旦那がおはらひだ。 ていしゆ「ハイ、酒とさかなで三百八十文でお
ざります。 北「コリヤがうてきにくらやアがつた。 ト、ふしようくにかのせにを拂つてしまふ。かごかきこゝろづ
き、コリヤほんにぼうぐみ、さつきの一本の銭はどうした。 ぼうぐみ「ヲ、それ。 モシ旦那、あなたの乗てござらし

やるふとんの間に、四文銭一本いれておきました。あるか見て下さりませ。 ト、いはれて北八びつくりし、「ナニ
爰にか。イヤ見えないわへ。かごかき「ナニないことはあらまい。 隨に入れて置きました。 北「さつき見りやア、北八、手
めへがふとんの下から出して、ひねくりまはしてゐた錢ぢやアねへか。 かごかき「それでおざります。 ト、北八心のう
ちに、いまくしいことをいふと彌次郎をにらむ。彌次郎をかしくわきのはうを、ぐつとふりむいてみると、北八し
かたなく、ふところより一本だして、ふとんしたへそつといれ、 北「ヲ、爰にあつた。 かごかき「サア棒
組、この元氣でやりからかさう。 ちや屋「ようおざりました。 ト、かごをかきいだす。彌次郎をかしく、こゝは猿がば
んばにて、かしはもちのめいぶつなれば、
ひろうたとおもひし錢は餅右からひだりの酒にとられた
かく打わらひてゆくほどに、境川といふにいたる。爰は遠江三河のさかひにて橋あり。彌次郎地口にてよめる、
遠州へつき合せたる橋なればにかはの國といふべかりける
程なくふた川の驛に着く。此ところ、家毎に強めしを商ふ見ゆれば、
名物はいはねどしるきこはめしやこれ重宮のふた川の宿
兩側の茶屋ごとに、旅人を見かけて呼たつる。 女「お休なさりませ。 あつたかなお吸物もおざりませ。 無鹽の
肴で、酒もお飯でもあがりませ。 (此茶やのかど口にゐたるくもすけ、北八彌次郎をのせたるかごかきをよびか
けて)「ヒヤア兵衛、かへてうせしたな。畜生め、はやういて鼻が番をしされ。 密夫めがしけこんでけつかるは。
彌次郎をのせ「あはうめおどれが所の親父めが首釣てをることアしらずに、くそたれめハ、ト、こゝを行過ぎ、と
ひやのすこし手前に駕をおろす。彌次郎北八こゝよりおりてゆくと、此しゆくは、いづれのとのさまにや、お小休と
見えて、御本ぢんのまへのりものたてつゞき、あまたの御同勢はせちがひ、とひや、袴こしをねぢりてかけまはり、

野ばかまふんごみのお侍衆、御ほんぢんへ相つめるを見て北八、「ハ、ア、おやしきだけ、大屋様も二本さしてゐるな。北ばかアいな。踏込さへはいてゐると、大屋だとおもつてけつかるさうだ。北アノ乗かけを見な。がうぎに蒲團がかさねてあらア。彌、その筈だ。のつてゐる人の天窓を見や。叶福助といふもんだ、ハ、、。ソレ馬がきたア。馬ヒ、、。彌、アイタ、、。わりい所に合羽籠をおきやアがる。ト、けつまづいてこゝとをいふを、おやとひの中間ていにみゆる男、「コノやらうめ、合羽かごへ土足をふみかけやアがつて、ふてへことをぬかしやアがる。よこつつらアカぶりかくぞ。彌、ハ、、。大江山の飯時ちやア有めへし、頼アカぶりかくも氣がつえ。中間、なんだこいつぶちはなすぞ。彌、きさまたちの赤鯛でナニされるものか。中間、さうぬかしやア切にやアならぬ。コリヤ角助お身のこしものを、ちよつと借しやれ。ト、ほうばひのかくすけが、こしの物をとりにかゝる。かく助、コリヤコリヤ、切ならばお身の刃物でなせきらぬ。中間、ハテヤかましい。どれできつてもいゝぢやアねへか。かく助、イヤよくない。中間、ハテしはいをとこだ、ちよつとかしやれな。かく、イヤさておぬしも氣のきかぬ男だ。おれがほんとうの脇差は、鎗持の槌右衛門に、二百のかたにとられたを、お身さまもしつてゐるぢやアねへか。中間、ホンニさうだ。エ、コリヤおのれ、打はたすやつなれどゆるしてくれう。はやくいけ。彌、イヤいくめへ。サアきれ。ト、つゝかゝる。みな、此けんくわ、をかしがりて、引わけもせず、けんぶつしてゐると、かのお中間、「エ、さうぬかしやア了簡がならぬ。突殺してなとくれう。ト、引ぬいてつきにかゝる竹みつを、彌次郎ひつつかんでねじたふせば、くだんの男、中間、ヤアレ人ごろしく。ト、此内はや殿様のおたちと見えて、おさへのひやうし木、「カツチカツチ。へそりやおともぞろへとさわぎたつ。御どうせにつれてけんくわもそれぎりとなり、彌次郎兵衛もこれさいはひに、北八もろともこゝをのがれて足ばやに行過。彌、ハ、、。大笑ひのけんくわだ。

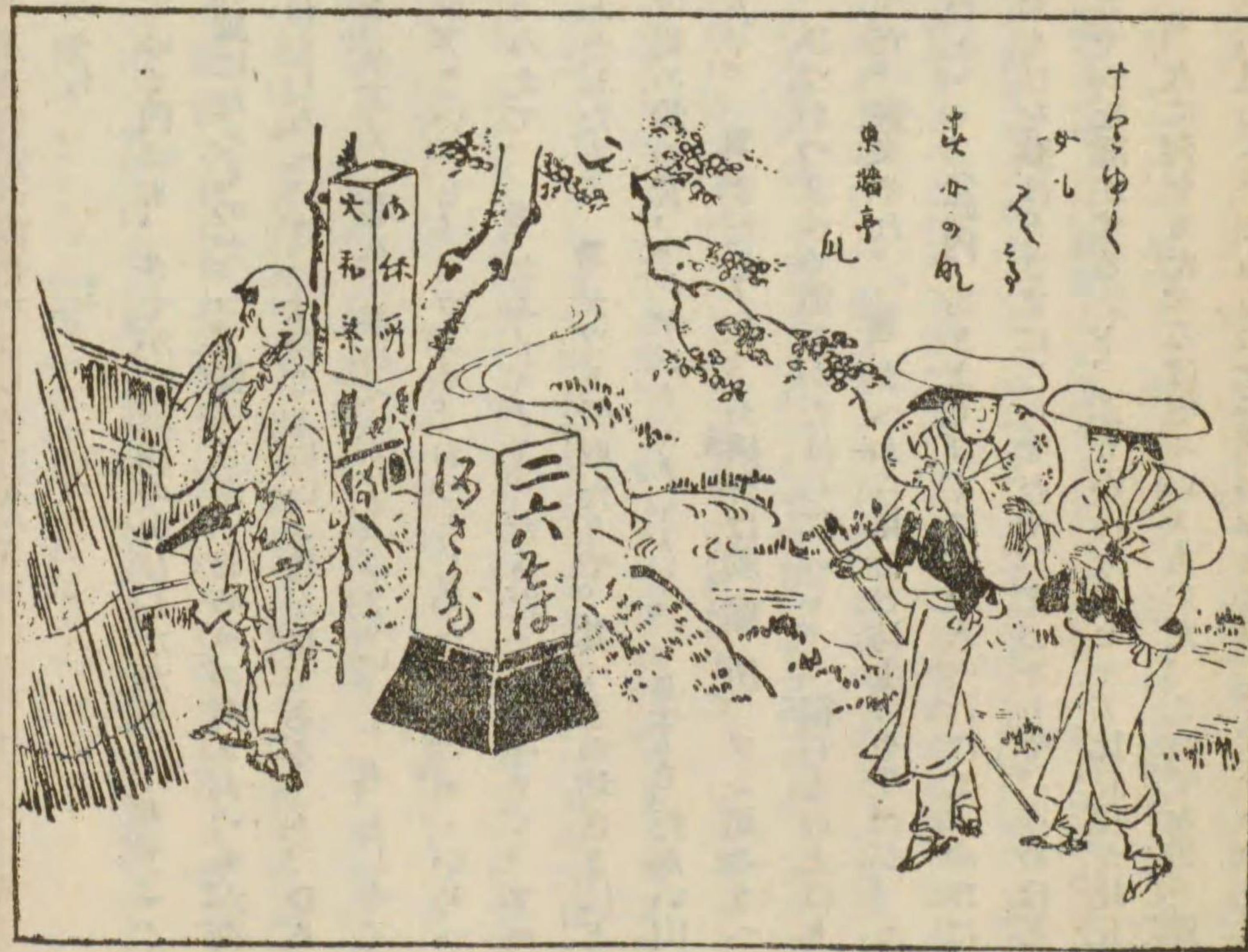
わきざしの抜身は竹と見ゆれども喧嘩にふしはなくてめでたし

それより此宿を出てたどり行に、はやくも大岩小岩を打すぎ、岩穴の観音をふしをがみて、

行がけの駄賃にをがむ観音も尻くらひとは岩穴のうち

げにも旅のきさんじは、差合くらず高聲にはなしものしてゆく内にも、さすがに退屈の欠びしながら、北ア、くたびれた。ちつとばかりの風呂敷包や紙合羽も、なか／＼邪魔になるものだ。コア彌次さん、おめへの荷とわつちが荷を一所にして、坊主持にしようぢやアねへか。彌、コリヤおもしろへ。さいはひこゝにいゝ竹が捨てある。ト、ひろひとりて、ふたりの荷物をたけのさきにくゝりつけて、彌、サア／＼北八、手めへからもつてこい。北、としやくにおめへはじめさつせへ。彌、そんなら狐けんでやらう。サアこい。ヒイフウミイ。おつとしめた。北、エ、いめへましい。ト、ひつかたげ行、向ふから來るたび僧は法華宗とみえて、僧、だぶ／＼。だぶだぶだぶ。フニヤフニヤ／＼。だぶ／＼。北、ソリヤ彌次さんわたしたぞ。彌、ヲツト受取たりや。其つぎの坊さまはどうだ。はやくくればいゝに。ト、また向ふよりくるのりかけ馬の鈴の音、「シヤン／＼。馬士うちたかい山から谷底見ればエ、おまんかはいや布さらすナアエ。どう。彌、きたぞ。お繪符は勅願所、ソレ馬のうへに御出家よしか、北、あんまりはやいな。ト、うけとつて、ひつかつぎゆく道のかたはらに、いざり御らんのとほり、足のかなはぬるぎりに御はうしや。北、イヤアこいつ坊主だ。壹文やれ。彌、まへから見ると坊主のやうだが、うしろを見や。ほんのくぼに毛があるは、北、おきやアがれ、ハ、、。(此内、あとよりびくにが三人づれにて、ゆびにつけし管をならしてうたひくる。うた、身をやつす、賤がおもひを夢ほどさまにしらせたや。えいそりや。ゆめほどさまにしらせたや。サアサさんがらへ。さんがらへ。北、あざやかな聲がする。ト、ふりかへり、ヒヤア比丘尼だ比丘尼だ。サア彌次さんわたしやす。彌、エ、いめへましい。北、人に荷をもたせるは申々いゝものだ。これでお供を連た心もちだ。ヤア／＼こいつらアまんざらでもねへ。彌次さん見ねへ。こちらの比丘尼がおれを見て、アレいつそにこ

にこと愛敬がこぼれるやうだ。畜類め。彌あいきやうのいよのぢやアねへ。アリヤア顔にしまりのねへのだは。北「わるくいふぜ。ト、此内、あとになりさきになり行くには、まだ年も二十三、今ひとりとはしま、十一二の小びくにも三人づれ、中にもわかいびくにか、きた入のそばへよりて、「モシあなた、火はおざりませぬか。北「アイ／＼今うつてあげやせう。ト、すり火打を出して、かち／＼。北「サアおあがり。時におまへがたアどけへいきなさる。びくに「名ごやのはうへまゐります。北「今夜一所に泊てへの。なんと赤坂迄行なせへ。一所にしやせう。びくに「それはありがたうおざります。モシどうぞお多葉粉を一ぶく下さりませ。とんと買うのを忘れました。北「サア／＼たばこ入を出しな。みんなあげよう。びくに「それでは、あなたおこまりでおざりましょ。北「ナニわつちやアよしさ。時におめへがたのやうなうつくしい顔で、なぜ髪を剃なされた。ほんにさうしておくはをしいものだ。びくに「ナニわたしが、たとへ髪が有たとて、誰も構人はおざりませぬ。北「ある



だんか、わつちらア一ばんにかまふ氣だ。なんとかまはしてくんなさらんか。びくに「ヲホ、、、。北「はやく一所にとまりてへ。彌次さん此さきの宿へもうとまらうぢやアねへか。彌「ばかアぬかせ。あやにく坊主のくるがとぎれたト、ここといひながら行ほどに、火うち坂をうちすぎ、二軒茶屋にいたると、此所よりびくにはわき道へはひる。北「コレ／＼おめへたちやアどこへゆく。そつちぢやアあるめへ。びくに「ハ、是からおわかれ申す。わしどもは、この在郷へまはつてまゐりますから。ト、野みちをさつ／＼と行過る。北八あきれて見おくと、彌次郎兵衛をかしくふき出し、「ハ、、、北八、手めへけふは大分つけがわりいぜ。北「エ、とんだめにあつた。ごふはらなト、うつかりしてゐるうしろからばつたり行あたる往來の人。北「アイタ、、、。目をあいてとほれ。だれだ。ト、ふりかへり見ればたび僧。彌「ヲツト荷物わたした／＼。北「コリヤはじまらねへ。ト、ふしよう／＼に、荷もつをひつかたげゆくまゝに、やがて吉田のしゆくにいたる。

旅人をまねく薄のほくちかかと爰もよし田の宿のよねたち

(此しゆくはづれより、遠國同者とは見ゆれ共、少しいたふうしやべる手合五六人、高壁にはなして行をきけば、中にもめひきのたてじまに、肩の所しまがらかはりたるきれをあてたるあはせをひつぱり、ふろしきづみといとだてをせおひし男、あとのほうをふりかへりて、「ヲ、イ、源九郎義經ヤアイ／＼。はやく來さいの／＼。ト、よぶこゑに彌次郎北八をかしく、このよしつねとよばる、男をみれば、紺の紋つきのひろそであはせに、これもつゝみといとだてをせおひ、かほは大あばたにて、少しかたこびんはげたる男、「かめ井せなアや、片岡せなアはや、と足が達者だアのし。うらアあくとのあかぎれさアへ、石ころがつゝばいつて歩かれ申さぬ。かめ井、靜御ぜんはどうしやつたアのし。よしつね、ヤレさてきゝなさる。あとの建場で、靜御前が持病の疝氣さあおこつたと、金玉ノウつりあげて、うつちぬべいと、あげへこげへにさわぎやることよ、それにハア六代御前が、牡丹餅さア三十べしもうちくつた

げて、食傷のウして、ぢたんばたんせつなかりやる。まんだそれに、辨慶は團子のくしさアで咽笛のウつゝいたと、涙アこぼしてなきやつたげて、うらが新家の友盛どのが、三人のウ介抱して、やらやつとあとからつるんで來申すわ。にしたちやアあにもしらずに、うつばしつて仕合だアのし。(彌次郎このはなしををかしく、あとになりさきになりて)「おめへがたアどけへいきなさる。よしつね」お伊勢さまへ参り申すわ。彌さつきからきけば、おめへがたア義經だの辨慶だのといひなさるが、どういふこつたね。よしつね「ハアそんな衆の聞きやつたらをかしかんべい。コリヤハアわし共が、國さアつん出てくるまへに祭れいがあり申て、千本櫻といふ芝居のウし申たから、それでハアよしつねだアの辨慶だアのと、狂言さアおつばじめた時、忘れないやうにと、その名をやつべしいひつけたくせさア、今でもおどけにいふのでござるわ。彌さつきこえやした。そんならおめへは義經になつたお方と見える。よしつね「さうでおござる。其まへにわしどもが國さアへ江戸しばやが來て、天神様の狂言のウし申したが、きゝなさる、たまげたりくつよ。あにがハア時平とやら五兵衛とやらいふ悪人どのが、讒言のウせられたげて、天神様の島ながしにならしやます時、興にのつてお出やると、あにがハア見物のウしてをるばあまさまたちも、かつさまたちも、ヤレ／＼いとしばいこんだと涙アこぼして、御門跡さまの通らしやますやうに、米だアの錢だアのと、舞臺さアへまきちらかいて、悲しがりやる。そこでハア見物の中から、博勞の興五左といふづな無上人どのが、舞臺さアへかけだいていやるにやア、此しばやアならないぞ／＼。あぜ天神様ア島ながしにせるのだ。最前お出やつた長樂寺様のえんまさまサ見るやうな、お公家どのが悪人だア。あにも天神様に科アない。いがしにしばやだアとつて、ふとを馬鹿にしたこんだア。天神さまのしりやア、此博勞の興五左がもつわ。時平どのはうらがあひてだと、あにハア御年貢米の二俵べしも、さしやアける力のあるせなアだんで、誰もうつたまげて、挨拶のウせるふたアなし、見物もくちやう／＼に、興五左どのさうだ。その時平とやらアしよびき出してぶつた／＼と。あにハア村中の若い人と達が、樂屋さアへ刎こんで、らんごくをやるとおもひ

なさる。さうせるとえど役者の時平どのは、コリヤたまらないと、尻のウおつばしよつて、つんぬげ申た。それからハア名のしどんへ密合つけて、もう此村へえど役者アいれさるなと談合のウして、わしどもが其跡のしばやさうで、狂言のウおつばじめ申したが、江戸しばやよりかア、ぶちられるほどはやり申た。ト、いきせいはつての、とはすがたり、じまんらしくはなしもてゆくまゝに、いつのまにかは大雲寺にいたる。このところは、あまざけのめいぶつなれば、彼人々は打つて此茶屋にやすむ。彌次郎兵衛北八は、いそぎこゝをうちすぐるとて、

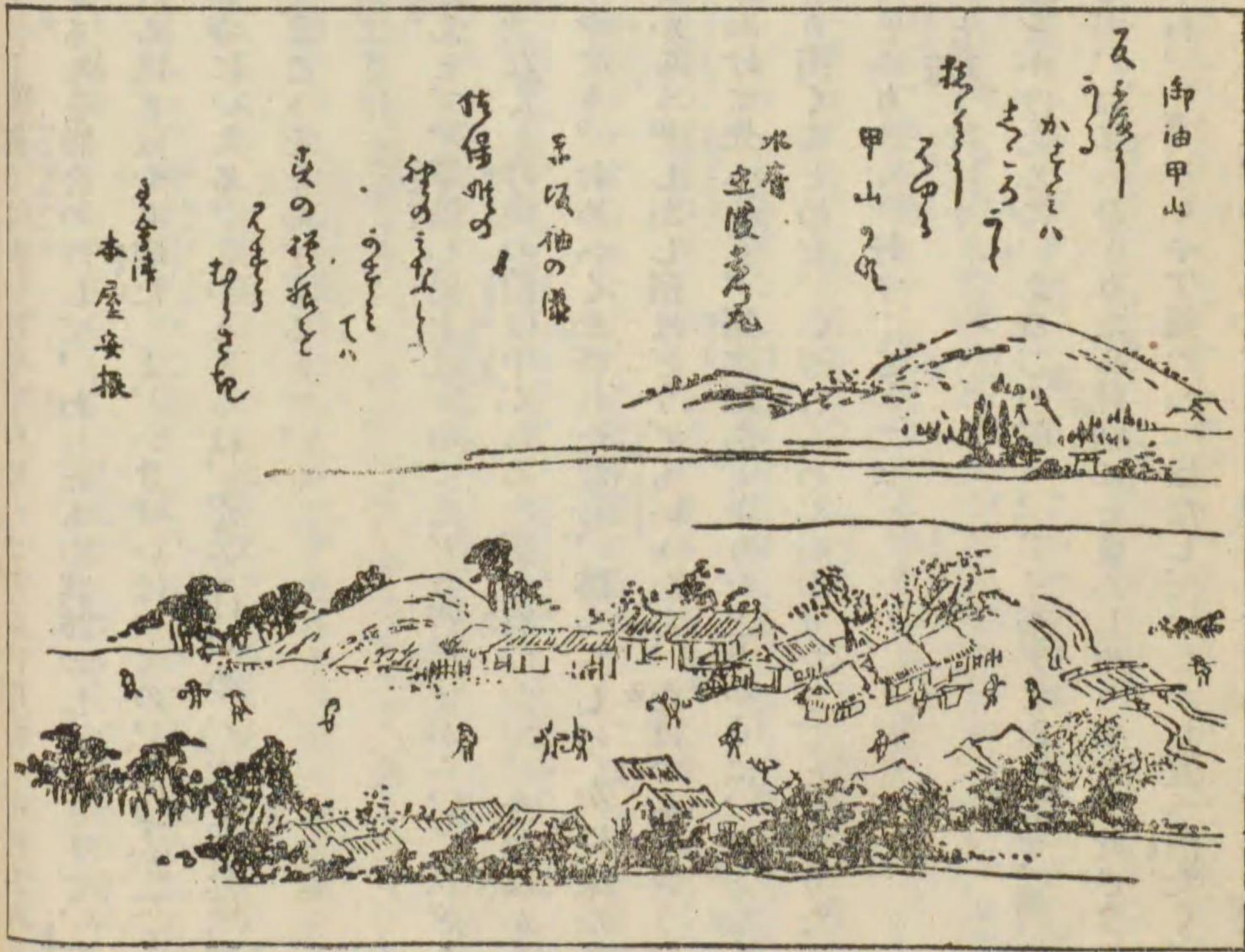
いや高き御寺のまへの名物はこれも佛になれしあまざけ

斯て此あたりより、はや日も傾き暮に近ければ、いぎや急んとて、草臥し足をやめてたどり行道すがら、北「どうだ彌次さん、埒があかねへの。彌次「大きにくたびれた。北「なんと昨晩の泊は中ぐらゐな宿で有つたが、今夜はかうしやせう。赤坂までわつちがさきへいつて。いゝ宿をとりやせう。おめへくたびれたなら、跡からしづかに來なさへ。宿から向ひの人を出させておきやせう。彌「それよからう。しかし宿はどうでもいゝから、たぼのありさうな内にしやれ。北「のみこみ山／＼ト、此ところよりかけぬけて先へゆく、彌次郎あとよりたどりゆくに、ほどなく御油のしゆくにいりたる頃は、はや夜にいりて、兩かはより出るとめ女、いづれもめんかぶりたるごとくぬりたるが、そてをひいてうるさければ、彌次郎兵衛やう／＼とふりきり。行すぐるとて、

その顔でとめだてなさば宿の名の御油のされへと逃し行ばや

彌次郎兵衛、あまりに草臥ければ、先此所はづれの茶店に腰をかけたるに、あるじの婆々、「アイ茶アまみりませ。彌「モシ赤坂まではもう少しだの。はうアイたんだ十六丁おざるが、おまへひとりなら此宿にとまらしやりませ、此さきの松原へは、わるい狐が出をつて、旅人衆がよく化され申すわ。彌「そりやア氣のねへはなしだ。しかし爰へ泊たくても、つれがさきへいつたからしかたがねへ。エ、きついこたアねへ。やらかしてくれう。アイおせわト、ちや代を

置、此所を立出行に、くらははくらし、うそきみわるく、まゆ毛につばをつけながら行く。はるか向ふにてきつねのなく聲、「ケン引く」。彌「ソリヤなきやアがるわ。おのれ出て見ろ。ぶち殺してくれう。ト、りきみかへつてたどり行に、北八もさきへかけぬけ、此所迄來りしが、これもこゝへきつねが出るといふはなしをききて、もしばかされてはつまらぬと、彌次郎をまち合せ、つれ立ゆかんとおもひ、土手に腰をかけたばこのみゐたりけるが、それと見るより、北「ツイく彌次さんか。彌「ヲヤ手めへなせこゝにゐる。北八「宿とりにさきへいかうとおもつたが、爰へはわりい狐が出るといふことだから、一所にいかうと思つて待合せた。ト、いふに、彌次郎心つき、こいつきつねめが北八にげたとおもひければ、わざとよわみをみせず、彌「くそをくらへ。そんなでいくのぢやアねへわ。北「ヲヤおめへなにをいふ。そして腹がへつたらう。餅を買て來たからくひなせへ。彌「ばかアぬかせ。馬糞がくらはれるものか。北「ハ、ハ、ハ、ハ。コレおれだわな。彌「おれだもすさまじい。北八にそのま



まだ。よく化ヤアがつた。ちくしやうめ。北「アイタ、ハ、ハ、ハ。彌次さんコリヤどうする。彌「どうするもんか。ぶちころすのだ。ト、うつかりした所を、ぐつとつきたふして、彌次郎そのうへりのりかよりおさへる。北「あいたあいた。彌「いたかア性體をあらはせく。北「アレサ尻へ手をやつてどうする。彌「どうするもんか。尻尾を出せ。ださずばかうする。ト、三尺手ぬぐひをとぎ、きた八が手をうしろへまはしてしぼる。北八をかしく、わざとしばられてゐると、彌「サアく、さきへたつてあるけく。ト、北八をくより、うしろからとらへて、おつたてくあか坂のしゆくにいたる。はやいづれのはたごやにもきやくをとめて、かどにたちゐる女も見えず。彌次郎は、やどからむかひの人が、もはや出さうなものとうろつく内、北「コウ彌次さん、いゝかげんに解てくん。外聞のわりい。人がきよろく見てわりいな。彌「エ、くそをくらへ。ハテ宿はどこだしらん。北「ナニおれはこゝにゐるものを、だれがさきへやどをとつておくものだ。彌「まだぬかしやアがるか、ちくしやうめ。(此内、向ふよりくるやど屋のをとこ)「あなたがたは當宿おとまりではおざりませぬか。彌「さきまむかひの人か。ヤドヤ「ハイおさやうでおざります。彌「それ見たか。此ばけぞこなひめ。ト、北八をつゑにてひとつくらはせる。北「アイタ、ハ、ハ、ハ、どうしやアがる。(やどやの男きもつぶし)「あなた方外のおつれさまはまだお跡でおざりますか。彌「ナニもうわつちひとりさ。ヤドヤ「ハアそれでは間違ました。私方のおとまりは、十人さまぢやとうけたまはりました。ト、此男は、さうく行過る。またあるはたごやのみせさきにて、ていしゆ「おとまりかなもし。ト、かけよつてとらまへる。彌「イヤつれものがさきへ來たはずだが。北「そのつれはおいらだわな。彌「エ、いけしぶといやつだ。もういゝかげんに尻尾を出しをれ。イヤまでく、あそこに犬がある。コ、ハ、シロコ、ハ、ヲ、シキヲ、シキく。ハ、ア犬がきても、いけしやアくとして居るから、さては狐ではねへ。ほんとうの北八か。北「しれた事。わりいしやれだ。彌「ハハ、ハ、ハ、サアおめへの所へとまりやせう。ト、心とけて北八がいましめをもとくと、やどやのてい主「サアおはひ

りなさりませ。ソレお湯をとつてこい。おざしきはえいかな。北ア、とんだめにあつたト、あしをあらふ。此うち、やどの女荷物をざしきへはこぶ。ふたりもざしきへうちとほりて、彌ホンニ北八了簡しや。おらア實にほんとうのきつねだとおもひつめた。北「ばか〜しいめにあつた。いまだに此手首がびり〜する。彌「ハ、、、。しかしめてよ。斯はいふもの、やつぱりこれが、ばかされてゐるのぢやアねへか。どうやらをかきな心もちだト、むしやうに手をたゞき、御てい主〜。ていしゆ、ハイおよびなりましたか。彌コレどうも合點が行ぬ。こゝはどこだ。ていしゆ、ハイ赤坂宿でおざります。北「ハ、、、。彌次さんどうしたのだの。彌エ、まだはぐらかしてゐやアがるト、いひつゝ眉毛をぬらして、御亭主さん、なんとこゝの内は、卵塔場ぢやアねへか。ていしゆ「エ、なによアおつしやる。北「ハ、、、。おもしろ〜ト、此内、かつてよりやどの女、女「おゆにおめしなさりませ。北「サア彌次さん、先湯にでも入て氣をおちつけるがいよ。彌ちくしやうめが、糞壺へいれやうと思つて、その手をくふものか。ていしゆ「ナニ、湯は清水でおざりますから奇麗でおざります。マアおいでなさりませト、勝手へ行。女ちやをくんできたり、「モシお淋しかア、女郎さんがたでもおよびなさいませ。彌「ばかアいな。石地蔵を抱てねるこたアいやだ。女「ホ、、、。いなことをおつしやります。北「そんなら、さきへはひりやせうト、北八ゆどのへ行。この内ていしゆまたざしきへ出來り、ていしゆ「ときにお客さまへ申上ます。今晚は、私方にすこし祝事がおざりますから、御酒をひとつあげませうト、いふうち、かつてより酒さかなもち出る。彌「おかまひなさるな。なんぞおめてたいことかの。ていしゆ「ハイおさやうでおざります。わたくしの甥めに嫁を貰ました。今晚婚禮をいたさせますから、おやかましうおざりましたよト、いひすてゝ立て行。北八ふるよりあがり、北「なんだ、おごりかけるの。彌「こゝの内こんにれいがあるといふことだ。コリヤいよ〜きつねめがはぐらかすにきはまつた。もう水風呂へもはひるめへわへ。北「エ、おめへもいよかげんにしな。ざりと、執念ぶけへこ

つた。彌「イヤ〜、めつたにゆだんはならぬ。この硯ぶたも、こんなにうまさうに見えても、性は馬のくそや犬のくそだらう。北「ホンニさうだらうから、おめへは見てゐなせへ。こいつはありがてへ。おじぎなしにやらかしやせう。ト、北八手じやくにて、さつ〜とのみかける。彌次郎れいのいちがきたなく、さすがに見てもゐられず、まじ〜して、いめへましい。氣をわるくさシアがる。北「きづけへはねへ。一ばいのみなせへ。彌「イヤ〜馬の小便だらう。ドレにほひをかゞして見せや。ムウ〜こりやほんとうのやうだ。どうもこらへられぬ。エ、まよ、やらかせト、一ばいついでのみ、したうちしながら、「酒だ〜。ドレ〜さかな。ヲツト此玉子はどうもいろあひが氣にくはねへ。えびにしよう。カリ〜。こいつはほんとうのえびだ〜ト、ひつかけ〜、さいつおさへつさつ〜とのみかける。此内かつての方は、わんかぐのおとがたびしとさわがしく、とりこみさいちう、はなれざしきには、はや婚禮のさかずきとはじまりしと見えて、うたひのこゑする。「四海なみしづかにて、國もをさまる時津風、枝をならさぬみよなれや。あひに相生の松こそめてたかりけれ。北「ヤンヤア。彌「コウやかましいわへ。北「やかましいはい、が、おめへさつきから盃をはなさねへ。ちつとこつちへまはしな。ホンニ馬のくそだの小便だのと、いふかとおもやア、やみくもひとりで喰ふやつさ。ハ、、、。彌「おらア正直化された氣になつてゐたが、今おもやア、さうでもねへ。とんだ苦勞をさせやアがつた。北「エ、おめへのくらうしたよりかア、おらアしぼられて、へんちきなめにあつた。ハ、、、。ト、此内、かつてより睡も出かれこれする内、おくのざしきにて又うたひうたふ。「千代もかはらじ幾ちよも、さかえさかゆる松梅の、ふたばの竹のよをこめて、老となるまでと結ぞたのしかりける。めでたいめでたい。三國一の賑をとりすまいた。しやん〜ト、手を打たゞき、ざゞめきわたる。此内かつてより女來り、あなた方もうお床をとりましょか。彌「そんなことにしやせう。北「コレ女中祝言はもうすみやしたか。さだめて賑御はうつくしからう。女「アイサむこさまもよい男、よめごさまもえらいきりやうよしておざります。おきのどくな

ことは、あちらの座敷にねやしやりますから、むつことがきこえまじよ。彌「なんだ、そんな手合と割床はあやまる。北「こいつは大變〜。女「モウおしづまりなさいませ。ト、出て行。ふたりも、そのまゝねかけると、はやふすまひとへとなりのざしきに、むことよめがねるやうす、ひそ〜とはなしするをきけば、した地からいろことにてもらひしよめと見えて、なか〜しよたいめんとは見えす、ぶつたりつめつたりして、いちやつくやうす手にとるやうにきこえ、彌次郎北八はねもやらず。彌「エ、とんだめにあはしやあがる。北「ホンニわりい宿をとつた。人のこゝろもしらずに、なんだかおそろしくむつまじいな。畜生め。彌「サアはなしごゑがやんだからむづかしい。ト、だんだんとんからのり出て、となりのやうすをききみゝたて、ねられぬまゝに彌次郎そつとおきたち、ふすまのすき間からさしのぞく。北八もはだかのまゝはひおきて、北「コウ彌次さん、取はうつくしいか。おいらにもちつと見せてくんな。彌「コリヤしづかにしや。肝心の所だ。北「ドレ〜見せねへ。彌「あれサひつばるな。北「それでもちつと退なせへ。ト、彌次郎がむちうになりてのぞきあるを、ひきのけんとひつばれども、のかじといぢばるはずみに、ばつたりふすまがあちらの間へたふれると、二人もともにふすまの上へころげる。むこもよめもおしにうたれてきもをつぶし、むこ「あいた〜。コリヤどやつぢやい。なんせ、唐紙を打こかいた。ト、はねおきた所が、あんどろもひつくりかへしてまつくらやみ、彌次郎はちやつとにげておのがねどこへはひこむ。北八まご〜してかのむこにつかまさり、せんかたなく、北「御めんなせへ。手水にゆくとつて、ツイ戸まどひをしやした。ぜんてへ爰の女中がわりい。夜座敷のまん中に行燈をおくから、それにけつまづいておきのどくだ。ア、小便がもるやうだ。ちよつといつて來やせう。こゝをはなしてくんなせへ。むこ「いやはやあきたお人たちぢや。夜着もふとんも油だらけになつた。コリヤ、おさん〜、だれぞはやうおこしてくれぬか。ト、よびたつるこゑに、かつてより下女が火をともして來り、そこらかたづけるに、北八も手もちなく、はづれしからかみをはめてひきたて、やう〜とわらひ出す。

もとのねどころへかへり、すご〜とわかせる。彌次郎をかしくふき出して、

ねてきけばやたらをかしや唐紙とともにはづれしあごのかけがね

きた八も夜着うちかぶりながら、

鞆のねやをむしやうにかきさがしわれは面目うしなひしとて

斯うち興じて、夜もふけゆくまゝに、双方しづまり、只いびきの聲のみたかくなりぬ。

道中膝栗毛 四編 下

鶏の聲萬戸にひゞきて、ひきつる、課役、馬の嘶いさましく、すでに夜明ければ、彌次郎兵衛北八もおき出で、あらましに支度とゝのへ、はやくも赤坂のしゆくを立出けるに、此宿の出端より、後になりさきになり行三人づれの旅人、是も江戸ものと見えて、すこしいさみ肌のまき舌にて、はなし行をきけば、ひとり「コウ、ゆうべの泊りはをかしかつたなア。今一人「ソレヨ、なんだか奥の間にとまつてゐたやつらア、きのきかねへやらうどもだ。やどに婚禮があるを羨しがりやあがつて、襖のあいだから覗きをつてむちうになり、とう〜ふすまをぶつこかしやアがつた。大わらひなべらぼうどもだ。今一人「それからその聲にあやまるさまア。あの騒ぎでおいらもろくにねられなんだ。いめへましい。一人男「そしてアノひとりのやらうめは、なんだか宵に宿の亭主をよびやアがつて、こゝのうちは卵塔場ぢやアねへかと、いやあがつたが、あのべらぼうめは、どうでも氣がふれてゐると見える。ト、此てやい、ゆうべ彌次郎北八がとまりし内へ一所にとまつたと見えて、此はなしをする。彌次郎聞て大きにあつくなり、あしばやにかけより詞をかけ、彌「コレきさままたちやア、さつきからだまつて聞てありやあ、おいらがことをべらぼうたア、

なんのこつた。さきの「ナニこんた衆の事ぢやアねへ。こつちのことだワ。彌こつちの事といふことがあるものか。ゆうべのやどでの事をぬかすのだらう。その襖をぶつこかしたべらぼうといつたア、おれが事だワ。

旅人「ハアこんたそのべらぼうか。彌「ア、其べらぼうだ。

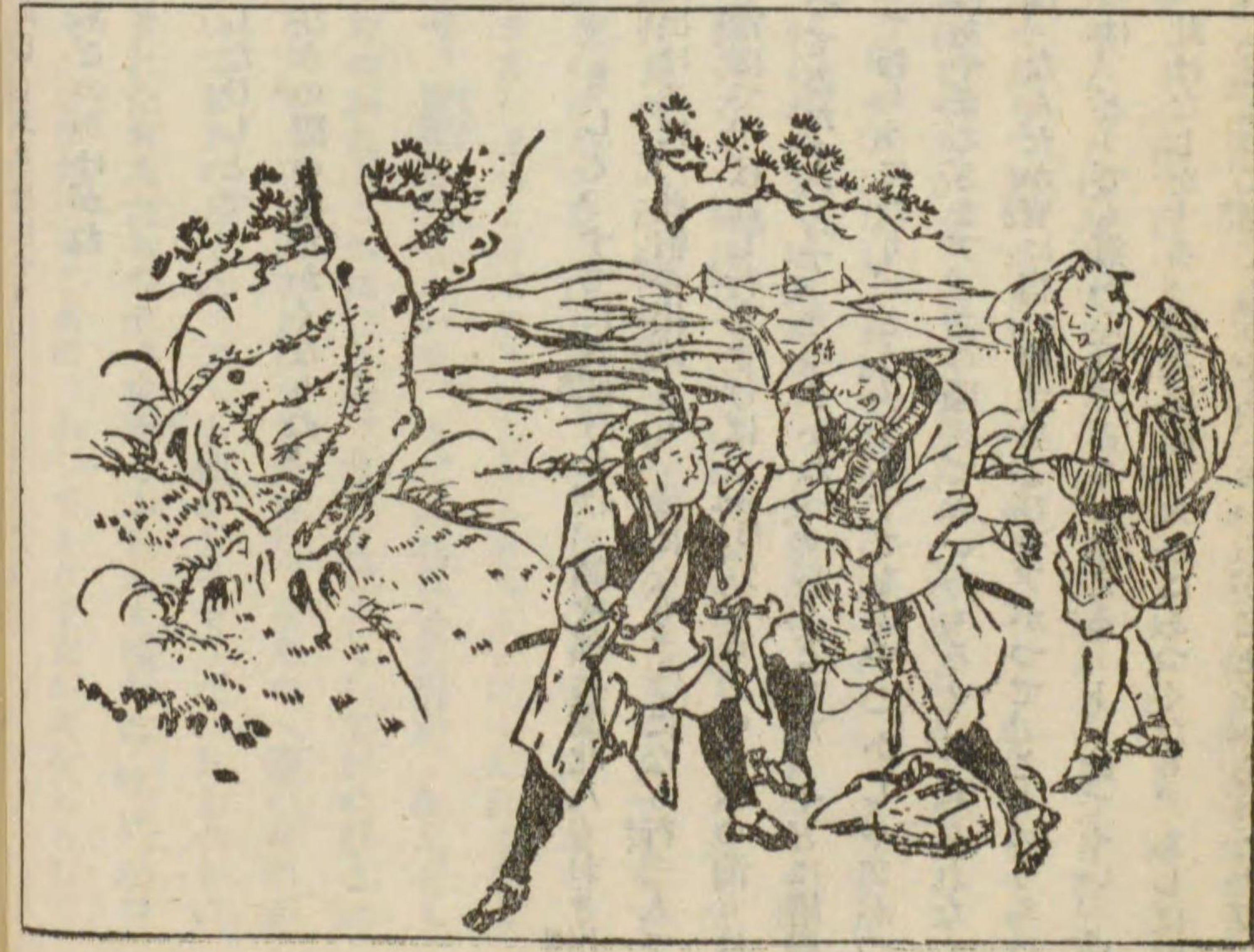
旅人「ハ、ハ、べらぼうだからべらぼうといつたが、いぢやアねへか。彌「イヤこいつ、わるくしやれやアがる。旅人「くそをくらへ。彌「なんなくそをくらへ。コリヤおもしろい、くふべいからもつてうしやあがれ。ト、彌次郎まつくろになつてりきむ。されどあひ手はけつきさかんのいさみでやい、馬のくそをつゑのさきにつつかけ、

「サアもつてきたからくらへ。彌「イヤ馬のくそはきらひだ。旅人「きらひといふことがあるものか。是非くらはせにやアおかぬ。ト、三人かゝつて、彌次郎を手ごめにする。北八をかしく中へはひり、北「イヤもう御めんなせへ。たれでも同前でござりやす。三人「ハ、ハ、ハ、かんになしてやらう。ト、行過る、彌次郎とても叶はぬと見て、たゞ口のうちに、ぶづくさぶつくさ。此内、

の木、中柴を打すぎ、山中にいたる。爰は麻のあみぶくろ。早繩などをあきなふなれば、北八、みほとけの誓ひと見えて寶藏寺なむあみぶくろはこゝのめいぶつかくて藤川にいたる。棒ばなの茶屋、軒ごとに生看をつるし、大平皿鉢、みせさきにならべたて、旅人のあしをとどむ。彌次郎兵衛

ゆで蛸のむらさきいろは軒毎にぶらりとさがる藤川の宿

それより此宿をうちすぎ、出はなれの、あやしげなる茶店にやすみて、北「なんだかがうてきにむしがかぶる。ばあさん、素湯はあるめへか。北「ハアさゆはござらぬ。水をしんぜませうか。北「エ、くすりを呑のさだへ。コリヤたまらなくなつた。ときに雪陣はどこにある。彌「どこにとつて、そんなにおいへを見廻しても、雪陣が疊の上にあるものか、裏へいかつし。北「ヒヤア、つきあたりに見える。ト、うらへ出、せつちんへゆき、しばらく用たして出、あたりを見れば、此うらに物おきをすまひとせし、ひとつ家あり。内に十八九のむすめ、髪はとりみだしてあれども、なか／＼の上しろもの、只ひとりあるやうす、北八れいのわるじやれにて、ずつと此内へはひりて笑ひかけ、北「モシ御無心ながら、水をひとつ。ト、手をあらふ内、娘はげら／＼とわらつてゐる。北「コウあねさん、おめへ何を笑ひなざる。そしてひとりこゝにあなざるのか。無用心な。ト、あたりを見れども、外に人はなし。北八こしをかけた、たばこをすひつけ、ト、へ、きみの悪い。何を見てわらひなざる。コレサ、何をわらふのだよ。ト、むすめの手をとつてひつばるにさすがふり切もせず、やつぱりわらつてゐる。北八、こいつは有がたい。もうしめたものだど、ぐつとひきよせる。いつのまにやら子供が見つけて、「ワアイ、あの人はずかしく、いるごとをせるやア。ハ、ハ、ト、大ごゑをあげてわらひ、かけ出す。北八びつくりして、にげのかんとするに、娘はつかみついてはなさず。彌「エ、エこのをとこめ。はなさん。北「これははなさけない。ト、むりにひきはなさんとする所へ、此娘のおやぢたちか



へりて、親仁「コリヤ我徒は、わかいをなごをとらへて、何せるのぢや。北「イヤ何にもしませぬ。おやぢ「せんものが、なんせ女ひとりをする内へ、はいらつせへた。コリヤ「承知「うちならんわい。北「ナニサ、今用たしにいつて、ツイ水をもらつたばかりさ。おやぢ「インニヤ、あれは氣ちがひでござる。こなさん、氣のちがうたものをとらへて、なぐさみかけさつせへたに、ちがひはあらまい。北「ナニとんだことを。おやぢ「インニヤ、すまん。氣違ひとあなどつて、ひゆつと、こなさんがやりからかいたにちがひがやしまい。とかういはつせるな。此分ではすまんぞ。ト、わめきちらかし、大さわぎをやらかす、此内彌次郎兵衛、おもてのちやみせにまちあたりしが、北八手水にいつてかへらぬゆゑ、あとから見にきたり、さきほどより此のようすを、かたかげに見てゐて、をかしさをこらへられず、しかしもう出かけてやらうと、うそ／＼出きたり、「御めんせへ。わつちやア、此をとこの連のものだが、あさい聞やした。こいつめあのやうに見えても、ありやうはちつと氣がふれてゐやす。了簡してやつてくんなせへ、エ、此やうめ、よくせわをやかせる。アノ頬はよ。アレみなせへ、きよろ／＼する顔が證據。むすめごは女だけまだしも、イヤモこのきちげへには、こまりはてやす。おやぢ「イヤ／＼、さうではあるまい。ナニあの人氣ちがひなものか。彌「ハテサあの頬付を見なせへし。アリア／＼あのとほりだ。北「なんだ、おれをきちげへた。コリアおもしろい。ハアふるはふるは、アレ／＼花のふどきが、ちりやたらり、うんきんたらり、かんきんちり、ちりかゝるやうで、おいと／＼してねられぬ。ト、／＼。ヤア、そこををるは女房どもか。イヤ能女房ぢやに／＼。コリヤ、のほい、ほほい、さんなあるかいな。ヤンヤア。彌「アレ御らうじろ、あのとほり。其くせあのつらで、色氣違さ。それだから女と見るとびろ／＼して、ほんに耻をいはにやア、利がきこえやせぬが、こいつめはわしが弟で、イヤモ、こんな因果なこたアござりやせん。おやぢ「ハアこなさんがさういはつせると、わしもかなしい。見さつせるとほり、たんだひと

わらうのだ。時に親父さん、おやかましうござりやした。おやぢ「マアちやでものんで、ござらつせへ。彌「もうめりやせう。サア氣違め、うせをれ。ト、彌次郎兵衛がちやらくらに、やう／＼とまひをさまり、彌次郎兵衛きた入をつれて、こゝをのがれ出かけ、はては大わらひとなりて、

くどきたる娘はほんの氣ちがひに、こちやまちがひとなりし目ちがひかく打興じて、こゝを立出、行道すがら、北「コウ北八、手めへもとんだものだ。氣のちがつた娘をとらめへて、どうしやうとおもつて。業さらしなをとこだ。北「へ、めんぼく次第もねへ。しかしわつちまで氣違へとは、彌次さん、ありやおめへ一生の出來だぜ。彌「酒でも買やれ。時にそれについてはなしがある。丁度手めへのやうな氣まぐれものが、きちげへの女をとらへて、じやらつきかゝると、其女のおやぢが見つけて、はらをたて、ヤイ此やらうめは、人のうちへことわりなしに牛込やアがつて、むすめをちよろまかさうとか。ソリヤア赤坂へいだわへといふと、手めへもまけぬ氣になり、イヤうぬなんだ、くちばしをとんがらかして、四ツ谷鳶のやうだとちやかすと、さきのおやぢが、ヲ、おれがよつやとんびなりやア、うぬは八まんさまの鳩だといふ。コリアをかしい。此北八がなぜ八まんさまの鳩だといふと、おやぢが、ハテきさまはきちげへの豆を、くはうとしたぢやアねへかと、ハ、ハ、ハ。北「なんだ、市谷の地口はおそれる。ハ、ハ、ハ。打わらひつゝ、行ほどに、あづき坂を過、岡の江、ゆふせん寺を打こえて、大平川にいたる。

岸に生ふ芹のあをみに小鴨まで水にひたれる大平の川、それより大平村を過行ほどに、岡崎の驛にいたる。こゝは東海に名だたる一勝地にて、殊に賑はしく、兩側の茶屋、いづれも奇麗に見えたり。ちやぢ「おやすみなさりまアし。おめしをあがりまアし。よい諸白もおざりまアす。おはひりなさりまアし。彌「ナント腹がすこしござつたぢやアねへか。北「いかさまこゝでお小休とやらかさう。ト、

彌「いめへましい。わらぢであしをいためた。ちつとの間ざうりで行う。モシ。此わらざうりはいくらだね。
 ていしゆ「アイ、十六文でおます。彌「こいつはやすい。(こゝのていしゆ、いせものにて、あきなひこうしやなり)』
 ていしゆ「アイ、おやすうおますわいな。わたしとこの草履は、ひゆつと丈夫で、ねからきりやいたしませぬ。北「ねか
 らアきれめへが、さきのはうからされるだらう。ていしゆ「イヤ、おはきなされてはたまらないが、しまつておきなさ
 るといつまでもおますわいな。彌「さうだらう。そしておめへのとこの草履は、はなをがあつてちようはうだ。北「は
 なをのねへざうりがどこにあるものだ。彌「何にしろやすいものだ。ト、つるしあるざうりを、引きり、とつて見て、
 イヤ、この草履はちんばだわへ。かたノは大きくて、こつちらはちいさいやうだ。コリヤア八文ヅツにしちやア、
 大きなはうはやすいが、ちいさいはうはたかいものだ。ナント御ていしゆ、かたつほの大きな方を、九文にかひやせ
 うから、こちらを七文にまけてくんせへ。ていしゆ「アイようおます。おめしなされ。彌「なむさん、銭がたりな
 い。一そく買うとおもつたが、たつた七文ほつきやアねへから、アノこつちらのかたノのはうばかり買やせう。
 北「ハ、ハ、こいつは大わらひだ。おいらがまねをしやうとおもつても、餅ならいゝが、ざうりかたノが何になる
 ものだ。ていしゆ「お左様でおます。一そくおめしなさりませ。どうもかたノはなしては、あげられせんわいな。
 彌「ナニ、かたつほはうらねへか。さすがは田舎だけ物が不自由だ。北「エ、江戸だとして、ナニざうりをかたノ
 賣ものがあるもんだ。ていしゆ「なんならこれになさりませ。これちやと一そくて七文にしてあげませうわいな。彌「エ
 エ馬のくつがはかれるものか。人じらしな。北「一そくかひな。おめへかたつほ買つてどうするつもりだ。彌「またさ
 きへいつて、かたつほ買はう。ていしゆ「ハ、ハ、ハ、十四文にいたしませう。一足おめしなされ。彌「きさま、とつく
 にさういへばいゝト、やうノの事にて、ざうりをとノへわらぢをぬぎすてゝ、はきかへゆく。かくて此宿を打
 過、はやくも八町なはて、さなげ明神をふしをがみ、今明神のたてばにいたる。此ところはいもかといふもなるる

の名物、いたつて風味よしと聞て、

名物のしるしなりけり往來の客をもつなくも川の蕎麥

それよりあなふ村、落合むらをすぎゆきて、有松にいたり見れば、名にしおふ絞の名ぶつ、いろノの染地、家ごと
 につるしがざりたてゝ、あきなふ兩かはの見せより、旅人を見かけ、「おはひり。あなたおはひり。名物有松しほ
 り、おめしなされ。サア。これへ。おはひり。彌「エ、やかましいやつらだ。

ほしいもの有まつ染に人の身のおぶらしぼりし金にかへても

北「ナント彌次さん、ゆかたでもかはねへか。彌「おもいれ、見たふしてやらうぢやアねへか。北「よからう。たんと
 買ふつらをして、なぐさんでやらうト、あちこちを見まはすうち、此町のとつばづれに、小みせなれども、そめ地
 いろノおもてにつるしある内へはひつて、彌「コレ、此しぼりはいくらしますト、いふに此内のでいしゆと見え
 て、しやうぎをさしてゐたるが、よねもなく、うちやうてんとなりて、ていしゆ「サアしまつた。時にお手はなんぢや
 いな。彌「コレサ、こりやアいくらだといふにト、すこしこわだかにいふと、ていしゆ「きもをつぶして、ていしゆ「ハ
 イハイ、それかな。彌「いくら。ていしゆ「コウト、あなたいくらだとおつしやる。そこでかやうにいたそかい。
 彌「エ、小じれつてへ。コレうらねへのか。ねだんはいくらだといふに。ていしゆ「ハテさてやかましい人ぢや。そちら
 のはうへひつかへして、符帳を見せなされ。たゞしれるものぢやないわいの。彌「こいつはとんだあきんどだ。ふち
 やうにウのじとエのじがいてある。ていしゆ「ヲ、さうぢやある。コウト、三分五りんぎれぢや。彌「たかい。ま
 まけなせへ。ていしゆ「ナニまけい。イヤならまい。此下手將基に。のあひ手「次兵さん、マアあきなひをしまいか。
 あなたがたがまつてござらつせる。ていしゆ「よいとても、敵等はよ買やしよまい。ハテかひたうても金銀はあらま
 い。ないはずぢや。わしが手におはしますぢやて。彌「なんだべらぼうめ。金銀があるまい。人を見くびつたことをい

ヤアがる。あるから買はう。是はふんどしだけでいくらだへ。ていしゆ「なんぢやふんどし買はう。イヤぶしつけ千萬な。彌こいつ、おいらをてうしヤアがる。賣ものかひものに無駄も何もいるものか。はなつたらしめがト、大きな聲する。ていしゆ、はつと心づき、さうくしやうぎをやめて、「へい、是は龜相申ました。何なとまけてあげませずに、おめし下されませ。北「さういひなさりヤア、しこたま買つて上やすわ。彌次さん。おめへおふくろやかみさまへのみやげには、あれがよからう。いくらだの。ていしゆ「へい、十四匁八分でおます。彌「ソレそつちらのは。ていしゆ「これは十五匁。彌もつといふのはねへか。ていしゆ「ありますとも。へい、これがなア廿一匁ツツ、こちらが廿二匁、下がナ十九匁ツツでおざります。彌もつとこれよりいふのがほしい。ていしゆ「イヤ、もうみなかやうなものでおざります。彌ム、そんならでへじにしまつておきな。誰ぞがかひやせう。わつちやアいつち初手に見ておいた、此三分ぎれを手ぬぐひだけ、きつてくんせへ。ていしゆ「へいさやうかなト、きもをつぶし、二尺五寸切て出す。彌次郎此代をはらひてこゝを立出、「とんだやつらだ。すてにいふ三太郎にしやうとしヤアがつた。きもつぶしな。ハ、ハ、ハ。時にてへぶ道くさをした。ちと急いでやりかけやうト、これよりすこし道をはやめ行ほどに、はやくもなるみのしゆくにつきければ。

旅人のいそげば汗に鳴海がたこもしぼりの名物なれば

かくよみ興じて、田ばた橋をうちわたり、かさでら観音堂にいたる。笠をいたどきたまふ木像なる故この名ありとかや。

執着のなみだの雨に濡れじとやかさをめしたるくわんおんの像

ません。おとまりなされませ。彌「とまりはどこにしよう。錢屋かへうたん屋か。北「むかうのうちはなんだ。鍵屋か。女「モシおとまりかな。北「ライ泊りやせう。はたごはいくらだ。女「ヲホ、ハ、ハ、ようおます。おとまりなさんせ。北「なんだい、とか。たどとめるか。彌「むしのい、ト、かさをとつてはひる。やどのていしゆ、「おゆをあげうず。おあしがよごれてなけらにや、すぐにおふるへ御召なされませ。ト、にもつをさしきへはこぶ。此内、彌次郎北八もわらちをぬぎ、おくへとほる。女「ちやもち來り、「おちやあがりませ。座頭の「おれうちをなされませぬか。北「れうぢもしてへが、マアはらがへつた。彌「うどんでもくつてきや。こゝのめいぶつだ。あんま「さやうなら、のちに來ませずト、立て行あとより、二三人づれにてゆみはりちやうちんをともし、「ハイ、おとまりでおざりますか。是は當驛のおんばこさま、手水鉢の建立、お心ざしをおたのみ申ます。彌「ハイ、北八、そけへあげてくりや。北「是はすこしながらト、ぜに入文出してやると、帳にしるし出で行。入かはりて、ぼうさまが一人、「ハイ、わたくしは六十六部の石碑をたてます。お心もちしだい、お施主につかつせへて下されませ。彌「なんだ。石塔のせしゆにつけ。いめへましいことをいつてくる。ソレもつていきなせト、おなじく入文はふり出してやる。入かはりて此うちのていしゆ、ひよつくりかほを出せば、「エ、又入文か。きさまはなんのこんりふだ。ていしゆ「イヤ、明日はおふねでおざりますか。又佐屋廻りをなされませるか。北「すぐに爰から舟にしやせう。彌「舟はいふが、おいらアどうもふねでは、なぜか小便をするがこはくて、そしてねつから出ねへにはこまる。七里のるといふもんだから、こらへてはあられずどうしたものだらう。佐屋へまはらうか、ノウ北八。ていしゆ「イヤ、それには能ものをあげうず。さやうのおかたにはわたくしがいつも竹のつゝをきつてあげますから、それでおせうようなされるがようおざります。彌「そんなら、それをおたのみ申やす。ていしゆ「ハイ、先御ぜんをあげうト、立て行。此内、女「ぜんをもつてくる。ここにてもいろくあれどもりやくす。やがてせんもすみたるころ、先ほどのあんまきたり、「旦那がたいたしましよ

へ。北「イヤ、おいらはもう湯にはひつてこよう。あんまさんもういゝによ。ト、いひすてゝふるばへ行。あんまはいとまごひしてかへると、うちの女とこをとりに来り、ふとんをしきてかつてへ行。彌次郎ははやそのまゝねかける。此内、きた入もふるばよりかへりて、北「ヲヤ、彌次さんもうねかけたの。ときに、おめへとなりざしきのしろものを見たか。とんだうつくしい警女だ。彌「ござなら目があめへ。北「目はねへが、まんざらぢやヤねへ。今湯からあがつてくるとき、ひとりのござめが、手水場てすゐばにまごついてゐたから、小あたりにあたつておいた。なか／＼やぼでねへしろ物よ。彌「ドレ／＼、ト、はひおきてのり出し、ふすまの間からさしのぞき、「ハ、ア、うしろすがたは、なか／＼いきなふうぞくだ。コリヤア、このまゝではおかれぬわへ。北「イヤ、さうはならぬ。ト、いひつゝよぎを引かぶり、心の内には、おのれ今にはひかけてやらうと、わざとねるふりにてよこになると、ぢきにそらいびきをかく。此内となりざしきもひそまり、ふたりのござもねたやうす。夜もしん／＼とふけわたり、後夜のかね、「ゴロンゴロン。(彌次郎そつとおきあがり見れば、北八はほんとうにねいりし様子。してやつたりとそろ／＼はひかけ、ふすまをそつとあけて、となりざしきへは入みれば、ござふたりはぜんごもしらねいりばな、彌次郎ござのふところへはひらんとせしに、さすがは目のみえぬものとして用心きびしく、ふるしきづつみを両手にしつかりかゝへてねてゐるゆゑ、これがじやまになりてはひりにく、彌次郎そろ／＼此ふるしきづつみをとりのけようとすると、ござめをさまし、かた手につゝみをかゝへ、かた手にて彌次郎が手をぐつとらへて、ござぬす人よ／＼。おやどのしゆ／＼トわめきちらされ、彌次郎はあてがちがひ、じゆばん一ツの此なりを、見つけられてはごふざらしと、ござが手をたゝきはなして、さう／＼にこなたのざしきへかへり、よぎをかぶり、そしらぬふりしてねてゐる。北八はとくより目をさまし、くつ／＼とわらつてゐると、此うちかつ手よりていしゆかけつけて、「ござさま、どうさつせへました。ござ「わしが比かゝへてゐるつゝみを、いんまだれやらがとらうとしをりました。兩戸りょうどでもあいてあるか、見てくれなされ。

ていしゆ「イヤ、どこもあいてはゐるをりませぬ。ござ「それでもいんまの盗人ぬすびとは、どこから來をりましたらうな。ていしゆ「ハア、ふすまがあいてある。モシ／＼、おとなりのおきやくさまがた、およつてござらつせるか。彌「ア、ウ、ムニヤ／＼。ていしゆ「ハ、ア、こゝにおいてあるはなんぢや。イヤ、ふんどしぢやをうな。モシおきやくさまがた、これはあなたがたではおざりませんか。ト、大きなこゑするに、彌次郎はつとおもひ、そつとあたをあげて見れば、わがふんどしが、ござのまくらもとから、しきぬごしに、わが枕もとまで、ながくなつて落ちてゐる故をかしさもをかしく、さすがおれがのだともいはれず、もじ／＼してゐると、北八わざといぢわるくおきあがり、北「なんだへ、さう／＼なさけないことをぬかしアがる。ト、きた八がよぎのそでをひく。ていしゆもさてはとしようちして、こゝろの内うちにをかしくおもひながら、ていしゆ「イヤもう旅の事でおざりますから、おたがひにお氣をつけて、御用心なざるがよい。ござさま、もうおやすみなされ。ござ「きみがわるくてねつかれませぬ。ようしめていつて下さりませ。ていしゆ「さやうなら。ト、そこらをたてまはして、出て行。彌次郎そつと手をのばして、ふんどしをたぐりよせる。きた八をかしくふき出しながら、

警女こぜどのにおもひこみしは是もまた戀に目のなき人にこそあれ

すでに夜もいたく更ふかわたれば、みな／＼やうやく一すゐの夢をむすぶ。あかつきの風樹木かぜのきを鳴し、浪のおと枕まくらにひびきて、つきいだす鐘におどろき、目さめて見れば、はや明あけがたの鳥かす、カア／＼。馬うまの「ヒイン／＼。長ながもち人「さかばナア、てる／＼ナアエ、すゞかはくもるナアシアエ、どつこいどつこい。出いふねを「ふねが出る。ヤアイ／＼。(此時やどやの女おこしに來り、「モシ、いんま一番ふねでおます。御膳ごぜんを上あましよ。彌「ツイ／＼、北八サアおきや。ト、ふたりはおき出て、手水つかふ内、ぜんも出、くひしまひ、かれこれする内、やどのていしゆ、「おしたくはようおざ

りますか。舟場へ御案内いたしましたよ。彌それは御苦勞。サア彌次さん、出かけやせう。ト、そこへしたくして、おもてのかたへ出かける。やどの女ばうをんな、「御きげんよう。又おくだりに。彌アイ、おせわになりやした、ト、いとまごひして、ふなばへ行。ていしゆこまでおくり來り、「せんどどうしゆ、おふたりさまぢや。たのみますぞ。彌、ときにわすれた。御ていしゆさん、夕部お約束の、かの小便の竹のつゝは。ていしゆ「ホンニ、ちんときらしておきましたに、ドリヤ、取てまゐりましょかい。ト、ていしゆかの竹のつゝをとりにかへる。此わたしぶね七里のかいじやう、一人まへ四十五文ツツ、其外駄荷、のりもの、みなそれぞれにちんせんをはらひ、ふねにのる。此時、ていしゆ竹の筒を取てきたり、「サア、お客様そこへなげますぞ。北、なんだ火吹竹か。彌、これをあてがつてナ、とやらかすのだ。よし。イヤ御ていしゆさん、大きにおせわ。サア是て大丈夫だ。ハ、ハ、ハ、。

おのづから祈らずとも神るます宮のわたしは浪風もなし

かく祝しければ、乗合みな、いさみたち、やがて船を乗出して、順風に帆をあげ、海上をはしること矢のごとく、されど浪たひらかなれば、船中おもひおもひの雑談に、あごのかけがねもはづるゝばかり、高聲にわらひのゝしり行ほどに、あきなひ船、いくさうとなく漕ちがひて、「酒のまつせんかいな。めいぶつかばやきのやきたて、だんごよいかな。ならづけてめしくはつせんかいなく。彌ア、よくねたは。いつの間にやら、がうぎに來たぞ。時に小便がもるやうだ。ト、やどやのていしゆがくれたる竹のつゝをいだし、こゝでこそと、まへにあてがひ、小便をする。此竹のつゝは火吹竹のごとく、さきのほうにあなをあげたるなれば、ふねのふちにもたせかけて、小便をするつもり所、彌次郎の心には、あなのあいてあるには心つかず、しゆびんのやうにおもひ、竹のつゝへ小便をしこみて、あとでうちあける事とこゝろえ、ふねの中にて、すぐに竹の筒へしこみければ先のあなたより小便ながれ出て、せんちう小便だらけとなり、のり合みな、きもをつぶし、「コリヤ、なんぢやいな。水がえらうなされる。のり合、た

れかどびんをうちこかいたさうな。ソレ、たばこ入も紙入もびつしよりぢや。コリヤたまらんわ。ハアおまへ小便ぢやな。ト、とがめられて、彌次郎、竹の筒をかくし所にうろたへて、まごゝする。北、エ、彌次さんどうしたものだ、おめへ小便をするなら、そけへあがつて、竹のつゝのさきのほうを海へ出して、しこむのだわな。めつさうな、船の中が小便だらけになつた。エ、きたねへ。彌おれは又こゝでしこんで、あとでぶちまけるのかとおもつた。のり合「イヤはやとはうもない。コリヤアくさくてならんわい。船頭しゆ、もう敷ものは外にはないか。せんど「だれぢやぞい、小便をしたのは。船玉さまがけられる。はやうコレふかつせいな。北、エ、きのきかねへ入だ。せんど「エ、ソレまだ竹のつゝからおちる。それもほかしてしまはつせへな。彌「イヤこれはそつちへやらう、火吹竹にならうから。北、エ、おめへが小便したものを、ナニ火ふき竹になるものだ。はやくふきなせへ、らちのあかぬ。ト、いちめられて、彌次郎ふんどしはづし、そこらふくうち、北八はうすべりをひつくりかへして敷なほし。北、サア、これでい。どなたもおすわりなせへ。彌「コリヤみなさん御めんなせへ。とんだばんくるはせをいたしやした。ト、ついにないしよげかへりて、そこら取かたづける。のり合みな、にがわらひして、だんまりである。此内はやくも船はくはなの岸にいたる。のり合、きたぞ。小便にこそぬれたれ、船はつゝがなく桑名へきた。めでたいめでたい。ト、みな、これよりあがりて、此しゆくに、よろこびの酒くみかはしぬ。

道東
中海
膝
栗
毛
五
編

膝栗毛五編序

歌人は居ながら名所をしり、雅人は行て名所を探る。今年五篇目の膝栗毛を十編舎の主人心の手綱をかいくり／＼くりかけ見れば伊勢の海千尋の濱に深くうがちて洒落を花なる貝盡し、古跡を温て新しき、趣向を見する筆のすさまじきに、予も寐ながら名所をしり馬はねる顔にて序すること、是作者の需に應じてとはうその皮、もともせぬに筆を採しは、跡の一杯がすぎ田のむめの香にひかれたるうかれ心、これも亦餘慶の仕事と謂ん歟。

文化丙寅春

龜山人蘭衣誌

附言併凡例

予今年神無月廿日あまり。六日の朝おもひたちて、東海道に杖をはせ、伊世路に赴き、内外の宮巡りして歸りしは、雪見月の五日になん。そよりして此五編目の著述にかゝり、彫工机のもとにたえず。須臾も筆をおくことなし。然るにいづれ人の編りけん、膝栗毛續編といへるもの、皇都の書肆より下したりとて、上總屋忠助なる人のもとより、予か方におこせたり。予是を閱するに其排設つゞまやかにして、滑稽にも工みなり。おしむらくは、かゝる色の文をもて、なとて自立せざるこそ不審けれ。それ名を素る人に非ず、欲にはするの徒なるべき歟。されど予か爲の引札にして思はざるの幸甚なりき。此故に今五篇目にいたるまで、頓て見んことを競ひ給へる人のあなりと、書肆の喜びは、益

或人曰、此書初編より四篇に及ぶ迄、彌次郎兵衛北入なるもの、髪結月代をせし所を見ず。こは大江都を立出しより以來、其事なきはいかにぞや。予答曰、こたひ旅行の刻しば／＼その光景を見るに、風土人情の差別、方言のおかしみ、其洩たること、缺たること、算ふるに十指を出たり。さればその足さるるを穿難し給はるゝこそ、予が爲の幸いなれば、取あへず其ことをもて追加に出せり。
羈中飯盛おじやれの戯れは、巻中毎に粗あらはして事ふりたれど、こたひ作者の旅宿にて、實に夜這といへること、を、仕損したることのあなれは、其事をもて、彌次郎兵衛北入か、四日市泊の趣向とす。
東海道追分までを上巻とし、其余伊世路にかゝりて、事繁く記すに違あらず。漸山田に此巻の筆をとどめて、續編に妙見町の奇宿古市の極樂、相の山の宮めぐり等をあらはし續て出板す。

兼々聞及貴公才
一遍相逢親十回

探得神都神代穴
翻々棄膝栗毛來

右

初逢十返舎一九生自勢筋
還戲賦以送

瀬 芳 園 艸

東海 膝栗毛 五編 上

十返舎一九著

宮重大根みやしげだいこんのふとしくたてし宮柱みやはしらは、ふるふきの熱田あつたの神かみの慈眠みそなす、七里のわたし浪ゆたかにして、來往らいわうの渡船とせん、難なく桑名くはなにつきたる悦よろこびのあまり、名物のやきはまぐりに酒くみかはして、かの彌次郎兵衛北八なるもの、やがて爰こゝを立出たていでたどり行ゆくほどに、此頃このとき旅人りよじんのうたふをきけば、はやり「しぐれはまぐりみやげにさんせ。宮のお龜なまけいが情所なさけ。ヤレコリヤよラし〜よし。馬主うまぬしコレ旦那衆だんなしゆ良り馬のらんせんか。彌や「よラしよし。馬主うまぬしやすいに。たんだ百五十でやらまいか。彌や「よラしよし。北きた「せうろく四文よんぶんでのるべいか。馬主うまぬし「そんならよラせよせ。馬うま「ヒイン〜。長ながもちく「ふねはナア、追手おひてにはかけてはしる、ナアンエ。はやくサア、あつ田に泊りたや、ナアンアエ。八兵衛どうした。馬うまでものんだか、なんだかはねらア。どつこい〜。北きた「なんと彌次やじさん、なにもなくさみだに、かうしようぢアないか。おめへの荷物にものとわしのがのをいつしよにして、ひとりかひつかついで、半日かみひかはりに旦那と家來けらいのしうちはどうだらう。彌や「コリヤおもしろい。それよからう。まづおいらから旦那をはじめるぞ。北きた「そりやアい〜が、けふはもう八ツだから七ツがはりにしやせう。勿論もちろんだんなと供とものあしらひは、たがひにばんくるはせなしにやらかしやせうぜ。彌や「しれた事ことよ。ト、いひつゝ、あたりに竹一本をさいかくし、彌次郎やじらうがにもつと北八きたはちがつゝみを、兩りゆうはうにく〜りつけて、北きた「先歳せんざい役やくにおめへ旦那よ。おいらは上下じやうげといふもので出かけよう。ナントよつほど氣きがきいてゐるだらう。ト、あとから荷にものをひつかたげて、北きた「モシ旦那へ。彌や「なんだ。北きた「いゝ天氣てんきでござります。彌や「ヲ、サ風かぜが風たいであつたかだ。北きた「さやうでござります。ト、かりにしう〜のごとく打語うちごりつゝゆくほどに、はやくも大おほふく村安中むらやすちゆう村を打過うちかつて、町まちや川

にさしかゝれば、彌次郎兵衛とりあはず、

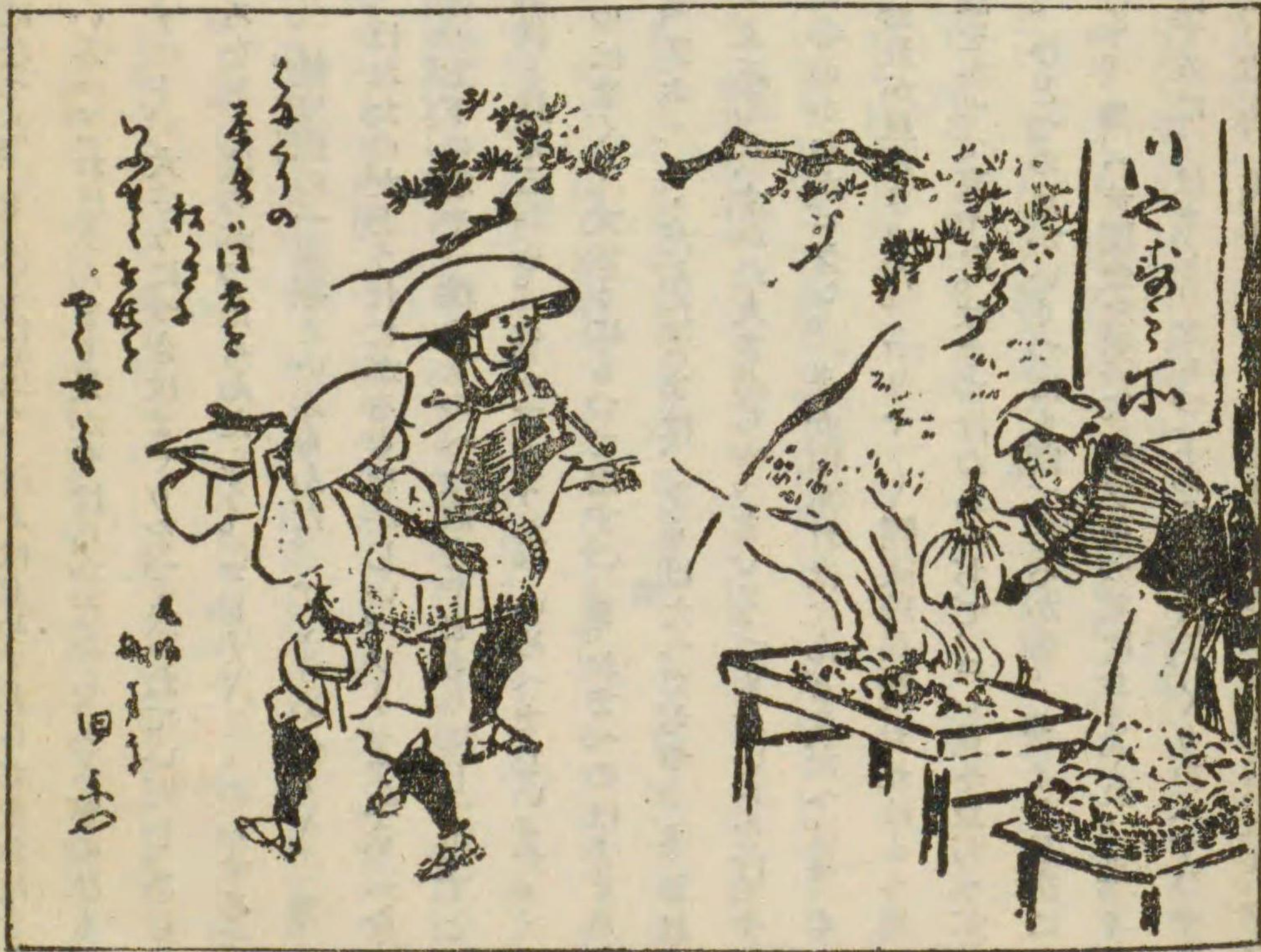
旅人を茶屋の暖簾に招かせてのほりくだりをまちや川かな

かく打興じて、なを村おふけ村にたどりつく。此あたりも蛤の名物、旅人を見かけて、火鉢の灰を仰立て、女をはいりなさりませ。諸白もおめしもござりませす。おしたくなさりませおしたくなさりませ。かごかき、駕いかまいかいな。これから二里半の長丁場ぢや。安うしてめさぬかい。彌「イヤかごは入らぬ。かごあとおやかた、旦那をのせまうしてくだんせ、戻りぢや、やすめに。北「だんなはおひろひがおすきだ。かごさういはずと、モシ旦那、やすうしてやらまいかいな。彌「やすくてはいやだ。高くやるならのりやせう。かごしたら高うして三百いたときましまかいな。彌「いやだ、もつと高くやらねへか。かごハアまんだやすいならやみげんこで。彌「壹貫五百ばかりならのつてやらうが。かごエ、めつさうな。わし共も商賣冥利そないにやつとはいたどかれませぬ。せめて五百でめしてくだんせんかい。彌「それでも安いからいやだ。かごナアニやすいこんではあらまい。そしたらわかれに七百くだんせ。彌「イヤ、くめんどうだ。何かなし一貫五百よりまからぬ。かごはて扱こまつたもんぢや。それよりちつともまからまいか。彌「まからぬまからぬ。かごエ、なんの事ぢや。かごかきのはうからねぎるといふはめづらし。まよぼうぐみ一メ五百でやらまいかい。サア旦那めしませ。彌「それでい、か。高くのつてやるかはりに、酒手をこつちへ貰らにはやならぬががつてんか。かごあげませずとも。彌「そんならさきへいつて、一貫四百五十文こつちへ酒手にさしひいて、のこり五十のかごちんだが、それで承知かどうだ。かごエ、そんなことであら。とひやうもない。彌「そこまづえんきりだ、ハ、ハ、ハ。北「こいつは旦那ができたできた。

たび人をのせるつもりで駕かきの高い直段にかつがれにけり

かくて朝餉川松寺をうちすぎ、富田のたて場にいたりけるに、爰はことに焼はまぐりのめいぶつ、兩側に茶屋軒をな

らべ、往來を呼たつる聲にひかれて、茶やに立寄こしをかくと、女「おはやうござりました。ト、ちやを二ツくんで來り、彌次郎へ差出す。彌次郎兵衛は旦那のつもり故、わらぢのまゝ茶やの板の間にあぐらをかきて、きた八したくはい、か。(きた八もやくそくなれば、ともものきどりにて、) 北「よろしうござりませう。コレ女中おめしを二ぜん出してくんな。女「ハイ、はまぐりでおあがりなされますか。彌「イヤ着てくひやせう。女「アホ、ホト、はこにしたあろりのやうなもの、中へ、はまぐりを並べ、松かさをつかみこみあふぎたて、やくうち、彌「コウ酒はい、のがあるかの。しかし諸白ではなくて片白には困る。そして江戸ぢやアアうめ、味ののくひあきしてゐる骸だから、道中ものはねからくへぬ。馬にのればあぶなし、駕はあたまがつかへる。店のものどもが、おやどの駕をおつらせなさるが、ようござりますといひをつたが、なるほどさうすればよかつた。不肖してのればのるもの、もう、道中駕にはあきはてた。北八これからはあるいてゆかう。い、草履があらば買つてくり



や。はきつけぬ草鞋で、コレ見や、あしぢうが豆だらけになつた。北「ほんになア、けふはじめてわらぢをおはきな
 さつたから、古いあかぎれが再發した。彌「とんだことをいふ。これはあんまり足がやはらかだから、わらぢのひもが
 くひこんだのだ。ヤ時にはまぐりは。女「ハイ只今あげます ト、大さうにやきはまぐりをつみ重ねていだし、めしを
 二ぜんもつてきてする。北「コウ彌次さん見なせへ。いろをとこはちがつたもんだらう。コレ／＼このむすめが、
 おめへの飯はちつと盛て、おいらがのはこのとほり山もり、餓鬼道の一里塚といふもんだ。ア、うめへ／＼。彌「へ
 へべらぼうめ、アノむすめが、しやくしあたりのいゝのを、ほれたのだとうれしがるもをかしい。ソリヤア手めへをや
 すくするのだわ。北「なぜ／＼。彌「すべて此かいだうでは、上下の者や、供のものへは飯をやまもりにして出すとい
 ふことだ。それだから誰が目にも、おれは旦那手めへは御供と見えるから。北「ハアさうか。いめへましい。ハ、ハ、ハ、
 はまぐりをもつとくんせへ。女「ハイ／＼（又やきたてのはまぐり、大さうにもつて出す。）彌「おまへのはまぐりな
 ら、なほうまからう ト、女のしりをちよいとあたる。女「ヲホ、だんなさまは、ようほたへてぢや。北「おれも
 ほたへよう ト、おなじく尻をつめりにかゝれば、女「コレよさんせ、すかぬ人さんぢや。北「どうでもおいらをば、やす
 くしやアがる ト、ぶつ／＼とをいふうち、あたりの寺のかねがゴラン。北「女中あれはなんどきだへ。女「もう
 七ツでござります。北「しめた／＼、約束のとほり是からおれが旦那さまだ。コリヤ／＼彌次郎兵衛、おれはもう馬に
 も駕にも乗あきた。是からそろ／＼ひろひませう。いゝ草履をかつて來やれ。はきつけぬわらぢで、コレ見や豆ぢうが足
 だらけだ。彌「ばかをいふ。なるほど手めへは足だらけだ。ひとつの足がいくつにも割てゐるから。北「イヤ旦那にむ
 かつて手めへとは何のことだ。この荷物もそつちやへやらう。彌「ハテ現金な男だ。マアそつちにおきやれ。北「イヤ
 さうはならぬ ト、つきつけるを彌次郎兵衛つきもどすはずみに、はまぐりをもつてある皿をひつくりかへすひやう
 しに、やけはまぐりが彌次郎兵衛のふところへひよいとはいはるト、北「アツ、ハ、ハ、ハ、はまぐりのつゆがこぼれて、アツ

ツ、ハ、ハ、北「ドレ／＼ ト、ふところに手をいれてはまぐりをつかまへ、北「アツ、ハ、ハ、ハ、ト、取おとせば、はまぐり
 へその下へおちる。北「入うろたへて、彌次郎がもゝひきの上から金玉とはまぐりをいつしよにつかむ。彌「ア、アツ
 ツ、コリヤどうする。きんたまがこげらア ト、いふうち、やう／＼もゝ引のまへのあはせめをひろげると、はまぐ
 りはほつたりおちる。北「ハ、ハ、ハ、まづは御安産でおめでたい。彌「しやれ所ぢやアねへ。とんだめにあつた。女「お
 けがはござりませぬか。彌「けがはせぬがまだ腹の中がびり／＼する。北「ハ、ハ、ハ、

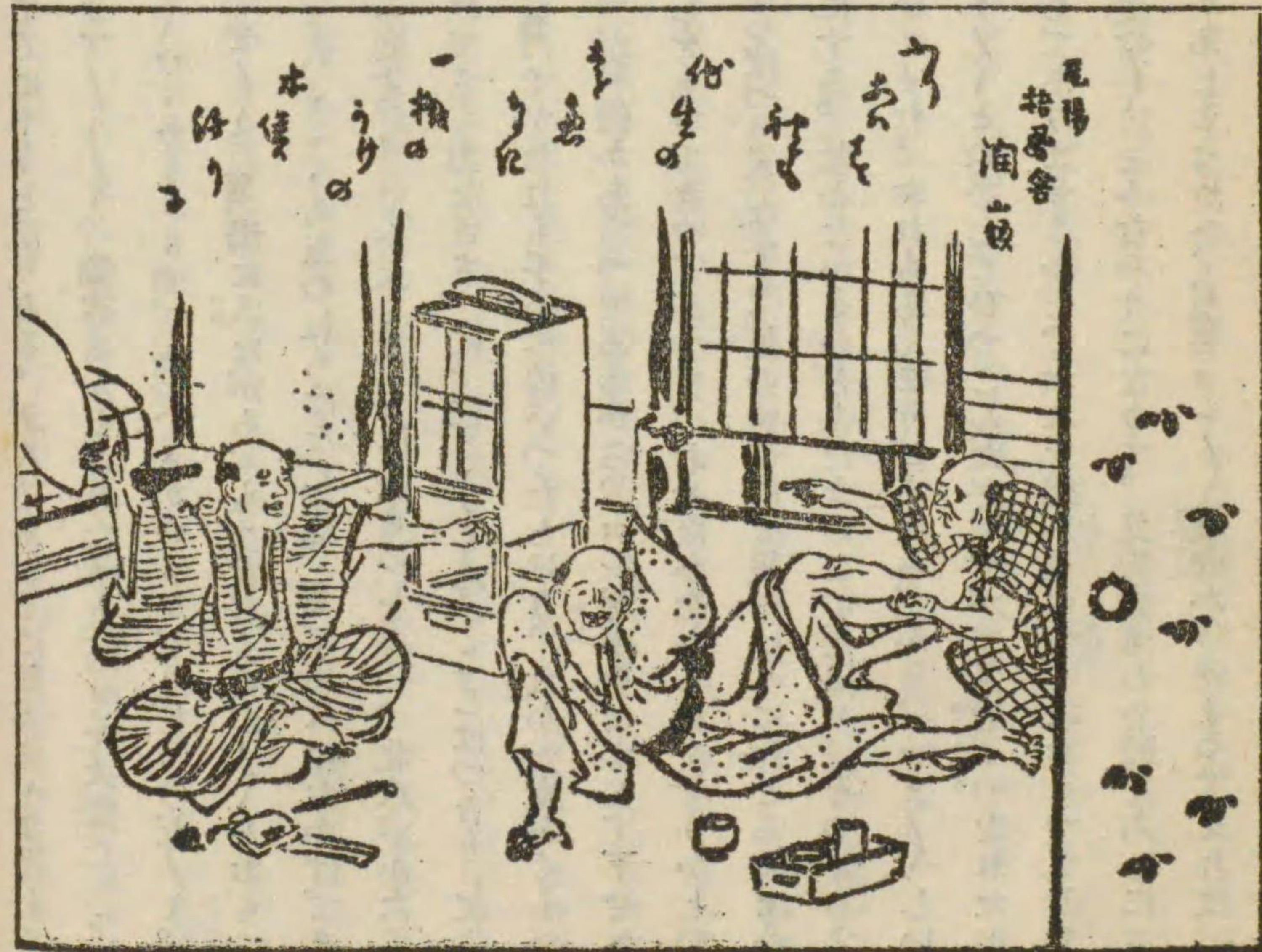
膏藥はまだ入れねどもはまぐりのやけどにつけてよむたはれうた

それより此所を立出、はつ村八幡を打過、七ツ家あくら川にいたりし頃、四日市の宿引出向ひて、「是はおはやうご
 ざります。わたくしおやどをおたのみ申上ます。彌「わつちらア帯屋へ行やす。宿引「イヤ今夕はお大名さまおふたか
 しらおとまりで、帯屋は兩家ともおさし合せてござりますから、わたくしかたにおとまり下さりませ ト、いふはうそな
 り。御小身様のおとまりで、下宿はわづかなれ共、夫をいゝたてにやど引わがたへとめんとするけいりやくなり。ふ
 たりともほんくらなれば誠と思ひて、彌「そんなら貴様の所はいくらで泊る。宿引「ハイそれはいかやうとも。彌「ゆう
 べは宮の斧屋でとまつたが、とんだ町噺にした。百五十で燭臺をつけてめしをくはせるか。そして酒も菓子も出した
 から、コリヤアだまつてもゐられめへと、別に茶代を貳百やるつもり所、やつぱりやらなんだから、大きに安かつ
 た。貴様の所もそのつもりで馳さうするがいゝ。ヤど引「かしこまりました ト、だん／＼はなしながら、打つれてゆ
 くともなしに四日市の棒鼻に至れば、やど引「かきだして、「サア是でござります。コレおとまり様ぢや。女「おは
 やうおつきなさいました ト、あいさつの内、ふたりはわらぢをときなながら見まはせば、いたつてむさくろしき宿に
 て、入口にすゝけかへつて、よこにいがみたるせんたなど、こはれかゝりしへつつかいのあるうち也。こゝ今晩はわ
 たくしかたもこみやひました。お氣のどくながら奥のお客と御一所になされて下さりませ。彌「ずるぶんよしさ。

女房「さやうならこれへ」ト、案内して奥の間へつれ行く。あひ宿みなかものふたりあり。彌「御めんなさい。みなかのおはやうござらつせへた。北「ア、くたびれた。えいとこな。女「すぐにおふろにめしませ。御案内いたしませう。北「ドリヤおさきへまゐらう。ト、手ぬぐひをさげて湯に行く。此内十四五のまへがみ、ふろしき包の箱をさげて、「おたばこは入ませぬか、楊枝はみがき、おはながみはよろしうござりますか。田舎「久しかぶりて吉田の大竹へのたりこんで、おやまに浅柄のたばこ貰ひをつたが、みな吸てしまつた。(今ひとりのみなかもの)「四文粉はあらまいか。商人「イヤそれはござりませぬ。是をあがつて御らうじませ。田舎「ドレ、ハツ、ハツ、ハツ。こりやねからたわいが無い。こつちらのはどうぢやい。ト、きせるについですつば。商人「それがようござりませう。田舎「イヤこれもわから火がつかぬ。見やんせ。すうてをるうち消らかいた。商人「ソレあなたのひざにもえてをります。田舎「ヤアコリヤ、大事のきりもんを燃らかいた。フツ、フツ、イヤこないに膝の焦るたばこはいらない。もつていかんせ。商人「ハイさやうなら、ト、こどといひながら出て行。北入湯よりあがりて、北「サア彌次さん湯にはいらねへか。女「あなたおめしなさりませ。彌「イヤてへふあだなやつらがちらつくぜ(北入こゝろに)「今のやつを風呂場でちよびと契つておきは、はやからう。彌「ソリヤほんとうにかどうして。北「己が湯にいつてゐる所へ、おぬるくはござりませぬかといつてうせをつたから、すぐにそこで約束した。まだひとりいゝ年増が見えるから、おめへ湯に入つてまつてゐなせへ。大かたそこへくるにはちげへはねへから、そこでくちをかけるがい。彌「しようち。ドレ入て来やせう。ト、彌次郎はゆにいる。又ひとりあきん人、「ハイ焼酎は入ませぬか、白酒あがりませぬか。北「ヲツトそのせうちを少しくんな。ヲト、よし、ト、ちやわんにつがせてせにをはらひ、かのせうちをあしにふきかけ、「よし、これで草臥がやすまるだらう。どなたも御めんなさい。ヤアえいとこな。ト、よこにねかける。此内、彌次郎は湯に入て女のくるのをまてどもまてどもいつかうに來らず。手あしのゆびを一本、にあらひて、しばらくの内まちぼうけとなり、

あまりなが湯をしてゆげにあがり、ふろぼのはめにもたれてぐにやりとなりある。北入はあまりに彌次郎が長湯なる故、そつとふろばへのぞきにきたり、このていを見て、北「ヤア、彌次さんどうした。コリヤ大變だ。ト、彌次郎がかほにみづをそぎ、「彌次さん。彌「ヲ、ウ、ウ、ウ、引。北「い、か、い、か、どうしたのだ。彌「どうした所か。手めへおれをえらいめにあはした。北「なぜ。彌「湯に入ながら、もう女がくるか、とおもつて、あんまり長湯をしたから。北「それでゆげにあがつたか。ハ、ちゑのねへはなした。彌「手めへのおかげでまだ足がひよろ／＼する。北「ハ、こいつはをかしい。サアたちな。ト、やう／＼にきものをきせ、北入がかたにひつかけ、ざしきにつれてかへると。彌次郎そのまゝたふれてさも力なさうに、「ア、今すこしはつきりした。北「おめへもとんだものだ。い、かげんにあがればいゝに。彌「イヤおれも手めへのいつたとほり、大かた女がくるだらうと、まつた程に、向うのながしにかの年増らしいやつが、何かあらつてゐるから、コレ脊中をながして下せへといつたら、ハイとこいて六十ばかりのばアめが、たわしをもつてきやアがつて、おせなかをあらひませうかとぬかしやアがる。北「こいつはいゝ。ト、むちうになり、ねはらばつてゐながら、足のゆびにて足のはうにねころんでゐるみなかもの、耳をひつばつたりなにかして、もちやそびにする。此みなかものどんだきのよい男にて、そつとわきのはうへあたまをよけると、北「それからどうした。彌「きいてくれ。おれもあんまりごふはらだから、いま／＼しい婆々アめだ。たわしをもつてどうしやがるといつたら、ハイ／＼とぬかしてひつこんだが、やがて又庖丁のをれたのもつてうしやアがつて、これでお脊中の垢をこそげおとしてあげませうかと、おれを鍋か釜のやうにおもつてゐやアがるさうな。いま／＼しい。北「ハ、こいつはでかした。ト、むちうになりて、又田舎ものの頭をあしにてさがしまはし、み、をいぢりかけると、こらへかねて北入があしをとらへ、田舎「コレ、最前からだまつてをれば、なんせ此あしてわしが耳をなぶりものにさつせへた。ト、いはれて北入づきて、「ハイこれは御めんなせへ。田舎「イ

ンニヤ扱御免ではじようちならまいわい。それもこなざんがむちうにならつせへて、はなしさつせる手そくぶりにやアあらまい事でもないが、こつちであたまをよけようとする、又あしてさぐりまはいてはなぶりものにさつせる。なんぜ人のあたまア土足につつかけさつせへた。すまない。彌ソリヤおきのどくなことだ。御めんなせへ。此やうにおあひやどするも他生の縁とやら、どうぞ了簡してやつて下さりませ。田舎「こんなたがさういはつせりやアきかまいものでもないが、あんまり人をばかにさつせるから。北「イヤもう生酔だから、かんにしてくなせへ。田舎「イヤまだこなさんはわしどもをばかにさつせる。最前から見えてをるに酒ものまないて生酔とは、猶じようちならまいわい。北「はてわつちは酒をのみやせぬが、此足がなま酔だから。田舎「ナニ足が酒をのみむんか。ばかアつくさせるな。北「おめへへぶあつくなるの。あしが酔たといふは、さつき焼酎をふきかけたから、それに此あしめが酔くさつて、ソレ御らうじろ。ひよろり、アレまだおめへのあたまにからかほうとする。



コリヤ、。田舎ほんにこなさんの足はわるい酒ぢや。北「さやうさ、あしは下戸の足がようござりやす。わつちはまことにこまりはてる。田舎そんならようござる。モウねまらまいか。女中、わどころをたのみます。ト、此うち女來り、それ、こつちをとりねかすと、田舎ものふたりはそこへころげるやいなや、前後もしらずう、と高いびき。彌次郎北八この女どもに、こあたり文句もさま、あれど此所と飯どきのしやればぐつとはしよる。女どもはそこをとつてしまひ、かへつて行と、彌次郎小ごゑになりて、「きた八、實に手めへさつきの女と約束をしたか。北「しそこになつてゐるといひをつたから、今にゆかねばならぬ。彌「おれがさきへいつてやらう。北「そねまずとはやくわなせへ。ト、うしろをふりむいてゐるまねする。彌次郎も北八がじやまをしてやらんと、ねいりしふりしてかんがへてゐる内、ふたりともたびづかれにや、おもはずすや、と一ねいりし、しばらくすると彌次郎兵衛ふつと目をさまみれば、あんどどうきえてまつくらがり、あたりもひつそりしづまりたるに、じぶんはよしとぬけがけし、北八にはなあかせんとそつとおきたち、さしあしにてつぎの間に、かわて聞おきたるとほり、さぐり、壁をつたひてゆくち、彌次郎兵衛あまりに手を上へのぼしたるにや、つりたるたないたに手がつかへると、どうしたはずみやら、がたりといつてたながはづれたると見え、彌次郎兵衛大きにきもをつぶし、「こいつはへんちきだ。あんまりおれが手をのぼしたから、棚板がはづれたさうな。手をはなしたらおちるであらうし、なにかがらくたがしたまあげてあるやうす、おちたらみんなが目をさますだらう。こいつは難儀な目にあつた。ト、両手を棚につつばつて立てても、ねからつまらず。手をはなせばたながおちる、襦ばんひとつでさむくはなるし、コリヤなさけない目にあつた。どうぞしやうはないかと立はだかつてかんがへてゐるうち。かくともしらず北八も目をさまし、おき出、これもだん、かべをつたひてくるやうす。彌次郎それとすかし見て小ごゑになり、「きた八か。北「だれだ彌次さんだの。彌「コリ

ヤしづかに。はやくこゝへ来てくれ。北「なんだ」。彌「これをちよつともつてくれ。こゝだこゝだ。北「ドレ
 ドレ、手をのばして、何かはしらすおちかゝつたたなの下をおさへると、彌次郎はそつと手をはなし、北八にも
 たせてわきへはづしたるに、きた八おどろき、北「コリヤ、彌次さんどうするのだ。ト、手をはなしさうにすると、
 上のたながおちかゝる故。北「ヤア、コリヤ情ない目にあはせる。コレ、彌次さんどこへゆく。ア、手
 がだるくなる。コリヤもうどうする。ト、うろ／＼してゐる。彌次郎はくらまぎれ、そろ／＼と先のはうへゆき、
 こしかべを傳ひてかつてのかたへ出るに、庭の向うにみゆるありあけの火かげほのかに、すかしてみればかのゆきあ
 たりふすまのそばにひとりねてゐるものあるゆゑ、さてこそ北八がやくそくのしろもの、しめこのうさぎと、いき
 なりに手をやつて探りみれば、こはいかに、石のごとくひえこほりし人たふれりたり。さながらいきたるものともみ
 えず。これはふしぎと、こは／＼なてまはせば、あらごもにくるみである故、彌次郎はつとおどろき、にはかにきみ
 がわるくなつて、がた／＼とふるひ出し、やう／＼に北八がある所へはひもどり、はのねもあはぬふるへごゑにて、
 彌きた八まだそこにか。北「オ、彌次さんおめへどこへいつた。コウちよつとこゝへ。彌「イヤそこ所ではない。あ
 そこに死だものへ狐がかけてあるから、もう／＼うすきみのわりいうちだ。北「ヤ、とんだことをいふ。彌「ナニサほ
 んとうに、アレあそこに。ア、とんだうちにとまり合せた、おそろしやおそろしや。ト、さう／＼にはひだしにげ行。
 北「コレ、おれをこゝにおいてどうする。エ、それにとんだことをいやアがつて、どうやらきみがわるくなつた。
 コリヤたまらぬ、ト、がた／＼ふるへるひやうしに、手が緩みて、うへのたながぐわら／＼。こりやかなは
 ぬときた八にげいせしが、うろたへてとまどひをし、いつかうわからずまごつくうち、このもの音に、かつ手よりは
 ていしゆのこゑとして、あんどさげて出くるやうす、おくの間からは田舎ものが出くるていゆゑ、いよ／＼うろた
 へみせのかたへはひ出る手もとに、こも一まいありしをさいはひ引かぶりて息をころしかどみあると、ていしゆあか

りをもち出、きもを潰し、「ヤア、コリヤなんせ棚がおちた。膳箱もなにもらりこくたいになつた。ト、そこ
 らとりかたづけるうち、何事やらんと、あなかもふたりながらおき出、「ヤレえらひおとがせるとおもつた。道理こ
 そ。コリヤ地藏さまのねきにまで箱どもがとびちつてをるが、ヤア、お鼻がぶつかけてしまつた。(今ひとりの
 みなかも)「ドリヤ、ほんに地藏の、さまの鼻アなくなつた。そこらにやないか。イヤこゝにねてをるはだれ
 ぢやい。ト、こもをまくれば、きた八ははつとばかりかほをあげて見るに、そばにはこもにつゝみし石ぢぢぢあり。
 さては彌次郎兵衛がしんだものゝありしといひしは、この石さうならんと思ひあるうち、ていしゆ北八を見て、「ヤア
 こなさんは、こちへとまらせへたおきやくぢやないか。それに今時分なんせこゝに、コリヤ合點かかんわい。
 どうぢややらこなさんたちのなりそぶり、うさんくさいとおもひをつたが、若しや護摩の灰ぢやないか。何ぞまたし
 よしめるつもりか。ありやうにいはずせへ。田舎イヤそればかしぢやござらない。大かたこなさんが此棚をおとした
 もんで、なんせ地藏さまのおはなアうちかいた。コリヤわしどもが村で、今度建立せる地藏さまぢや。きんのふ石屋
 どのからうけとつて、あしたは早々長澤寺様へをさめにやならぬが、お鼻がうちかけてはもつていかれぬ。元のとほ
 りまどはつせへ。(これは此近在の人々、村のお寺へをさめる地藏也。石やよりもつて歸る所、おそなはりしゆゑ、こ
 よひはこゝにとまりしと見えたり。ていしゆいよ／＼やつきとなり)「お地藏さまのおはなもおはなぢやが、おまい
 がたのお荷物なんぞなくなりはせないか。どうでもがてんのかぬやつらぢや。ありやうにいひをるまいか。北「イ
 ヤわしらはそんなものぢやアねへ。めつたなことをいひなさんな。しらしちやうめんの旅人だ。田舎インネさうぢや
 あらまい。又それでなければやア、なんせ今時分そこにねてみさつせへた。北「イヤこれは、手水に行とつて、
 ていしゆ「たわけたことをつくさまい。手水場は座敷の縁さきにあるものを。さだめし膏にもいたてあるに、そないな間
 似合くやせんわい。北「さういはれちやアわつちも面目ないが、恥をいはにやア理がきこえぬ。有體にいひやせう。

ていしゆ「ヲ、サ、はいはいてどうせるもんぢや。北「イヤどうもおはづかしいが、今頃わつちがこゝにまごついてをつたといふわけは、ツイ夜這よまひにきて、此棚たなのおちたにうろたへたのでござりやす。田舎いなかナニ夜這よまひにきた。イヤはやこなさんはたわけたもんぢや。どこの國にか、石地藏さまの所へ夜這よまひに来てどうせるつもりぢや。ていしゆ「いへばいふほどろくなことはぬかしをらぬ。北「コリヤとんだ災難にあふことだ。彌次さんく、ト、よびたつる。せんこくより彌次郎兵衛はたちぎきして、はらすぢをよりみたりけるが、よい時分と立出、「コリヤアどなたもおきのどくな。ありやアわつちがうけ合あひあひ。うろんなものぢやアござりやせぬ。れうけんしてやつてくんなせへ。又地藏さまの鼻とやらがかけたといひなさるが、どうぞわつちにめんじて、あとではどうともいたしやせう。ト、いろくちやらくらとことわりをいひちらし、ていしゆも今はせんかたなく、さながらわるものとも見えぬ手あひ、一とほりはいつたものゝ、今はなつとくしてすましければ、

はひかけし地藏の顔も三度笠またかぶりたる首尾のわるさよ

かく即吟すげんの彌次郎兵衛が狂歌きやうかに、おのくどつと笑ひをもよほし、やうくいさくさをさまりけるにぞ、いまだ夜のあくるにはほどもあらんと、めい／＼ねどころにはいらたるが、しばらくありて、はや一ばん鶏とりの告つひわたる聲々、馬のいなよきおもてにきこえ、彌次郎兵衛北八いそぎおき出て、支度とゝのへ、やがて此宿このしゆくをたちいづるとて、

やうく／＼と東海道もこれからははなのみやこへ四日市よつかいちなり

それより濱田村はままだむらを打うちすぎ、赤堀あかほりにさしかりたるに、往來わうらい殊ことに賑にぎしく、男女大ぜいこゝかしこにつどひあつまりたるは何事なにことにやと、彌次郎兵衛北八も片寄かたよりのき行つゝ、ある親仁おやぢに向ひて、彌やモシ／＼何なんでござりやす。おやぢ「あれ見さつせへ。北「けんくわでもござりやすか。おやぢ「インネ天蓋寺てんがいじの蛸たこ薬師やくしさまが桑名わさなへかいちやうに行ゆしやるので、今こゝをとほらつせるから。彌やハ、アなる程向うへ見えるく、ト、此内このうち、だん／＼人足ひとあししげくなり、講中かうちゆうとおぼしく、ま

つさきに村の名をそめたるのぼりをおしたて、いづれも大音にて、かう中「なアアだア／＼。北「たこやくしさまアゆでたのぢやアねへ、なまだと見える。かう中「なアアだア。彌やのぼりをもつていくやつつらア見さつし。ちゑのねへつらだぜ。かう中「おさいせんはこれ／＼。是は海中かいちゆうより芋畑いもはたけへ出現しゆげんしたまふ所の天蓋寺てんがいじ蛸たこ薬師やくし如來にょらい。御しんじんのかたは、おこゝろもち次第しだいあげさつしやりませう。サア／＼お心もちはようござりますかな。北「けさほどは中かさで三せんほどたべました。彌やソリヤ蛸たこどのがござつたござつた。ト、此内このうち、みづしにいれたるやくしによらい、大勢にてかつぎとほる。あとよりてんがいじのをしやう、のりものにてきたると、こゝかしこにあつまりあるばどかゞども、十念じゆんをねがひけるに、わかたうかごのとを引あくれば、をしやうはゆでだこの如きあからがほにて大あばたひげだらけのでつくりをしやう、さもしかつべらしく、「なむあみ。みなく「なむあみ。をしやう「なむあみ。みなく「なむあみ。(をしやうなむあみとだん／＼となへ、十念じゆんのしまひに、どしたはずみやら、はなのあながむづ／＼として、をしやう「ハアくつしやみ。ト、いふと、みなく「十ねんのあとゆゑ、これもくちまねすることとこゝろえ、みなく「ハアくつしやみ、(をしやう小ごゑにて、くそをくらへ。みなく「くそをくらへ。彌やハ、とんだお十念じゆんだ。アノをしやうは、くつしやみから長郎ちやうらうだハ、。かう中「なアアだアなアアだア。ト、さどめき立、行過る。彌次郎北八はをかしく、あとを見送りながら、

十念じゆんをまうしながらのくつさめはあつたらくちに風をひかせし

かくよみすて、打興うちきよう行ゆくほどに、はやくも追分おひわきにいたる。此所の茶屋、まんぢうの名物あり。の女おんな「お休やすみなさりませ。めいぶつまんぢうのぬくといのをあがりませ。おぎふにもござりませ。北「右側のむすめがうつくしいの。彌やかぎやの小ぢこぢよくめらもあいきやうらしい。ト、ちや屋には入いこしをかける。女おんな「おちやアあがりませ。彌やまんぢうもやらかして見よう。女おんな「今あげませう。ト、やがてばんにもつてきたる。このうちこんびらまゐりと見えて、ぬの